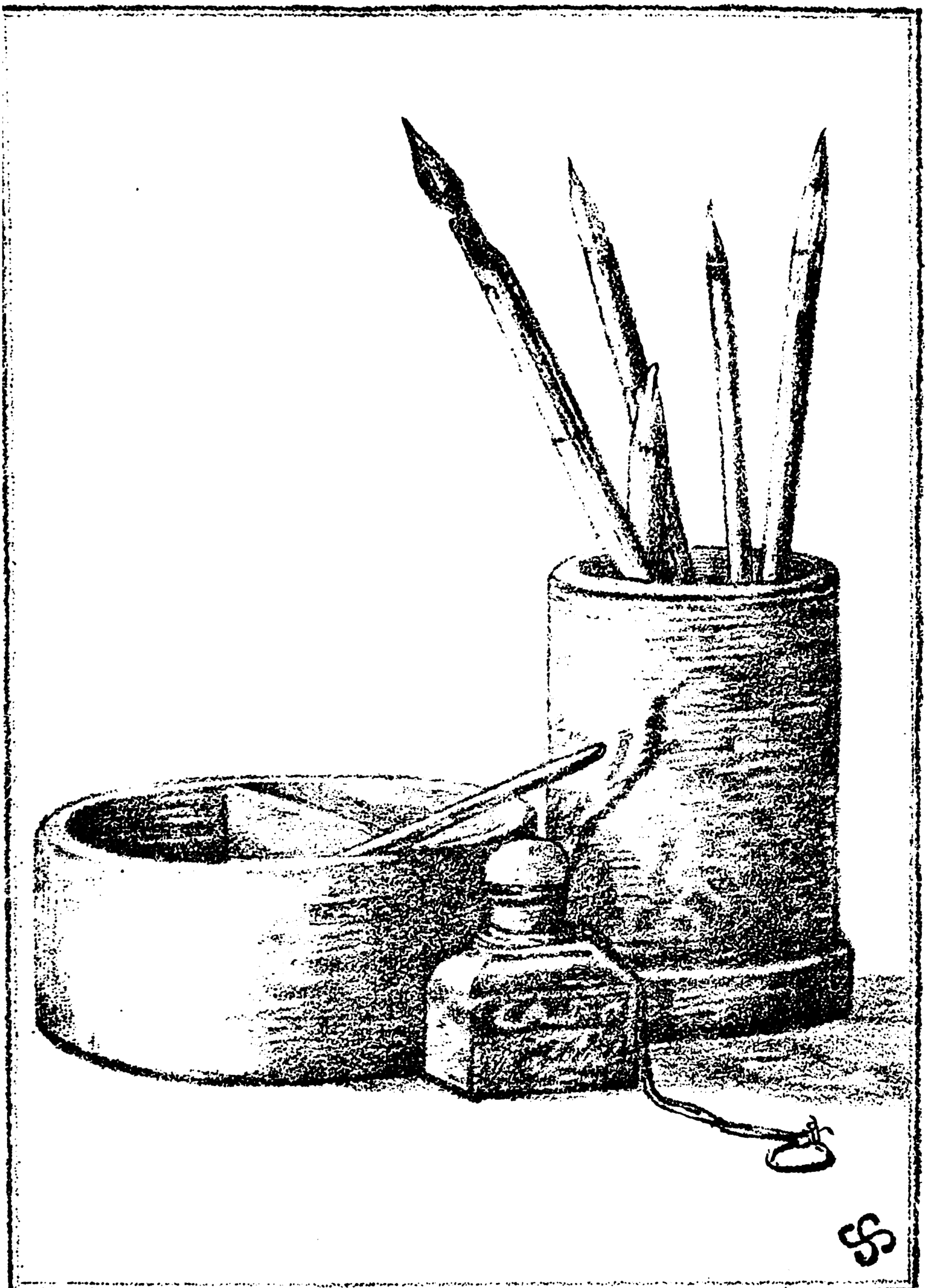
女子文壇

第三巻第六號

明治四十年五月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



机の上



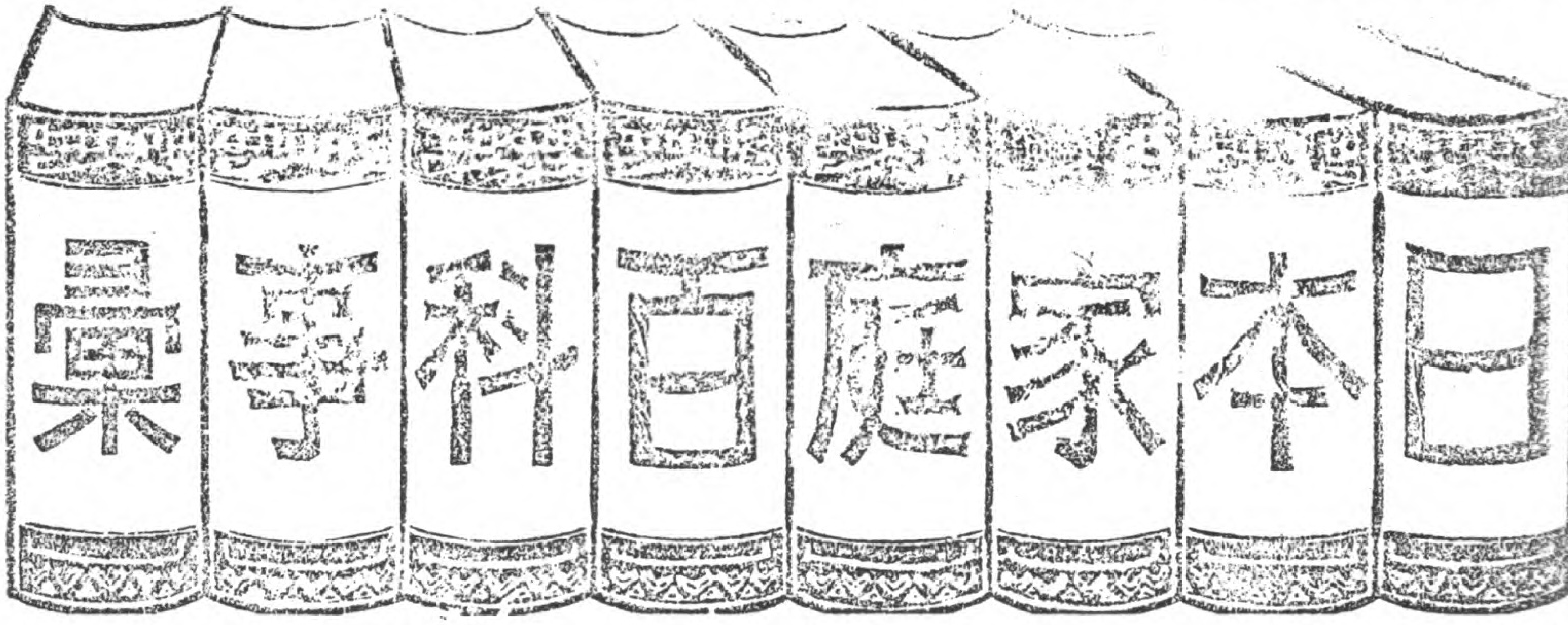
重松せい子筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

◎東京博覽會紀念特賣五月卅一日限◎

▶期限後又は期限內と雖も部數滿つれば特賣を撤回し當分絕版◀

帝國大學教授文學博士 芳賀矢一先生 女子高等師範學校教授 下田次郎先生 編纂



世上百般の知識を網羅し、日常實行の方法をも指示したる本書は何人にも必須の寶典たるは勿論なれども、家庭の女王たり家庭の中心たる婦人社會に向つては眞に一大福音を傳ふるものといふべし

本書はもと歐米に行はるゝ婦女辭典の精華を拔き本邦婦女に緊切なる事項を加へ親切丁寧に摸範的家庭の要件といふ要件を悉皆說明したるを以て**嫁入道具としては鏡臺と共に**無くてはならぬ持參品にて**主婦に**とりては時計と共に一日も見ずには居られぬ必要品也

育兒教育

◎小兒は如何にして哺乳すべきか、如何にして教育すべきか。玩具の種類用法遊戲の方法順序。禮儀作法の躾方より心理教育の原理に至るまで平易に且丁寧に說明したるものは本書也

衞生醫療

◎健康の幸福は如何にして維持すべきか。妊娠出產產後の養生月經等婦人衞生の各項目は勿論、小兒の疾病衞生療養に就ては特別の注意を與へ傳染病精神病、呼吸器病を始め、內外科一切の疾病原因經過注意應急手當等を親切明瞭に詳記したるものは本書也

料理裁縫

◎飲食の料理卽ち日本支那西洋食物の養分献立料理の方法より各種菓子の製法に至るまで、最も明細に說明し、衣服の調製織物帶地の產地縞柄色合選擇の注意裁ち縫ひの仕方を懇切に圖解を加へて詳記せるものは本書也

裝飾技藝

◎婦人美にして一層美ならしむべき裝具は如何、寶石には如何なる種類ありや。簪櫛指環は如何、香水白粉の選擇は如何。編物刺繡造花抹茶香合生花等の流派方法等を懇切に手に取りて數ふるが如く記明せるは本書也

音樂遊戲

◎音樂の嗜、舞踏の術も亦社交上婦人の心得べき事にして東西音樂の發達、異同變遷及び樂器の種類樂譜の讀方、奏樂の方法、遊戲舞踏の抱旋方法等に就て明細に遺憾なく敘述せるものは本書也

文學美術

◎婦人の品性を高尙にする文學美術、古今の詩歌文豪の略傳著作書の解題を始め繪畫彫刻建築美術工藝品の特色、作家等に就て文明國婦人の知らざるべからざる知識一切を網羅し解釋したるものは本書也。

女子問題

◎二十世紀の一大問題たる女子問題とは何ぞ。家庭社會國家に於ける女子の位地、權利、要求は如何、職業は如何、歐米女子の現狀は如何、是等の問題に就て最も確實精細に敘述したるものは本書也

以上は特に女子に關する重要なる事項なるが其外歷史地理理化博物宗教政治經濟軍事等何事も容易に且適切に說明したるものなれば**娘としても妻としても母としても女學生も女教師も看護婦も**小遣錢の一部を節儉して本書一冊を購ひ給はゞ生涯の便利譬ふべきものあらん。裝釘の壯美、挿畫の艶麗贈品としても賞品としても乃至は單に家庭の飾物として價格以上の價値十分なるべし。

◎裝釘壯美 ◎四六倍判 **千五百頁** 石版廿四刷極彩色 **挿畫及地圖卅一枚**

◎**特價** 一時拂六圓五拾錢 月賦拂六圓九拾錢（着金順九月五日ヨリ送本）月賦拂込金壹圓九拾錢以下每月壹圓八拾錢拂込 ◎小包料市內四錢市外廿二錢臺灣韓滿各七拾錢

東京神田 電話本一〇三六番 振替貯金五〇一番

合資會社 冨山房

女子文壇の廣告によりて御注文の節は其旨御書添を乞ふ

一度内容を見て眞價を知られよ

婦人世界

五月一日發行 二巻六號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊郵税共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎口繪 ◎彩色畫三枚◎名家若夫人◎各女學校の優等卒業生總代◎名家の令嬢鑑◎跡見女學校の卒業生◎東京女學館生徒の演じたる活人畫

◎藤を詠じたる古來の名歌評釋（白水）

◎私の感心せる女學生（晃くみ子）

◎婦人の眼につく博覽會の出品（月亭）

◎子供に親の云ひ附けを守らせる法（開稻絢子）

◎小說（苦學生）……西村醉夢

◎弦齋夫人 五月の珍料理

△わらびの料理は如何にするか

△ぜんまいの料理は如何にするか

△鯵の西洋料理は如何にするか

◎少女欄 毎號弦齋氏の筆に成る女學校と家庭の大評判

◎跡見女學校御在學中の閑院宮女王殿下の御勉強……跡見李子

評判の大文字 婦人の日常生活法 村井弦齋

△智識は如何に必要なるか

△一身に關する智識は如何に必要なるか

△家に關する智識は如何に必要なるか

△國に關する智識は如何に必要なるか

△世界に關する智識は如何に必要なるか

△諸般の智識は如何に必要なるか

△技藝は如何に必要なるか

△高等教育は如何に必要なるか

◎我が娘を嫁に遣りたる時の實驗談 阿部夫人

◎記者の見たる東京女學生間の新流行

◎米國中流社會の住居と家具

◎小兒の消化不良症（加藤醫學博士）

◎活動的婦人鳩山春子女史の面影……

◎吃音全治實驗談 古巣校生

◎結婚前の理想と結婚後の實際

◎婦人世界臨時增刊

化粧かゞみ

大好評（四月十日發行）定價一冊金拾五錢郵税一錢五厘

村井弦齋校閲 和洋新式化粧法 は悉く網羅せり美貌を望む婦人は讀め

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參六番） 賣捌 全國書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

樂天主義

文學士 塚原秀峯 譯述

盲者ヘレン、ケラー女史は眼盲し耳聾する不具なる身を以て此書を著はし一躍米國文壇の明星となれり女史が獨創の文致と思想とは此書に於て十二分に發揮せらる其樂天主義の開陳に於て文字靈活精彩奕々たるは勿論ショーペンハウエル其他の厭世主義を痛撃するや亦驚く可き筆力を示せり眞に是れ稀世の名著●定價金貳拾錢郵稅四錢

トルストイ短篇集

了島 冷泉 譯述

トルストイ研究者の爲に翁が短篇小說中の傑作十一篇を撰みて譯出す皆原作の面影を寫し得て憾み無く光明と趣味とは相伴うて卷中に滿てり這個善譯青年大人共に讀むべし●定價金參拾錢郵稅四錢

人道と天道

水島靜處 譯述

博士アドラー氏は米國倫理學會々長として令名夙に高き碩學なり此書は博士の講演中吾人の靈性的生活に關して殊に不朽の意義を藏するもの九種を選びて一書となせるなり深邃なる倫理學的見地と高き信仰との結合に基ける人生最高最善の思想を得んと欲する者は一讀せよ●定價金參拾錢郵稅四錢

文庫

二百記念號

最近發行 本號廿錢

一冊十五錢郵稅一錢六冊部稅共九十錢十二冊同一圓六十八錢

本號執筆者

瀧澤秋曉　小島烏水　五十嵐白蓮　河井醉茗　横瀬夜雨　溝口白羊　山崎紫紅　澤田東水　中根紅雨　山野邊浮草　齋藤紫村　三谷蘆華　有本芳水　山田停雲　重田はる　木村貞子　田邊光風

熊井秋菊　鮫島大浪　磯萍水　海賀變哲　伊良子清白　澤村胡夷　森川葵村　本山荻舟　大內白月　松田秀峯　石丸紫水　新井湖舟　堀井汀水　森下浪溪　人見東明　內藤鳴雪　吉川長水

青春の佳期

文學士 竹村修 譯述

青春は人生の佳期なり此の佳期を積極的に善用するは青年唯一の課程にして同時に最大快樂なり而も又其一生を光輝あらしめ幸福ならしむる所以に外ならず然らば所謂善用に必須なる各要件如何此書之を說いて餘蘊なく且頗る興味に富み讀者に多くの新所得あらしむ●前編●定價金四拾錢郵稅四錢

歐米名著百種 第二編 修養全書

新刊 高潔にして趣味ある名著を譯出す！

男子の見たる理想の處女 並處女の缺點

女子の見たる理想の青年 並青年の缺點

博士ミラー著 金[illegible]拾錢郵稅四錢

人は凡て自ら己の全體を見ること能はず個人と個人との相對に於て然るが如く一般男性に對して女性然り一般女性に對して男性亦然りされば男女各悉く自己の缺點を知り力めて品性の修養を全くせんが爲めには互に異性の己等に對する批評乃至注文を聽くの必要ありとす博士ミラー氏の此著一卷は文字悉く我が現時の青年男女の爲めに著はされたるものゝ如く適切無二の良書なり

第一編 織分の道 金四拾錢郵稅四錢

版元 東京本郷區駒込西片町十番地 振替貯金口座第三百五十五番 內外出版協會

雨後の山水



三宅克己先生筆

名譽總裁博恭王妃經子殿下

會長侯爵夫人鍋島榮子

大日本女學會

本會は女學通信教授に從事すると茲に拾參年此度第七回の學期を開きて新に會員を募集す●本會講義錄を女學講義と稱し其學科幷に講義囑托講師左の如し

○修身（後閑菊野）○禮法（佐方鎮子）○國文（同人）○作文（今泉定介）○漢文（菊地晩香、桂湖邨）○歴史（大森文學士）○地理（喜田文學士）○地文（脇水理學士）○數學（藤野了祐）○博物（脇水理學士）○理化（同人）○生理衞生（三宅博士）○家事（後閑菊野）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○畫學（武村千佐子）○史傳（下田歌子）其他附錄數欄あり

學期終了は貳ヶ年にして一個月の紙數菊判百五十頁以上之に對する會費は僅かに一箇月貳拾五錢にて別に入會金を要せず●講義は其文章極めて平易にて總かな附なれば高等小學を卒へざる人々にても講習するとを得べし高等女學校に入學し難き事情ある女子達は此書の配布を受けて女の道を辨へられよ●詳細なる會則希望の向はハガキにて申込あれ直に進呈すべし（尚此外に高等科もあり入學を許す）

新學期開始會員募集

東京市麴町區下二番町三七 大日本女學會（電話番町一三三〇）

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的姑息式賣藥）のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全に強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新發賣 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ實に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢　特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑壹劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し**悪血滯血**し多年滯りの古血及を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛況**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「新案元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき好世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢著金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**　（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

明治卅四年十月創刊

毎號 皇太子殿下下賜上覽

▲天下無双青年筆戰雜誌之覇王 大判百三十頁

第七卷

青葉若葉(増刊四月廿日發行)

第十號(五月一日發行)

第十一號(五月十五日發行)

秀才文壇

◁正價表▷

一冊郵税共金拾壹錢〇六冊同六十三錢〇十二冊同壹圓廿錢〇廿六冊同二圓卅四錢

毎月一日十五日二回發行

定期増刊二回

▲壇友之優待每號獎學大懸賞付

▲毎號選評擔任大家▼

〇敍事文……文學士 中内蝶二
〇抒情文……同 上
〇短篇小説……德田秋聲
〇俳句……高濱虚子
〇新體詩……馬場孤蝶
〇新派和歌……文學士 尾上柴舟
〇和歌……佐々木信綱
〇漢詩……小笠原虚舟
〇評論文〇日用文〇五行文學〇人物評論〇文士會(以上編輯局選評)

日本 少年少女作文雜誌 第二卷五號

少年文壇 〇普通文〇日記文〇はがき文〇和歌〇俳句〇お笑草〇新考物〇友達會〇筆蹟〇スケッチ

正價 一冊たつた金五錢 六冊郵税共金廿七錢〇十二冊金五十四錢(郵券代用一割增)

少年之友

五月一日發行

▲毎號少年習畫帖 山中古洞先生 吉本雅美先生 執筆を附録とせり

◎五月人形……記者
◎菖蒲の話……園丁生
◎ぼくの日記……ぼく生
◎黄金の林檎……竹峰
◎皆さんから……太郎
◎皆さんまで……記者
◎屋根の草……はくう
◎ロングフエローの生立
其他懸賞作文澤山

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目 文光堂 (振替口座壹九五五五番)

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店



淺草區七軒町所在　東京府立第一高等女學校卒業生　（明治四十年）



小石川區柳町所在　私立跡見女學校卒業生　（明治四十年）



牛込區河田町所在
東京女子奎文美術學校卒業生
（明治四十年）



本郷區竹町所在
東京裁縫女學校卒業生
（明治四十年）



麴町區三番町所在　三輪田高等女學校卒業生　（明治四十年）



本郷區弓町　女子美術學校卒業生　（明治四十年）

各女學校卒業優等生



三輪田高等女學校
吉原あい子



跡見女學校
西澤春海



跡見女學校
和田總子



東京裁縫女學校
飯高たき子

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

滋養新劑 グリコナール錠

本劑は醫學博士北里柴三郎氏指導の下に佐伯矩氏が牡蠣の滋養成分に就き研究の結果創製せるものなり本劑は滋養劑として病者及一般衰弱者に有効なるのみならず心臓を強め盜汗を治し速かに體力を恢復し元氣を旺盛ならしむる特異の効能ある事を多數の醫學者に證明せられたり……本劑の説明書は御申越に從ひ呈送す

消化新劑 タカヂアスターゼ

本劑は工學博士藥學博士高峰讓吉氏の發見に係る澱粉消化新藥なり我醫學諸大家が治療上に於ける本劑の効果に就き發表せられたる實驗報告を集載せる説明書は御希望に依り無代郵送す本劑は粉末及錠劑各大小容器入として各地藥舖に販賣す類似品あり必す高峰氏タカヂアスターゼと御指定を乞ふ

發賣元 東京市日本橋區南茅場町

三共商店藥品部

誌友おもかげ（八）



（佐倉）
片岡春子
高科才子
吉田秋子





（廣島）
今西初野子
佐藤いち子

（沼津）
谷井その子
飛奈衣子
千葉みつ子

（小樽）
伊藤ゆみ子
攝あさ子
高橋喜美子

（群馬）
中野百合子
常澤薫子



記者申す――續々御寄贈を願ます――御都合でお返し致升



誌友おもかげ　九



（東京）小島千菊子





（甲府）穠山きん子

（羽前）仲島政子



（宮城）手塚ひさよ子





（大阪）陰山白ばら子

（佐渡）淺井銀子



（小倉）林千賀子





（岡山）西村清子

（相模）富藤千代惠子

（續々御寄贈を願ます御都合てお返し致ます）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

沼波文學士。佐々木信綱
巖谷小波。河井醉茗
生先序文

女子 懸賞文集

第二輯

製本出來

△全一冊 讀切洋裝 五百頁

正價金三拾五錢 賣價金三拾錢 郵稅六錢

本書第一輯は曩に大好評忽ち數萬部發賣の盛況を呈せしが、今又第二輯成る、滿卷賞に獎學五百金餘の重賞を懸けて募れる天下女秀才の金篇玉什明治文壇の珍品なり

出版元 東京京橋區大鋸町 電話本局六〇七番 （郵便振替貯金口座第一七二九番） 女子文壇社

特約元賣捌 ○東京堂○東海堂○北隆館○至誠堂○前川文榮閣○上田屋○良明堂

好機逸す可らず

◀東京勸業博覽會開設紀念特賣▶

本居東宮侍講題詠　下田學習院女子部長題歌　小杉文學博士序文　小森松風君編著

女子文學全書第壹編

美文作法

全一冊洋裝　正價四十錢　紀念賣價廿五錢　郵税四錢

中央新聞評　女子文學全書の第一編として出てしもの總論に於て美文の起原名稱種類を說明して叙事文抒情文敍景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小說との關係を述べ更に美文鑑評法、漢文の素養、讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳述したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし

坪井理學博士序文　山田美妙先生序文　小森松風君編

女子文學全書第二編

言文一致文範

全一冊洋裝　正價四十錢　紀念賣價廿五錢　郵税四錢

論より實地明治式の新文章言文一致體の好モデルを各部門毎に掲げ傍ら起源發達種類熟練法等迄面白く說いてありますから是で充分練習試作が出來ます文範作例は皆當代名家の粹英實用雅美兼帶の言文一致體は清新の思想を發揮すべき明治女性の必要機關又家庭文房の珍としても錦綉花園の觀ある此文範をおすゝめします

實地精査

報知新聞記者　中村木公君編

女子遊學便覽

（三十九年精査）

全一冊洋裝　學校長肖像入　正價金三拾錢　紀念賣價廿錢　郵税四錢

萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば調査は善く行屆けり、尚ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば上京に念ある女學生と其の父兄とには頗ぶる便なるべし。

出版元　東京京橋區大鋸町　女子文壇社　（郵便振替貯金口座第壹七二九番）

元賣捌○東京堂○北隆館○至誠堂○前川文榮閣○上田屋○東海堂○良明堂

▲東京勸業博覽會開設紀念特賣廣告▼

河井醉茗君著　山中古洞君畫

詩と美文

王蟲

目次

◎姉妹◎舞少女◎笛物爵◎火性◎木の業◎昔の戀◎鉄を止めて◎哀江頭◎朝顏の葉◎紫死

◎をさな草紙◎廢城◎幼き富士◎詩人村◎眠らんとして◎夕暮日記◎戀想文讃◎手函の讃◎わが家の正月行事◎海の幸

◎渡りぞめ◎戀ごもり◎廢屋◎天なる戀◎大和三山◎故郷の家◎故國の音樂◎さゝやき◎くもり空◎繪師

◎夕燒◎天香山◎春の卷◎驚のゆくへ◎夜の戸◎終點まで◎新年の家◎愛子の死◎五尺手拭

◎氷山◎時谷◎草刈◎林檎◎塔下の少女◎落葉を焚く歌◎我子◎いのり◎玉蟲草紙

◎若葉の家◎濱名湖物語◎手紙の端に◎雨夜の占◎軍人町◎狸囃子◎識の墓◎片羽を齋へ◎驗馬

◎吾行く道◎幹に刻める影◎冬の日◎詩人の家◎朝の響◎若菜の子◎吾家の花◎高野街道◎靈顏

全一冊新式製本色クロース金箔、色箔入頗優雅
（正價金六拾錢）
紀念特賣價參拾錢　郵税六錢

鈴木秋風君著　太田三郎君畫

小說美文

朝晴

目次

▲箒木▲枇杷の實▲蜩時雨▲日舍道▲春のひかり▲鬚そり▲野性▲手袋賣▲江戸川▲野菊▲喧嘩停車場▲春の悲▲青葉日記（花ぐもり、海酸漿、向の丘、音樂家、惻隱、寂寥）▲遠潮

彩色挿畫　薇薔　湖の音　詩集　大川端

全一冊新式製本　洋裝密書入頗優雅
（正價四十五錢）
紀念特賣價廿五錢　郵税四錢

出版元　東京京橋區大鋸町　電話本局六〇七番（振替貯金口座第一七二九番）
女子文壇社

特約元賣捌　〇東京堂〇東海堂〇北隆館〇前川文榮閣〇至誠堂〇上田屋〇良明堂外書店

毎號 皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第三巻第六號目次

○甲種一等賞 銀側懷中時計當選者 拾ばり日記（叙事文）……石神喜惠子



第三巻　第六號

（明治四十年五月一日發行）



外國語の力

記者近頃、或る青年の小集會に臨席しました時、座興に英語の唱歌を歌ふたものがありました、すると又次に佛蘭西語の唱歌を歌ひ出したものがあります、又々獨逸語の詩を暗誦したものがあります、最後に又聞ではあるがと露西亞語の俗謠を一寸一節眞似をしたものがありました。ほんの座興の事でもあり、之を以て直に今の青年が語學に博通して居るとは言へますまいけれど、外國語が各方面から入て來ると云ふ事は、確かに言へるのです。そこで記者は諸孃に氣を注け！を絶叫せねばなりませぬ、うか〳〵して居ると世間一般に外國語――少くも英語位は知らぬものはないやうになるかもしれません、英語の力は、日本語の力と平均するやうになるかもしれません殊に多少社會の上階級に立たうとする者には、男でも、女でも外國語の素養がなければ、仲間入が出來なくなります。ですから諸孃に改めて今から英語をおならいなさいと勸めます、自分より若い者が、能く知つて居るから習ふのは馬鹿らしいなどと思つてはなりませぬ、言語の生命は永遠です、いつから習ひ初めても、語學に遲速はないのです、世間にはまるつきり語學の力の無いものが、いくらもあるのですから、それから思ふと今初めても决して遲くはないのです、假令諸孃の境遇が學問をする時期より後れ居ても、語學の心得だけても持つて頂きたいものです。

假名遣問題

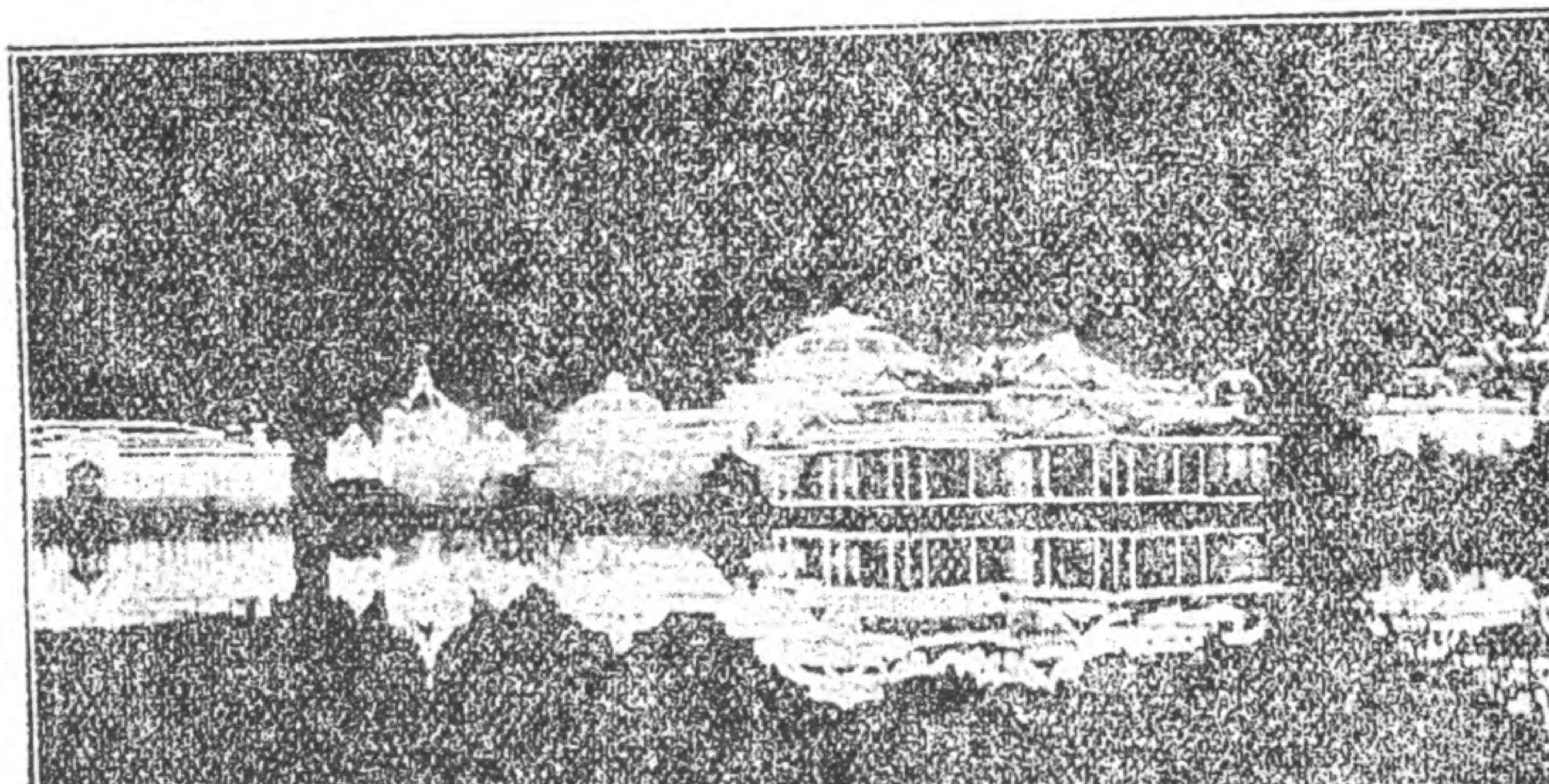
文學士　岡田正美

歌文を作ることを主としてをられる諸子に向かつて假名遣の御話をするのは少しいかゞであるが、時節がらでもあるから、この御話をする。

假名遣には、國語假名遣と字音假名遣との二通りがある。國語假名遣といふのは我が國で出來た言葉で書きあらはす方法をいふので、字音假名遣といふのは支那から傳來した言葉を假名でうつしとる方法をいふのである。田舍、慈姑、位、等のイにはゐをつかひ、櫂、悔、報、等のイにはいをつかひ、貝、盥、價、使、等のイにはひをつかふ、繪、烏帽子、聲、故、机、等のエにはゑをつかひ、萌黄、笛、稗、等のエにはえをつかひ、家、古、前、後、唱、歸、等のエにはへをつかふ、男、女、叔父、叔母、薫、栞、魚、操、等のオにはをつかひ、巖、朝顔、氷、直、通、等のオにはほをつかひ、思、趣、老、衰、等のオにはおをつかふ、とかやうに假名のつかひ方を規定してゐるのを國語假名遣といふのである。委、尉、員、院、等のイにはゐをつかひ、伊、意、印、韻、等のイにはいをつかふ、怯、業、等のゴーにはごふをつかひ、合、甲、盍、等のコーにはかふをつかひ、口、工、公、後、等のコーにはこうをつかひ、光、皇、荒、鑛、等のコーにはくわうをつかひ、行、交、香、高、行、江、孝、等のコーにはかうをつかふ、とかやうにうつしかたを規定してゐるのが所謂字音假名遣である。

然るに、この二種の假名遣は記憶するに甚だ困難である。口にいふ通り假名にうつし、假名で書いたとほり口にいふのなら、極めて容易であるが、この假名遣は二種とも、さうでないから、誠にむつかしいのである。かやうなむつかしいのを七八才の小供に教へるのは甚だよくない、殊に、字音假名遣の如きは、尋常四年以上になりて、漢字をよく記憶して、自由につかふことが出來るやうになれば、全く不用に屬すべきものであるから、尋常二三年あたりの下級で強ひてやるだけのものでもない、といふので、文部省では、明治三十三年の八月に小學校令施行細則を發布した時に、小學校に於て字音假名遣を教へることを廢止して、そして一切口に發音する通りうつすことにした。即ち、イと發音するい、ゐ、は皆いと書く、エと發音するえ、ゑ、

は皆おと書く、オーと發音するお、を、は皆えと書く、オーと發音するあう、あふ、おう、おふ、わう、をうは皆おーと書く、コーと發音するかうかふ、こう、こふ、くわう、は皆こーと書く、ホーと發音するはう、はふ、ほう、ほふは皆ホーと書く、キョーと發音するけう、けふ、きやう、きよう、は皆きょーと書く、ショーと發音するせう、せふ、しよう、しやう、は皆しょーと書く、チョーと發音するてう、てふ、ちよう、ちやうは皆ちょーと書く、ニューと發音するにう、にふ、は皆にゅーと書く、リューと發音するりふ、りゅう、りう、は皆りゅーと書く、とやうに定め、又、カと發音するか、くわ、はかと書き、ガと發音するが、ぐわ、はがと書き、ジと發音するじ、ぢ、はじと書きズと發音するず、づ、はずと書くのを正しいとし、なほ、從來の慣用に依つてくわ、ぢ、づ、を書いても妨がないといふことに定めた。



博覽會第二會場のイルミネーション

此改定は、凡て發音の通りに書けばいゝのであるから、小學兒童の爲には勿論、我々にも極めて便利なものであつたが、一方、保守論者からは隨分はげしい反對が出た。長音をあらはすに「ー」をつかつたところから、この改定の主義を棒主義とよび、棒論、安論、暴論、とも嘲つた。然し、一方、教育家連中は皆非常な贊成で、いづれも、この主義を國語にまで及ぼして國語假名遣の煩雜なのを一日一時も早く除いてもらひたいと熱望して來た。文部省も固よりその考などで、それから、ますますその方面に調査をすゝめて、いよいよ昨年の末に國語假名遣改定案を作つて、之を國語調査委員會の議に付し、その議を經て、之を高等教育會議の議にかけた。その結果、假名遣改定案は口語體の文にのみ適用する、文章體の文には適用しない、といふことで、可決になつた。

さて、この改定國語假名遣の主義は、大體に於いては、

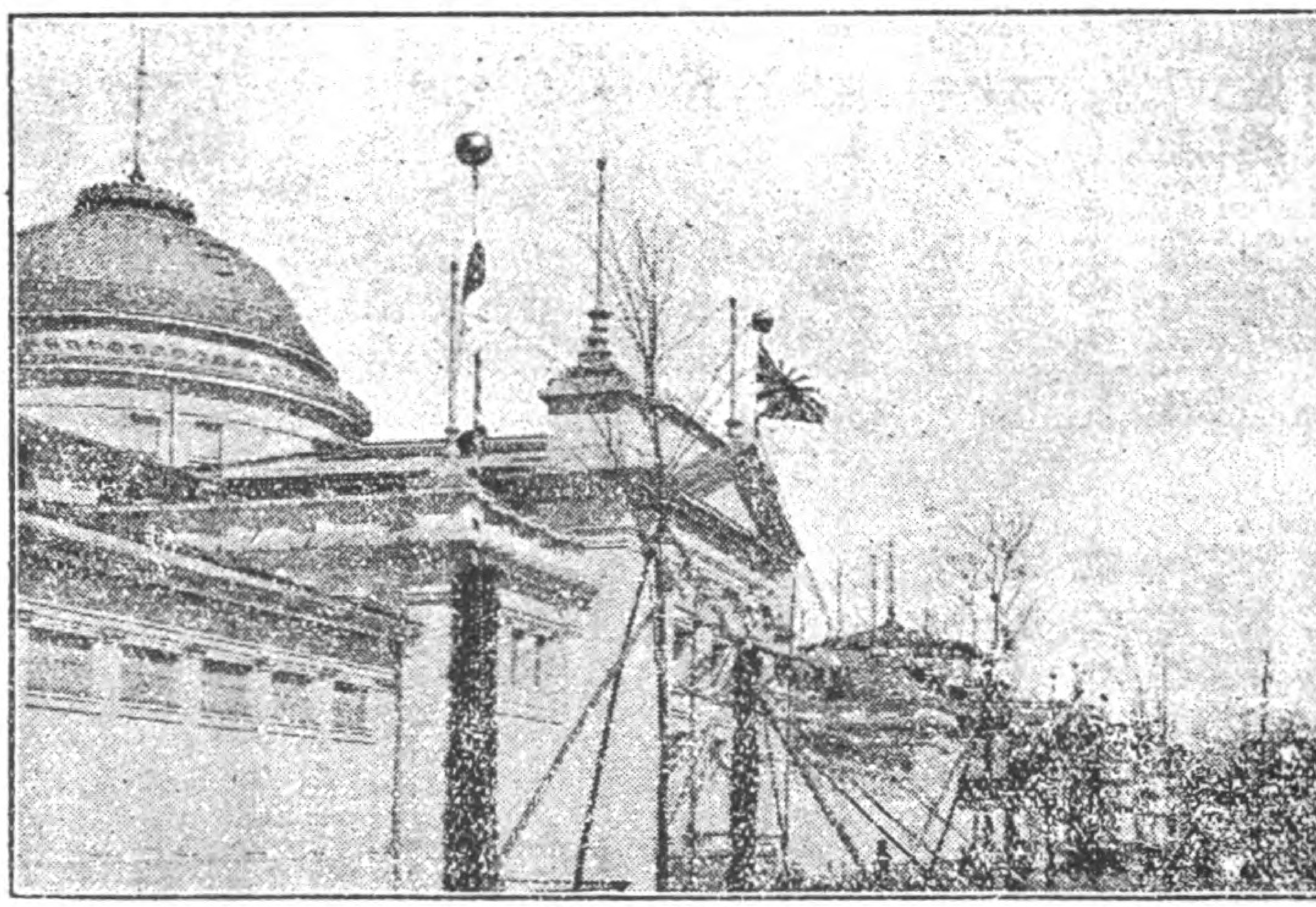
發音の通りに書くので、即ち、ワと發音するは皆わと書く、即ち、粟、川、皮、岩、澤、蛙、瓦、替、憐、祝、などは、いづれも泡、俵、醪、理、などと同じく、わをつかふ、イと發音するひ、ゐ、は皆いと書く、即ち、貝、價、鶯、齡、敬、願、迷、井、藍、位、基、用、等は、皆櫂、悔、報、老、と同じ樣に、いをつかふ、エと發音するゑ、[illegible]へ、は皆えと書く、即ち、繪、繪具、烏帽子、末、故、机、笑、蠅、備、早苗、古、歸、辨、唱、等は、皆枝、入江、笛、見、聞、などと同じく、えをつかふのである。この外、夕暮、夕顏、結城、などはゆうぐれ、ゆうがお、ゆうきと書く、狂、振、飾、などは、くるう、ふるう、と書く、近江、大坂、啞、扇、等はおうみ、おうさか、おうし、おうぎ、と書く、神戸、麴、香し、小路、等はこうべ、こうじ、こうばしい、こうじ、と書く、八日、漸々、等はようか、ようようと書く、蝶、鴨脚樹、今日、夫婦、等はちよう、いちやう、きよう、みようと、と書くのである。即ち、まづは發音のまゝに寫すのであつて、前に述べた字音假名遣の改定の精神を適用したものと見てさし支ないたゞ、相違してゐるところは、字音假名遣の方では、コー、ソー、トー、ホー、モー、等の長音にはーを用ゐたのを、今度は、これをこう、そう、とう、ほう、もう、とやうにうをつかひ、また、キュー、シュー、チュー、など拗音には、ョ、を右側下に細書したのを、今度は、下に普通の字できよう、しよう、ちよう、とし、キュー、チュー、シュー、等の拗音はきう、しう、ちう、と書くことに改めたとと、アー、カー、サー、ター、の類はああ、かあ、さあ、たあ、とやうに、あをそへて書くことに改めたこととである。エー、ケー、セー、テー、等は、從來の通り、えい、けい、せい、てい、等と書くことに定めた、なほ、カと發音するか、くわ、は凡てかと書き、ジと發音するじ、ぢ、は凡てじと書き、ズと發音するず、づも凡てずと書くことに定めたなほ、除外例として弖爾遠波の、は、へ、をに限りては、へ、を、の假名をつかふことに定めた。

此の如く、この改定案は極めて自然的で極く平易なものであるが、さて、この改定案によつて文をかくと、文の面は隨分從來のとかはる。動詞の如きは活用の行までかはる。(買は、買ひ、買ふ、買へ、買ほう、と書けば、ハ行五段活用であるが、買わ、買い、買う、買え、買をうと書けば、新ワ行五段活用になる)のがある。そこで、例の保守連中はもはやどうしても默つてはをられない

早速に同志を談らつて、皇道國語會といふものを起し。又、一派の人々は、別に國語擁護會といふものを起して共に俱に文部省に反對した。是に於て、國語問題は噪然として天下にかまびすしく、甲論乙駁、なかなかの勢になつた。貴族院に於いては先月伊澤修二氏の一派から假名遣改正は事重大なるに依つて更に鄭重なる調査が願はしいといふ建議案が提出されて、可決になつた。衆議院に於ても同月に三輪信次郎氏の一派から同樣の建議案が出たが、これは會議にかゝらずに終つた。

さて、反對論者のいふところには隨分滑稽な議論もあるやうであるが、ともかく、大躰に於て、國語の歷史を無視し、舊假名遣を尊重しすぎるといふ弊に陷りてゐはしないかと思はれるのである。即ち、論者は、舊假名遣は神聖なものである、合理的のものである、古來少しも亂れたことのないものである。この假名遣をさへ永久に守つて行けば國語の純粹も保たれ、皇道も保ちえらるゝものと考へて、而して、音も言葉も時代時代に依つて變化するものである。假名遣といふものは言葉の變はるに伴なつて變はつて行くべきものであるといふことを全く考へてをられないやうである。

元來、言葉といふものはどうしても變はるべきものである。進步發達のないところでは、その變化は緩慢であるが、夫でも全く變化のないことはない。まして、進步發達のはげしいところては、この變化は殊にはげしいのである。我が國の過去に於て、この變遷の最も激しかつたのは奈良朝と平安朝との境の處である。萬葉集と古今集とを比較して見ると、殆んどその間數百年もへだたつてゐるかと思はれる位である。



博覽會第一會場内美術館

て、とにかくに、言葉は變はるものてある。さすれば、假名遣はどうあるべきてあるか、一度定まつた以上また變はるべきものてないか、又は、言葉の變はるにつれて常に變はるべきものてあるかといふに、假名遣といふものはもと〳〵言葉を寫す爲の方法てある以上は、言葉が變はれば寫し出す方法も從つて變はるべきてあらう。衣服には一つ身との三つ身とか、本裁とかいふのがある。本裁の內にも身長に從つて二寸とか三寸とかいろ〳〵あるやうてある。衣服は身躰に應じて寸尺を定めて行くべきものてある。之と同樣に、假名遣も言葉の變化に應じて改めて行くべきものてあるのてある。

論者は、又、舊假名遣は昔確定された以來一度も亂れたことのないもののやうに考へてをるやうてあるが、さうてない。今實例を擧げて、夫を示さう。

所謂假名遣、延喜天曆頃まてはまづないやうてあるが、それから以後には段々ある。こゝに行成卿の書いたのだといはれてゐる素性集があるが、(行成卿は藤原道長紫式部、淸少納言などと同時代の人て、平安朝最盛の時代の人てある)この素性集を見ると、かの「底ひなき淵やはさわぐ山川の淺きせにこそあだなみはたて」の歌が「そこ井なきふちやはさハぐさハかねどあさきせにこそうはなみもたて」となつてゐる、又「をこなはせたまふとき」とかいた處もある、又「秋やまにまどふこゝろをみやたきのたきのしらハにけちやはてゝむ」とかいた處もある。「泡」は、古事記にはあはとあるが、普通にはあわが正しいとしてある。この外、この時代の書風てあるが、んとむともとの區別がない。これらて、天曆以後の假名遣の樣子の一斑はわかるてあらう。

又、こゝに、定家卿の假名文字遣といふ書がある。この書は、定家卿が、家集の拾遺愚草の淸書を母方の祖父の河內守親行に賴んだ時に、親行が、ヲとオと、エとヱとへと、イと井とヒと、などどうも區別がわからない、後學の爲にもなることてあるから、此淸書の序にかなづかひをきめたらどうてあらうといつた、これについては、定家卿もかねてさういふやうなことを考へてゐたので至極賛成て、そこて、親行が案を立てゝ、定家卿に見せた。ところがその案が皆定家卿の思ふ通りにいつてゐたので、早速合點した、(即ち、校閱を了した。)そこて、こゝに一の假名遣制定が出來た。之をその後親行の孫の行阿が增補したので、この本を定家

假名遣とも又行阿假名遣ともいふ。定家は、歌の神として崇拜され、抑於歌道定家を難ぜん輩は冥加もあるべからず罪を蒙るべきことなり、などいはれた人であるからその人の校閲を經たこの假名遣書の尊重されたことは無論で、此後永く世の標準として行はれてゐたのである。ところが、今、これについて調べて見ると、今日のいはゆる假名遣とは大分ちがつた點がある。「男」はヲトコとあるべきであるが、おとことしてある。「鬼」はおに、をに、二所に出してある。「鯉」はこひ、こい、こゐ、三所に出してある。「基」はモト井とあるべきであるが、もとひとしてある。「小」はチヒサシとあるべきであるが、ちいさしとしてある。「解て」はトキテの音便であるから、トイテとあるべきてあるが、といてとある。(之ては問ひてになつてしまふ)。この外に、この類はいくらでもある。然し、當時の人は少しも之を疑はないで(むしろ、イの假名にいひゐ三躰ある、エの假名にえ、江、ゑ、へ、四躰ある位に考へて)これに從つてゐたのである。湖月抄の著者で芭蕉の師匠であつたかの北村季吟などは、無論この定家流の假名遣をつかつてゐる。平家物語、源平盛衰記、大平記、等もやはりこの流である。一般の人々は之等の書のをまねて適宜に書てゐたのである。



博覽會第一會場內噴水塔

ところが、元祿になつて、大坂の契沖阿奢梨が定家假名遣の古書の假名遣と違つてゐることを認めて古事記、日本紀、萬葉集その他、凡て正しいと思はれる書物に依つて、古代に行はれてゐた假名遣を調査して、和字正濫鈔といふ書を作つて元祿八年に出版した。ところで、當時は定家假名遣の行はれてゐた時であるから、隨分反對もあつた。中にも江戸の橘成員といふ人は倭字通例書

といふのを作つて、契沖の説をうつた。そこで、契沖は又和字正濫要略を作つて自分の誤を正し、又、成員の説をも駁した。かやうにして、契沖の説は漸々古學者間に信ぜられるやうになつて、その後古言梯、雅言假字用格、などいふ書も出來て、之が爲めにます〳〵勢力を得て、遂にうごかないものになつて來た。然し、それは古學者や歌文にたづさはつてゐる者の間のことて。普通の士民は相變らず定家流の假名遣を大抵にやつてゐたのである。

ところで、明治七年になつて文部省で小學讀本を作つた。この時に、假名遣は契沖流の假名遣を採用した。是が契沖流の假名遣の標準假名遣として天下に公認せられた初である。それから、二十年頃になつて國語國文が復興されるに及んで、丁度國學者の流を汲んだ人人が、その局に當つてゐたので、契沖流の假名遣はますます唱道され、ます〳〵尊奉されて、中學校師範學校にも教科として採用され、又、官報局でもこの以前から之を採用して詔勅法令等一切の官文書に適用して來たので、いよ〳〵ます〳〵勢を得て、遂に絶對の正しいものとなつてしまつたのである。

然し、極言すると、この假名遣は凡そ千年ばかり以前に、通用してゐた國語の假名遣であつて、既に五百年前の假名遣でもなく、三百年前の假名遣でもない、無論明治時代の今日の國語の假名遣ではないのである。ところが論者はこれを二なきものに思つて、これを今日の假名遣として天下一般に使はせようとするのであるから、その議は實に假名遣の原理に戻つてゐる隨分亂暴な議であるといはなければならないのである。

この假名遣は國語のまだ餘り轉訛してゐなかつた時分の狀態を寫してゐるのであるから、所謂語源を知るには甚だ便利であるが、然し、普通一般の人士は國語の語源などを研究するよりは寧ろ國語の運用を研究する方が大切である。その國語の運用にはこの古假名遣は甚だ不便であるのであるからは、この古假名遣は今の普通一般の人士には寧ろ無用有害なものであるといつてもさしつかへはなからう。

なほ、こゝに論者の假名遣に關して見落してゐる一大要點がある。それは、言語の變遷の記録といふことである。「かは」(川)は古來かはと書いて來てゐるから、いつごろまでカハといつて來、いつごろからカワといふやうになつたのか、まるでわからない。「そこひ」(底)の如きは、前に述べた素性集にそこヰとあるので見る

と、當時既にソコヰ、又は、ソコイ、と發音してゐたものと見える。をの假名の如きも、本來の音はウォであるが、同集にをこなひ（行）とあるのを見ると、當時既にオと發音してゐたものとも見える、この外「たまふ」（給）の如きも、たぶ、たべ、など用ゐた例が中古以來の書に澤山あるから、さやうに轉訛したといふことがわかるし、「てけり」の如きも、てんげりと書いた例が澤山あるから、その時代にはさやうに讀んだといふこともわかるのである。是を國語を亂すの、語源を失ふのといつて、いつまでも古代の假名遣の通りに書いて來た日には、言語の變遷のあとといふものは全く湮滅してしまつて、國語の變遷は全く研究することが出來ずにしまふのである。

極言すると、從來の假名遣は實に此の如き性質のもので、まづ普通一般の人々には餘り必要でない。然し、そこにまた慣用といふことがあつて、我々の眼や手はそれになれてゐる、その上その形について又種々の聯想も既に具はつてゐる。であるから、我々は矢張從來の假名遣の方が讀みやすくもあり、書き易くもあり、又おもしろくもおくゆかしくも感ずるのである、即ち、おもひと書けば、直ちに思のことと知り、それに心の火といふものをすぐに聯想するが、これをおもいと書く時には、思といふ感は起らないで、重しといふ感がすぐ起る、といふやうな嫌がある蝶もてふとかいてあればいかにも蝶らしく感ずるがちようとかいてあると一寸變に感ずる。然し、かやうなことは慣であつて、丁度士族ときけば、すぐ上品な人物といふことを考へ、平民ときけば、すぐ卑賤な百姓か陋劣な商人かと思ひ起すやうなもので、過度の際にはまぬかれ難いことである。

て、文部省の今度の新定國語假名遣には、これを斟酌して、弖爾遠波のは、へ、を、は從來のまゝに存することにし、又、この假名遣は口語躰の文にのみ適用することにし、文章躰の文には適用しないことにしてある。て、一方からは姑息に失してゐる、手ぬるい改定であるとの批難もあるが、今日の事情に鑑みると、まづは止を得ないのである。然るに、例の皇道國語會や國語擁護會の人々からは、異外にも妙な、的をはづれた、途方もない反對などが出るので、我々はたゞ〳〵驚きに驚いてゐるのである。

假名遣と言語とを混同するやうな人々や言語と道徳とを混同するやうな人々などは、まづどうでもよろしい。

假名遣は假名遣、言葉は言葉、道德は道德と區別して考へられる若い人々は、まちがつてもさやうな奇妙不可思議な論には耳を傾けないやうにして、正理正道に向つて歩を進められたいのである。

明治三十九年花曆（續き）

志賀別川

●八月十二日（日曜）夜、晴朗、長空一碧、星斗歴々、日本方第三天測點は豫定以上の觀測を了り得。

●同　十三日（月曜）日本委員本部に於て日露兩國委員會議を開く、散會後、小宴を天幕内に開く、談笑湧くが如く、諧謔百出、談偶々水瓜の事に及ぶ、露國委員長曰く水瓜とな、水瓜の贈物は堅く謝絶す、小露西亞にては結婚の申込を謝絶するには、贈物の籠の内に竊かに水瓜を入れ置くなりと、言了りて大笑。

●同　十五日（水曜）スコット翁の正百三十五年誕生日に當る。依てポロナイ川對岸の月眉湖（舊ポロナイ河流なりしも河より分離し湖となる、故に其形細く長く月の如く眉の如し、チァラの遙山、水に鑑して湖邊の楊柳と綠紫映發し、且つ湖の極端まで探求せしは予にして、在來全く無名の水塊なれば、郭頻伽の湖邊楊柳綠一灣、樓頭新月碧一彎、盡道阿儂眉樣好、阿儂門外有遙山の句より、月眉湖と附名せしなり、頻伽の此句、宛然たるスコット翁の『湖上の美人』中の景象）を探求し、大鮒二尾を網し、急造の筏にて川を渡り歸らんとするや、筏、予の重量に堪えず、河心にて沈沒せんとす、即ち眞裸躰となり、犢鼻褌を以て衣帽を頭に卷きつゝ、泳ぎて右岸に達す。夕、新に一天幕を林樹の中に張り、衛兵の追分節を聽く、節々淸新、萬斛の爽氣頓に湧き來るを覺ゆ。

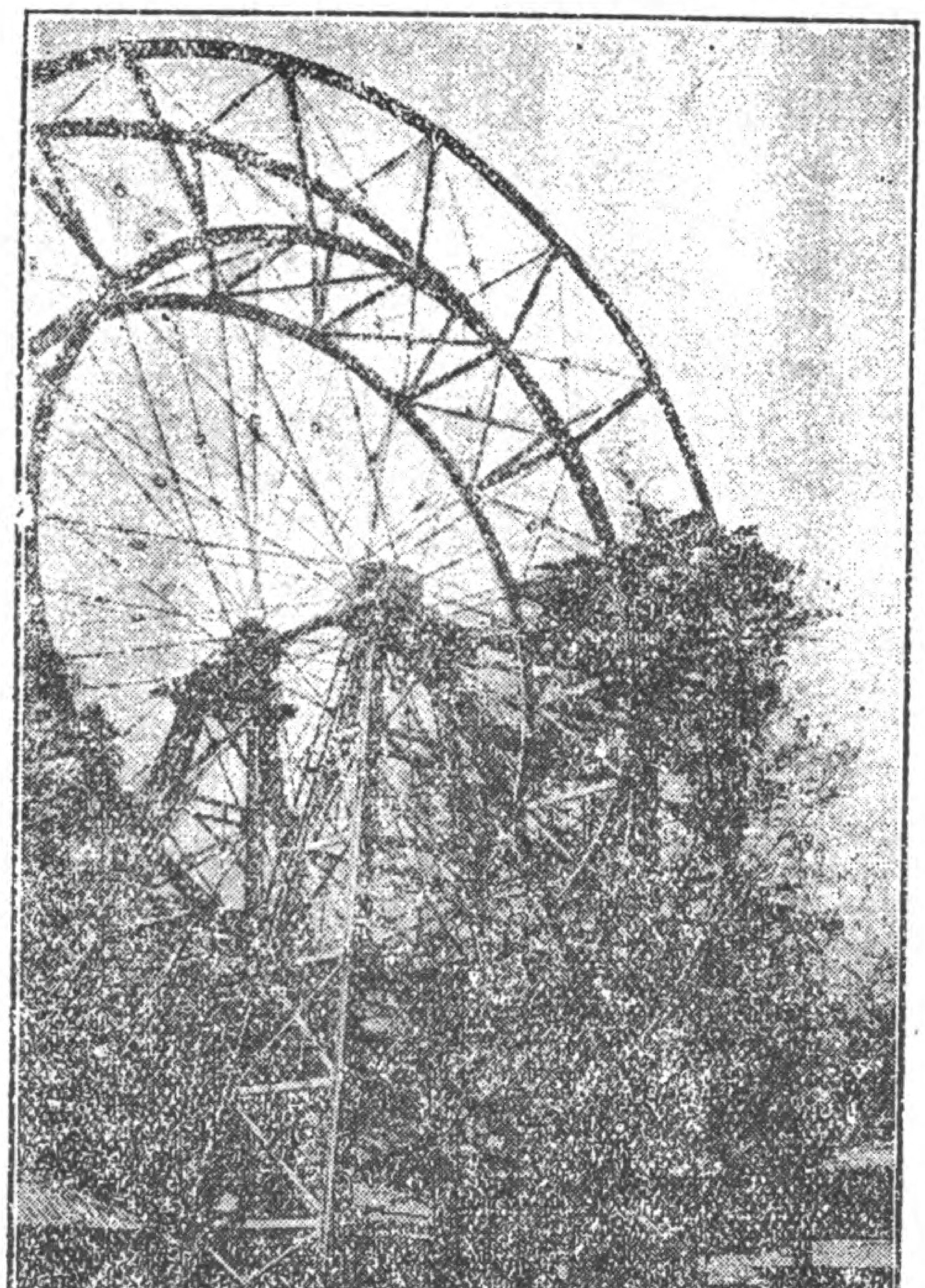
●同　廿一日（火曜）山火事、風と共に南東、南西、西の三處より勃發し、滿天焦げ來りて雲狐色と化す、天測點への糧道一時爲めに絕たる。

●同　廿二日（水曜）木葉初めて黃し、北地秋の早き

を知る。日本よりの郵便物來着す。夜、原田(予が東京宅隣近の斬髮師)蟋蟀一尾を捕へ、防蚊覆面の内に飼ふ、聲々爽涼、枕上に音を聽きつ、且つ故人千里新に寄せたる詩句を讀む、此境此情、此の僻陬にある者に非ずんば遂に解し能はざる處。

◉同　廿四日(金曜)　雷鳴轟々。豆大の雹を降らし、次で飛雨となる、黄昏新霽、彩雲滾々として落葉松の海の上に湧き來る。

◉同　廿五日(土曜)　露國產青馬アレキサンドル號に跨り、グロデコオ出發、九時、ツンドラ(泥炭沼地)に入る、水苔の腐蝕せるもの重なり〳〵て、磯躑躅一面に其上を蔽ひ、歩々水に飽ける海綿の上を行くが如く、而かも彈性ある磯躑躅は我が兩脚を彈きつ撥ね飛ばし、中中に行くべからず、唯だ其の淸き香氣を發揮するもの稍々人の神氣を爽かならしむのみ。



博覽會第一會場內の觀覽車

◉同　廿九日(水曜)　日本委員本部附の人夫、貂を手捕にす。夜、新霽、月色淸朗。

◉九月一日(土曜)　陰曆七月十三夜の月、白楊の梢に懸り、晶明にして蟲聲も亦た白きの感あり。

◉同　二日(日曜)　ポロナイ川に網し、鮭鱒六尾を獲、頃日の鱒は灰色となり、復た銀鱗潑刺の狀なく、鮭は鱗に凋める薔薇の色を縞にし、兩魚共に脂減り、風味殊に佳ならず。夜、月明、霜下る、人は宛然「受降城外月如霜」の句中にあり。

●同　三日(月曜)　初霜、草の上に鹿子斑なるを見る。

●同　四日(火曜)　タモの木葉なかば黄を染め、コブの葉益々臙脂を彩る、日本委員本部附の委員將校に防寒外套を貸與さる、旅順口の戰役に鹵獲せし露國羅紗にて裁縫せしもの。陰暦七月十六夜の月明に任せて散策す、天高く霜下り、鈴蟲の音を超えて露國馬の嘶く聲清がやかに聞ゆ。

●同　六日(木曜)　夜、月光、白楊の皮を葺ける我が小屋の隙間より洩れ來り、突と我面を射るより、枕上より仰ぎて天を望めば霜氣滿空。

●同　八日(土曜)　白楊の葉、雨に打たれ秋と共に漸く黄し。

●同　九日(日曜)　風强し、倒木の聲ドスーン〳〵。

●同　十一日(火曜)　初氷。

●同　十四日(金曜)　露人、麥及び馬鈴薯の收獲に忙し。

●同　十七日(月曜)　雹下る、間々大さ礫の如きものあり、天幕に衝り戛々聲を發す。

●同　十八日(火曜)　柳蘭の花飛び、白楊の葉舞ひ、片々たる碎錦、ボロナイ川を流れ去る。

●同　二十日(木曜)　室外溫度零度。黑貂獵の季節來る、露人の犬を率ゐ、數日間の糧を齎らし獵銃肩にして山に入る者漸く多し。

●同　廿三日(日曜)　落葉、雨の如し。

●同　廿六日(水曜)　初雪、西方の群峰皆白し。

●同　三十日(日曜)　朝、グロデコオ出發、夕、五十度直下に宿泊す、四圍皆な山峰、千年の喬木立ち、顧望寂寥、時に黑木鼠の木より木に移るを見るのみ。

●十月一日(月曜)　嵐氣、寒氣、身に迫り骨に徹す。起きて時計を見れば午前二時、天幕の外、積雪三寸餘。夜、日本緯度班東部分班幕營地着。分班長(中隊測量師)を深さ百餘米突の深溪中に見る、四方大樹森々、天幕は宛然「樹の井戸」の内にあり、時に天地寥絕、積雪五寸、遂に宿泊す。

●同　八日(月曜)　朝、青馬アレキサンドル號に跨り、グロデコオ出發。八時、ボロナイ川畔着、成富氏

政出張所長、丸木舟を艤し待ち居りたるを以て、成富氏及び長吉と同舟ボロナイ川を下る、漕手はギリヤーク土人ホモガン父子、オロチヨン土人ニコライの三人、ニコライ土歌を唱ふ、アーフーユーフーフーと、抑揚なく波瀾なく平板單調なり、兩岸の林樹黄紅張錯、舟は油畫の間を行るに似たり、夕、キシクの沙地に幕營す、水程七里。

◉同　十日(水曜)　水程十里(丸木舟)。ボロナイ川右岸の沙地に幕營す。

◉同　十一日(木曜)　天明、丸木舟にて幕營地を發す、川霧模糊、既にして旭光此霧を徹して來り、空色麗はしき紅紫色を彩り、右岸には亭々たる針葉樹、此の紅紫色を破りて柱の如く並び立ち、其上より西に一山の卓立し、峯に雪の縞を染む處、頗る伯耆の大山に似たり、其名を問へば、舵手ホモガン曰くアバマイ山なりと、夕、水程二十里(丸木舟)、右岸の沙地に幕營す。

◉同　十二日(金曜)　天明、幕營地出發、水程十七里

(丸木舟)、夕、ボロド着、オロチヨン土人の三戸村なり、土人の空屋に眠り、屋根の割れ目より洩れ來る月色を氷の如き枕上に眺む。

◉同　十三日(土曜)　天明、ボロド出發、川霧冥合、午前十時漸く霽る、兩岸の草樹、霜に飽き、ミヤマカヘデ、ミヤマウツギ、コブノキ、水岩の間に紅を曬らし、樺、楡、落葉松は黄を染め盡くし、根松、エゾ松、ハンノキの綠、其間を織りて唐錦の如く、時に墜錦片々と波に點ずる處、秋木澄清、影水中にあり、水亦た錦を織れる間を下り、下り〳〵て河口のシスカに出づれば、オホーツクの海水蒼茫として眼前に開展し來る、即ち開闢以來の「闇黑水域」たりしボロナイ川航行の成否を試驗し、茲に及第して、其の可航を世界に闡明せしものとす。

◉同　十四日(日曜)　余等一行を待ち受け居りし碎氷汽船大禮丸に搭じ、午後二時、ボロナイ河口出發、直ちに青森に向ふ。

◉同　十七日(水曜)　夕、青森上陸、一旗亭に小酌し、

歸途花井お梅出塲の演劇を看る、街を夾める櫻樹、葉半ば存し、季節未だ秋の半なり。

●同　十九日(金曜)　函館區敎育會の招にて講演、夕、函館區長等の招にて臥牛山下の函館ホテルに酌む、櫻の霜葉は四月の花よりも紅なり。

●同　二十日(土曜)　後志川の溪谷に入る、紅楓滿目、グチアン平野に出て、後方羊蹄山(蝦夷富士)を仰ぎ見る、峰頂少しく白し(雪)。

●同　廿一日(日曜)　札幌の公園に遊び午餐す、林檎及び米國種の葡萄盤に滿つ。

●同　廿二日(月曜)　小樽中學校の招にて講演す、途上、秋大根を駄し來る駒に陸續會ふ、大根肥え太り時に人の腕の如きものあり、市街の背後なる溪谷の各開墾地に收穫せしものと。

●同　廿六日(金曜)　アムーペシ上陸、野生の山葵、款冬の蔓を溪畔に摘みて歸船。

●同　廿七日(土曜)　午後二時、アレキサンドロフスク上陸、是れアレキサンドロフスク第三回の遊となす、鈴江(予が幼女)の土産にとて露人の店に書及び露西亜更紗を購ひ、四時歸船、直ちに日本に歸航す。

●十一月十三日(火曜)　日露兩國委員會議、小樽なる日本郵船會社支店にて開會、郵船會社支店長には其の支店の一室が日露兩國國際上の會議室に充てられたるとは非常の榮譽なりと挨拶し、北海道名產タモの木材もて縷めたる貴賓室の中央に大卓子を据え、遶炫ゆき唐紅の毛綾織を敷き詰め、上に大輪なる黃白の菊花と翠滴る松の盆栽を安排しありしは、流石に露國委員も嘆美しぬ。

●同　廿三日(金曜)　小樽出發、大雪、汽車雪に壓せられ、後方羊蹄山下に遲留すること七時間。

●同　廿五日(日曜)　歸宅、山茶花、玄關の前に咲いて迎ふ。

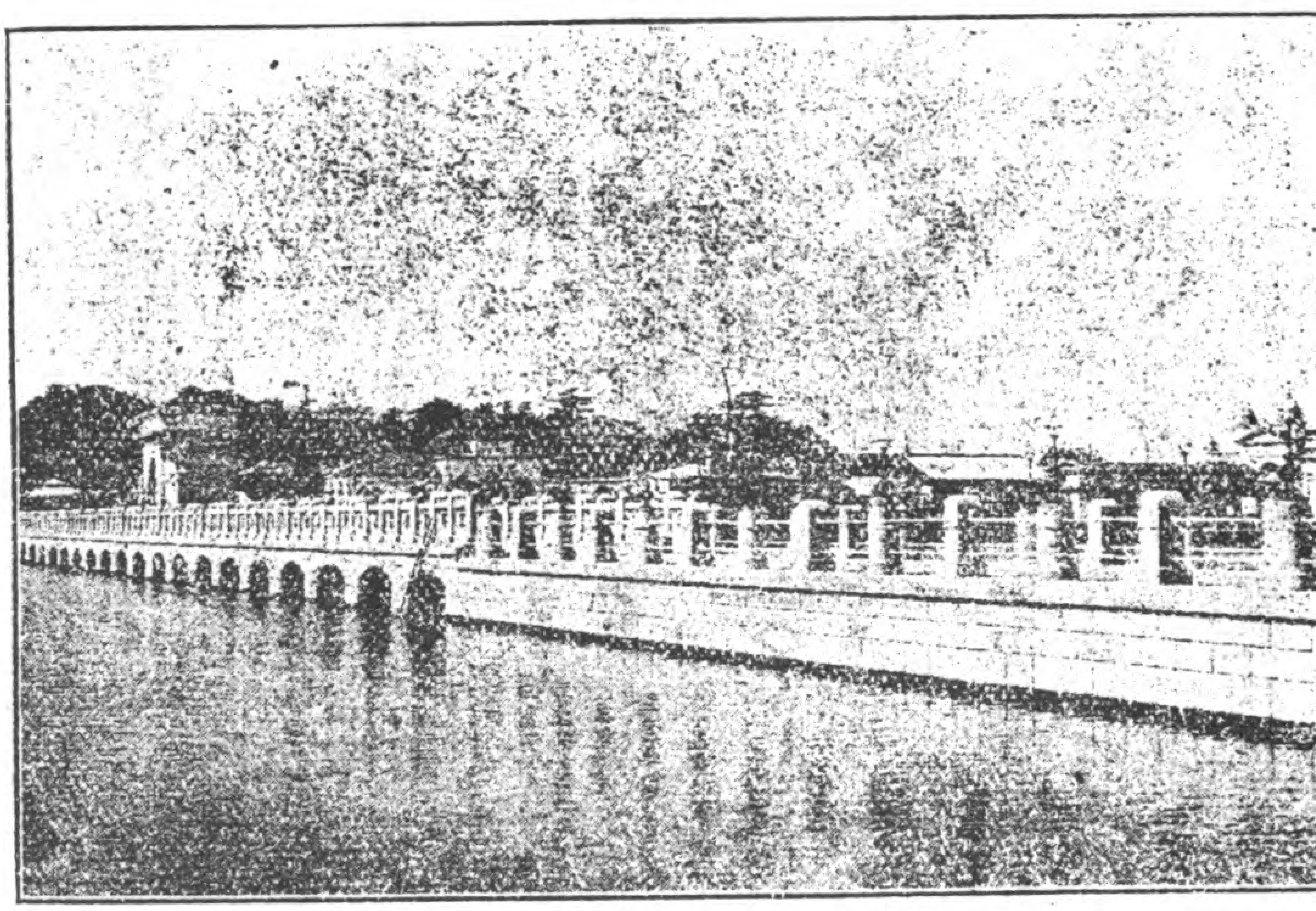
●十二月十日(土曜)　宮中御召、天皇陛下に拜謁を賜はる、御控室に神仙掌の盆栽、紅の葩を咲き揃ふ、人をして神仙の境に入るの感あらしむ。

●同　廿七日(木曜)　妻兒を伴ひ、相州小田原の海岸

早川に行く、前日來より滯留せる老母、弟妹等喜び迎ふ。

◉同　廿九日（土曜）　早川より一書を京友に寄せて曰く。

謹啓、來春一月六七日頃迄當地に隱退致居り候に付歲末及び新年の御慶欠禮致候、連日晴天打ち續き、毎朝旭光積水に潑ね來り、松影婆娑、東窓に映るや、直ちに起き上り樓外を散策致候へば、天竺牡丹（單瓣）、野菊、浦島菊、杜鵑花、茶の花未だ殘り居り、椿、山茶花は全盛を極め、小田原古城址の梅花も十株に一株位の割にて綻び初め候、四十日前、後方羊蹄山下にて汽車の大雪に壓せられ七時間も遲留致候事を追想すれば、狹しと思ひし日本の版圖も中々に廣きものと被考候、匆々拜具　（完）



不忍池の觀月橋を越えて博覽會第二會場を望む

うつゝ

文學士　尾上柴舟

今にして知りぬ現實とあらましと
あひあはむ日ぞ身は失せぬべき

あさな／＼心に逐はれ身に逐はれ
冷たき土をいてゝふむかな

あゝおもへば今の休息は極まりし
痛の中の一時にして

まぼろしの影より影に導かれ春より春に一めぐりしぬ

香木は響も立てずたふれけり下葉末葉の笑の中に

高き日は見るにまばゆし冬草のかげに閉づべきちいさき眼には

いづこにかすまひはあるとわが魂のすみつる國に呼びて見るかな

夜はふけぬ巷の軒は手をのべて行くわが肩を壓するに似て

何ならぬもの丶響も興ひきてゆかしき春の地となりにけり

おもほえぬうれひさまよひ夢ながら夢に過ぎ來し國數へみる

つらかりし昨日を忘れ明日を見ず今日の一日のしづけさに居ぬ

何人の命ずるならず日記といふあやなききぬを今日も織りつ丶

雲の影山を下りぬ野の末に救もとむるものやあるらし

あ丶悲し殘れる今日の日を逐ふと鐘こそひゞけ野にも山にも

忙がしう西に東にめぐれども心おくべき地ぞなかりける

おもかげの人乘る舟もよりぬべく心の海のなぎにけるかな

うつくしき寂しさおぼえ憂をも守りぬ花を守るがごとも

いかならむ形をか取る胸の戸にこむる思を世にし放たば

故鄕は夕暮かなし蕭條と父ます山の風迫り來て

百年も秘めしが如き思をば云ひ得し今日の胸すゞしさよ

博覽會

▲東京勸業博覽會は四十五年の大博覽會の準備博覽會とも見るべく、諸般の點に參考となつた擧が多くあつたらしい、日々五六萬の入場者があるのだから先づ成功した博覽會と言て宜しからう▲女子などの比較的世間と接觸する機會の少いものは、博覽會を善く見て、新しい智識を養ふが宜い▲博覽會も見やうの善惡に依つて、意味のあるものともなり、無意味のものともなる、只美くしいとか、立派だとか、飲食店に入つて物を食つたとか云ふだけで、後に何も殘らないやうならつまらぬ、博覽會は博く見るよりも、狹く見て、深く或るものを注意した方が爲になる勸工場と違ひ新智識の應用を見せる處だから其積りで見物せねばならぬ

女子大學

卒業式とバザー

▲三月十一日日本女子大學校の卒業式があつた、記者も招待せられて其摸樣を見たから一寸一言してみやう▲今回の卒業生は大學部總數百四十八名、附屬高等女學校八十一名である▲年々多くの卒業生を出し、多く入學生を有する女子大學は、兎に角私立の女學校としては成功したものである▲さて當日は生憎朝から陰翳たる天候で、正午前後より雷雨を起し一時は凄まじい空合であつたけれど式も嚴肅に終り、午後は生徒の父兄保證人及び來賓に慈善市と文藝會を見せた▲慈善市は學校の圖書館購入費の基本を造る爲に十三日より三日間、公開して婦人に限り入場せしむる筈で當日は其豫行公開とも云ふべきものであつた▲賣店の品々は下は幼稚園生徒の製作に係る花籠の樣な物から、袋物、編物、造花、陶器衣服類まで同校の生徒が一年有餘の日子を費して作り上た物で女の手で出來る物は殆んど網羅されてあつた▲文藝會は慈善市の餘興であつて、唱歌、音樂、活人畫、對話等であるが中にも對話と云ふのは名は對話であるけれど其實は劇である▲此日は「永久の生命」三幕「磨かずば」三幕を見た、「永久の生命」は一種の理想劇でロマンチックなものであつたから見物は割合に感動しなかつたけれど記者は此方に贊成する「磨かずば」はずつと世話に碎けて筋も家庭小說と云ふ處、場中大喝采▲雨と雷の爲に混雜したけれど、斡旋は能く行屆いた、電光閃めくや、櫻ひらく〳〵とこぼるゝ廊下傳ひ、紅のリボン飜り、紫の袖舞ふ、壯美を兼た此日の會も果る頃には天が晴れた。

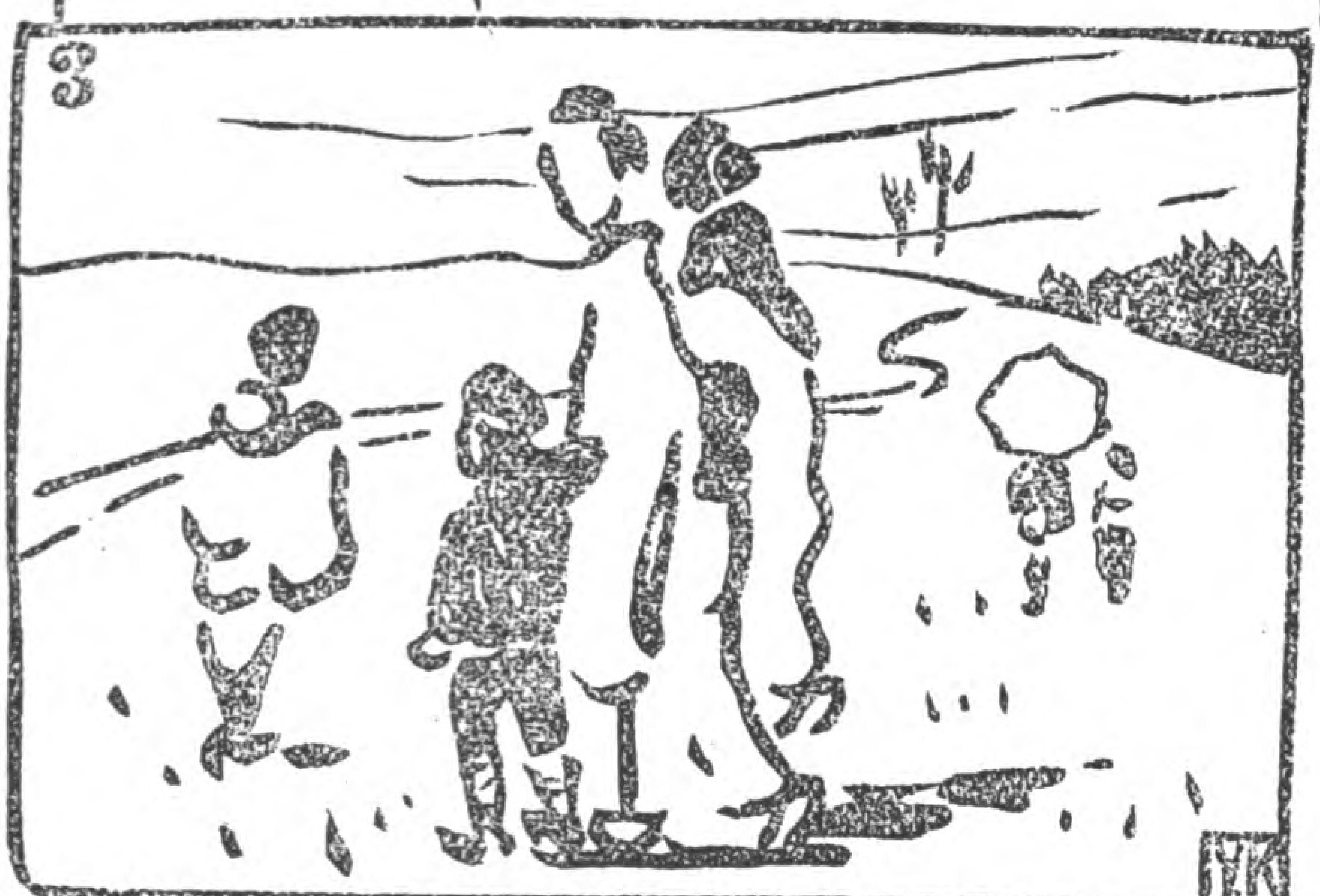
懸賞當選圖畫（其六）

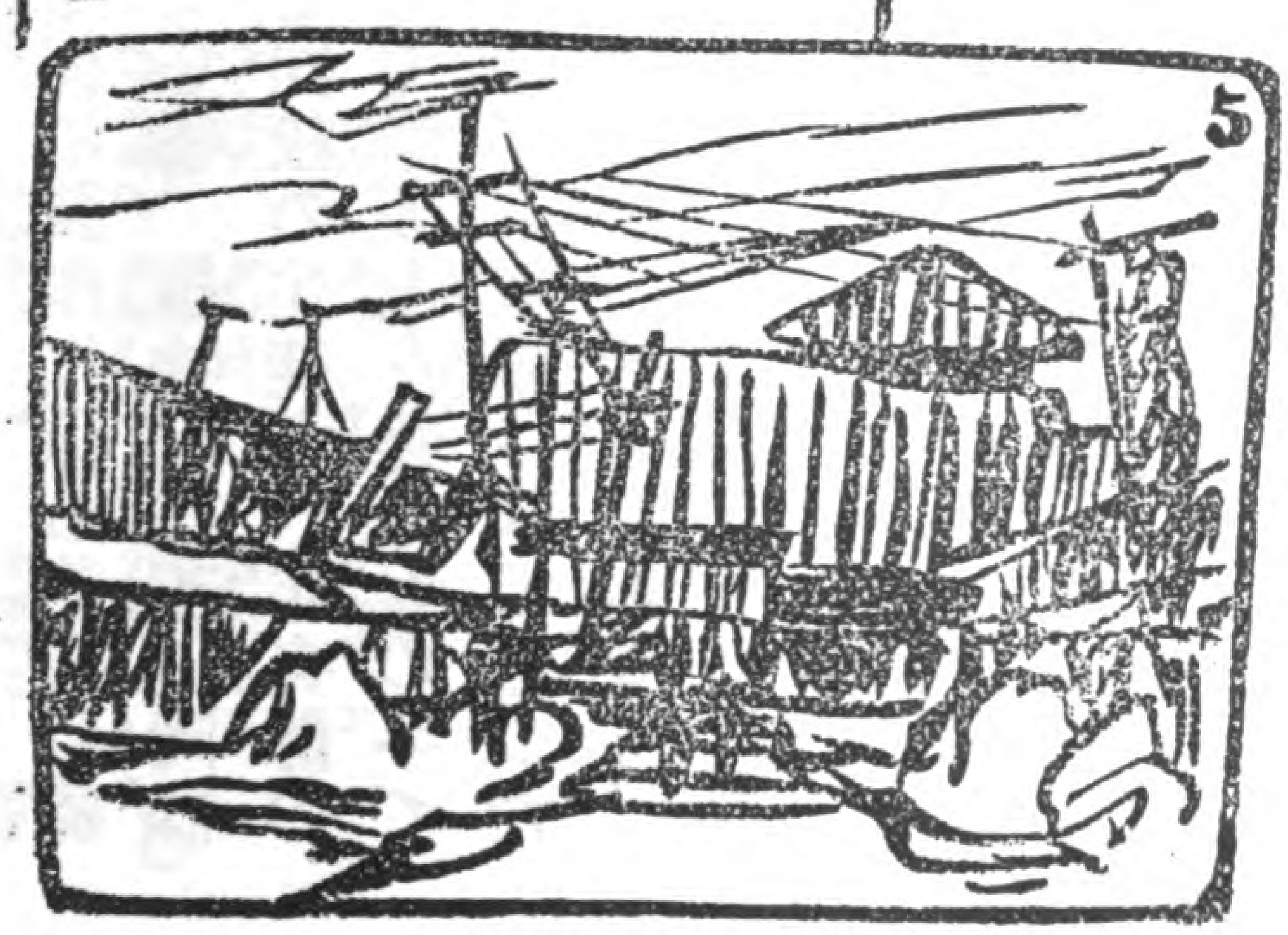
山中古洞先生選











(1)可愛き友（二等）　東京府下南多摩郡恩方村　中島縫子

(2)義太夫（三等）　牛込區高田早稻田農園脇　岩谷綠子

(3)野遊び（四等）　三河國豐橋停車場前山中鎗太郎方　加藤芳子

(4)よましむぎ賣（五等）　大坂市西區立賣堀北通三丁目　奥西ゑい子

(5)夕（五等）　岩手縣盛岡市本町　清水登美子

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

一等

○捨ばり日記

静岡縣藤枝町 石神喜惠子

「葉、雅鷹樣は亡き數に入らせ玉ひしぞ」と雪の太眉つと打顰め、顔そむけてのお住持が今日の物語り、夢ならず幻ならず、かまへて戀とは、せじ思はじと誓ひてし身の、はかなさ悲しさに氣も狂はん許り、宵より早う衾は打かつぎたれ、いかで目の合はさるべき、次の間に世にも安げなる兄の鼾恨めしと聞き居けるが、聽て耐へ兼ねて床の上に起き直り、彼の君の給はりし香箱、今は形見なるをそと取出しつ、小暗き行燈の灯影かきたてゝ、秘め置きしわが日記、紫表紙なるをとりあぐれば、ころ〳〵と中より落つる玉入の細指輪、今は仇なれ是なくばとは實にや、いや増しわき出づる涙の雨に、細かき文字は霧をへだつるやう朧ろになりぬ。

* * * * * * *

十五日。けふで三日、我門川こぎて釣する人あり、東泉寺の客と兄は云ひぬ、鍔廣の夏帽子ま深に被りたれば、老か若きか知る由なきも、其後姿の繊細にして優美なるは思ふに都の人ならん、そはともあれ此人こゝだくの得物やあると晝休みの折から、後ろより拔足して近より、百合撫子澤に開きたる花垣の上よりひくさし覗けば、振向きたまひて、三日以來ざこ一尾のえものもなしと、ほゝ笑み玉ふ、妾は周章ながらも、そは笑止、この川の魚は惡賢くて、と呟くやうに云ひしが、不審晴れねば、如何にして知り玉ひし、斯迄心して忍びきつるものを……、後ろにお目やつき玉ふと戯れて問へば、おぞまし、見られよ清き流れに落つる島田髷の影法師を、音は忍びても隱せぬ形と、指ざされて、ぬかりたり、なめげは幾重にも許させ玉へ、其かはり妾きつと釣れる法をお敎へ申さん、そは捨針とて麻糸の端にはりつけたるを二十も三十も拵へ沈め置き玉へ、銀魚鰻などつれる事妙なりと云ひも畢らぬに、夫それと竿も糸も河中へざんぶ。

十七日。お陰にて斯る太きを得たり、鬼の首より嬉し、恩さはれ山門になまを持込まんも心なきに似たれば、恩は重ねて着るべし炙り玉はれ、且われ一人にては興なし、御家の人々も遠慮なくと門口の立咄しを、逸早くも納戸に午睡の兄、きゝつけて、そは近頃耳よりな事、薬は早く德利清めて橋際へ走れ、お客様は火を起されよ、と心得顔に俎かつぎ出すも可笑や。

十八日。けふは見え玉はず、われより訪はんも異な者なれど、昨日歸りがけに呉々たのまれたる羽織の綻び、幸ひの手隙にもてきてと山門を入れば、寺男の作助草を扱いて居り、お薬坊よ、お前の手篤いもてなしに中てられてお客様は枕が上がらぬ、よい程にせずば新田の安や裏の與太の思ひでも、よい死様は出來まいと、唐突背を叩かれて、厭な人と平手でびつしやり、其儘馳拔て夏菊折り去る小坊主呼びとめ、是々と頼めば應て持て來し縞絽の一枚、一目みて並ならぬ方と大方は推せしが……。

十九日。出來上りたれどきのふの寺男の言葉胸に殘りて何となう足重きに、ご苦勞ながら兄様と頼めば、よしきたと言下に一走り、置いて來て驚き顏、たまげた、華族の若様だげな、己ァ豪いなあ、差向いで酒飲んだわいと、ひとり悦に入つて煙草すぱ〳〵。

廿日。けふも見え玉はず、朝より織りそめし布は三ひろ五尋とのびて向日葵の花徒に廻れど。

廿二日。嬉しや來ますは君なり、何やら黒表紙の册子小脇に抱へて……、夫見せ玉はれと手を出せば、ただではと首ふり玉ふ、お好み次第と笑へば、さらばと繰展げ玉ふ中は、扨もいつのまに？此花かの水、しかも軒下に梭とる妾をばいとゞ清げに……、罪な事と顏紅らめて怨ずれば、腹立た敷くば思ふ樣責め玉へ、今日一日留まる吾なり、あすは否でも應でも汽車に運ばれて邸に入る吾なり、扨も此一夏は悠々此山水に憧憬れんと思ひしものをと、萎れ玉ふ樣の戲れ共見えぬに、扨は頓ておたちにやと驚けば、さなり心進まねど詮なし、さはれ余は此地の太く氣に入りたれば、來年もくるべし翌々年もくるべし死してもくるべし、否笑ひ事にあらず既に地を相して住持に咄したりと事もなげに仰せ玉ふお顏の、この世の見納めとはつゆ心づかざりしが……。

廿三日。起きて戸をくれば小坊主門にあり、若様より御身への贈り物と目の前に手の物差出す、何やらん立派なる品、山住の身に要なしと推返せば、小坊主には猶要なしと又差出す、若様はと問へば早籠坂邊りなるべし、朝露のある内に鶴川へと曉月を踏みて出で立たせ

玉ひたればと云ふ、さらば詮なし再會の折迄とかりそめにうけて秘めぬ。

＊　　＊　　＊　　＊

よみ行く儘に清しき御聲音、優しき御面わ、まざ〱と浮び出でゝ、限りもなき懷かしさ悲しさ、思はずワッと聲たてゝ兄やめさめんと袂噛みしめぬ、よしさらば程なう御遺骨のつきもせば、かの壽中に入りたる垣の草花がはるかはる手向け、墓守と一生をさゝげて、此寺邊に朽ちばや。

（評）よく情をうつし、景をうつし、文字詩趣を帶びて才情人を刺す、君の平生の作に比して優ること數等。

三等

○川風

熊本　江副ちかつる

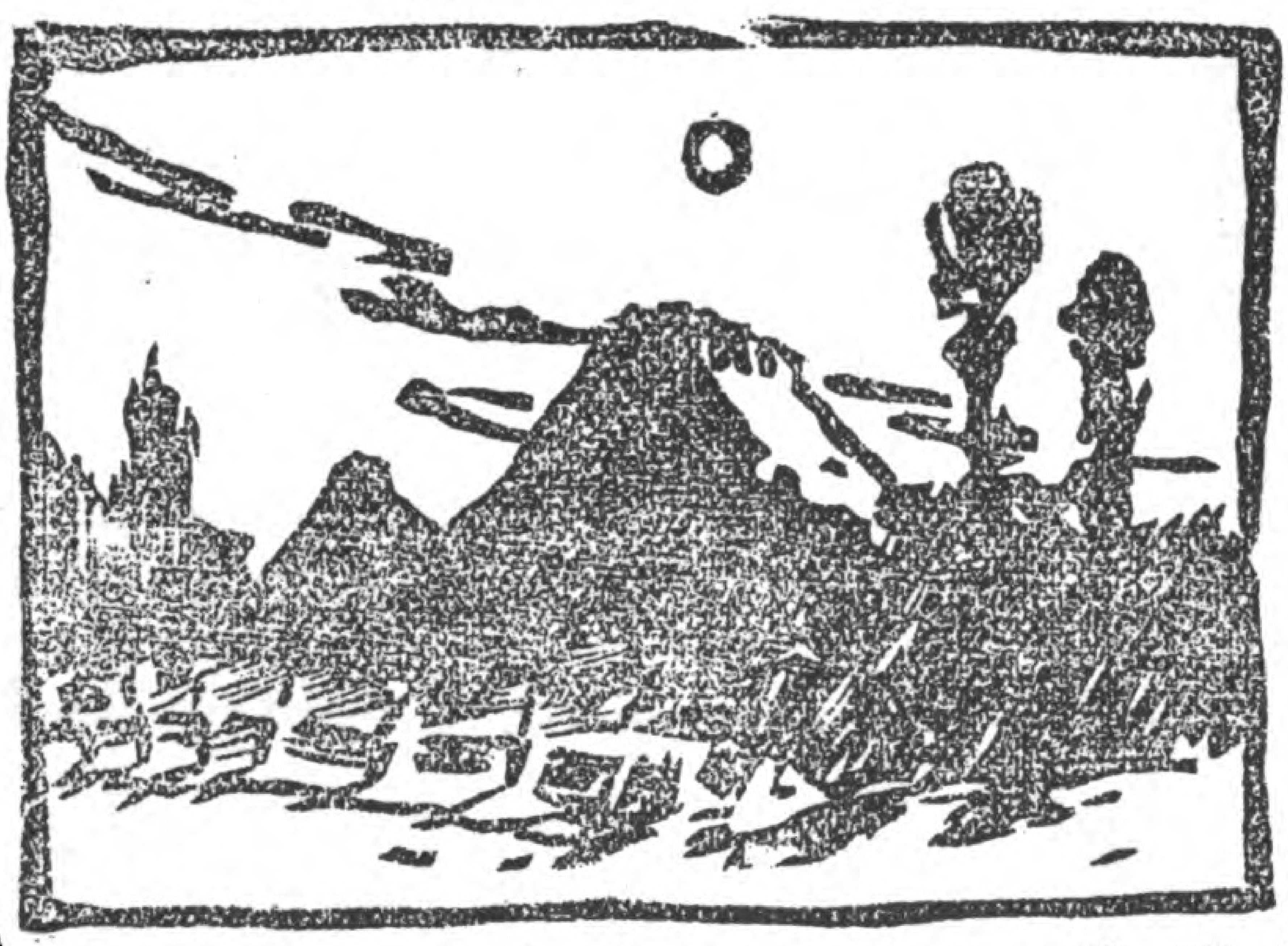
春らしくもない今宵、川沿の道は殊に寒い。

此邊は家もまばらで人通りも至つて稀である。川岸の並木柳の間から見える川向うの縣立病院は、墨繪のやうな世繼の森に連つて、月を背に、電燈は恰も星のやう、今迄しばらく言葉を切つて歩いて居た友は、此時一寸足を止めて、思ひ出したやうに。

「て、どうしても、むづかしいの！」

と、術なげに云つて、そつと太息をもらすのであつた、今が今、家を出る其時まで、無理にもと勸めて居た私も、かう、其事情を親しく友の口から聞かされて見ると、流石に同情に堪へない所もあるので、さう〱は「惜しいとは思はなくつて？」と許りも云ひかねるので、「ほんにねえ、お察ししてよ」と言ひはしたものゝ、また〱初め自分で勸めた事を悔いはしなかつた。

お月夜　　失名氏



友は歩を移しながらも重ねて辨解をつゞけるのである「それはねえ、百人といふ生徒の中から、こんな不束な私を撰拔していたゞいた事ですから、それに一番好きな音樂學校のことなんですもの、私だつて行きたくないとはなからうぢやありませんか、出來ることならばどうにもして行きますわ、行きますわ、けれども今お話した通り父と云つてはもう居ないし、それに二人の兄といつても腹違ひ…、それで母がさう云ひますの、二人の兄さんは私の爲に

は義理ある子、それを、たとへお父様がいらした時にせよ、其兄さん達には中學で止さして商賣をさしておいて、今更お前にばかりそう學問をさしては、第一兄さん達に對してすまないし、又世間だつてよくは云つて呉れまいッてねえ……。で、行きたくもあらう、自分もやりたい、けれども何も運だ、俊さん母様の爲を思つてお呉れなら、何卒、この事ばかりはお斷りしておくれつて……さうまで母に云はれては、私どう思つても……」

「もういゝの！よくわかりました、お察しします、お察しいたしますわ」

もう私はたまらなくなつた、何といふ可憐な友であらうそんな事とは知らないで、ゆるして頂戴！

なぜ私は無暗に勸めたらう!?

と云へば、私は、夫れ目前に泣いてまで止むる親の心に背いて、女子大學には入るべく、明日は出立しようとする身なのである。

が、今更はづかしい、どこまでもやさしいこの友の友として、實にはづかしく思はれる。

おゝ、今日までを何とせう、今日よりは改めやう、何もかも、親の爲には捨てゝ終はう、親の意に背いて得た月桂冠が何になる？

「俊子さん」と自分はあらためて友の名を呼んだ。

ひそかに泣いてた友は、はつとした樣に「えゝ？」と私の顔を月の光にうかがつた。

「堪忍して頂戴な、ほんに私はすまないのよ」

「何をおつしやるのよ、それは私がいふことだわ」

「いゝえ、全く私は今日まで誤つて居ました」

と自分は今日まで自分が何も知らないで、ひた勸めに勸めた罪をわび、そして親の意に逆つた私の大學入學を思ひ斷つといふことゝ、併せて之も皆やさしい友の感化であるといふことゝを告げて、眞心から謝した。うれしいと胸にさけんで、思はず互に握りしめた手をはなすと、いつしか二人は世繼橋上に立つて居るのであつた。

月は足下に銀波を流し、川の呟きは一層平和である。川風が今更のやうに寒い。

（評）老錬、會話の達者なる、稀に見るところ。

五等　○湯屋の一日

八代　松野みどり

汽笛一聲鳴り渡れば、西より東より集ひ來る老若、貴賤貧富の別ちなく、知る知らぬ打交ぜて、一重脱げば露出の細き太き長き短き白き黒き取々に思ふ同士、心心の高聲低語に洗ふ石鹸の泡よりは先づ口に言葉の沫

を飛して、此所のみは心も共に飾りなく、時候の挨拶、無沙汰の詫び、髮の出來榮えより髮結の批評、米屋の善惡、姑の繰り言、嫁の愚痴、料理の話、畑の自慢、試驗の豫想、下女の小言、お脊中をとの讓り合ひ、泣く兒、騷ぐ子、すかす母、叱る祖母、或は心なく立はだかりて懸り湯する其飛沫に顏をしかめ、或は幼子の辷りたる物音に胸轟かすに、彼方には我關せずとばかり七つ道具に顏の皮磨りむかんばかり磨く人あれば、此方には湯槽にもたれてそを打眺め居るものあり、危なし心せよ、轉びなせそ、それ込み合ふぞ、桶な取られそ、風引かんに早や入りね、熱しうめ給へ、ぬるくは侍らずや、ちと焚きねなど、心々に打呼べば、騷喧の聲、蒸氣の響に和していと喧し、かくて立昇る湯氣に逆せながらも、心の垢まで流し去り、極樂よ好き氣持よと出て行く跡には、手拭持つ手も凍るばかり、寒やと入り來る人々の、之一枚が極樂の境と、入口の障子の音絕ゆる間なし。

斯くて夜も漸々更け、埋火白くなり行く頃には、湯槽の中白水と變じ、人足減じてもの音靜になれば、番臺守る老婆も屈托顏に、果ては白河の河船漕ぎはじめぬ、波や高き、身內いと搖れて、後れ馳せに來りし人の湯札置きしも知らぬ態なる可笑し、斯くては早や沖まて漕ぎ出てしと思ふ時終業の汽笛けたゝましく鳴りひゞけば、人影漸々去りて、蒸氣の音全く絕え、果ては流しを洗ふさゝらの音のみ暗を縫ひていと寒く聞ゆ。

（評）輕妙なる筆致。

秀逸

○われは雲雀なり

信濃　帶刀きさへ

花にあけゆく日朗かに、小蜂は花より花と蜜集むべくとびめぐり、蝶は妙なる香に醉ひつゝ樂しげに花に眠りぬ。

我は此暖き日和を藍色深き空に自然の美うたはんものと、溫き菫の床をはなれ、いとしき妻とともに雲井はるかに舞ひ上りぬ。

世は今彌生の花盛りとて、こゝかしこの村々には、櫻花さき、桃の花亂れ、菜の花の黃、紫雲英の紅は、麥の綠に綴られて、美しさ云はんかたなし。

茅屋三四立ち並ぶ河岸には根芹洗ふ少女あり、河を隔てゝ袖長く淸き子の竹かごさげて田の畦さ迷ふは草つむにやあらん。彼方柳けぶる畷道、馬の鈴も長閑に聞ゆるは今日しも隣村に嫁ぐ村長の一番娘の一行なるべ

し、赤き裾を春風ゆるうなぶる。我は此面白き眺めに猶もうたひつゞけてあちらこちら舞ひ遊びぬ。

折しもあな恐ろしや、天やゆるぎし地や震ひけんとばかりにあらひゞきし銃の音に、我は暫し魂も身にそはずに舞ひ上りぬ。やゝありて心落ちつけよく見れば、愛しき妻はなし。如何にかせじと音せしかたを見やればあなうたて、あな悲し、妻は翼をやうたれけん足をや傷めけん、タンポヽの根元に苦しげに悶え倒れたり。土手のかげより立ちいでしは銃もつ若き男の子なり。夫の骸拾ひ上げて打ち笑みつゝ去りぬ。

あゝかくて我が妻は慈もなき罪多き人の子の銃先にかかりてはてぬ。

朝には八重霞をわけ入り、夕には彩雲のかけ橋手をとりつゝ渡りしも夢となりぬ。

あはれ明日よりは誰としもうたひ、誰としも語らうべき、うらめども永久につきせぬ此うらみ、せめても妻が死を吊はんと斷腸の思ひをこめて一節高う宣れば、田に畑に立つ人の子は曰ひぬ、雲雀の聲樂しげなりと。

あゝ日は槃なく暮れて打ち見やる牧場の小羊も今やつれだちて家路に急ぐ、落花恨多くして春寒し、いつの日かわが涙かわき、我が嘆消ゆるものぞ。

美しきもの弱きは造化の神の妬みか、罪なきもの果敢なきはそも誰人の科ぞや。

あゝ我は悲しき運命もつ雲雀なり。

（評）この恨み縣々として盡くるの期なし、咄、何等の無情漢。

○散る花

赤坂峰影女史

花曇りと云ふのはこれてあらう、どんよりとかき曇つた天、風も無いに庭の櫻はちら／＼と池に散りかゝる、すうと淋しい音を立てゝ椿の樹蔭から吹き出た一陣の微風は池の面に集る花片をすみ／＼に押しては小さな波を立たせて居る、庭はさして廣くはないが飛石傳ひ櫻が池に散りかゝるあたり何となく風雅であるがさて散る花を惜んで花の下をたづねるやうな人かげも見えねば開け放つた座敷にも人の氣は更にない其光る廻り椽には落花のみ徒らに吹く風に舞つて居る、ふと玄關の方に當つて種々な人の話聲が聞えたが間もなくそれが靜まると突然駈けてきて椽の端に泣き伏したのは此家の主婦日露戰爭で名譽の戰死を遂げた海軍少尉桂木武の未亡人雪子であつた、續いてまた走りよつた十七八の少女は泣き伏した雪子を見ると我を忘れて其背に折重なつて泣き伏して了つた、先に涙をさめた少女は痛々敷まで細つた雪子の撫肩をさすりながら「姉さん！姉さん!!……」「姉さん心を大きく持つて下さい

確りして頂だい！姉さん」「あゝ文ちやん清はもうほんとに逝つて了つたのね可愛想にとう／＼お父樣の後を追つて行つて了つた、もう水道町へ出たか知ら其れともお寺へ……」血の氣の失せた青白い雪子の頰には止めどなく涙が流れる義妹の文子は雪子の涙を拭ひ「姉さんもう何事も諦めて頂た・餘り歎いて躰を損めたら、私は如何爲たら可いでせう、姉さんこれからは猶一層眞の姉妹のやうにね」「あゝ文ちやんよく言つておくれだね、私は未だ文ちやんがあるから心丈夫、どうかさうして貰ひませうね、たとひお母さんが何と被仰つても私は眞の妹とも子とも、文ちやん一人をたのみに、どんなに辛いことがあらうとも一生此家は去りません、あゝ清が健在たら……私はどうしてから不運かしら、かけがへの無い一粒種のあの子を」またも涙にくれるのであつた折から程遠き勝手元の方で何やら聲高に話す太い聲が聞える、文子は何と思つてか雪子に其聲の聞えるのを厭ふごとく頻りりにまぎらさうとして居たが「姉さんお母さん餘まりだわ餘り酷いは……」何か言はうとして姉の氣色を

おばしま　下總　藤崎みな子



見乍ら無言つて了つた、「いくら血は連つて居なくとも孫だわねえ」と雪子ははや文子の後を言ひ足す二人は再も鼻をすゝるのである、「姉さん氣に掛るのはお止しなさいよ、あゝ兄さんは姉さんがこんな苦しみをしてまでも健氣に此家を立てゝ行かうと被仰るのをお聞きなすつては、どんなにおよろこびでせう、さあ何んだかうす寒く成つてきましたから室内へ這入ませう」文子は優しくも雪子を勞はり助け入らんとする時、五十前後のでつぷり肥つた雪子には姑に文子には繼母に當るお常、裾さばき暴々敷通りがゝりに二人を見て「何を爲てお出なさるの雪さん、主要の若い者がさうして居て親を追ひ使ふ貴女も定めしお疲れでせうが私も昨晩はまんじりとも爲ませんよ雪さん、言はなくとも御承知でしようが部屋は皆の脱殼が山のやう、お座敷は散かり放題、おつつけ會葬下さつた方々もかへられるだらう・雪さんそれで私は立派に桂木家を立てゝゆくと被言つた方かね」ぶいと行つて了ふ、「あら姉さん！」、雪子は血走つた眼するどく突然離座敷を指してかけて行かうとする、「姉

さん心を靜めて頂だい姉さん姉ーさん！」、あはれ淋しい庭には何かさゝやくやうに小鳥も哀れな音を殘してゆく。

（評）悲風悽雨、世は春なれど秋よりさびし。

○怨みの釘

園城やま川

佐保姫の跡を慕うにあらね共、逝く春を惜みて落花の川を溯れば、流は愈ょ迫まり、奇岩怪石は龍と立ち虎と伏し、靑葉若葉翠滴らんばかり。

玆は人跡まれなる山ふところにて、太古の面影をとゞむる老杉古檜はゆく雲をはゞみ、脛を沒する草はなけれど偃松繁りて苔滑らかに、踏めば泉湧きて草履の裏をとほさんとす。晝猶くらき此深林、幽鳥の聲かすかに、斧のあとを絕つ事幾百星霜、山姬の息吹のこりて滴りし泉も聲をひそめ、落葉朽葉はいたづらに苔の肥となるも哀れ。

杉の奧さゝやかの祠あり、何の神にか傾きし扉をもれて神躰もあらはに、額や華表や自然が刻む襞の跡の浪目波目の浮影のみぞあざやかなり。

ふと見れば傍の松の幹に小さなる藁人形を數多の頭なき釘にて打とめ、其横の皮を削りて女の筆に怨の數々記しありぬ。吁是こそ噺のみに聞ける怨の釘にやあらん、見るは今ぞ始、打ちしは女、呪はれしは男、失戀の怨か破鏡の歎か、偖ても大膽の女なるかな、怨の餘りとは言へ、「萬籟死して月くらく、山靈もしばし眠る丑滿頃を、白衣亂髮、頭に三本の燭をともし、社前に臥す魔牛を高足駄に踏み越え、神に呪を捧げて、人形に打ち込む釘、槌の音は木精に冴え、おどろの髮は逆立ち、凉しかるべき眼は血を濺ぎ、苔の唇は耳迄裂け、花の頰は靑白くや變りつらんと、思へば想ふ程我の目前にある樣に覺えて、肌は慄然と水をあぶるが如き感にうたれ、稀に聞ゆる怪鳥の聲も寂寞を破りて物凄く、衣は空翠に濕ひて陰欝居るにたへず。思へば女の身程罪深かる者やあるべき、我も女の身ながら。

（評）鬼氣人を襲ふ。

○海魔

常陸芳香女史

颰々として吹き頻る風伯を敎唆かしつゝ、憤懣と嫉妬とを以て充たされたる海魔は、鼕鼕と攻鼓を打鳴らして、神の子の乘りたる船を、碎かんず勢もて擊ち、破らんず勢もて衝く、船はその奇しき怪力に飜弄されて、高く一上して九天の頂、低く一下して奈落の底‼。

船中の諸人、勇を鼓して、必死に働け共、逆卷激浪のため、奈何とも詮術なし。

嘲ける如く、嗤ふが如き狂風一陣！海魔は益々興に乘つて、白頭の奔馬に鞭ちつゝ猛り狂へば、檣は折れ、

楫は砕かれて、最早活殺の運命は、海魔の掌中に一握せられぬ。

折しも玉顔愁波を湛へて、突如舷頭に顕はれたる姫御前、丈なす緑の黒髪狂風に嬲らせつゝ、瞑目合掌……何事をか祈れる。

又もや恐るべき巨濤は襲ひかゝりぬ。刹那玉顔さつと紅潮を漲らし、あはや躍りぬ……幾千尋の水底に……。

かくてしばし、風伯默し、海魔潛む。

* * * * *

あゝ戀しき夫にさきだちし姫――吾嬬はやと偲ばせられし尊――共に歷史に涙の幾頁を添へしは、悄くや皆この海魔の所爲!!

（評）悽愴。

○夕食の團欒

奨作　春陽子

あらゆる、生物に向つて、日毎に樂しき、慰藉と惠とを下したまふ、日の御神は、もうトップリと、山の後に沈んで、只名殘の光力なう愛宕山の、嶺にかゝれるよと思ふ間に、東の空には、星影の二ッ三ッ幽に〳〵浮び出て、うす黒い、ボンヤリとした、夜の帷は、代つて、この里を守るべく、次第に近く襲うて來た、畑中の、ひとりコンモリとした鎮守の森も、いつしか夢の樣に淡く〳〵、隔ての絹かすれ行く、その彼方に燈火が一ッ二ッほの見えて來る。

と、終日無邪氣なる、遊に疲れた弟等は、空腹をかかへて、ドヤ〳〵と歸つて來る。

「お母さん、まだ、御飯にはならないの？」、「早く御飯！」、

サー、これからが、吾家の面白い可笑な、騷動が初まるのである騷動？ 騷動！ それは云ふまでもなく夕食の團欒のそれ！

吾家十人の家族、祖母と母とを除いて、その他は悉く自分の弟妹なので、妹が三人、弟が四人、――恰も滿ヶ淵の石地藏の樣な、四人の坊主頭！ それが實に、この騷動の役者として日毎に、比類なき活劇を演ずるのである。

やがて薄暗い三分じんの光の下に、三尺四方位のテーブルが持ち出されると、待ち兼ねて弟等は吾れ勝ちにその圍りに環狀を作るのである。そしてこゝに初めて、騷動の緒が開かれる。

「俺れの箸は……？」

「お母さん！、俺れの箸がない」

「あら正兄(マサニイ)ちゃん俺れの箸をとつた！」

流石の妾も殆んど應接の遑がない、その中に箸を得た片方では空茶碗を叩き初める、テーブルの端て太皷を打つ、それは〳〵モー實に大騷動。

そこへ妹が飯櫃（オヒツ）を搬で來ると、益々騷動は烈しくなる、
「姉（ネー）ちやん！俺にさき……、」
「ウーウ。俺れ先だ」
「アイ〳〵お待よ、行儀の惡いことチー、……好ちやんは小供だから一番お先に、それから、正ちやん、敏ちやんと段々小さい人からネ」と妹は當惑顏。
するとお互に自分は小供ではないといつたやうに、なつて暫し默して控へる、然しそれが又いかに待ち遠くあるであらう？。
それて、愈々飯も汁も備へられると口々に、
「頂戴致します」と、それでもいふ丈け感心だ。
モー宛ら飢ゑたる猿が小羊を捕へた樣に鼻息荒く茶椀の上から嚙り付く。
所へ小妹が何か芋の煮たのでも持つて來ると今暫し默した騷動が又しても打ち上る。
「小い姉さん！何それ？……ア芋！」
「俺にも、お芋！」
「ちー姉ちやん！おれにも」と最後の弟が碌に口も廻らぬくせに兄共のまねをする
「ほんとに、お前たちは外聞が惡いネ、今やるからお待ち！俺れにもて、云ふ人には上げないよ。」
これては溜らぬと思つて一時靜かになる、が、それも只一瞬て……、忽ち飯のお代りが出る。
「お飯頂戴……御飯！。」
「アイ一寸お待ち。」
妹が今盛つて居るのにも、頓着のあらばこそ續け樣に、
「御飯！……御飯!!。」
「お待ちと云ふのにチー、そんな、大聲出すと、お隣の道（ミチ）ちやん所へ聞えるよ。」
然し、小供等は、お隣なんかは何でもない、一向ケロリとして、茶椀を目よりも高く、差し上げて御座る。
又、こつちの方では、末の弟が祖母に養つて貰ひ乍ら、手が、ひまなので、振つて見たり、頭を打つて見たり、ちよこ〳〵と、いたづらをやる。
「好ちやん！お止しよ、きかないと、養つてやらないわ」
祖母の優しい、小言などは、馬の耳に念佛、益々騷ぎたてるので、愈々自分の番となる、父は今他郷に居るので家中て一番怖いものは妾なので。
「好！、お止しなさい!!きかないの。」と大喝頭上からあびせ掛る、それに怖れて弟は靜まつたは宜いが、今度はサー大變今年生れた一番すゑの〳〵妹が自分の大聲に驚いて、
「ヒーッ」と火が付いた樣に泣きだした。
「おゝ宜し〳〵、誰がよ〳〵」と母は切りに乳房を含ませて居られる、自分もこれには仕方がない、茶椀を手にして啞然又茫然！。
「鳥羽畫の樣ネ、オホ……。」
忽ち妹のお冷かし、笑聲は鈴を轉ばす樣に沸いて喧々

擾々、泣たり笑たりとは、實にこの事で、今吾が家の騷動は絕頂に達したのである。知らぬ人が聽いたら、何事が起つたと驚くであらう。

これが吾家毎夕の團欒である。「ホンニ御飯も何も食べた樣でない」とは屢々、吾が家族中に通用される言葉である。然し妾は決して不快だとは思はない、妾はかう思ふ、この不思議なる騷動の中には世の令孃たちの到底味ふべからざる、家庭の幸福があると、あゝ、この飾りなき無邪氣な小供等の團欒の上に、暖かき神は臨まぬであらうか、藹々たる和氣はなからうか。

（評）かう多くの干松に攻めかけられては、小政閣も閉口であらう。

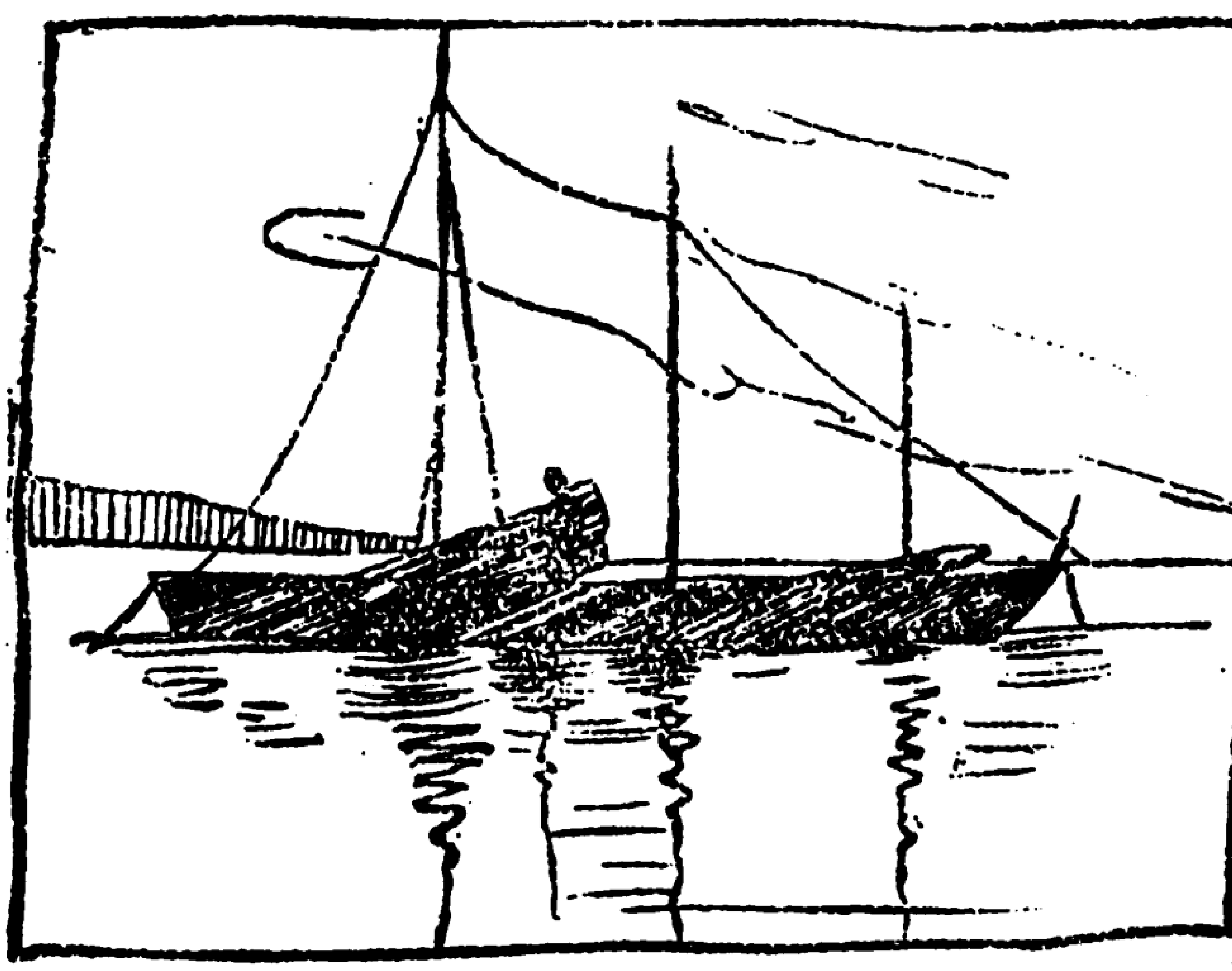
○汽車の旅

麻布　秋山欽子

十二月二十日、午後三時、上野より水戸行列車に乘りて、筑波の麓、戀瀬の流清らなる故郷に向ふ。

窓を明くれば、冬の日影暖かに脊を照す。かの大きやかなる建物はやがて來るべき博覽會場に充つるものよ、など祖母に談る間にいつか喧しき鴉の聲を後に聞きつゝ。

やどり船　大阪　あや子



我と同じく乘り込みし女學生二人、いづれも故郷に歸るなるべし、髮をローマとやらむに結びて眞紅なるリボンをかけたり。金縁の目鏡越しに車中を見廻して、さて包の中より少さき本取り出て、誰憚らぬ大聲にて讀むをきけば、郭公の歌、いづれは我と同じ遊學の身なるべきに、などやうなきことを思ひつ。

三河島に至れば窓外の眺、頓に新らしうなりぬ、目路遙に白雲たゞよひ、名なし小川は白うながれ、綠なす嶺は藹々とと行手に聳えて、尾の上なる白妙の冠は薄灰色の空に榮えて眞白に光りかゞやく。行く水に影をひたしてすゞな摘む里の子二人、汽車を仰ぎて何をかほゝゑむ、籠脊うて畔道行く翁の小さき鮭提げたるを犬の慕ひ行く、危し。

電信柱はくるめく許り後へ〳〵と、鷄なくわら屋の、脊戸に干されし赤きヅボン、かげ長う地に引きたるは入相近きしるしなるらし。

忽に兒子なく聲す、黄昏を家路に歸る子守の一群、軍ごつこやなしたりけむ、破れし國旗烈しく振りて、萬歳と囃し送りぬ、色も香もなき汚らの少女が瞳に、我等がかげの何と寫れる、いゝなあ〳〵といふ聲の後に聞えぬ、羨むを止めよ野の少女、着飾りし人の心の、汝等がまとふづゝれにも劣れるを知らずや。

日没りて夕づゝ出でぬ、ほのかなる水の香に、河淀の近きを覺ぼゆ、薄暗き電燈の光りに車中はひつそりとしつ。

時ならぬ鳴神のなりはためく如、汽車は今、名にしおふ大利根の鐵橋にとかゝりつ、夏歸省せし時は降り續きし五月雨にいとゞ水かさ增して、湧き返る渦流、凄まじき許りなりしが、今ほの白う暗を行く川面を見れば、蘆の葉の末枯れしが、さや〳〵と風に音して、薄墨にて一刷毛刷きしやうなる一帶の砂地盡くる處に、灯火二三點、取手の町にや。

牛久に至る、夕暮なりせば、淡として波に浮ぶ、夕映の芙蓉峯をも愛でられしものを。

森を迎へ、立木を回り、電燈華かなる停車塲いくつかを過ぎて、飛ぶ火の影、鮮かに水に寫つる頃、懷かしき山紫水明の鄕にと着きぬ。

噫、今宵の夢路、いづこにかたどらんとする。

(評) 達者なる書きぶり。

○話し聲

大阪　つゆ子

泣く僕が無理か、憤る僕が無理か、それを訴へるのは君の外に無いから一々話すが、昨夜といふ昨夜は僕もたまらなかッたよ、恰度九時頃だッたらう、奥の間で又弟の泣き聲が聞えたので、多分伯母に叱られて居るのだらうと心に懸つては居たが、さりとてどうする事も出來ないので、相變らず讀書をつゞけて居ると、益その聲が高まつて來た、て、何處か怪我でもしたのではあるまいかと、僅か半頁も讀めば終る筈の書物をそのまゝに、大急ぎで飛んで行つて襖を明けると、ア、矢張り伯母が叱つて居たのだ。又惡戯でもしたんですかと尋ねると、伯母は惡らしい程濟まし込んで、エ、この子の惡戯にも困りますよ、と横柄な言葉付。で仕方ないから弟を叱り付けると、私はどうもしないのに……アノ伯母さんがと、ワット泣き出した、君!この言葉が事實なんだ、此頃の弟は到底腕白をする勇氣とては無い程衰へて居るんだもの、と云つて食客の身の僕、此塲合どうしてさうと云へやう、馬鹿つと云ひさま僕は弟を引きすゑて、心ならずもあゝ打つた、か、堪辨して下さい、私がわるいのです、と弟は大聲で泣きながらあやまる、伯母は冷笑つて居る。此時弟は嘸僕を恨んだらうが、何の罪ない弟を打つ僕こそ打たれる身よりどれ程つらかつたらう、どうか此子だけは可愛がつて育てゝ下され、と拜まむ計りに賴まれた母の臨終の悲しい聲が耳を打つ、あゝこの時の心は今にも

寸斷されるやう、如何に食客の身とはいへ……勿論厄介者には相違ないが昔の恩義もあるぢやないか、イヤそれは云はないとしても、僕一人ならばとにかく、弟のある限り、僕が今の學校を卒へるまではどうせ伯母の厄介者なんだ、同じく世話しなければならないものなら、せめては快くしてくれたらどうだらう、今のこの悲しさ、腹立たしさの涙の代りに、感謝の涙を流さしてくれたなら、どんなに僕は嬉しいだらう、と云つてそれは殆んど不可能の事。今後まだ二年、學校を卒へるまで、弟と共にこんな苦を繰返さねばならないかと思ふと、噫、學校へも行きたくない、此世に生きて居たくも無い………。

* * * * * *

久し振りで見えた兄さんのお友達に、紅茶を差し上げやうと襖の前まで來た時、聞くともなしに耳に入つたお友達の話し聲、何たるおいたはしいお身の上だらうと、聞き終つた時には眼に一杯の涙の露、私はもう何だか身躰が凝つたかのやう、茶盆を持つて戸口に佇んだまゝ暫しは身動きも出來ませんでした、それにしても弟さんは今頃お一人でどうして居られるでせう。

（評）くだ〳〵しく同情の辭を連れざるが、なか〳〵に同情の深きを感ぜしむ。

○のどか

札幌　杉山　はぎ枝子

一

十戸の村春暖たかにして緋桃の花はら〳〵と、野牛の夢の上にこぼるゝ哉。

わらを打つ音、糸を引く唄。

二

柳枝たれし小川の堤、菫摘みつゝ少女子二人聖き戀をかたるかな。

蝶一番、漣に影の縺れつ。

三

雲雀高う、麥笛近う聞えて菜の花翻る風柔かに、胡蝶のキッスの忙がしきかな。

流るゝ雲、美しう遠山の櫻と融けつ。

四

草莚、陽炎暖かに燃えて、糸柳の糸より細き媚の眼、稚子の微笑、翁の顏の麗かなるかな、袴脱がせられし土筆三つ四つ日永さうに横はりつ。

五

軒低き苫屋の垣根、花笑ひて、鳥かくれ行く一帆の春色霞淡きかな。

鷗の夢、のどかにゆれつ。

（評）とり〳〵に長閑なる景なれど、やゝ厭味ある節あり。

新體詩

河井醉茗先生選評

二等

○山鳥

熊本市七軒町二十六、境志計方　島田たけ子

曉の神、行きを躊躇ふ森陰や
明けなむとして夜の幕落ちず
朽ち葉の香、漲るなかに
山鳥は悲しき昨夜の夢より醒めぬ。

昨日こそ雌鳥と朝の餌あさりしか
山もとどろ響ける音に
魂消えて、ひた翔び翔びて隠れぬ
雌はいづらに行きし遂に逢はず。

紅ゐの血汐に染まる
首は蔓につながれて
笑み憎き獵夫の銃に掛りし雌鳥よ。

今日も雄は夢見心地に
雌の姿まだあるやうに
尋ね詫び求きても行きつ

さら〳〵と流れ行く谷川の
巖の上に、あはれ雄鳥。

東雲燃ゆる朝日を浴びて
美はしき誇りの羽を
羽搏きて高く鳴けば
山彦よ。そゆしはしれて――雌はあらず
山はまた寂莫にかへりぬ。

兎に角人眞似がない、森陰の曉色、山鳥の悲哀、歌ふにも力があり熱がある、中の二節は少し修練が足りないやうです、前と終りは確かに絶調、少くなからぬ感興を覺えました(醉茗)

三等

○春の潮

小石川區久堅町二十番地伊東方　小谷秀子

潮こそけぶれ、春の海、
島は朝日につゝまれて
磯にこぼれし櫻貝、
花とや咲かん、雨あがり

潮に追はれしさゞ波は、
聲を忍ぶとほくそ笑み
眞珠ちりしく砂路に、
吸はるゝ如く消ゆるかな。

世をば外なる島人の、
住める岸をやめぐり來し、
あるは鷗の靜かなる、
夢をや搖りてかけり來し、

潮よ、胸の寂寥の、
冷えし思ひをいやすべく
(よしや、一瞬)何處より
流れや來ぬる、かゝる世に。

穩藉の詩風(醉茗)

四等

○牽牛花

名古屋市志摩町四丁目九三、內藤十太郎方　內藤てつ子

その昔天のおん神が
雲九重のたかどのに
千人の姫を舞しめて
薄き羽衣てひのうた
異白の裳裾爽かにも
み神いそ〳〵輿に入り
いて盃をとらせんと
大の盃強ひますに
さゝれし姫は羞ひに
五ツの指はおのゝきて
さと手さらし土の上
朝の幸をむねに秘め
少さき蕾ふくらかに
生れて出てぬ朝顔は
元てれ天に侍せしのみ
姫が想ひのみ情けに
堅くとざせる花びらの
常世讃美の事祝や
春の宴の花むしろ
一坐入興の艶容や
あゝ妙の樂みち響
第五の姫が舞振に
誘はれ出てし者なれば
開かば薫る美き酒の香

花やぎて若々しい作てす、類想も澤山あり別に斬新とは言ひませんけれど、詩語のあやなし方に上手な處があります(辭者)



春の雨　豐橋　菅沼錐子

五等　闇の森

長野縣諏訪郡下諏訪　山田くに子

とり巻し冬の濃霧は
怪鳥がやれし古巣に
暮色は「ひた」と迫りつ
仄ぐらき中をのぞけば、
刻ごとに森を包みて、
くづれ伏す草の冷夢に
森は皆深き沈淪。
何魔の秘の呪咀ぞ、
魍魅をこめし響の、
來るが如はた去るが如、
闇さきつ目をぞ襲ふ。
ひた寄る怪しけはひは、
寂寥の冥府にや通ふ
陰森と死の香ふくみて、
胸底に深くしみ入る。
懼は胸に迫りつゝ、
我知らず高ふ叫べば、
聲の精闇を迷ふて、
物凄く木魂返して
何物か雕刻て去りぬ
をじまどふ我魂に深く

暗黒面を歌ふ詩人は近頃大いにふえたやうですが、我が文壇にもあらはれて來ました。此詩、詩語を扱ふことの上手な點に於て優れて居るだけて未だ我々を戰慄させる程の暗黒な境には入って居ません(辭者)

秀逸

○寂寥

成田紫泉

大空に紫あせて　寂光は今かおちゆき
しづ〳〵迫る黄昏に　杉木立黑うねむりぬ
こもり沼のしゞま破りて、闇の香いぶせき匂ひは
うちあれて森にさわだち、悲愁は冥府のみちびき
水の面に星はうつりて、白鷺のなくねもひくう
聞ゆるは梢の葉ずれ　あゝ哀れさびしみの森。

此んな詩風が一つのタイプになつたやうです、此際光明の方面も歌ふ者が出ればならぬ（評者）

○憤怒

大阪府　奥山みつ子

刧初の霧の逆浪立て　妖かし姿狂はし振りに
八百重の袖を渦卷かしめ　をかしや眠れば影をもとめず
これや怒の沈める樣か。　憤怒よ汝刧初に生れて
今なほ世にある永久なる力　あら恐ろしの命のあへぎ
一とたび立たば乱るゝ餘　箭の根千束と映えたる眼
あゝ雷神が軍鼓も停めん　映えかの樣よ其若姿。
立つたる裾に白光搖曳ぎ　握れる刄に紅燃えて
霧吐く袖は逆さに靡く　あゝそれ憤怒の美し形。
夫れ咆號の火を吐く山の　地軸を徹し身震ふ樣に
悶えの煙空を包みて　とろけし巖を溶かすと見ゆ
これや怒の崇き力。

憤怒の形相とは好詩材、詩語の排列かけ出しの及ぶ處ではない、經驗ある方の作と見ましたが只餘りむつかし過ぎる（評者）

○白塔

土佐　潔子

くすしき大氣、ゆらめけば、黄金の扉、さと開らけて
まばゆげの、光さし　靈氣みつ、譜の韻
調よ、高らにひゞく。
何となく、足ははこびて、夢見心地と、獨りうなづき
冷えまさる、大理石の　金色に譜をきめて、石徑を
水いろの路を踏み行く。
瓔珞の星、聖氣にうかび　長うひく我がかげ
いつとなく消えて　窕もる、うま酒の雫
つと吸へば狂亂の樣に―魂はいづこ？
世は最初なる、想に　今詩にさと華こゝに見て
偉いなる力、讃たへば、　蓋にうかゞて「白塔」近く眺め
森の中―よき人の、　名を呼ぶらしき、心地哉。

初の白塔の歌より、むつかしくなつただけて、別に好くはありません（評者）

○旅情

牛込區　岩谷綠子

跫音ひく〳〵、黑鐵の　鎖重げに、灰暗き
獄屋に歸る囚人の　群れにあひたり—田舍道
(夕暉は山に隠れて。　野鳥の聲ぞ悵ましき)

われは漸く畏怖ろしき　「世」の獄屋をば脱れいで
「道」の鎖を断ちきりて、　甦へらんと旅立ちぬ、
(鈍雲の裂たるみて、　草吹く風は蕭々—)。

喘ぎながらに進めども、　あゝ萍の寄る邊なう
「寂寥のみが湧き出てゝ、　脚絆に落つる涙かな。
(夜の帷は逼りて、　萬象は熟睡に沈みぬ)、

此人、將來進境あらん(醉茗)

○鳳雛の曲

滋賀縣　辰井ふみ

師の君、臨月下旬、弄璋の慶あり、闔門歡聲充つ。

水仙開き梅薫る　まだ初春の雨の宵
仰げばうれし雲きれて　さとほとばしる星一ツ—
好き兒、男の兒は生れましぬ。

御空の花と愛られて　散らずしぼまずとこしへに
靈光を放つ尊とさよ。

泣くや御聲も清らかに、　乳房にすがる面影は
昔名高きマクダラの　マリアが抱く乳子の如。

はた天平のいにしへの　畫工が描きし幼子の
繪の精春の息吹得て　抜け出し如き容かな。

されば南の窓にして　祝ぎ歌書くも星月夜
希望の光充ちにたる　宵の明星呼びかけて
天に止まる諸ろ星も　祝ひませよとこの歌を。

才人の筆(醉茗)

○咲き初めし薔薇に

美津枝

來ましゝな花薔薇、　互ひの言の葉忘れずて
いざや語らん我おもひ、　君を迎の調を

君がみたまのさほ姫と、　天つみ空にはせてより
君がなきからかいいだき、　暫時は熱き接吻を
されど術とてあらされば、　其なきがらを室に入れ
寒き夕は暖めつ　朝折〳〵水そゝぎ
まひる時々土かひて、　ひたぶる君の生れますを
祈るに外はなかりける、　願やみ空にひゞきけん
今日うす色のほゝゑみの　花の蕾は咲き初めぬ

花薔薇の歌で、此程新しく言へたのは少いでせう(醉茗)

○鈍き魂

德島　朝田眞洲子

あたたかき
麗日和を、遠の野、近き里
見渡す限り大海原の如く
うすかすみ罩めて、重ゆげに
ゆたゆたと濤こそうねれ、それの麥圃を
われひとり夕暮れのそゞろありきす。

春の風
海を越えて、浦安の「くに」より
つばくらめ、連れだちて來ぬ。
そのつばくらめ『歡樂の國の空よ』と
うねて翔り、高く舞ひ、はた低くとぶ
水の面、菜種蓮華の花さく圃の面。

われ知らず
いかにしてここに來りしや？「鈍魂」
「癡」とな笑ひそ、われはまことあはれなるもの
思ほへば我身の上や、同じ人の世
人と生れて、などかくばかり
涙もろきや？「あれ歔欷す」。いかなればーー。
いかなれば
告天子なく野は悲しきぞ、「追懐」の
もゆる芝生に、君はあらねど
かたち現ぜぬ御聲とのみ、何となう胸に木精て
死の神が呼ばふ。招のさま・・・・。
あゝ夢心地。ひたと悲しーー。

美しくに
夕焼けて柑子の色に、春の圃の
大空かなしーー。徒らに涙眼して
紅き花だに得も摘まず、軟麥の
したり葉の小徑を、われ知らず
憧憬れて、心ならずもまどひまどふ

驚ろきぬ
われに返れば、あゝ驚ろきぬ。西なる國に
「ひる」と「よる」との、神ら格闘ひて
怨恨は燃え上り、血はながる。
そも瞬時やがては、「鈍」の夜の「領」。われに返りて、
おどろきぬーーあゝ「鈍魂」。

清新ですけれど、透徹しません、新しい詩語を使うて見るだけで、新しい生命のない作は感心しません、きれ〲に好い句が挿まれてある(碌名)

○行く春

朝凪静子

春は行きけり、東に——
路は落花に埋もりて。
春は行きけり、西に——
昔の夢を浮べては。
春は行きけり、南に——
夕べ別れの淋しさに
生命の道を顧みぬ
春は行きけり、北に——
やつれし影を追ふ如き
柳の糸をくゞりつゝ。
春はみどりにかくれけり

南に——が一番よろしい、北には、も少し強く言へなかつたでせうか(醉茗)

露にしめれるうす暗の
辿れる足の惱み勝ち
悲しみわぶる胸の中
はかなき時の來りけり。
小鳥は鳥の歌思ひ

○富士山

筑前　田中とよ子

あゝ崇高しや富士の山
雪の冠、高からかに
彩雲の帯美しく
刻一刻とうつり行く。
ほゝ笑み給ふ御聖姿や、
美しき御子等が集ひ來て
もすそは長う紫に
現世の現象を外に見て
天の御樂園に遊びます
なせしと計り思はるゝ

野の川　東都　坂野光子



存外苦心せずに、しかも富士山の歌として、そんなにいけない事もない、末二三句は削りました、無い方がよろしい(醉茗)

○人を慕ひて

福岡市　河原白百合子

(筑波根の詩人に)

「山むらさきの筑波根に
なへたる足のたゞざれば
涙の中に死にもせで
母なかしぬる罪の子と」
花守の人慕ひては
おなじ性質なる病葉の
母なる君の手にすがり
みどりを妾願ふもの
涙は人の友と云ふ
さあれ常陸の朝晴れて
雲七彩に流れては
紅さす人は見えずとも
み興すゞろのほゝづゑに
美し詩巻口誦して
君は筑波の詩の人
世は今春の名となりて
雪とけやらぬ草の戸に

胡蝶は花に夢むとも
我が世は冬の日なるもの
頬にはのぼる笑もあれ
梅は咲けども山の窪
すぐせを胸に浮べては

常陸に迷ふ想かな

好意は兎に角、詩として未だ味ひが深くありません、筑波根詩人を満足せしむるには未だ一層の修錬を要します（酔茗）

○君を思ひて

靖霞洞畔　あくがれ人

君を思ひて眼とづれば、ときめき心地胸もえぬ
我は燒野の柔地(つち)に、萠えたる春の草のごと
君を思ひてうつぶせば、涙に袖は打ちぬれぬ
我は渚に溺あびて、ぬれたる春の貝のごと
君を思ひて手をくめば、血の動悸(とき)たかく息もれぬ、
我は春野のかぎろひに、醉ひつゝ舞へる蝶のごと。
君を思ひてぬかづけば、うなじ瘦せぬと人いひぬ
我は春日を花訪ひて、小雨に瘦せし鳥のごと

比喩が何處までも女性的で又新しい匂ひが籠つてゐます（酔茗）

○櫻の實

麹町　山下里子

しげりし枝の片かはに、櫻は赤き實となりぬ、
幼子なれば朧夜を、うしと思はず眺めなむ
一と夜心のさまよひに、櫻の下に來りしが、
母家の方にかゞやける、灯ははたととざされて
のこれる月のあはきかな
あはきが中に目ざとくも　翁に似たる白き雲
冬木にをきし霜がれの、我世とごとのほてり顔、
眠るに似たる木の上より、赤き實はこそ落ちにたれ
かゞむとなせし我小手に、そのゝきつゝも拂ひしが
のこれる色はきえもせて、黒くもせめし紅の色
胸のなごみの一と時を、夜鳥はとびぬ西の山。

櫻の實も詩に新しく、殊に夜は珍しい、何れ實感から來た作でせう（酔茗）

○俤人に

四谷　飛生人

白梅月夜、あゝかつて、ゆきずり逢ひし戀幸の
そゞろ言より香して、花に灯、人に影
その夜の君を見浮べて　あゝ我が血潮狂ひたり。

立ちわかれては寂しき、影のみ、胸に湧き出づる
その夜の君のあたゝかさに、面影慕へばうつゝなう
涙浮ぶるおのが瞳に　雲のやうにも君は映りて

朧、櫻の宵々は、　街にゆきかふ來人に
まぎれて君のあらむかと　憧れ心ひそやかに
樹のもとにそと立てば　靜こゝろなく花は散る

○病床にて

福岡　後藤筑紫子

うららかにすむ武藏の春の空、心うくなる窓の人々。
我のみはなどてかくある憂き辛さ、故郷戀うなる呻吟の床。
さすらひのさて身の上を何にをか、替へましなばかゝるものなん。

花園より花園をめぐる蝶々の
花なればもとより草の花なれば、
露の大野鐘に追はるゝ人の子に
再びはふまじの響ひもろかりき、
果てなむまでの露の命か。
墓の影に小さく咲かばや、
踏みあらされし撫子よ我
緋桃花ちる古里の道。

○石地藏

奈良縣　中富よしみ

三年をよそにさすらいて
まだいとけなくありし頃
たはむれなせし里の寺
たゞ若草の萠ゆるのみ。
あれにしあとの片隅に
半ばゝ苔におほはれて
過ぎし昔を語らへば
共に遊びしかの君の
散句ふ花すみれ
石の地藏にさゝやける。

我古郷にかへり見ば
水の實をひらい花を折り
今は昔のかげもなく
かたみに殘る石地藏
絶えず吹かれつそよ風に
咎へもあらずはゝゑまず、
たまや化しけん足もとに
風吹くまゝに心なき

○常陸の野を偲びて

（胸を病みます夜雨の君に）

高知縣　田内いれき

世に一人なる母君の、
傷める胸をいだいては、
さはれこぼるゝ露にさへ、
ふかき情の血はゆれて、
花は彩々野に咲いて、
み空の雲も七彩に、
ミューズの神の奏でます
慰藉の曲は永久に、

溫きめぐみの膝にして、
もらすみ笑みも寂しとや。
燃えたつがごと溢れたる、
涙いとはぬ君なれば。
山には百の鳥歌ひ、
君なぐさむとながれては。
現し世になき靈韻の
君が幸をば祈るらむ。

○牛飼唄

上毛　かるかや

花は散ても春さへくれば、
なぜだろか？
蝶は死ぬけど蜜たくはへて、
なぜだろか？
葉流した小川は涸れて
なぜだろか？
牛がある時申すには
なぜだろゑ、

萌いたお庭の芽は生へる
蜂は冬ても飛んでゐる
秋もやせない利根の水
草は食うけど花はいや

○星

巣鴨　橋本好子

五彩色どる夕雲の、
いてやとすさぶ笛竹は、
瞳に美しき星り[illegible]。
迴る家路の牛にて
數ぞ添ひ行く星の影
仰げば近き星の影

富士のも裾に亂れけむ、
集り來る小羊の、
小さき胸の狂ふ時、
みだるる笛の音を止めて、

○くれゆく野

下野　鈴木露子

やゝに暮れゆく曠野に、
森の落葉はしめやかに
ゆるく流るゝ里川に
羊追ひゆく若人の
羊のかよう野小徑
夕べ消えゆく宵の月

沈める霧は迫り來て
まばら木立に木精して
うつる夕雲榮えもなく
沈める胸に似たるかな
おぼろに青み。鈍色の
孤獨の君を偲ぶかな

○寂寥

牛込　佐藤よし江

終日を、檠につかれて、歸りこし、たび館、六疊の、寂しき居間や、
死の影か、あゝ闇は、破れ壁の、隅よろ徐々に、わが座せる影をものみぬ、
つかれしろ、身はいま起ちて、灯ともさむ、力だになく、出くひし、文机に倚り、
こし方の、つゞり〳〵し、幸うすき、夢をたどりぬ、
追懐の痛さにめげて、はて知れぬ、冥府の眞底に、沈みゆく、「恋のしばし、
こは何か、わが目さへぎる、仰向けは、姿やつれし、老翁の、われ、みまもりぬ、
おもむろに、口を開きぬ、旅の子よ、など歸へらざる、なが母は、いたつき重く、
死の瀬に、終焉の名殘、歸らざる、あ子が名呼びて、永久の、眠にいる、と、
驚きつ、眼ひらけば、老翁の、姿はあらず、朝日影、閉さぬ窓の、
骨破れし、障子とうして、萬のぞく、日破れの壁に、旅の子の、寂し影しぬ

○未だ見ぬ友に

東京　秋山鐵子

日影うらゝに蝶舞ふ日、　はるけき君が文を得て
すゞろに思ふその人は、　紅梅かをる窓にして
春を讃ずる人なりと、　我はも名なき野の草の
永劫榮もなき身にしあれど、　優しき君が面影を
忍ぶよすがの亂れがき　野越へ山越へ君が手に
渡り行く日の榮あれな

○紅　情

下谷　鳥居園子

行く水に花なげて、　欄による子
薔色の袖長し、　惱ましその額に
かざす白き手、　落ちしはそれ
玉の指輪　彫りたるは誰が名
あゝ水に沈みぬ　『やせしよ』形栽し
怨まんはたれ、　風なきに花散るを
春の蝶の夢、　何れいつまでも遠き。

○農婦となる歌

茨城縣　石塚しづえ

野の畑にいざなはれ、　うつらふ花に憧憬れて
迷の宮の奥ふかく、　さ迷ひしこそおろかなれ、
うつゝよ夢よ花の香の、　消えて跡なき廿年を、
嬉しや神の御手により、　常闇谷よりすくはれぬ、
あゝ雲霧のはれし夕、　星の光に偉力あり。
御啓示。――永劫に野に歸り、　歌へ自然の懐に。
野の人！さはに興あらむ、　神の啓示ぞ長けれ、
長閑けき光かぎろひて、　世はまた春の若みどり、
風あたゝかに草笛の　牧場の末にほの聞ゆ
野の人!! 吾も群に入り。　いざおり立たん。あはれ吾が
小野の雲雀よ鶯よ　共にうたはむ

○同窓會

小草子

同じ學びの窓の内に、　そだちし友の打つどひ
幼心に手をひきて、　親しくかたるたのしさよ。
たへて久しく逢見れば、　かわらぬ人はあられども
丸わげなるはわれ一人、　多くの友のとりまきて
ふさふとのたまふみことばの　われはうれしく又はづかしき。

○慰安

福井千代子

あれにし野邊にゆきくれて、　やどりになやむ旅人も
一もと咲ける姫百合の　清きにうさを慰めむ
病の床になやむ身も、　雪はづかしき看護衣の
眞白き見ればしかすがに、　うき苦しみも忘るゝよ
野にすかれたる花さくも、　み空の星の涙なる
情の露にうるほへば、　色づき薫りますとかや
けふやあすなる身なりとも、　優しき君の温き
愛の惠に浴しなば、　いやさるべきやいたつきの
あゝうたゝねにエンゼルの、　天降りませしと夢みしは
眞白の衣きよらけき、　愛の御神の姿なり
木枯すさぶ冬の夜も、　春のみ園の心地すは

十字の名を負ふ人々の
汚れ濁りし世をあげて
優しき人のあるかぎり、
愛の息吹のふけばなり
人皆我にそむくとも
いとも安けく世をおくる哉

◎鶴岡を出づる時

羽前　齋藤良子

六とせの昔秋のころ、
關の白河打渡り、
花の都を後に見て、
霜ふる國に入りにけり、

月の三山はいや高く、
赤川鬼面のふた川は、
水とこしへに清くしく、
こゝに武陵の里を見る。

離合集散世の常と、
口には云へどまのあたり、
雁にあられど春歸る、
遊子の身こそあはれなれ。

またも都に歸り來て、
上野の山の花見れば、
恩ひはいづこ赤川の、
滑き流のその里よ。

◎村近き小道にて

麹町　康子

繁みの小道黄昏れの、
心の駒ははやれども
早や我村の見ゆるかな
など我足の進まざる

ことし五ツの妹の
歸ると聞きし今日の日を、
姉恩ひなる彼女なれば
門邊に立ちつゝ暮しけん、

袴のもすそ打ちからげ
急げば息の苦しくて

ばら　大坂　高橋芳子



病のために歸る身の

今一年の後ならば
嬉しく歸る今日なれど

學びや捨てゝ出し身は
なにかざすべき花も無く

あゝ疲はてと一足も

花笑はしふ胸にして
うたて病ひにをかされて

希望の破れし此胸に

今日の一日の業終へて、
馬ひき歸る野の人の
曲り小道に影消えつ、
唄聲細ふ響くとき
淚にぬれし顔上げて
天なる神に祈り捧げぬ

◎黑髮　相摸　中里響花

晩春の日脚もつれて
鐘辷る森におちては
力無う小さき胸抱き
細りゆく——人の影

森の寛は闇を手招き
さと流る神灯冷たう
懐しの木魂のうめき
苦ほしの——人の影

苦ふかき土に額づき
崩れたる香の煙りに
くり返す專念の呪文
滅入る如——人の影

高呼べど靈は默して
頭叩く落花の礫に
から〳〵と鈴の響り
人の影——血走りぬ

うない卷く丈の黒髪
人の影いづこに消へし
醉に吊りし戀の殘骸
さはく\と風にあやしぶ

ふっつりと斷つよと見れば
屋とんで森や默々
今も尙恨みのこりて
蛇のそれよ――黒髪

○深山

横濱　花舟子

雲、森々と行わたり、
ゆきずり匂ふ山姬や
風溫うしてこぼれける、
齋りのみてる溪間や、
大氣にもやは丁々と、

水淙々と流れ去る
白衣の裾にそよろふく
かざしの花や蘭や
霧になくなる閑古鳥
南の岸は白橿か

○月琴

大阪市　吉岡君子

七夕姬の樂終り、
今たけなはの花の宴、
月宮殿に開かれぬ

錦の戸帳さと開きて、
神秘の秘曲緩うして、
聲高らかに將軍令。

奇しき音色に、憧憬れて、
疾しや刹那に、月琴竊りて
天童姬にけがれたり。

潮の香高き磯づたひ、
あやしう舞上る四の糸、
海底深く沈みけり

下界は人の眠れるを
月の都の奧深く

女神御威の崇い詔、
月琴取りて唐韻の、

年うら若き天童が
さかしく下界に降る時、

けがれし手にかなづ時、
かなしと嘆く罪の子は、

○逝く水

羽後　渡部みや子

あま翔る鳥翼ちゞめ、
神の息吹か夕風寒く、
萍莚しぼむ水面さびしや。
幾重雲間の峯の奧、
紅匂ふ深みどり
わりなく醒めし小川やあはれ。

樹がくれ深くいこふ夕、
破れたる蘆の葉末をわたる、
せゝらぐ小川流もやせて。
湧ける泉の面影しのぶ、
花のとばりの甘夢に、

○里ごもり

宇都宮にありつる時

新潟縣　山田さとし

三月盛のうつら病み、
忠實なる乳母のいふがまゝ、
里居の日記も古りたりな

室は八坪の離屋建て、
まろび寢さめし折々は、
隅にもとめて物思ひ、

小庭に落つる葉櫻の、
日ごとに仰ぐ紅き實を、
數へたりしも幾たびか、

五尺にたらぬ垣根越し、
筑波遠山のぞみては、
夕べく\を祈りてもみる。

夏に入りても氣疎きを
京へ三里の野の家に

母屋の人聲遠ければ
小暗き花を天井の

醛なづかしみ立ちよりて
小蔭ぐ棺のをちこちに

麥の穗黄なる野の末に
罪の子われに幸あらせと

○詩文を作る時

西ノ宮　森井せい子

詩文の意味すら解きかれて、
好める道の得堪へずて、
選者の君を煩はし、
されど詩文は拙くも、

讀むにも困る我れなれど
見眞似人眞似綴りては、
反古の數増すうたてさよ。
他人の作にあらずして

我が精神を籠めしものなれば、
いかでやましき事あらんやと。

○ねむれ妹

神田　松岡笑百合

うめが香かをる朧夜に、
花の顔容そむけつゝ、
涙を袖におほひてし、
春の月こそくもりたれ。
水にうつらふあか星の、
晨の空にきゆること、
なれは濁に染まずして、
もとの園にや歸りけん。
こゝろの泉かれはてゝ、
荊蕀からたち生ひ茂る、
あゝうつし世の女には、
あまりに胸や淋かりし。
たらちねいます青山を、
今宵も雲や守るらん、
はや塵遠き夢まくら、
靜にねむれいもうとよ。

○寫し繪

武藏　鵜澤かうがい

果敢かりしな朧月の、
袖しか浦の夕湖に、
暮れ行く春の音聞きて、
松の影はふ岩かどに、
深き思ひにたどりしよ。
あゝうら若き歌人の、
眉の匂ひを月と見ば、
かくれて燃ゆる情こそ、
大海原に照り渡る
天つひかりにさもにたれ
あゝ戀みの歌の子の、
胸の思を星と見ば、
流もゆるき古川の、
汀に浮ぶ藻の花の
白きは友の身なる哉。
今うつしゑを手にとれば、
例へば藤の房長く、
水にうつらふ湖や、
夕靜かに浮雲の、
神秘の符を開くごと、
沈みて重き我が魂も、
胸をいて樹をめぐり、
かのむかつをなびきては、
愁も雲と散り失せて、
奇しきは友の寫し繪よ。
壁より白き花瓶の、
瓶のもなかに紅の
さつきの蕊を積み置れ、
友がうつしゑ埋めては、
さびしき笑をもらす哉。

○冬の風

後志　北海女史

冬風山にさけぶ時
玉の館のたわやめの
かざしの花の色もあせ
袖の麝香の香も消えぬ
伊豫簾うきまく冬風に
人を和せしまひひめの
べにさし指の血はひえて
鏡とる手も狂ふかな、
心ぼそしく人の子の
魂み空にかへる時
時を得がほの鮎の子は
蒼穹を高くあふぐかな、
鳥はほゝゑむ去歳の春
快樂は夢とは知れゝども
かくまであるゝものとしも
むもひはかけじうたびとよ、

○咲きしすみれ

熊本縣　緒方ゑと子

夕女神の落したる、
羽衣の露かたまりて
美しすみれ咲きにけり
美味しき汁を吸はんとて、
寄り來る蝶の樣々に

あやしや花はしぼみけり
いともたへなる舞ぶりの　羽色あせにし小さき蝶
しぼみし花に寄ると見て　あやしや花は開きたり

○花と星　扇城　やま川

人よりさきに戀ありて、　天なる星は花を戀ひ
埴なる花は、星戀へど　六億二千三萬里
みちの遠きに逢ひ得ず。
想ばかりの其中に　むなしく夜の明けゆきて
二人の仲は隔てられ　曉毎におく露は
星の涙や花の栞や。

○砂文字　日本橋　ほたろ

戀の思に堪へかねて　夕日淋しき磯に出て
磯の眞砂にひれ伏して　胸にあふるゝ悲しみに
うつし出せし砂の上
砂にうつせし文字なれば　波のよる間に消え失せて
引くやさゞ波怒る波　崩れて落る波の岡に
深き思も殘れかし

○はかなき笑み　麹町　淺井千鳥子

花の十七眼を病みて　癒ゆるに難き二とせを
かけし眼鏡の眞光りに　いたみよ今は夢に走りぬ。
夜な夜なひもとく詩集の　詩文字小さう恨みしを
あゝみ情けのおん母が　黄金とかへしこの眼鏡よ。
はかなき子なりあゝわれは　若き希望も富も名譽も
冷たき人の世に捨てゝ　ひとりの慈母とこのめがれと
うすき草路に樂しまむ。

○蜜柑の園　紀伊　文子

見ずや蜜柑の山園を、　園は黄金に輝けり、
實の味はうまくして、　み神のかめの美酒の如、
色はこれ秋のみ神が、　逝かんとて玉ひし紀念、
味はこれ冬のみ神が、　出でんとて玉ひし惠。

○花占　高知縣　田内いね子

夢に現にあけくれを、　君が情にほゝゑめど、
胸の血汐は狂ひたつ、　青春き心の恥かしや。
あゝたゞ僅三日を、　相見ることの得ざるさへ、
わすられし身にあらずやと、　早や何となう胸ゆれて。
咲きみだれたる花園に、　紅よ紫、黄色よと、
花、いく彩もつみとりて　そよ占ふてみたるかな。

○暮秋　阿波　藤衣女史

紅流くづるゝ夕映の、　水の面淡く殘りしが、
雲もろともに消えてゆく、　涙すゝむる夕なれや。
せゝらぎ高きいさゝ川、　流れの末に星見へて、
小徑をわたる秋の風、　暮の渡しの急ぎ道。
憂世の夢を住み侘びて、　頭の霜のいや白き、
老翁が手に取る水馴棹、　歌の節さへ衰ろへて。
しばし語るも假の縁、　舟より上る五六人、
四と東に別れゆき、　我のみ遁る草堤。
鄙の花原色褪せて、　かりがね寒き川の瀬や、
落葉朽葉にかくれ鳴く、　こほろぎの聲細きかな。

短篇小説

廣津柳浪先生選評

三等

○野の家

神奈川縣高座郡大和村字下鶴間　野島さと子

上

今日は日曜ではあるし、其の上望んでも得られない樣な好天氣なので、久しく訪れなかつた野の家を訪ふべく家を出た。野の家といふのは、こゝから半里ばかり離れた吉田の村はづれにある一軒家で、妾が小さい時分お乳を頂いたおばさんの家である。野の家！、野の家！。何と美しい名ではないか。何と優しい名ではないか。そこには美津さんといつて、妾より一つ年長の姉さんがある。今はお嫁に行つて家には居ない。妾は美津さんのお乳で育つたのである。

中

あの、森の後ろに淡暗い下路の羊齒や、一つ葉や女蘿を踏みわけて、日射が青紗の樣に透ける木立を縫ひながら、美津さんと二人て、馨床しい大櫻の櫻子の紫を毟つたり、麥の穗浪に分け入つては、葉の丸い、色の淡い、鎌倉すみれや、ふか紫のつぼすみれなどを、あさつた昔は、あゝ、どんなに樂しかつた事であらう。考へるともなく考へながら、いつしか妾はなつかしい野の家に着いた。藁屋根の低い門をくゞると、合歡の木の下に、太つた親雞が二三十羽の雛鷄を連れて、頻りに餌をあさつて居る。戀しいおばさんは相變らず丈夫だと見えて、椽側に眼鏡もかけずに針仕事をして居る。妾が這入つていつたのを見ると、おゝとばかり。膝の上から縫かけの着物をおろして、よくまあいらしつて下すつた。と、いそ〳〵立つて妾を迎へて呉れる。おばさん久しく御無沙汰致しました。御丈夫で何よりですね。と云へば、もうお茶の仕度をしながら、ありがたう御座います。お嬢さんて御丈夫で何よりですはね。おうちではおかはりも御座いませんか。と、どこまでも優し

いおばさんだ。これをおぢさんにあげて下さい。と云つて、土産を出す。こそへおぢさんが山から歸つて來た。妾の姿を見るより早く、おゝ、よく來さしやつた。此の頃は鷄め卵を生まないで困りましたよ。彼方からも此方からも賴まれて居るんだが、肝腎の奴が生まねえぢやあどうすることも出來ましねえや。でもあなたんところの分は二十個ばかり一番いゝのを殘して置きました。よう來て下すつた。實は市への買物もあるし。あしたあたりは持つてあがろうと思つてたんです。おうちぢやあおかはりも御座いませんか。と、鍬もおろさずに云ふて吳れる。妾はあがつてお晝を頂いた。



美津さんからは別にお便りも御座いませんか。やつばり御丈夫でゐらつしやるのでせう。

ありがたう御座います。あれもしあはせに丈夫でありますと見えて、此の間も無事だつて云ふ手紙が來ましたつけ。今日はこんなによい日和ですから、ゆつくりとまあ庭でも眺めながら、澁茶でもあがつて遊んでゐらつしやい。美津でも居ると、すこしは面白い事もあるでせうにねえ。

いゝ桃があるのね。歸りに一枝下さいな。

ようござんすともよ。夏になるとあの木の下へ茄子を植ゑるから其時分には又ゆつくりとゐらつしやい。茄子の實が澤山なつたとこなぞは、町ではとても見られませんよ。

それから妾はしばらく三人で四方山の話をしてあそんだが、あまりおそくならん中

にと歸途についた。

下

あゝ、妾は來るべき月清き夏の夜、露を受けた濃紫の茄子の實の、詩的のふぜいを眺めながら、おぢさんとおばさんの面白い世間話を聞かうと思ふ。

田園生活を巧みに描いて、おぢさんとおばさんを活躍させ、野の家の詩趣を充分に感得せしめる、田園を描くと大抵は單調になるものだが、此篇は比較的にぎやかになつて居る（選者評）

四等 ○落第生

駿河國清水町
松永兼吉方 大倉京子

『ヤーイ落第女、山内の落第坊主』大聲に叫びながら、春の色を見せた小袖垣の陰から、七つ計の惡戯盛の男の兒が、物にでも怖へたやうな形體て、座敷の椽へ驅上つた。と其八疊で餘念もなく裁縫の手を走らして居た、五十內外の品の好い老女が、鳥渡眉を顰めて。

『これ清雄、何故お前は那麽惡口を云ふのです、お父樣に叱られますよ。』

と優い調子で窘めて、徐ら其躰を起すと、いそ〳〵と椽に立出てた。

と恰も其小袖垣の傍に、悄然とした若い女の姿、一體に面瘦したが、何處やらに花の匂、日中を歩いた所爲か上氣した頰の邊に、束髮の前髮がうるさく亂れて華奢な右手を帶に挿んて、人目を耻ぢる如に俯向いたが、面の美しい爲か、又なく傷々しくも思はれるので老女は哀愁の念に打たれたが、故意と快活に。

『まあ芳ちやん遠いに好く來て呉れましたねえ、そんな裏口から、遠慮深い娘ですこと。』

『叔母さん今日は。』と少女は顏を上げた。

『あゝ、まあ此方へ被入いな、那麽所に立つて居ないで、ねえ、さあ被入い。』

と老女は取散らした、樣々の道具や布切を片附ける、男兒は、何時の間にか表へ行つたと見えて、勇ましい軍歌が春風に響いて來る。

少女は山內芳子と云つて、或女學校の學生であるが旋て卒業の時をまつて、此家の長男道雄との、約婚がなつて居たので、それとはなしに芳子は度々訪れて、兩者の交情は濃であつた、がいよ〳〵と云ふ難關て、思ひがけない結果になつた。

老女は勤めて芳子の氣を引立てやうと。

『貴孃のやうにくよ〳〵なさる事はありませんよ、弘法にも筆の誤つて事が有りますもの、何も這麽ことは

運一つてすよ。」
「外の科目は如何やら良しかつたんですが、只英語だけが、妾決して怠けた譯じやなかつたんですが。」
「左樣ですつてねえ、ですが何ですよ、外國の語なんか異人さんの所へお嫁に行くんぢやないですから、如何でも好いですよ、道雄も云つてましたよ、英語は自分達でも狼狽すりや失敗るのに、女學校で英語位で彼麽事をするのは先生が無理だつて。」
「左樣ですか。」と芳子の面には喜の色が動いたが、又沈んで「皆さんが左樣仰有つて下さいますが、妾は面目無くて、外へ出るのが可羞しくて、内にばかり引込で居ましたが、母が此方へ伺へ／＼つて申しますから斯うやつて臆面もなく。」
芳子は思出したやうに、紫の包を開いて一封の書を取出した、芳子の母から老女に宛てたものである。
「眞個に其方が好うムいますよ、引込んで計居て病氣にでもなれば、それこそつまりませんよ。」
とお世辭ならで親身に情深い。
手紙は芳子が、此度の件から破緣に成りはしまいかと氣を腐らして居るから、宜敷頼むとの文意であつた。
「今日は道雄も居ますから、寛り遊で被居いよ。」
言葉を殘して老女は出て行つたが、引違へて入つて來たのは、道雄で、溢れるやうな笑顏美しく。
「やあ芳子さん、暫時來ませんでしたねえ、僕は嫌はれて了つたと思つて、内々鬱いでましたよはゝゝゝ貴孃もつまらん心配はせん方が好いですよ。」其言葉には熱い情が籠つて居る。芳子は只胸がつまつて、嬉しいのか悲しいのか、涙の一雫。

此叔母さんも善い人、道雄も善い人、落第した女學生も善い人、善い人の善い心が一致して、終りに芳子が一雫の涙となつた、此涙も眞い感じの涙である（選者評）

五等　○淋しき家

播磨揖保郡常全村　平谷たつゑ

破れ塀を周らした大きな家の門を、一人の商人、大きな紺染の風呂敷包を背負て、不平相に出て行つた。家に、白髮の媼と十六七の美しい娘と日當りの椽側に見るともなく見送て居たが、情ある老媼の眼は其娘に注がれて「お前慾しかつたらうけれどな」「否別に」とばかり、庭に眼をそらした。春ながら淋しい風に蝶々一羽、ひら／＼と飛んで來て直塀を向へと。蝶蝶も此家を寂寥と感ずるのであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

櫻花の下て妹の飯事の手傳ひしてゐた國子と云ふ姉娘母に呼ばれて內へ這ろうとすると「姉樣何、妾もよ」と袂に纒つて來る妹、共に暖い春日を浴びて居たので頰は濃き薔薇の如、やがて敷居を跨ぐと「まあ暗い事」、と妹はぽかんとして居る、「實に外から這て來ると夜の樣ね」、と眼を閉てゐたが、直「お母樣何事ですの」と其儘框へ上ると「おや是はお孃樣、お溫暖御座います」何時の間にか來てゐた商人喰へ煙筒を離して「あのー私は京都五條通山陽染物會社から參りまして、エー今度始めてヾ御座りますので、廣告の爲に其染物の見本をお安價に御まけ申して、へイ、少量でも買うてお貰ひ申して、其染方の善良のを御承知して戴きたい爲なのてハッ、何卒宜く」快辯滔々先刻母に告げた同事を喋つてゐる、加之自分から返事迄もして、明てか不明か、ぱちぱちして紅い商人の顏を瞻る妹、幾通りも列べられた美しい友禪縮緬に見惚れて居る姉、母は火鉢に手を翳して「圀ちゃん如何」、と云へば「美麗わ」と慾相。「お孃樣何卒御手に取上て御覽下さいませ」商人の口は再開いて「其模樣なんぞ非常に好柄ですよ、猶染直しても其品に毫も變らない樣に致しますので」娘は指された淡白納戸の地に、白と地の色を極濃厚した大輪の紫陽花枝もたはゝに染出され、葉は淡りと鹿子形になつて居るのを讃めた。商人は滿足して、其母なる婦人と話を始め計らずも今行つた家の內幕を聞き得た。



人影　京城　榮花

如何にも資產家らしい大きな彼家でこそ、澤山買つて貰ふと一心に說いたのに、又今度購ひませうつ、一向に見て呉れず、次度と云たつて呉服屋じやないから最早來ませんのだと云つてる永い間には、あの美しい娘樣と老媼との外誰も出て來んので、餘り老人とは思つたがお母樣ですかと尋ねると果して左樣でなかつた。でお母樣はと問ふた時今日は留守ですと云つて橫向いた娘の顏は非常に寂しかつたが、其筈だ兩親がないんだものの、だが何故亡い物を留守だと云つたのだらう、あの家も土藏も近々には他人の手に入ると云ふ事、て其と

云はずに御母樣が留守だから買へないと、斯ふなのであらう、若いながらに我家の耻を隱さうとする、可愛らしい心根だな。

何處彼處となく行商ては、知らぬ人の家の噂を聞く事度々で、大方は皆聞き捨ての商人も、今日迄稀に見る美しき娘の氣の毒な境遇を聞いては、多少同情を寄せずに居られないのである、彼村を出て旅宿に着く迄、斯樣な事を考へて居たが聽て、良い松も在つたが永い間鋏も入れてない樣だつたし、寂寞として何だか陰氣な家だつたと思つた。

田舍には有りさうな淋しい家を、旅商人に依りて觀察せしむると云ふ趣向は、實に面白い、淋しい家と賑やかな家の對照も宜い、只叙法の少し面倒になつた爲め、一寸讀者に分りかねる處もある、けれど取材は正しく珍らしい（選者評）

秀逸

夕はれ

大坂市　吉田さい子

今日は月末先生から精勤證を戴いて時計を見れば今三時三十分紫風呂敷包を小脇に袴の紐をひきしめながら校門を出た春の雨は名殘なく晴れ渡り活々とした草木床しき菫鮮かなたんぽゝは道の兩側に咲き揃ひ朝に夕に通ひ馴れた道ではあるが月日のたつのは早いものだ私しは花の咲く四月には立派な成績で四學年を卒業しようと考へて居た明日は三月一日、あの八年間の長い間通ふて居た學校も三十日餘りで卒業せねばならんと思ふと嬉しい樣な悲しい樣な氣がして私しは何とも云ひ知れぬ感に打たれて石橋の上に立ち小川の流れを眤と眺めて居ると向ふの方で泣聲がする、見ると横の葉を奇麗に刈り込んだ生籬の潛門の前に飛白の綿入を着た八つか九つの女の子が柳の下に佇んでしく／＼と泣いて居る脊には可愛らしい稚兒を脊負ふて居る「如何したの」と其房々とした髮の毛をなでながら顏を覗き込とパッチリとした目に美しい露が宿つて居る暫くは默つてうつむいて居たが「下駄の鼻緒が切れたの：：：」と小さな聲でいつて不思議そうに私の顏を瞶めて居る「そう姉ちやんがすげてあげますよ」といつて袂から半巾を取り出しそれを裂いてよりながら「何と云ふ名なの」「京ちやん」「幾つ：：：」「九つ」「姉ちやんが送つて往つてあげますからねお家はどこ」「あしこです」と小さな可愛らしい手で鎭守の森を指して居る鼻緒は手早くすげ終つたので京ちやん踴りませうと手を取つて今來た道を戻つて行く松林を通り拔ると田甫道野山は白

愛兒

武藏　角田すみ子



雲の如く櫻の花が今を盛と咲き競ふて空には小鳥が囀つて居る「京ちやんお母ちやんは家」たづねると「お父ちやんやお母ちやんはないの」悲しそうに云ふ、聞けば可憐い物語此子は三歳の折父を失ひ母の手一つに育てられたが母も去年の春病氣に罹つて亡くなつた、父母を失ひし彼女は只一人ぎりの叔母の家に引きとられて居たが元より其日暮して邪慳に育てられて八つの歳から子守奉公此處、大坂を離れて一里餘り、淋しい片田舍でしんめうに勤めて居ると云ふのである。

私は同情に堪へ難くて京ちやんを抱いて共に泣いて居た田甫道を幾曲り村の中に入らうとすると私の手を逃れて馳せ出した小川の岸の竹垣の中に白壁の見える廣い屋敷、其門の前で惘然と野を眺めて居る女が我が子の目に入つた時「京」とばかり驅けて來て能く戻つてお呉れだと確と脊の子を抱き〆めた「皆どんなに心配したかしれないよ一躰どこまでお出てたの」「學校のとこまで」「もうどこにもお出でなよ」「この姉ちやんに家迄送つて戴いたの」と幽にいつた「貴女に送つて來て戴いたのですか有難うございました」と子に乳をのましながらかういつて居る。日は六甲の山の彼方に落て四方の山は次第に薄く煙のやうになつて行く。

音樂、繪畫は言ふに及ばず、凡て技藝を修めるにも、幼い間から筋の好い人と惡い人とある、いくら大きくなつて修錬が積んでも、到底ものにならぬと見込のつく人と、ものになりさうに思はれる人とは、幼い時から異つた頭腦を持つて居る、此篇の作者、幼い事は幼いが確かに異才、たちのよい筆を持つて居る（選者評）

○何の罪

本所　田中久子

「…何も〳〵よく存じつる私、何人の噂たりとも夢異とは信じ申すまじければ今此處らわたりのはした者が專に噂申しつる如く猥に男子にみ心許さるゝなどゝは何しに疑ひ申すべきや、されども口さがなき世間の手前あるが上にも御愼みの程御大切かと存じまゐらせ候……」

「昨日山浦樣からこんな事を云てお寄越なすつたのよねへ美さん…私どんなにどんなに口惜しいか……」ハラ〳〵と淚をお溢して高樣は私の顏をお見守りなさ

います、私は何か云はうと思つてもつひ聲が出なく成て其まゝだまつて俯向て仕舞ました。

「手紙をお祖父樣が御覽に成て、家の恥だ、以後愼めつて夫は〳〵もう先程どんなに叱られましたか、自分では萬一此樣事をいはれる樣ではと思つて、もう〳〵出來る丈注意をしてゐますんですけれどね、美樣、矢張り私の心が足りませんのですかしら……仲町の山浦樣から云つてお寄越に成た位ですからきつと彼處の方の人達が……」つて涙をお拭きになると又「それからね美樣、私はもう始終家から白粉をつけるつてそれは每朝々々云はれますのよ、でも私白粉をつけるのが惡いと申すんぢやありませんけどもね、世間は煩うご座いますわね、ですから私もしか其樣事を種に何を云はれまいものでも無いと思ひましてね、見つともないこんな黑い顏を其まゝ平氣で居ますんですわ……ねへ、此位氣を付けてゐますんですけど……」

紫のお被布の袖に面をお包みに成て高樣は机の上へ突伏してお了ひになりました。私もゝう何だか悲しく成つて了て其上へつと重なりますと、細やかなお肩が小さく搖れて聲さへ立てゝ被入います。

「高樣、私もよう〳〵知てゐますからね、夫に何も〳〵神樣が御承知の事なんですから、直にお母樣にもお解りになりますわ、ね、高樣さあもう……」とお肩へ手をかけて搖ぶれば高樣は漸く面をお上げに成て。

「美樣！う嬉しうご座います」

あはれ其御笑みの淋しさ、握られた私の手は傷い程でした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あゝ考へてみると私は却つて幸福だつたのかも知れません、高樣は級の中でも指折のお容貌だつたので私は始終高樣の事を羨ましい樣に思つてゐました。同じに生れて居乍ら高樣はあゝもお美しくて入被るに私はなぜかう……などと他から見たら馬鹿らしい事でせうけれど……行末の事を考へる時はつひこんな馬鹿な事も考へるのでした。けれども、あゝけれども、私はもう〳〵決して他を羨みますまい、私は矢張り私に滿足して自分に相當した事をして一生を送ればよいのです、あゝもう他は羨みますまい。美しい方となれば誰も墮落をしてゐる樣に云なす世間はあの淸い潔白な高樣までに汚い名をきせて……。あゝ考へてみれば私の方が却つて幸福だつたのかもし

れません、私の一生には可愛い〳〵慰が有ますもの。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

つと障子をあけると暖い日ざしは花壇一面に流れて、金網の中では鷄がクヽと鳴いてゐます、オヽそれよ、お晝の菜を忘れてゐた、そして今日はヂキタリスの移植もして仕舞ひませう。

さして複雑した趣向があるでもなく、ほんの一場の會話に過ぎないけれど、斯んな處が最も短篇に適するのは、厭、言ふ通りて、作者は其呼吸を能く心得て居るらしい、行文の可憐なのは惡いとは言はぬけれど、少し御伽噺めいて、小說の文體には何うかと思はれる（選者評）



夕餉　下谷　岡野さか江

○邂逅

静岡縣　さゝ舟

主人の老翁手づから煮て勸むる茶を啜つて青年は語り續けた。

「夫て、下繪はもう出來て居るのでムいますが、其浪打際に貝を拾つて居る少女のモデル……、什麽も未熟の手腕にはモデルが無くては甘く畫かないので……、が無いので弱つて居りますと不圖濱で見掛た少女、勿論孃樣とは存ぜす是屈竟とお後を慕つて、輪廓丈でもと思つたのですが、隨從の老婢さんが胡亂に思はれる樣子なので、鳥渡巖陰で躊躇する間にお姿を見失ひましたが、ふと心づくと眞砂に殘つた一條の足跡、是れ辿つて行たらばと尋ねて參りました處が野川と表札が有つて先生がお見えになつたので……、私はもう夢のやうでムいます」

青年の涼しい眼中には露の玉さへ浮ぶのであつた、老翁も胸を被ふ銀の髯を扱いて、感慨に堪へぬらしく、「眞に夢のやうぢや、夢で覺めねば宜と思ふ……、知つての通り私も痼疾の爲職を辭して、此片田舍へ引込んだのぢやが、將來の希望をかけて留學さした長男は半途で病死する、學校の職員は皆改革る、いやもう今は東京の風も厭で、孃を對手に養鷄なぞをして心閑かに老を樂しんで居るのぢやが、夫でも寢覺の時折々は誰は什麽なつたか、彼人は志を得られたかと忘るゝ暇もなかつたが、今斯く立派に成功して、天晴一派の畫家となられた、御邊を見ると、自分の萎へた腕が癒つて、長男が蘇つたやうに嬉しい、で今の孃の事ぢやがの、モデルになるとあれば私も斯

道の爲此上もない滿足ぢや、差支がなくば旅館を引拂ふて、いつそ此家へ來ては什麽かの……、其方が宜からうと思ふが――老翁の眼にも熱心の色が溢れて居る。

青年は辛ふじて、

「……ハイ……。」感謝あまる一言を漏して、恭しく頭を下げた、萬感胸に迫つて、口も利き得ぬのである。主客共に無言、少時垣越しに三段許沖を行く白帆の影を見入つた。

折から颯と風一陣、庭の緋桃の梢を拂ふて、ハラ〳〵ハラ〳〵頽るゝ如く散りそめた。

突然コッコッコッコッ夫唱へ婦和し出した鷄小屋の陰から、小籠手に、悠然と表はれた話中の少女みどり子、玉の掌に依估なく撒き與ふ餌に集ふて、白金の脛當した白色コーチン、烏金の色の袴を穿いた暗色プラマ、薔薇の冠、雪の衣のレグホーン、何れも喜びの小叫びを擧げて女神のやうな少女をとり圍むのであつた。

春風、再び私語く花を誘ふと、舞つて亂れて、みどり子が友禪の袖、紅のリボンを打つと、地上の花も生きて蝶のやう、その圖らず青年を誘ふて、師弟の邂逅を遂げしめた緋天の緒の雪駄は、八文字に落紅を踏むのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

では今春の展覽會に海と云ふ傑作を出して、非常の好評を博した前の岡山昌也、今の野川霞聲が、房州白濱に於ける一年前の出來事である。

事を記するのが上手で、情を寫すのが次になつてゐる嫌ひはあるが、何でも書けさうな筆だから、今一歩根本的に感情の修養に力めたらば、作家たること亦難くはあるまい。（選者評）

懸賞品發送報告

第三號及び第四號の當選諸孃にはそれ〴〵左の通り賞品をお送りしました。尙、發送未濟の部に記名の方は至急住所姓名を御通知下さい。

第三號の分（三月二十日發送）

流行絹張洋傘……相原壽美子

◎吳服物　萩雨女史○富士谷あい子○ます子◎小間物　有賀まさ子○飯田季春子○田中常子◎文房具　形山千代子○長尾藤子○岩谷綠子◎圖書切符（五十錢）薔薇子○沖の石○手島まさ子○松尾花子○山本壽子◎同上（三十錢）竹叟文子○齋藤紫桂子○さゆり子○辻金子○坂里綸子○秋子◎同上（二十錢）松井さき子○大沼楓子○篠野とり子◎同上（十錢）藤原かず子○濱砂まさよ子○直田松枝○林きよ子

▲發送未濟　伊勢、谷口壽子○旅順口、愛蘋○岡野さかゑ○矢氏名○小國紋子

第四號の分（四月五日發送）

銀側懷中時計……山田くに子

◎吳服物　有賀まさ子○眞洲子◎帶止半襟類　花舟子○濱子○乙幡もん子◎小間物　白樺子○明石光子○柳子○松本蕣子◎文房具　大村絹子○平田つみ子○夕雲○小堀みち子◎圖書切符（五十錢）西野はる子○初瀨みつゑ子○山田沖子◎同上（三十錢）大塚さな子○山下里子○小林とみ子○松山薔薇◎同上（二十錢）濱砂まさよ○小松崎なをえ○朝井千とせ○安保強子◎同上（十錢）鎌田みつぎ○ふぢのや○是枝とく子○西村悅子○前出民子○白井津奈子◎別種（所望の新聞紙一ヶ月分）早崎芳月○菊地みつ子○小山もと子○村岡英香

▲發送未濟　越後、長澤ふく子○越後、中村淑子○小石川、翠子○熊本、島田たけ子○長門、孤蓮女史○大和、しづ女○青森、絹子○赤坂、成瀨靜水女

和歌　佐々木信綱先生選評

三等

薔薇の芽に絹笠きせて音きかむ
灯に榮ゆる春の夜の雨
熊本縣球磨郡深田村　桑原露子

(評) うばらの芽、絹笠、灯、春雨、いづれもうつくしきものを配合して、歌も又うつくし。

五等

野兎の桑の芽を食む四月の日
さみどりゆする嵐吹くかな
下野利根郡三原村　鈴木雪江子

(評) 結句原作野分ふくかなとあり、野分は秋の暴風に用ふる語、四月にはいかゞ。

秀逸

◎ 小草子
窓おせば遙に見る故さとの山のふもとの人なつかしき

◎ 神戸　高橋紫峯
有明の森の女神が金冠の眞玉こぼれて湧くか眞清水

◎ 香川縣　合田まが子
桃の花咲ける宿ごと歌書てゆくていそがぬ旅の僧かな

◎ 高岡　梶川露子
右左舟やる川は菜の花の黄にして晝の雨美しき

◎ 千葉縣　吉原安藝子
ならしたる鬼灯やめて舞姫が耳傾むくる鶯のこゑ

◎ 長野縣　山田くに子
地に捨てし我が戀の火甦り天をこがすか夕燒の雲

◎ 岩代　齋藤巴子
白雪の峯よりおろす風うけて鬣ふりぬ野の馬共は

◎ 本所　田中久子
鐘なりぬ寺も木立も紫に烟りて春の星てる空に

◎ 小石川　井上勝子
山の宿今日も終日鶯にかよわき胸を痛めて泣きぬ

◎ 麻布　秋山澄子
白衣きて奇し花かざす冬姫がゑまひに似たる水仙の花

◎ 土佐　石川のぶ子
灯ともして春は艶なる星月夜薄く映をよき人と見る

◎ 下總　三橋浪子
我が名をば君が呼ぶらむ思して出でし花野の夕月夜哉

◎ 大島町　鵜澤銀子
黒髪の人と立見る温泉の欄干君が夢なる蝶よ舞ひ來よ

◎ 飛驒　田口専津子

みづ車くだくる水の白々と柳をくゞり家廻りゆく

○　越後　岩本翠浪

山路行く若き御僧が笠の上にさむう散くる白梅の花

○　周防　三井はる子

樟腦蒸す白き煙の山つゝみ野包む如や春宵霞

○　尾張　菅沼あきか

朧夜や月の息吹に花散るを亡き母來ます氣色と聞きぬ

○　鳥取　上山千重子

强られて琴彈く宵や瘦やせの小指しめせば桃の雨ふる

○　上毛　和田末子

合宿となりし近江のかや賣と時鳥きく木曾の宿やに

○　茨城縣　石塚しづ子

玉水の響幽かに春の夜はかり寢の夢にいと更けぬらし

○　大阪　西岡たね子

古への懸想文賣さながらの人まひくるふ花の宴かな

○　岡山　まつ子

飛び〳〵に奈良の在所の小家がち墨うる店の白梅馨る

○　日本橋　宮島美千を

吾が誇り王者の冠も拋たんよき歌得たる束の間の興

○　札幌　杉山はぎ枝子

春ゆくか吾が身めしひに春ゆくかさいへさはいへあゝ胸痛き

○　土佐　石河のぶ子

萬人の軍勢よすと夜の風を恐れぬ笑みぬ淋しき日かな

○　日向　横山きよ子

富人のつゞみ琴の音面白う花見御舟のぼりゆく哉

○　近江　藤野しづ子

朝顔の種子まく朝を妹が傘して抱きぬ白き小兎

○　大坂　和歌子

昔の葉をやじりのあとに止めてし扉のあたり櫻散るなり

○　大阪　鎌田春枝

白梅の香をしたひ來て鶯の鳴く朝そゞろ心うれしき

○　土佐　石川濱子

絲をきて疲れんいれじのたゆたひにうたの想にはぐれぬる夜よ

○　東京　つや子

とめこかし鏡が酒のわが宿を花はなけれどとなりにこそよれ

○　香川縣　まがれ

となりどちわらひ語らふ聲きゝておきなほゝゑむ雪の朝かな

○　日本橋　みちを

去りて又梅戀しと花魂の迷ふに似たる春の蝶かな

○　埼玉縣　船津千代子

渡し人早や舟出せ隅田川此の川上は雨もよひせり

○　日本橋　柳緒きよ子

笹の葉の風に折り〳〵音するや天なる姫の絹すれの襟に

○　岩代　ともゑ子

窓近く水の流れと鶯の啼く音をきゝぬ山下の家

○　新潟縣　岡部つぎ子

春風のそよふく頃は谷川のこほりもとけて鶯のなく

○　長門　孤星女史

幾度か人のなさけをしりぞけてかくて我世の春いなんとす

○　熊本　江副ちかつる

炭賣りて市よりかへる父上をわが待つ谷や蘭の香かをる　常陸 川並花子

○前の世に如何なる罪のありてかと神にたゞさむ幸なきわが身　岐阜縣 白梅子

○風なくて月もこほらむ寒そらを何地行くらむかりの一むれ　佐賀縣 久原秋紅子

○おぼろなるかすみの宿の君におくる歌の曲には花の香こめて　大和 和田芳子

○あづまやをなゝめに出てし一枝の梅が香床し夕月の窓　常陸 松が枝女

○花をみてかへるはおしきあすか山いざ木の下にひと夜あかさん　麹町 吉敷里子

○池のはた三軒長家よきほどに朝風吹きぬ蘭の花咲く　遠江 宮城梯子

○紫の幕うちかけし花蔭に舞ふ姫つゝむ薄霞かな　大和 藤田さゆり

○鹿の影春日の野邊に黄昏れて大佛の鐘今なりひびく　伊勢 常盤木花子

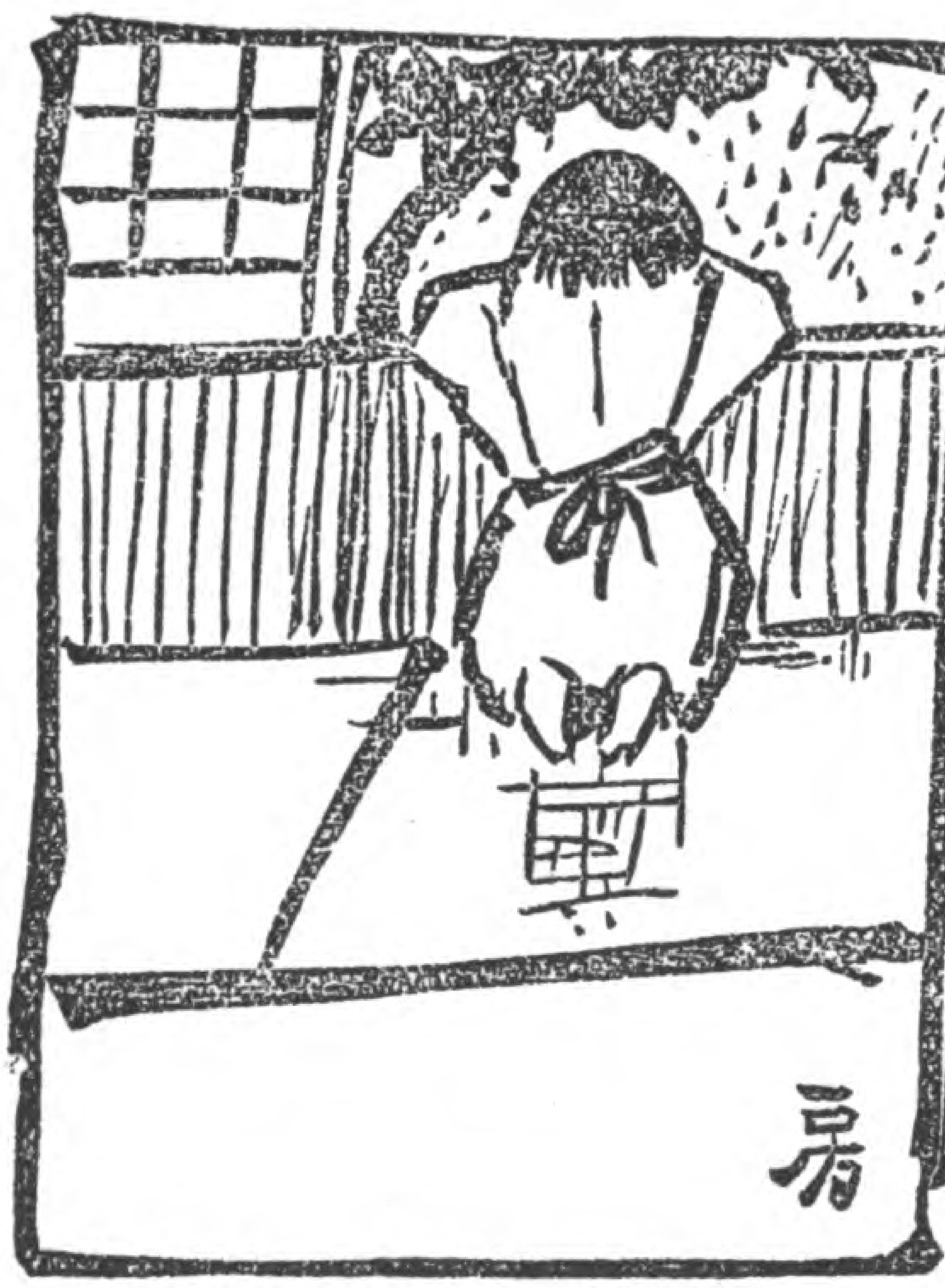
○春の日は廣き天地を彩りて花の御堂の鐘に暮れゆく　辻 登茂子

○目に見えぬ花の匂ひのいづちよりひれもすたえぬ鶯の聲　肥前 秋月靜女

○峯こゆる嵐も絶えてふくる夜のつきはの山に落つる月かな　淡路 照子

○手習へるをとめのほゝにすみの色あざやかなるがあいらしきかな　小石川 片岡滿壽子

○畝火山香具山霞む大和路や梅に小鳥の日は長うして



春雨　沖繩縣 房子

○雨やみてほのかにいてし夕月や笛の音ゆかし卯の花の宿　松前 工藤逸子

○すげ笠に花ふくみくる冠師更科月よ山の峽にして　牛込 鋒立月代

○白萩の露もこぼるゝ秋の野になくか此宵もこほろぎの聲　酒田 菊池りう子

○君を見て胸の泉のいと底に若き血潮の漲るおぼゆ　牛込 佐藤あし江

○泣かじとてそむけし方や風もれて床の白梅一ひらぞ散る　佐賀 かつら子

○花の下舞姫の唄ふやまびこは天なる姫の囃す御聲ぞ　小石川 山崎房子

○春なれやはるの心のはるがすみ野べに山べに立ぞうれしき　山形縣 齋藤貞子

○みよしのゝ里の春風心あらばまどにも入れよ花の香りを　常陸 黒澤とみ子

○星の子の天降りてそこに囁くと見しはこぼるゝ小笹の露よ　相摸 野島さと子

○白魚のおどると見しか若菜洗ふ乙女の脛に小波集ふ　芝 佐藤ま子 よ

○梅の花見る度毎に思ひけり我が身に花の咲かで過しを　仙臺 相澤てい子

○柴の戸によるよる梅の匂ひ來てやさしき方もあるすまひかな　鶴來町 花子

○たゞひとりたどる山路に日は暮れてさびしくひゞく瀧の音かな　鹿兒島 大津きわ子

和歌

○　麹町　長谷川なを子
御牧場の鹿の子斑に雪見せて朝日麗らに羊遊べり
○　芝　智惠子
ふたゝびは歸らぬ去年をゆめに見て母なき春のさても淋しき
○　丹波　藤枝女史
愛でし師の深き惠も偲ばれて思出多き初日の出哉
○　本郷　尾花子
うつくしき一枝あれど人の山散りしく花を踏みつゝもなほ
○　上毛　紅葉子
亡き母の筐にくれし此袖に涙の乾く暇とてもなし
○　をばな
火にすべくみ歌手にせどいたづらに胸のいたみのたゞ深うして
○　麹町　淺井千鳥子
宵の書院しづかに梅薫り田端の君が來るやと待ちぬ
○　大坂　倭文子
白雪も花もひとつに霞みけり吉野の里の春の曙
○　廣島　加藤初代
椎がりに道のしるべの鶯に何とてものを深く聞くらん
○　近江　松本きく子
君まつに君はきまさず夕ぐれて菜花野の春の夜の月
○　福島縣　水上喜佐子
思ひ出の悲しき戀に涙いてゝとゞめもあへぬ春の雨哉
○　若松市　靜香
朝まだき風も涼しく故里の庭の櫻ぞ今盛り哉
○　新潟縣　千坂瑞枝子
なつかしき君と別れの涙川むすばぬ袖もつゆけかりけり
○　南品川　風岡やす子
公達の影朱雀路にたそがれて五山の鐘のうつゝなきかな
○　土佐　石津のぶ子
女郎街を小傘かざしてつと走せぬ使に出てし春の雨の夜
○　澁谷　蓮子

うれしくも今朝きゝそめぬ我宿の垣根に來なくうぐひすのこゑ
○　若狹　師田秋郊女
けふもまた積りし雪の多からん心してゆけ山越の路
○　京都　白菊
秋の夜や草葉の露の月あびてすだく虫の音凉しかりけり
○　豊後　齋藤白露子
花と共に送りし人のおくつきにすゝきみだれて秋風のふく
○　山口縣　結城しな子
春の野の花ほの白くたそがれて瀬戸の麥畑雲雀落ち來ぬ
○　岩代　悲蓮子
六年ぶり君と手をとる里小川何を先きにとわれは惑ひぬ
○　本郷　川口久子
故里のつれなき友を我思ふ心をかたれ木枯の風
○　丹後　松本みどり
妾が憂斯くもあるまじ逝きませし姉君現世にましますならば
○　若狹　山中雪子
七歳にて父にはぐれてさまようて今詩のかどにうらぶれ行く子
○　美作　小郷とら子
百鳥の聲も霞につゝまれて神世おぼゆる伊勢の宮居や
○　宇佐郡　高津綾子
來し方は目もはるかなる阿蘇の峰白き姿にけむり立つなり
○　秋田縣　小笹千代子
いさら川流れてのぞむ隣が家の桃さくまどにあやの音する
○　下總　野々宮清子
憎いかな別れて逢ふてこゝに三年思ふ一つをいはで別れて
○　岡山　井上直枝
比叡おろし雨を誘ひて吹き來るやまどのとおろす京の家々
○　神戸　藤堂清子
かれてよりちかひし望とげやらで一人淋しき夜半の雨かな
○　若松　皆川千代子
うぐひすや上より下を見落して止まる梅樹に一聲の鳴く

○夕暮れの里の小川に馬洗ふ馬子の小笠に桃の花散る　富山縣　梶川露子

○うつくしと窓のかたへにたちよれば笹葉にやどる夕月のかげ　津　新風

○きさらぎや逝きにし人の碑を彫む鑿の音冴て梅の花散る　筑前　花田うらの

○うつゝ心に床し笛の音慕ひ行けば白梅の下りぼんゆらめく　磐城　今川とき子

○宵月夜詩にあこがれし若人が歌ならずして庭をさまよう　松江　古志絵子

○佐保姫が織りし霞をもる雨は花の笑にはさはらざりけり　愛知縣　里子

○母上に病知らする筆をおきてうつゝ心に雁の聲きく　下谷　燕雨子

○梅二ッほころびそめし圓窓に書讀む少女止すこゑもす　長府　沖子

○おぼろ月かげもとゞめぬ春の夜のけしきゆかしき櫻木のもと　下總　みどり子

○なつかしき友の玉章手に取りて眺め床かしき庭の白梅　薩南　杉野白露

○まきおひてくだる山道人も逢はず木の葉だにちれみなし子なるた　京都　信子

○青葉茂る深山の奥に時鳥一聲なきぬ月おぼろなり　宇都宮　渡邊英子

○梅が枝に啼し鶯一と聲に箏のしらべも暫し止みけり　備前　柴田琴友女

○冬の内に花吹きにけり天つ姫何時の間にやら灰まきつらん　沼津　小蝶

○かなし妹がとき洗ひがみ風によれてれぶれる如き顔にまつはる　羽前　ふて子

○長閑日に三保の海原眺むれば舟のかじとる舟子かすかに　靜岡　羽根安子

○花の野にわかずなりぬるいとし子に逐はれむみらか蝶のゆく路　飛驒　和田てい子

○薬買ひに里迄出づる少女子の道一里半こがらしのかぜ　若松　沖田和似子

○いさり火も消えて靜けき海原の離れ小島に月傾むきぬ　樋口夏月

○夕日かげほのかに殘る田圃の道を歸る小童も急ぎ勝ちなる　安房　はる子

○山にすむ小兎の眼に眞白なる雪の世界のひろきはうつれ　河内　吉川桂花女

○薪負ひて歸る山道はづるれば明星見えぬ夕の風ふく　日向　鬼塚つな子

○春の川調べもゆるく風のまにひゞく音色のあたゝかき哉　安藝　伊津美

○小鼓や月の宮居の舞姫の袖の模樣の金まき繪哉　近江　龍居富美子

○亡き父の墓に盛りたる土落ちて標に菫のかへり花咲く　下野　溪泉女史

○桐火をけ机のもとに引よせてやどの翁のひとり物思ふ　神田　中村美子

○おしなべて野は若草となりにけり去年の枯根の見えわかぬまで　陸前　佐々木千歳子

○舟下りて柳くゞりて繪日傘の日傘具しつゝ桃さく村に　神奈川　小島欧子

○なげきつゝかなしみつゝも窓によればわら屋の煙たゞ重げなり　越後　籠野とり子

○笛の根のながき春日を今日もまたすみれ摘みつゝ野邊に暮しぬ　紀伊　ひろ子

○戀ゆゑの黑髮なれば戀なくに切りてすてんと少女泣きすも　三河　花江子

和歌

○　筑後　しのぶ子
紅梅の花ほころぶる南窓そゞろに戀し北國の友

○　靜岡縣　岡村双鵲
草刈りて春の山路を歸へり來れば聲ふむばかり山蛙鳴く

○　信濃　森本みさ子
底までもすみ渡りたる里川の清き心は誰や知るらん

○　石川縣　川島きく子
鎮守の森影小さく湖に投げていよ／＼さむくいよ／＼冴えぬ

○　伊豆　無名子
鳴きやみて雨のふる日に文讀めばそゞろ戀しきふる里の母

○　下野　定形久子
水車ゆるうめぐれる川添の藁屋の軒に白桃の咲く

○　仙臺　みえ子
春わかぬわれにつげんと谷間よりお庭の梅にうぐひすの聲

○　滋賀縣　四村悦子
去年の秋湯谷の宮につかへてし君のおも影忍ばるゝ夜半

○　福井縣　信與子
霞のおくゆかしくも鶯のなく一節を笛にこめばや

○　三河　長坂よし子
古池の水は濁らず清けれどうつる月こそ臨なりけれ

○　若狭　三木よさ子
星の君桂の宮に笑みますと月姫さてもはじろふ樣よ

○　萩　花月子
情けなく庭の梅花つみ取りて香かぐはし机の上に

○　滋賀縣　伊藤豔子
わざをへてかへる賤男のかげかすむ夕日の野道ひばり鳴くなり

○　羽前　杉葉女史
雪消えて庭苔青き古寺に夜な／＼聞ゆ松蟲の聲

○　伊勢　濱出君子
いたわしき君よなげきそ通ひ路の夢にまみへん夜半もあるかな

○　たんほゝ
姉上におくらまほしや鶯のとまれる梅を其まゝ折りて

○　豐後　秋里學子
父やまつ母やまつらん五とせを旅にあかして今日歸る身を

○　飛驒　鹽谷千代子
高らかな追分節に高殿の琴奏でます姫の手たゆたふ

○　小石川　塚越歌子
山を背の十戸の村の夕霞ふく風ゆるく梅が香ぞする

○　新潟縣　千坂瑞枝子
亡き友の墓に詣づる夕暮れに雲にかゝれる朧夜の月

○　南葛飾　牧野くに子
寒梅やそよ吹く風にほころびて日毎に誇る眺めなりけり

○　大分縣　濱口女史
音もせで思ひにもゆる螢こそ鳴く虫よりも哀れなりけり

○　南品川　萬千田野里子
春の小川ふりの袂をそとぬけてうつくしまりの流れゆく見ゆ

○　本郷　春霞女
霞つゝ野末は見えず成にけりつばなぬく子の聲ばかりして

○　京都　暮る村
霞もるゝ日かげ滋む野の土くれに或は草の根ざしやあらむ

○　周防　岡部佐保子
あゝ處世戀のほのほの燃へを胸に抱きて世に堪えむや

○　茨城縣　木村千代子
胡蝶舞ひ百鳥歌ふ春の野をたどりて行けば菫花咲く

○　遠江　岩瀬卑子
何となく亂れごゝちの夕暮や入あひの鐘のいとゞさびしき

○　鳥取　山根綾江
如何わしき人すまゐすとふりかへる前ゐし家のなつかしき哉

○　越後　葉美子
逝きます日吾名を呼びてやまざりし御母の面を見る心地して

○　新潟縣　長谷川田鶴子
さとの子がしわざの小凧かゝりたる紅梅さきて春の雪ふる

○ 麹町 田中さよ子

なぶられて銀の燭も面はゆう君と舞ふ夜を春の雨ふる

○ 横濱 吉川香都子

櫻ちる浮世小路の夜は更けて亂蝶かたる化粧の軒

○ 近江 寺村いと子

のどかなる春の野山に若菜つむ少女の袖に匂ふ梅かな

○ 京都市 一孤雁女

小波をたゞすの森の夕月に緋ぶさゆりつゝ引かれ行く駒

○ 上毛 小暮たつ子

此の春や逝きし花君思ひ出すたはむれ植へし櫻の咲きて

○ イシミ たけ子

せきれいのかすめておりし夕川の岸の柳のやゝちりやまず

○ 清水町 齋藤敏子

荒浪の寄せては返す磯の邊に見えがくれにぞ飛ぶ千鳥哉

○ 奈良縣 峯山春子

うつしゑに涙のかはくひまもなしゐますがごとき母君の面

○ 紀伊 増見月子

幸もちて甦り來よと幼子の柩おくりて若き女哭きぬ

○ 近江 田中紅雨子

高殿の箏の調べの憧がれを梅が香强ふ鼻つき來る

○ 沖繩縣 安次嶺わか子

梅林泣く鶯の聲たへてかれの音淋し雨の夕ぐれ

○ 新潟縣 石黒美以子

幾千里かけへだつとも吾が心などてか君を忘るべきかは

汐干狩　大坂　醇女



○ 栃木縣 高山不二子

なき父の御墓詣でに母君といそぐみ寺の紅梅の花

○ 石狩 雪涯女

御寺の燈火寒う夜は更けてほのかにきこゆ經誦する聲

○ 遠江 常子

おぼろ夜を泣きて別れし故郷の庭の小松よ今もみどりか

○ 神戸 足立あさ子

須磨の浦かなたに見えし淡路島かちわたるべき春の海原

○ 土佐 とし子

山寺の夕べの法の聲やみて落葉にそゝぐ雨の寂しさ

○ 伊賀 山村りやう子

亡き姉の好み給ひし桃咲きぬふりよき枝やみ墓に手向けむ

○ 藤枝町 乙女

姉上とスケッチ終へて水ぐるま廻る川邊に白すみれ摘む

○ 姫路 敏子

鐘に暮るゝ上野の山の花の雲仰ぐ袂にちる春のくれ

○ 八王子 山口美代子

谷の戸を今朝出てそめし鶯の聲より漏るゝ春ごころかな

○ 沖繩 大島ふさ子

燈籠の灯消えて白梅の花もおぼろに春の雨ふる

○ 遠江 局内けい子

うちかすむ春の野道の長閑さに日の暮れゆけど宿も求めず

○ 下野 野澤靜子

ゆくりなく胸のなやみはいやましぬ桃の花散る朧月の夜

○　周防　岡本かやで
三島社のほくに掛れる蔦紅葉詣人に秋知せけり

○　岩手縣　伊藤宗枝
梅の花見んとて閣にうち入れば人來と告ぐるかきの鶯

○　尾張　菅沼あきか
彩の衣花の宴に侍りてなほ涙しぬ亡母の日なれば

○　山梨縣　盛澤美代子
笛きざむ夕の窓の春靜寂花散る空に月朧なり

○　相摸　中里かく子
境内の銀杏十丈脊立ちて古刹の秋を空に聳やく

○　青森縣　藤原千代子
うすおすお姿の白露ほのしろく海のあなたに白帆三つ四つ

○　臼杵　富士子
御酒買ひてかへる野道にたそがれて二ひら三ひら梅の花ちる

○　丹波　藤枝女史
春の宵湖廣く月清く櫻が蔭に小舟つながる

○　宇治川　清月
反古張りの圓窓ひらきながむれば梅が枝搖ぐ春の夜の月

○　安藝　蔦翠女史
春の日の靜に暮るゝ女神山紫匂ふ夕榮えの雲

○　徳島縣　若槻淑子
春の野にいでゝ遊べる少女子の摘みしすみれを胡蝶追ひ行く

○　大和　小橋きく子
君が笑櫻の花に似たる哉そが奇しきまで夢に見るなり

○　名古屋　原田琴子
駒の上の殿にめされてはづかしうた參らせぬおぼろ夜の月

○　能登　舟倉二三
春の野の遠き砧を耳にして夕榮空に鶴も五つ

○　奈良縣　増田たまの
琴の音に思はずよりし軒の端に香匂さつと梅の花散る

○　三重縣　山崎はつ子
里川の花の小舟にそとのりてゆめの胡蝶やいづ地行くらむ

○　伊豆　上原雪子
小雨ふる野路山路露わけてひとり尋ぬる白萩の寺

○　徳島縣　笠井菫子
ちりてよりかゝりてはまた流れゆく花を慕ふてゆく胡蝶かな

○　麹町　冷花女
鐘さす尼が軒端は連翹の花さかりなり月しろうして

○　丹波　吉田綾子
春の日や乙女のまりのふとそれて小猫の眠り驚かしける

○　長岡　土田哲子
風なきに櫻ちりくるまどによれば兄のいまわのことば身にしむ

○　下總　神田美智子
朗らかに歌いだかせ舞姫は花の微にまろ寢するかな

○　大阪　武田とし子
亡き姉と二人逍遙ひ眺めける淡路の島の春の夜の月

○　本郷　種川みま子
犬の聲あまりにさゆるさびしさに文よむ灯かきあげにけり

○　近江　英子
窓近かき庭の紅梅ふく風に一片ちり來ぬ文机の上に

○　神戸　今田櫻町
白百合に歌思興ある詩の小川水の流れを聖歌ときゝぬ

○　品川　矢名子
霞そふ波間に浮ぶ釣小舟眺めにあかぬ品川の峯

○　しら糸女史
竿に干すわがせが衣はるの風吹けば飛びかふつばくらめかな

○　神奈川　藤原節子
のどかなる年の初日の影さして海原千里波しづかなり

○　相模　島文子
水や空空や水なる遠海の船をかすめて白き雲飛ぶ

○　若生すみれ
亡き母がめてし朝顔咲き出てぬいざや手向けん奥津城の前

○　岩代　三浦すゑ子
河岸につゞく柳も君が黒髪もおしなべて吹く春の風かな
○　萩　孤藍女史
緋桃ちる夕の窓に只ひとり君を偲びて思ひ出に泣く
○　會津　坂内銀鈴子
我が夢は御母慕ひて乳縮る二十年昔に立ちかへりけり
○　京都　梅子
師の君を送りて歸る路すがらあはれに聞きぬ柴笛の音を
○　安房　富美子
鶯の歌の調に蝶の舞ひ菜の花踏みて花はこぼれり
○　近江　藤野白菊女
しまによき鳥の夢ゆり朝凪ははな藻たま藻の歌のせてくる
○　福岡縣　たか子
桃の花かつ散る下のすゑ風呂に少女歌誦す春の宵かな
○　和歌山　田仲木呂子
晴衣髪美しき京の娘の繪日傘紅く陽炎燃ゆる
○　加賀　舘芳香
牛追ふて蝶追ひつゆく童子の見えつかくれつ菜の花の道
○　伊勢　垣内かつ代
みやこより流れてきしか笹舟は島の靜江にわれ待ちてゐぬ
○　三河　中島磯子
春かぜよわがうつゝなき思のせて西の國なる人につげてや
○　大坂　野崎麻須子
春の水溶けて流るゝ谷川の行く手をかざる岸のわか草
○　神戸　紫峰子
菜の花や細き流れの村界ひ女二人の小遊足哉
○　土浦　佐野常代子
盛の日や埋火の如き南天に小鳥つどひて讃美歌ふたう
○　三重縣　森田初子
返し文花や薫ると封ときぬ京なる友の水莖のあと
○　京都　吉田靜枝

若戀して思出多き筒井筒汲む人なしに秋の雨ふる
○　澁谷　村田かつ子
たらちれは今宵いかにと仰ぎ見る西のみ空に星一つとぶ
○　上毛　金子春月
見渡せば春訪づれぬよう／＼にまばらなる家にかすみ棚引て
○　岩代　はる子
涙もて書きつる歌は神ぞ知らん桃咲く村の白き壁見ゆ
○　上毛　眞砂壽子
銀燭のゆらめく毎に小屏風のかげの雛君ほゝゑむらしも
○　山口　秀翠子
たちばなの蕾に色づきぬ乳母が背の少さき君は笑みてぞ御座す
○　佐賀市　中島ちか子
さびし夜を一人物あむ手をやめて月にぞかたる今日の學びを
○　飛驒　加藤亮子
父島と母島かよふ船のゆく波路のどけき海原の春
○　大阪　つゆ子
天の國はたらちれ居ます所なりと日にいく度か空仰ぎ見る
○　下野　きん子
梅の花手折りて君が光りある髪にかざせばほゝ笑みませる
○　京橋　今泉磯千島
三年振りくにゝ歸りて庭見れば香ひの花に鶯の啼く
○　宇都宮　美知子
賤が家のおくれ咲なる梅が枝にくちほつれざる黄鳥の聲
○　上毛　堀越りつ子
白露がふり積む枝を花と見て春をしるべの鶯の鳴く
○　栃木縣　瀧澤秀子
降る雨を扉によりて掌に受けて大空仰げば風薫う行く
○　茨城縣　橋本いは子
門口の柳の糸の色そめて下行く駒の足はやきかな
○　南多摩　田中しか子
れがはくば汗ふきしぼる其時に眺めにしたき松に種子蒔

○　信濃　太田はるえ子
鎮守の森かげ淡く日は西に馬士唄霞む村外かな
○　神奈川　川名かつ美
獅子のやう敵を勝てる武士も牡丹に眠る愛猫のごと
○　下野　梅澤哲子
朝霞の中の口笛雛児ならむほがら〳〵やうぐひすの聲
○　日向　まりや
歸らばやいざかへらばや淡なりて古里えてんの花や待つらむ
○　近江　溢子女史
わが君の庭に茂れる衣笠の千歳の松も色はかはらじ
○　常陸　露女史
春の朝たなびく霞を打ち分けて浪の上つたふなうたのこゑ
○　萩　澄田みき子
春きぬといふばかりにて山ざとは冬にかはらず淡雪の降る
○　上毛　秋峯女子
うすがすむ筑波はるかに春の風若菜つむ子の袖ふきなぶる
○　本所　枯野ゆり子
二十二の戀ははかなき春の夢世に捨てられし身をば恨まむ
○　熊本　豐子
櫻貝取りて孤島入日を寫つす時霞掛けけり我が手たゆたふ
○　京都　桂園子
朧夜や船に默思の興のせてのぼる野川の淡の色なき
○　越前　新保豁子
春の夜や祇園わたりの鼓きゝて夢ごゝちなるそゞろありきや
○　牛込　岡部絹子
世をすてゝ山家住居の心にも春の都は忘れざりけり
○　本所　とく子
兄弟が功勳くらぶる丸窓に鶯なきて梅の花ちる
○　伊豆　大川千枝子
春日野に霞たちこめ御社の前に額づく禰宜小さう見ゆ
○　下野　香月女

霞立つ吉野の山の櫻散る夕鐘寂びて雫の音もるゝ
○　信濃　帯刀きさへ
病む身にも櫻かざして惑みぬやがては散らん運命忘れて
○　廣島縣　靜萩會
庭に日々牡丹は咲きぬ妹はあらず思出の秋實のあしき
○　上毛　かるかや
窓によりて御歌誦すればゆく春の振袖ながし君かへり來む
○　東京　今野町子
頭掛まさぬ母まつ町は更け行けど一人かなしきひな遊びする
○　石狩　野口幸子
桃さきて磯の小家も網代木もかつて畫きし里とはなりぬ
○　神奈川　野島さと子
日うら〳〵桃の花咲くよき庭に姫君たちておうな召し給ふ
○　小田原　清水晴子
菜畑の靜かに暮るゝ黄昏をねぐらさまよふ蝶あはれなり
○　近江　松本きく子
若草もうれひに踏まば恨もたむ我やあまりに春のさびしき
○　甲斐　萩原近子
春雨の夜をしみ〳〵と物思ふ瓶の花散る灯火の前
○　横須賀　三輪靜子
君おもふ胸には涙もひゞき遠峯のさくらも餘所事に見て
○　越前　上原嘉子
都へと旅立つ兄を送る身のひとしほ淋びし朧夜の月
○　伯耆　しらなみ
東風吹きて梅の花散る夕ぐれに松の梢の風は音して
○　香川縣　合田まが子
あの頃は今はなくてときゝつるなゆきまどひたる乳母が里かな
○　名古屋　淺野米子
君ませし頃ませしなど母思ひ思ひつそゞろ衣更へぬる
○　兵庫　柳田白百合子
梅のちるその夕べなをとめ子のつくまり戀し春の雪ふる

○　印旛　小倉秋鳳子
徒らにのべにすつるもほしき哉かなりたえなる山笑の花

○　三重縣　萩原えい子
賤が家にかしぐ烟の細うしてくれゆく空に霰たたくおと

○　下野　遠井曉子
妹が流す野川の花束に疲るゝ蝶のついて行きけり

○　紀伊　三宅水仙
思ふどち打つれだちて汐干がり満ちくる汐にもすそぬれつゝ

○　岡山　玉松女史
山ぞひの家に藁打つ音のして薄夕月夜栗の花散る

○　石見　春子
たはぶれにむかしの人とよびも見ぬうちはづかしきみけしきなれど

○　芝　椎の　しらつゆ
長閑なる空に雲雀の聲もして斧の音きこゆ小山田の里

○　伊豫　佐伯友枝
年々に文の林の生茂り言葉の花の世に匂ふなり

○　岡山縣　粲雫女史
母君の逝きましてより今日幾日あはれ指輪のゆるふなりしよ

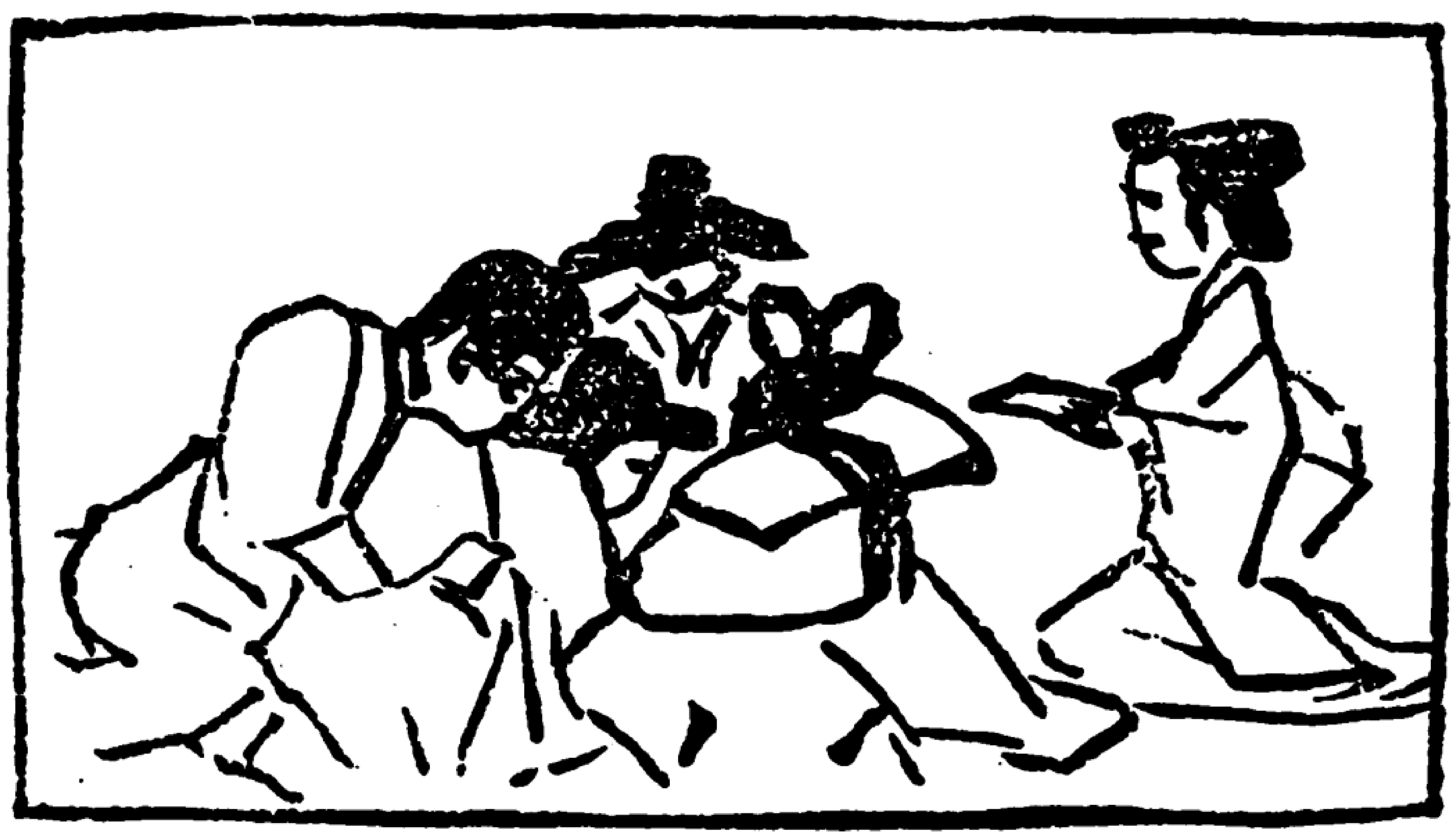
○　東京　芙蓉峰
よそへなき我身の末を如何せん草葉の露と消えて果つるか

○　みつけ　芳子
鈴の音はかすか〱にうすれつゝかすかにきゆる馬子が追分

○　三重縣　東ひさ子
たそがれの里の細道たどり行く少女の姿消えて失せけり

○　豐後　溪月女史
戰にあひし若き二人が身を投げし池のおもわに蛙しば鳴く

歌るた會　鳥取縣　今井康子



○　四谷區　松田濤子
丸窓のうたゝねの子にそとよりて[illegible]さゝやく春の夕ぐれ

○　名古屋　宮脇とし子
落椿踏む音ゆかしと若き日よ鐘鳴る院の庭さまよひぬ

○　長崎　深富朝子
新しき日影に匂ふかど松のみどりもながくつきぬ御代かな

○　紀伊　津田梅子
和歌の浦松の木の間に帆は見えて磯うつ波もゆたかなる哉

○　松山　孤蝶女
水すめる弟の池に顔寫し後れ髪梳づれば桃の花散る

○　土佐　石川のぶ子
暑さ避けて京の少女と親しみぬ月の濱邊に母なき子と子

○　山城　鈴木きく子
若藍の香ぞゆらぐらし風にさゝ波たゝす淀の川面

○　土佐　深瀬ます子
春の夜をかたりふかして行く人をくゞりのかたへおくるともし火

○　廣島　國川はな子
種子ひろひて幼遊に植ゑたりし桃うつくしき故郷の春

○　紀伊　撫子
夕雲のあなた〱へゆくかごと無限の思ひ青春のゆめ

○　神田　長井遊月子
沖の島の森のこかげに苫屋見えて海上十里弥雨のふる

○　羽前　こん子
親父の身のいはれを聞きて泣く我に悲しみそうな遠寺の鐘

○　下野　曉子
或る村や白き障子に四五人の影ほの見えて語る春の夜

○　富山縣　金光萬子

拂へどもまたふりかゝる袖の露ゆくてもわかぬ野のみちかな　近江　梅村幸枝

○むらさきの目もはる〳〵と見ゆる日にかすみ色野にむさし野のはら　上毛　惠磨子

○古宮の奇しき聖の香とゞめたる軒端に散るや白梅の花　備後　落雁子

○稲妻もれ雨滴は杜をつとふかなちごをぬらすな夜の明くるまでは　鳥取　門脇朝子

○糸をよる窓にま近きたれ柳靜かにけぶるひる時の雨　兵庫縣　平野せつ子

○賤が屋の軒の梅枝咲きにけり朝なに聞ゆ鶯の聲　松江　古志ます子

○野にそのに理想の花をつむ子らがのぞみのまゝに神あたへてよ　飛騨　千代子

○銀燭におもてそむけてはじらひの今宵を祭の君笑しき　横濱　すゑ子

○家の花のつゞく畔みちゆく駒のすゞものどかに聞えけるかな　美濃　傍島敏子

○衣更へ袖丈少しちゞめよと母のたまひて吾れ老ひにけり　京都　登志子

○嬉しげに譏さま見てる少女子の着たる衣にしつけ殘れる　八王子　野田露代子

○田の畔に豆がら焚きて里の子の掘りしばかりの芋をやく見ゆ　横須賀　加藤ぜん子

○青春の病ひに通ふ温泉道右も左も丹つゝじの花　高知縣　田内いれき

○爪びきは誰がすさびぞや軒たれし小家つゞきの春雨の町　鶴來町　はな子

○香をとめん人をこそ待て山里のかき根の花の散らぬかぎりは　鹿兒島　木下蓉子

○宵闇のほのかに匂ふ夕空に風あたゝかう花の香ながる　岐阜　谷錦汀

○書き上げし天女の姿千々にさきて若き畫だくみ失戀に泣く　長野　山田かほる

○まだなれぬ寄宿が庭の花かげにかくれて泣きぬ故里の事　備中　大山ます子

○爪琴の音も床しくもるゝかな紅梅匂ふ窓のあたりに　下總　藤崎美奈子

○歸省して門邊に立てば母上の恙なくてか機の音高し　成田　池田かれ子

○夜の戀にうかれて下りし星の子の歸らで野べにやどりけん露　呉市　桑原靜子

○君と二人たのしくかたるゆめさめて窓間にさゆる夜半の月かげ　伊勢　山川つい子

○覓の神が大手擴げて淺間山掴むが如し渦卷く烟　千曲　乙女

○時鳥血に啼く聲は故郷の我よりほかに知る人ぞなき　埼玉縣　近藤登久子

○春來ぬと告げて鳴くなる鶯にのき端の梅の笑ひ初めけり　愛知縣　宮田愛子

○なべて世の人のこゝろは濁り江のそこ清からぬものにぞ有ける　伊豫　曉子

○八重の潮路安けくこえて歸りませ白浪たかき海を瓶づ君よ　八幡町　佐々木まさ子

○春雨を小傘にうけて桃割れの杵屋を出づる人うつくしき　足利町　須永つる子

○君が代のむすぶ若水けさよりはみさをの松とあらたまりつゝ　伊豆　上原露葉子

○泣くひまに芭蕉は破れぬ野は暮れぬ何にかくれて夢をむすばむ　奈良縣　中宮よしみ

○春の野やすみれの束を枕して眠るわらべに花吹雪する　越中　北本歌子

五年の病にやつれし細き手に窓をくゞりて花の散り來ぬ
○ 秋田市 渡部春潮

森の家に秀才やこもる朧灯を窓にもらして星見るけはひ
○ 長崎市 峯時子

咲きみちし花のかつ散る下影にたゞずむ人の美しきかな
○ 岩代 富和子

春雨にやなぎの綠搴すゑ硯にうけて繪筆そめけり
○ 大分縣 江口榮子

糸績ぐ媼は眠るまたつむぐ緋桃花咲く南の窓
○ 出雲 白すみれ

名にしあふ黒かみ山に風起り十里のふもとふぶきうづまく
○ 大阪 川島愛柳

川原の清き流に枝たれて姿やさしき岸の青柳
○ 小石川 嬰子

姫たちは扇かざして嵐山の花見ておはす夕日の中に
○ 日本橋 原田仙子

小搖らぎの帆影そめわく小波に夕陽緋なり白桃の須磨
○ 甲斐 槇内さやか

花の時君と別れてまた花の時は來つれど君は來まさぬ
○ 麹町 山下いそ子

朧夜や舞子四五人鼓とり舞ふなる方に櫻花ちる
○ 越後 保坂ひろ子

白馬金鞍まみはづかしき公達のみどりのきぬに花ちりかゝる
○ 宮崎縣 濵砂まさよ

霞立つ夕山低き野の里に未だ春なれぬ叢ぞなく
○ 西多摩 森田志満子

ひな賣りの小唄は遠く消えうせて馬のいなゝく春の坂道



ひな樣
小車女

○ 下野 鳳子
もゝ草のもえ出したる春の野に胡蝶追ふ子の姿うつしぬ

○ 信濃 なでしこ
明の鐘山のあなたに音きえて馬子のひな唄野邊に響きぬ

○ 播磨 小泉愛子
のがれ住む草の庵もなかなかにむすびなれては樂しかりけり

○ 石川縣 川島きく子
數ふれば早五年を旅の空に我が業ならず父母老いましぬ

○ 陸奥 柳田きさ子
賤が家も門の柳の糸たれて鶯うたひ春は來にけり

○ 岐阜縣 奥村雅子
うつり行く世はさまざまにかはれども月の鏡は同じかりけり

○ 上毛 粟苑子
春がすみいつたちそめし櫻花岸の柳のかげ見えぬまで

○ 紀伊 津田眞佐子
眺むれば戀し故郷の大空に鳴くや愛らし時鳥かな

○ 越中 五十嵐美波子
姉君と梅薫りなる庭に出て語らひ居れば月は昇りぬ

○ 熊本縣 緒方惠登子
常に逢ふわが友ながらことさらに嫁くと言ふ日のなづかしきかな

○ 上總 十六夜女史
姉よ涙かくし玉へな此宵をかぎりの母やまどひますらん

○ 岡山 坂東須美子
學び舍の垣根に香る白桃の花散る頃や我業卒へぬ

○ 靜岡縣 藤本靜江

霞む夜や淺間に咲ける梅の花下を流るゝ水に寫れり

○　京都　松井靜枝

花散りて人はきたらず吉野山青葉がくれに郭公なく

○　松江　長野とく子

妹のかたみの指輪小さけれど試みはむる春の夕暮

○　たけ子

託磨野は菜の花日和今日もまた阿蘇の遠鳴り寢て聞いて居る

○　相摸　守屋花笠

細雨や土橋越えむの蛇の目傘此方向かずや歌がたりせむ

○　滋賀縣　坂八重子

我が思ひ賦紅の花のそれのごと燃ゆらむ思ひ胸に秘め置く

○　秋田縣　佐々木貞子

暮れぬうちに歸らんものといそげども今日も野寺の夕鐘なりぬ

○　瀬戸津　金糸子

雨の日も風の夜半にも思出ていましゝ昔しのばるゝかな

○　大阪　花の里

山里の荒れ家に咲ける白梅の見るぬしなきに何をほゝ笑む

○　宇都宮　芳野靜子

君ゆきて惡にしづみ寢もやらぬ瞳に似たりしのゝめの星

○　渡島　工藤以津子

淋しうもひとり摘みぬと病む友へまゐらす籠の初若菜哉

○　京都　松井星水

夕暮ん櫻散るなり庭の面はたゞ靜かなる春雨の音

○　成田町　三枝

三年ぶり里に歸れば我が家の庭の柳に小鳥巣くひぬ

○　萩　かをる子

蝶まへる菜の花畑の其末に古き寺あり姉のはかあり

○　日本橋　ほたる

住捨てしこゝや垣根の跡ならん昔のまゝに菫花咲く

○　桐生　宮川滿津江

春の野に花里寫す筆止めて耳をかたむく鶯の聲

○　周防　嵐子

久方の春をも待たでまだき咲く南の窓の紅梅の花

○　芝　高木花枝子

沖遠きはれな蹴場の芝の上にかげうすれ行くありあけの月

○　和泉津　田涙子

消しかと思へばまたも涙の間に影あらはるゝ海士が漁火

○　佐世保　藤村しな子

紅梅の薫れる宿をたづぬれば門守る犬のあやしみて吠ゆ

○　茨城縣　仲田百合子

うすがすみたなびく春の夜なりせばいづる月さへおぼろなりけり

○　牛込　千秋鈴子

ながむれば初春風の身にしみて目をいたましむるふるさとのそら

○　大阪　松家華子

かへり見てそれと言はんは餘りにも稚かりきよ美しき夢

○　神戸　杉山とし子

繪日傘に糸遊からむ桃日和ゆるき流れに若鮎のぼる

○　上毛　金子春月

谷つゞき白梅咲きてさながらに深山に白雲棚引と見ゆ

○　兵庫縣　野間ひさこ

ひばりなくこゑばかりにて大空はすがたも見えずかすむ頃かな

○　相摸　和田くに子

谷を出てまた谷に入る箱根路や霧しげき谷に鶯ぞなく

○　靜岡縣　竹泉子

思ひわび西のみ空を眺むれど山を隔てゝかたゝよりかな

○　東京　柴野かつ子

ところ〳〵花咲く藁屋ほの見えて霞こめたり王子の村

○　弘前　福井松江子

父はうせ母は世を去りそが姉は幼子つれて里に乳乞ふ

○　明石　きよ子

深草の里の朝ぎり深ければ乳母が茅のやまだ見えもせず

文藝遊戲　女子新聞　第二

株式募集廣告

目的　本會社は吾等の有する性格及事件を小説家に貸與するものとす

前途　文藝の發展と共に吾等の事業は有望なれば配當の多大なるは疑ふの餘地なし

申込　申込をなさんとするものは十行二十字の原稿紙を證據品として送附すべし

制限　貸與は作中の人物に限る
委細は定欵を見るべし

發起人
間　貫一　宮　さん
川島武夫　浪　さん
高濱　勇　君　江
創立委員長　伊豆熱海々岸　荒尾讓輔

作中人物株式會社
創立事務所
（電話詩番）

（懸賞當選、駿河、大倉京子）

落苗廣告

無代分與（一人一本限り）

右は私此度女學校卒業祝の紀念として廣く世上の歸女子様に分與仕度候、此の蕗は世の珍品にて莖の長さ八尺葉の周圍二丈五尺全く靑き大傘をひろげたる如くに候されば女史達の相合傘には尤も結構と存じ候但し莖は食用にも相成候

秋田名物

秋田縣平鹿郡里見村
佐々木園子

廣告

私事三月壹日、周防岩國錦帶橋より東京京橋間を步行中梅月と彫刻しある實印紛失候に付御拾得相成候御方様には御禮として月刊雜誌女王を一ケ年分差上申可候也

五月一日　梅月

（山口縣、河本梅月）

好評嘖々！

鶯宿梅主人著

辭典界の大王　ホーホケキョ會話辭典

縦八寸横五寸二分（定價金八圓五錢　郵税二十七錢）
紙數七千七百八頁（特別減價三圓）

本書發行以來玆に五年發賣册數實に五十萬餘部の巨多に及べり以て如何に本書が學界は歡迎せられつゝあるかを知らに足らん

發行所　東京小石川區董町二番地
霞ヶ堂書店
郵便振替貯金口座二〇番

（遠江　竹葉女）

懸賞さがし物廣告

昨夜半突然吹き入りし寒風の爲め燈火消え失せて同時に側にふせりし弟子の姿見えず相成り候就いては若し似よりの者を御みとめの方は下名迄御通知下され度御禮としては少々乍ら金三圓差し上げ申すべく候但し殺たるまゝにて夜具も顔もすべて暗色、頭の大さ直徑一尺程名を影法師と申し居り候

幽草庵主靈信尼

（信濃　花園守）

孫薫儀

昨宵鉢植の寒紅梅の枝振よき下に散る花の一ひらと永き眠につき申候此段生前辱知諸君に御通知に及び候也

追て葬送の儀は目下相談中に付其内折を見て又女子新聞の上にて御知らせ申べく候生花造花等の御寄贈の儀は遺言により山程にても御遠慮なしに御受け仕る可候

明治四拾年四月一日

祖父　田舍萬吉
親戚一同

（羽前、香澄）

言說

農村處女會の必要

處女會は其名の示す如く、未婚婦人の會合であつて是が設立は刻下の急務である。

現今農村に於ける女子教育を見るに其父兄は女子は學問を學ばしむるの必要なし慾ろ技藝を熱達せしめて家庭の助けとなさしむべしと言つて多くは小學中途にして已に退學せしめ裁縫活花を習はしめんとて一里も一里半も遠方へ通はせる習慣がある、之等は却て往々神聖無垢なる處女に惡風習を教ふる場合が少なくない、故に吾人は此處女會を開いて特に女子に關する有益なる講話を聞くの必要を認めるのである。

て本會毎月二三の例會を開き時には高德ある僧侶の宗敎談を聞かしめ時には學識ある醫師の衛生演說を又時には警察署長の風紀演說其他農業講話女子道德家政學業の大要を聞かしめたならば農村婦女子の爲め又は一家の主婦となつてから大に効力があろうと思ふ、吾人は本會が各地に設立されることの一日も早からんことを欲するのである。（相摸　登志子）

月界電話

○かぐや姫の演舌　かぐや姫は去月十一日の月界文藝同好會席上に於て日本に關する長時間の大演舌を試み滿場拍手喝采聲裡に降壇せり、内に石作、車持の皇子などの人物月旦最も面白かりき（山口、うさぎ女史）

臺所電報（十日發）

○ねずみの暴動　臺所において昨夜五六匹のねずみ大そう暴れお皿二枚茶碗四枚を破そんしたれば今夜は藥團子の速射砲を以て主暴者を擊退せんとて臺所は大さわぎなり（廣島縣、今西初野）

學校界

▲入學生携帶用具　松本女子師範學校へ入學する生徒携帶品は、文房具一式、かいまき、ねまき、針箱一式、櫛箱一式、齒磨楊子類、毛帽子、蝙蝠傘、行李、前掛、襷、諸木綿、上草履、エビ茶木綿袴、隨意參考書籍、等を携帶すべしと、但し敎室用衣服は筒袖木綿たるべく各其所有物には記名し置く以上が四月入學する生徒の帶携用具だそうです（懸賞當選、長野縣なてしこ）

▲村の學校　私の去年まで通學して居つた境野小學校は桐生町の南につらなつて居る境野村の中ほどにあり縣道をまがつて西の方へ行くと裏門の所へつきますそれをはひると南むきに舊校舍があり前に新校舍が横たはつて居り其の南に五十間四方の運動場があり内に女子男子のテニストコウトが三ツある周りには多くの植木をうゑ去にし春らんまんとして咲ける櫻桃の花の内テニスして日も廣澤山に沒せんとする頃かへつた事もあり木々の間には村人のきふしたシーソー海船ブランコ流動丹木などすへてある又この間行きましたら植物園が出來いろ〳〵の草花が植てあつた（群馬しおり女）

▲梅花女學校　女子敎育の爲に設立せられたる女學校は大阪西區に位せる梅花女學校が第一でありませう此校は明治十一年に創立せられ、英語敎科書は一切米國より取寄せ生徒をして、語學研究に進歩を與へると言ふ事である、程度は高等小學二年又は三年を修了せし者は本科一年生又四年を卒業者は本科二年何れも無試驗と言ふ事です、（大阪、東柳子）

○會一束　▲白百合會　同會に於ては近日、本町中教院にて、歌合會相催す由會日は未定▲記者歡迎會　昨日來縣の女子文壇記者歡迎會は、本日午後二時より、藥倶樂部に催す筈▲女子文壇誌友會　同會は誌友臨時大會の件に關し、去る九日正午より沖幹事の宅に、委員會を開き協議する所有りたり▲柴笛會　第二回親睦會を明後日午前十時より風月樓に開く、余興は福引活人畵等なりと云ふ。（土佐、潔子）

短評

▲よく皆さんが繪はがき交換などを誌上にかゝげますのに、男の方は「おことわり」などゝ書てあるのを見ますが妾には何故此樣なことを書くのかが理解しかれます▲男女の交際必しも惡いとは言はれますまいいわんや繪はがき交換に於てをやです▲妾はかへつて疑ひます男と交換を厭ふ人、心中には一種の卑しい考がひそんで居るのじやあるまいかと▲かく言ふたとて強ひて男に交際を結べとは言ひませぬ。只男だとてせつかく送て下さつた方には返事位したがよいでしよう、と言ますのです、妾は男の方にも返します（群馬縣、星野みれ子）

今中將

大和宇陀郡室生村雲雀山なる室生寺は中將姫の古蹟として名にし負へるが「今中將」の名更に噂を添ふるにぞ、記者一日之を探る。まづ出て來れるは四十恰好の尼樣。彼一句之一句語を交はしけるほどに、音もなく唐紙開きてしとやかに顯はれたる、之ぞと記者はハッとしぬ。更に一目してまばゆき人なるを知りぬ。墨染の袖の神々しき十四五歳の嬋娟たる小尼の茶菓をすゝむるなるを知りていたくも驚き入りぬ。之やても中將姫の再生か！美はしさよ、愛らしさよ、爭て俗人とは生れざりしよ。小尼の去るや否や、いかなる身の上ぞと問ひ出づるに「お見かけの通り彼の子は萬人に勝れた眞の美人でございます。畏れ多いとてございますがホンに中將姫樣の御再生かとも存じますッイ此隣村の者でございますが兩親は小野小町のやうに此子の爲に世間に罪を作らしてへ……と親子泣く〳〵髪を切つたのでございます。」記者は他事を忘れて唯々泣きぬ。吁今の世にも斯る物語めきし事の殘れるは、流石に邊鄙なりと思はれたり。（大和、押花かをる）

◎少女の潔白　去る十二日茨城縣新治郡志筑村櫻井某の長女とみ子（十三）は例の通り同村の小學校に通ふ道すがら金拾圓入拾壹錢入りたる紙入を拾ひたるより同村の派出所へ屆出たる所へ同村字堺村村上由造と云ふ者が落せし由を屆け出しより其場にて成規の報酬を與へんとしたるに聞入れる樣もなければ同小學校の教師に依賴せしもかたくいなみて受取らざりしと（茨城縣、日下部千代子）

◎泉水地方の洪水　先日來の大雨にて庭の泉水の水は非常に滿ちたり、それが爲め三月上旬より建築に忙がしかりし蟻の連中は去る廿五日漸く建て上りたりとて其夜皆々穴の中にて大賑ひ夜更くるまゝにそれ〴〵樂しく夢路をたどる折しも水は不意に浸入し來り無慘にも彼等は悉く溺死せりと翌廿六日朝雨は全く晴れたり小庭警察署長淸は大いに驚き多くの人夫を使役して熱心に其の死骸を掘り出だせしが廿七日調の報によれば溺死者千六百六十六人の多數なりしと（筑前、波子）

◎女學生の頓智　昨日記者が電車にて某所に行かんとする車中に美くしき女學生腰掛ん場所なき爲立ち居りしが今迄場を廣く取り居りし角帽に向ひ今少しく片寄りて掛させ給と頼みたりき角帽は其美人なる爲にや直ちに席をゆづりしが美人は己の後に立てる老人に其席をゆづりて前の如く立ちてありき（山田いな子）

◎鼠の婚禮　子爵大黑家の家令、物置忠兵衛父子は、至極忠實者の由なるが、その子息忠義（廿三才）は兼て米國へ留學中の處、去る三月首尾よく月桂冠を頂いて歸朝せしを幸に、今回主家大黑家の仲人にて、同家扶なる臺所忠左衛門の長女忠子（十八才）と來る五月五日の吉日を朴し物置家、大廣間にて盛大なる結婚式を擧行する由なり因に記す、忠子は東京第一高等女學校出身にて、秀才の聞え高く絶世の美人なる由、記すだに目出度き話しならずや（飛驒、あやめ子）

話の種

世界最小の鐵道

福井縣丹生郡吉野村余田片山千里が單に自己の遊戯として其書齋に布設したる鐵道は、世界に於て最も小さきものと云ふ可し、線路は古洋傘の骨にして、機關車も客車も貨車も罫用紙を以て作りしものなりと云ふ（福井縣秀美）

演藝だより

三月一日催されたる春野座の音樂會は先づ霞染の垂幕が揚ると舞臺一面若草織の絨氈を敷詰め燕環の洋琴に駒鳥翁の追分次がせゝらぎ女史の獨吟て中入に紅梅餅と櫻湯の饗應お給仕は蝶々髷に藤袴を穿て出る最後に雲雀太夫の一座が餘興に宙乘りを演る筈と雁君の案内にて極めて大入なりし（懸賞當選、伊勢紅女）

小説

うつし世　あきつ

おとづれ（二）

「まあ好い聲ね」

春子は編物を持て椽側へ出た。椽側には楓と槇とが入組んで影を投げて、其頭端の方が障子にも寫つて居る。有乎無乎の和かい風が白梅の香を運んで來て、淺黄に澄んだ空が拭つた樣、一片の浮雲もない。街の鶯がどよみも聞えず閑寂の天地に、時折、一聲、二聲。

「何て好いお天氣でせう」。

と春子は日向ぼつこし乍ら日影を仰いだが、其淸しい眼を細めてちらちらと眩しそう、途端格子戸が開く音がした。

「おや誰か來た樣ですれ」。

と姉を見返る。

「そうれ、今開いた樣れ。」

と友子も其方を見遣つた時、小さい足音荒く馳けて來た、

「姉さん、お客樣だよ」

と龍男が小さい名刺を出す。

「妾の所へ？」

受取て一目、忽眉に曇りが見へた。

「何樣な人、女？」

「奇麗な姉さんだよ。」

と目をくりくりさせる。

「ではれ、龍男さん居ないつて斷つて頂戴な、れ、可くつて」

「居ないつて？」怪訝な顏。

「えゝ居ませんつて、名刺を返して」

受取ると龍男は馳けて行く。

「春樣、誰？」默つてた友子が聞く

「え、お友達なんですけれど！」

何氣なく云ふけれど、顏嶮い。

（懸賞當選下谷、太田樂子）

川柳

丙午やつと○免れて安産し　伊賀　りやう

すり用心○時計に汗をかゝせて居　磐城　かも子

知りつゝも○態と女に道を問ひ　備中　有情女

女子新聞○兎角男が讀みたがり　宮城　徳枝子

息をつく○人形なども陳列し　東京　廣小路

女曰く○三號館にて氣絶せん　赤坂　かよ

卒業證○手に入れるまで一苦勞　筑紫　才女

郵便の○來る度胸がどき〳〵し　大坂　あさ子

新刊紹介

○詩集『金牛宮』　詩文堂

○『もやひ舟』後篇　同

○女王一卷ノ三　世界之女王社

○少女新聞　其社

○天才文壇二號　光明堂

○讀書界　月報社

（東京、好女）

天氣豫報

雨降り申候

天氣にては御座なく候

但し每日通用　（新左）

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○野の戀

岩代國鷲巢　優女史

秋の野の小川の岸に、いともやさしく咲き出でたる桔梗、女郎花。あゝ艶なる君よ、あな清き人かなと、彼等は互に戀ひぬ、されど中を流るゝ小川に隔てられて語るを許さず、彼等が姿日に窶れぬ。

かくて幾日をや經にけん、一夜痛く野分の吹きて、雨さへ加はりしかば、戀にやつれて色あせし桔梗は、遂に堪へずして花先づ落ちぬ、つゞいて女郎花も零れぬ、されど未だ互に知らざりき。

翌る朝、流れ行く桔梗はなつかしき彼の君に、餘波を惜まんとて、振りかへりし時、女郎花の浮きつ沈みつ、流れ來るを認めき、桔梗は歡びの聲を上げて叫びしかど、水の音は、そを打ち消しつ。

泣き悶ゆる桔梗のありとも知らで、女郎花は戀しき方をかへりみつゝ流れぬ。

かくて互に戀は成らざりき。

〔評〕互に相思うて知らず、同じ流に散り果てゝ尚ほ悟らず、悲しからずや、此篇儚く哀れなる戀を描く、僅に十數行、語短くして意長し。

秀逸

○なみだの春

牛込　千秋鈴子

昨日と暮し今日と明し、流れて止まぬ月日に、去年の山、去年の水、さながら春立ちかへり、花咲き鳥なきて、人はおのがじゝ謡へど舞へど、さても淋しき我が心かな。

かつては人の持つなる母君の、我れにも在して、風柔かにうす霞む、野べ山べ、若菜や摘まん蕨や折らんと、連ぬる袖のふりもよくあくがれ出でけんも、思へば去年の今日此ごろよ

露の世はつゆの世ながらさりながら、思ひかけきや、天地に人とたのみ參らしゝ母君の、はかなくならせ給はんとは。四十路にも足らはぬ御齡、すこやかに見え給ひし御姿に、今日の心をなどてか思ひ設けんや。あはれ昨日にかはる人の世の、あまりといへば情なの運命や、花よ鳥よ、など咲くなどなく、さだめなき身を永らへて一人泣くべき我れに、春も何せん。

戀しきかな母君、なつかしきかな母君、在りし昔の俤のさてもなつかしさよ。うきねの床の夜な夜な、夢に御かたはら近う語らへども、現に見る寫しゑの、影さへおぼろげになりまさるぞかなしき。

早く父君に別れまゐらしゝ身も、母君の在して、さりともと慰められしが、あはれ思へば仇なりけり、世に長からぬ御命と知るに由なく、ひたぶるにたのみ參らしゝ事のくやしさよ。一人行くべき旅路かは、などて妾をも伴ひては給はざりし。

父君逝きて母君去りて、一人の同胞だに持たぬこの身一つを、たれにか寄せて涙求めん。かの明星のかゞやくところ、かの銀河の流るところ、そこに何の慈みかある、春よ來れ春よ去れ、秋よ來れ秋よ去れ、春秋幾年か經べき人の命ぞ。あゝ背きはてたる世の中に、むすぼれとけぬ胸いだきて、うつし世の波にたゞよはん、我が身の行く末、さても思はるゝことよ。

（評）「春くれば散りにし花も咲きにけり」

○形見（守雄に代りて）　紀伊　文子

今宵もまた我はいくそのなやみと疑惑とを抱きし胸を慰すべく、怒れる波濤の上幾丈の窓によつた。上絃の月は中天に登つて淡く、我が廻轉燈の强き光と合して、銀波の上を照らしつゝあるよ。

彼の椿事あつて以來七日。

毎夕此處に冲を見渡す事の淋しき身にも樂しき樣におぼえて：：：：：：：。

今も今、彼女が乳母の手より受けし、彼女まどか子がかたみの此の書、此世の名殘に守雄樣へ亡き數に入らんとして圓子、となつかしき水莖のあと、其華かなる面に似て美しきを一眼見ては、いかて此胸を躍らさずにをられよう、いかていかて此血汐もえずにをらうぞ、戰く手に封押しきりて、讀みゆく文字ひし／＼と身にせまりては、いとゞ悲しくもの狂ほしき心地ぞする。運とは云へど命とは云へど、あまりと云へば儚き夢ならずや、かつては親に許され世に許され、まゝ事よささ舟よと遊びまはりし幼き昔より、結ばれてし緣の糸の、とくな、とかじと、未來に大なる希望を抱き、束の間も忘れざりし中を、魔の手に裂れて以來二とせ、此の島にうらぶれ果てゝもなほ忘れがたきは、彼女が面影鈴の如き眼、月形の眉、何として忘られよう、小

雨そばふる夕、月清き夕、行く雲に行く雁に、そゞろ昔を偲びては、よしや學士の冠はあらずとも、幸に世に活きずとも、名譽も希望もすつるとも、此の胸の煩悶を彼女に慰藉さるゝを得ばと、甲斐もなき空想にふけりしも幾たび、成らぬと知りてなほ思ふ愚しさ、思ひ絶えなんとして中々に、えたえぬ此の胸の、さても切なや。

若しやくと我が疑ひしに違はて、彼の夜の事は、親が切なるすゝめのもだし難く、我への操立てんとして、あたら十九の花の盛りをうたかたの、あだ浪の花と散らして、あくまて此守雄が妻として逝きし彼女が心いとしともいぢらしや、「死なば同じくはおん親ら點じ給ふ燈の光照る波に沈みたくかくてぞ舟路を選み候」とは彼女が形見の書の言葉如何に優しき心ぞや、優しき彼女の心は、非情の親と一ならんとは思はねど、許し合ひて裂かれし中ながら、榮華に眼くらみしかと、我ながら女々しと思ひつゝも、恨みし事もありつるを、今彼女が心の底に秘めし眞を知りては、我ながら恥かしう、身もよもあるにあられて、わびてわびられ手を把りたき人は早此世にあらず、わけて悲しさは死出の旅路の其供を、快く諾ひてし舟子六藏が胸、いかて泣かずにをらるべき、我が父母とは絶ちがたき好誼ある誰彼すら見返りもせぬ此の我に、厚き同情を寄せくれし彼と思へば、胸迫りて泣く涙枯れむばかりに……………。かくて我胸の疑惑はとかれたれど、吁、我はいかにして哀れなる忠僕六藏が靈を吊ふべき。

圓子其人よ、此の世の緣こそ短けれ、又の世にては必ず必ず夫と呼ばれ妻と呼ばなん、そを我が樂しみに、此の戀の形見をいだきて、我がために身を捨てし圓子、主のために命捧げし六藏二人が靈を、我が點ずる火光に吊うて、天命を待たん哉。

（評）燈麗守、守雄が苦惱を描けるもの數篇ありしも、皆採るに足らざりき、本篇亦群を抜けりとにはあらざれど、幸に落付あるを以て、收めて「疑惑」の大團圓とす。



卒業式　大坂　瀧本加壽尾

○ヴィオリン　靖國祠畔　あくがれ人

どこをたゝいたらば、人を魅する、絹を裂くやうな高調の、ふるひを帶びたあの音が、出るのだらうか、どこをたゝいたらば、愁人の忍び泣きのそれのやうな、低い哀れなあの音が出るのだらうかと、私はかつて美代さんのヴィオリン持つ手を疑つても見た。

時は秋の暮て、見渡す限り茫々とした、道も亂れて人

も通はぬ芒野の果さして、ヴィオリン肩に、天なる樂と思はれるばかり、右手を長く引いては、轔轢と岩に碎くる浪の音の如く、颯々と松の梢に渡る風の聲の如く、奏て奏て、天を仰ぎつゝ、しづかに分けゆく、美代さんの姿を見たと、里の童はいつたが、その翌日、野の草つゞき町へ花賣にゆく少女の急報によつて、私は初めて美代さんの死を知つたのである。半ば疑ひ、半ば信じつゝ、草をふみ、芒を分けて、人なき野邊の奥に馳せついた時は、あゝ野の古井戸に、悲しい美代さんの亡骸が浮び上つてゐた。美代さんは、かつて戀を失つた涙の人て、只もう世のつらいのをかこちながら、ヴィオリン抱いて、暮らして、ゐた美しい樂人てある。秋ふけし野の、星影うつる底深き井の水に、白いむくろを横たへた美代さんは、自ら若い生命を葬むつたその面には、些の苦悶の影も見えぬ。古井のわきの車の上には、朝夕抱いてはなさなかつたそのヴィオリンが、おかれてあつて、淡い夢見るやうな野夕顔の花びらに「このヴィオリンは、小名濱の浪に投じてたまへ」と、薄墨の色もはかなく、書かれたのが、半ばしほれたまゝに、そへられてあつた。野を出はづれて、十餘町、そこは狂瀾怒濤並ぶものなき太平洋の絕岸小名濱である。

私は、そのヴィオリンをしかと抱いて、巨きな岩の上につゝたつた。松は吠え波はおどりて、百萬の白鬼、巖頭にあらはれ、世を咀ふ若人のおたけびかとばかり、天と相打ち、雪と亂れ、花と咲く。から、手に小弓をとると、私は今、その浪に投げんのヴィオリンを、左の肩にさゝへて、怨多き悄な曲を奏てはじめたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

曲半ば、胸迫り、涙流れて、私は引くにたえずして、つと小弓をとめると、あわたゞしう響を發して、しつとりとした浪のしぶきに、三絃はポツリと斷れた、私は、右手にもちかへると、小弓をしつかりヴィオリンに、白いリボンで結びつけて、ぢつと眼をとぢたが、はら〳〵と涙が頰に傳はつたのである、袖てはらつて、思ひ切つて、私ははなしがたなのそのヴィオリンを、浪に投げた、と、幾尋あらう、底も知られぬ海原の、みどり深い波は、惡魔のやうなかしらをもたげて、ヴィオリンをのんだ、二間三間、波のあなたにつと浮んて流れたが、又見えなくなつてしまつた、波はざぶんざぶんと、寄せてかへして、かへして寄せて、…………。

あゝ私は、岩の上に伏して、さめざめと泣いたのてあつた。

（評）幽玄なる筆致の、何處にか人をひきつくる力はあれど、餘りに飾り過ぎたるきらひあり。

○彦星

河内 吉川文子

いて我こそは、かたはしより、星の宿りを討ち平げ、尊き星の位を得て、星の國をうしはく大君たらむと、去年の一夜の星の紛れに、馴れし宮居を逃れ出てし彦星の君は、代々相傳の重寶たる、星の兜をおし戴き、星鹿毛の名馬に打跨りつゝ、途すがら、あるは星の林の寢鳥を驚かし、あるは野澤に眠る星貝五位の夢を破り、東海の濱には、名に立てる星貝の美味を味はひ、南海の磯には、音に高き星鰈の甘味に飽きつ、かくて遂に、二十八宿をこと〴〵く討ち平げて、ことし文月六日のつとめて、星明りやうやく薄れなむとする頃、國たみの心からなる頌歌に迎へられつ、めでたく凱旋したまひぬ、かくて戰勝を祝ふ宴の莚には、國色無雙なる舞姫の幾群れ、綺羅星の如く立ち並び、やがては咲かむ星見草の、白黄こきまぜたる綾羅の舞袖、これや天津乙女の立舞ふにやと、心も空にあこがれなむとす。かくてその日もいつしか暮れて、星を戴く頃ほひともなれば、はや星合の空打明かりて、鵲の橋今しも打渡されつ。勝ほこりたる彦星の君と、脊子が歸りを待ち焦がれたる織女とは、さらでだに嬉しき、年に一夜の逢瀨の契りいと濃かに、天の川原の水音も、ことほぎの曲を奏づるかと覺し。

（評）二十世紀の七夕。

○おちば

相模 土筆子

十二月六日でありました。思ひ出しても口惜しく、又恐しく、其夜の樣があり〳〵と、目の前に浮びます。御母樣とても餘りな、如何にお氣に召さないとて、今日の御叱り樣は、餘りと申せば御無理お情けない、今迄は、何の樣な事が有ろうとも、一度嫁いだからは其外に家はないぞ自らも決して歸るまいと、心に誓つて泣いて怺へて幾度も、鐵面皮しい程、出て往けがしの御仕打も、じつと怺へて居ましたものゝ、今日と云ふ今日こそは、夫に迄あの樣な……私はもう到底も怺へられませぬ、今迄もつたいない程、あの樣に常に優しくして下すつた旦那樣、有難くて〳〵。けれ共もう之れ限りでありまする、旦那樣、私は一生を獨身で暮します、殘念ではありますれど、之れがお別でありまする、何卒御身お大切に、お達者に、之れがお別で御座います、御名殘惜しくはありますれど、之がお別れでありますると、不覺にも泣き臥した時、時計が何時かを報じたと思ふと、頭がぽつと逆上し其儘家を忍び出たのでありました。

村を通り拔ける迄人にも逢ず、一と山越せば後を一と山、追手が來るかと思へば、落葉の音にも氣を置かれ後振り返り、ふり返り、夢中になつて走れば、長き山路もはや半ばと思ふ頃、往く手遙かに人影を認めた、

何を考へる間もなく、傍の樹蔭に身を寄せて、待て共〳〵、待つ事が餘り長かつたので、遂氣怯して北風に騒ぐ枯葉の方を省みると、ぞつとしてはや、逃げ出さずには居られなかつたのである。

山も遊き樣として自らの、はしたなきを自覺した時、又も人影が動いた、思ふに月の光に小松などの、かりにさう見えたに違ひない、臆するからだと、合點して驅け出せば、黒影は次第に大きく、終に疑ふ可からざる人となつた。

けれ共最う間に合はぬ、避けられぬ、儘よ此儘、若しもの時は此と、手を懷ろにして、晝より用意の剃刀を、固く握つて近づいた。

月が雲に薄暗くなつた時、丈高い男は通つたのであるが、私は平氣を裝うて、行き過ぎたのである。

振り返り乍ら一と息して、無事を知つた時、言知らぬ恐しさが身を襲うて、思はずも立ち悚んだのである。

木摺れの音や、寒鳥の羽搏きに、幾度か胸を躍らして、漸く村の森を認めたとき、細い土橋も走り渡つたのである。

氷る手足の痛いのに氣が附けば、自分はいつか故家の門入つて、せくまゝ強く、戸ぼそを打ち敲て居たので、内より太く、誰だと戸を開けて、美代か?! 何した?と云はれた御言葉に、張りつめた心の急によわり、思はずワッと許り泣き臥した。

月は白く澄んで、夜は深々と更けて居た。

（評）戀しき思を懷きての夜道、女らし。

○梅の香

上毛　花波池女

梅香迫る窓の下に、妾は新聞紙を抱いて、入學許可を喜ぶと共に、また去年の夢の、胸に浮び出てゝ、一年以前の妾と一年以後の妾の身の上を思ひ比べて、獨り笑みを禁じ得ぬのである。

＊　＊　＊　＊　＊

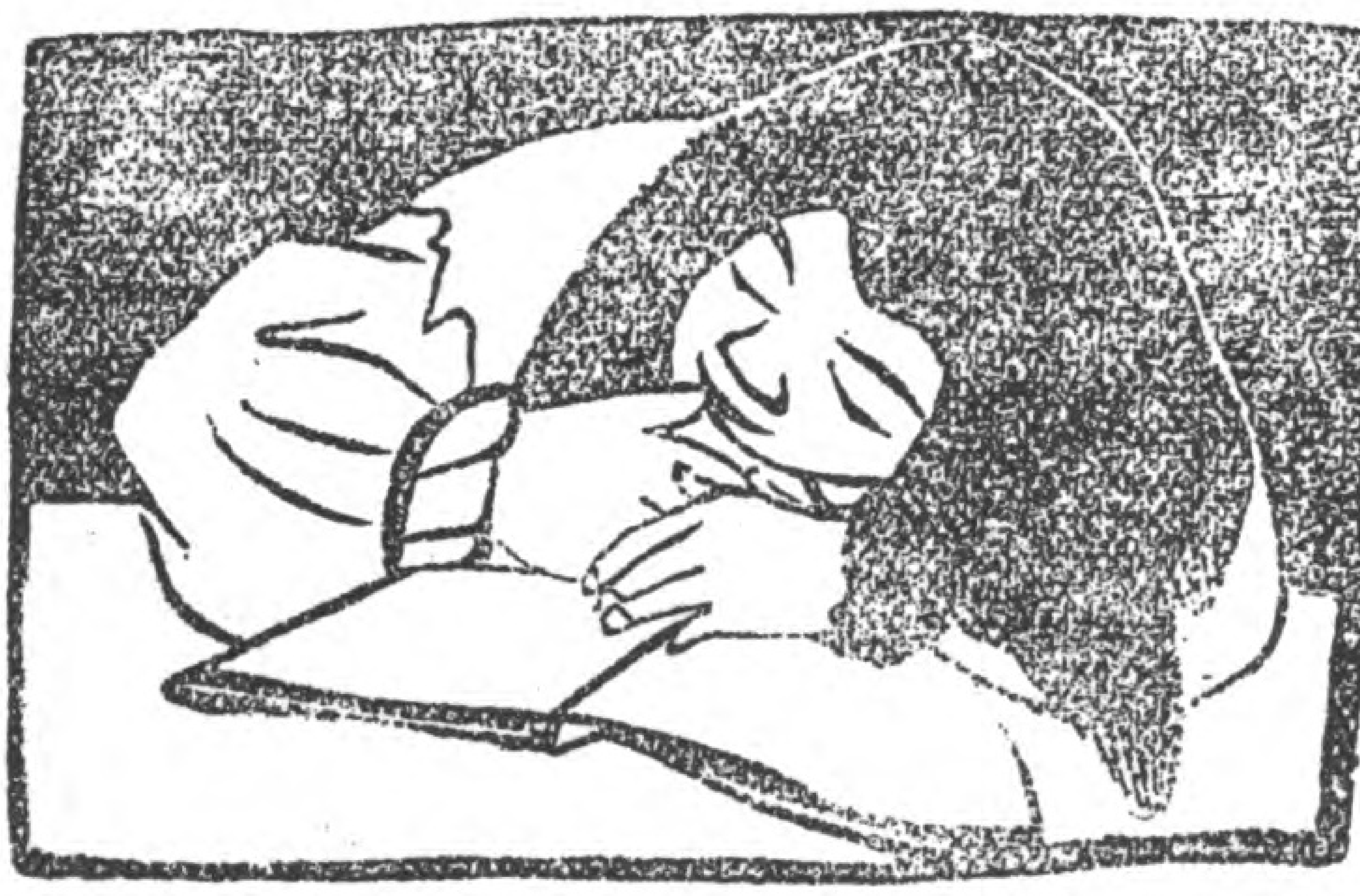
試驗は不出來であつたけれども、若しや……と萬一の僥倖を憑みにして、結果發表の日を心待ちに待つて居た甲斐もなく、遂に入學が出來ぬことに定まつてしまつた。斯んなことならば、寧ろいつ迄も發表せられずに、よしや細くとも、一縷の希望が繋つて居ればよかつた。さすれば叔父樣叔母樣もこんなに怒り罵りはなさらぬでせう。樂しい空想にも耽つて居られたものを。

誠や浮世は夢である。故郷を辭して四年、螢雪の功を積み、錦を衣て歸る時に、叔父樣叔母樣は如何に優しく妾を迎へることでせう。亡き父母の靈は如何に喜ばれるだらうと、夢想して居たものを。あゝ思へば、皆是れ夢幻、空想と實際とは斯く迄反對するものであるか。叔父や叔母に叱られながらも、仕事の暇々には、一心に勉強した甲斐もなく、今は空しく失敗に歸してしまつた。口を漱ぎ手を淨めて、毎朝神に祈を擧げた

その淸い感謝は、今は汚らはしい恥辱に打ち消されてしまつたのである。さても果敢ない夢の浮世、さても拙い妾が運命。

叔父樣叔母樣に、嘲弄せられた時の耻かしさ、悲なしさ、妾は穴あらば、消えも入りたい位であつた、父のお蔭で今の樣な身分になつたのでありながら、その恩義を忘れて、妾をこのやうに無情に取扱ふとは、あまりつれない叔父樣！叔母樣！。

妾が三寸の胸は、搔き挘らるゝやうな、壓迫されるやうな、何とも喩へやうの無い苦しさがして、心臟は激しく皷動し、頭はいやに熱して來て、今はり裂けんばかり、いつそ、腦溢血にでもなつて、斃れてしまつた方がよい、妾の爲めには、その方が却て幸福である。あゝこんな夢の浮世にあつて、何の望みがあらう、何の樂しみがあらう。こんな無情な叔父や叔母に召し使はれて、何んのかのと自由を束縛せられて居るよりは、寧ろこんな世の中には居ない方がましだ。運命の冷たい手に弄ばれ、雪ぎ難い耻辱を受けて泣かうよりは、寧ろ父上母上の跡を追うて、冥府の里の和氣藹々たる家庭に人とならう。妾は遂に心を決して、羽根瀧に投身して此の世を去つたのである。瀧の女神に父母の住家を尋ねて、行くと非常に立派なお宮、龍宮とはこれであらう。恐る〳〵門先まで行つて、取次を願へば、父上母上は思ひの外の立腹にて、對面も許されず、唯だ一片の書き物を賜はつた。恭しく披いて見れば、嚴めしき手蹟にて左の如く書いてあつた。



無邪氣　廣島縣　今四初野

「古語に曰く、天將に大任を人に降さんとするや、必先づ其心志を苦しめ、其筋骨を勞し、其體膚を餓ゑしめ、其身を空乏にし、行ひ其の爲す所に拂亂す。心を動かし性を忍び、其能はざる所を增益する所以なりと。汝は未だ此處に來るべきに非ず、速に歸りて叔父叔母に謝せ。天無情に非ず、必汝を助けん。汝が父母は草葉の陰に、汝の成功を祈りつゝある者を。やよ汝、不覺すな。」

拜し終つて、御敎訓確く肝銘仕りましたと、靜かに一禮して、立ちて去らんとすれば、ホヽ――ホケキョと鶯の聲。はつと驚いて見やれば、妾は依然として、宮山家の奧の間の古き机に對して居るのであつた。窓外には、梅花紛々として薫香を放ち、其の枝には、鶯一羽、朗らかに讃美の曲を歌

うて居るのてある。あゝ梅花、何とその風情は高尙いてはないか。冬の寒氣に打ち勝つてこそ、春は來り、鶯までも訪ね來て祝ふのてある。あゝ妾も、梅のやうに潔白な心て、天から與へられた境遇に滿足して、出來得る限り勉强しやう。唯世の艱難戰爭に負けぬやう、忍耐の旗の下に奮ひ戰つて、やがて理想の岸に着かう。今までの陰欝な心は、全く消え失せて、妾は心からの笑みが、知らず識らず面に漏れたのてある。

＊　＊　＊　＊

其後妾は、叔父叔母に事ふること、父母に事ふる如くにした。叔父の言葉も、叔母の待遇も以前のやうに、無情てはなかつた。妾は暇を得ては益勉强した。その甲斐ありしか、はた天の助けか。使を果して、今しも家に歸れば、叔父は微笑を含みて、机の上に好い物があるとのこと、何物ならんと見れば、嬉しや一枚の新聞紙、女子師範入學試驗及第者として、妾が名も紙上に載せられて居た。妾は今は喜ばしさに堪へず、思はず微笑して、新聞紙を抱いたるまゝ、一年前の妾が身の上を追想する折しも、また聞ゆる、ホヽ――ホケキョと鶯の聲。窓前の梅花も昔のまゝに、妾が胸に香ふのてある。

（評）　瀧壺に投身せしあたり、わざとらし。

○顏を赤らむるもの

下野　大橋政子

人のあまたよりつどふ所にて、我が衣に蚤のゐたりと云はれたる、これかれもとめんと價定めたるに、折ふし袖に錢の持たざりけるいと恥かし。若き少女のこゝらの田の前を通りたる、井戸端にてとやかく男の評する女のそばを過ぎたる、試驗に落第したる、手のつたなき、恥かしきものの數には入れど、皆わが心得の善し惡しにあれば言はずもがな。戀にやつれたる姿の人に知られたるこそいと恥かしげなれ。我が近き所に住める美しき少女のあるが、いといたくやせたれば、いかにし給ひしか、もし病みてやおはすと、なに心なく尋ねしに、否、病にも侍らずとて、顏赤らめたる、我も强ひて、問はざりき。誰も居らじと大きなる口して物たべたるを人に見られたる、藁にて澤庵漬といふものをさげたるに道すがら人に遇ひたる、婚姻の夕こそなかなかにいみじう恥かしけれ。乳母の明日よりは御孃樣ならで奧樣なりといふも恥かしきに、丸髷に結ひ給ひし妾、婿君の是非にと仰せ給ひしもうべなどいひたる、消え入りたき心地するに、父上母上の、婿君のうはさし給うて誠にふさはしき婿君よ、なれにはいかに思ふなど、問はれし時など、顏に袖おしあてたるまゝにてえ答へず。來る人每に、さぞや嬉しくおぼさんといふに、さる事つゆも知らずなどいへば、かくし給ひても

穗にあらはれて眼元に嬉しさに見ゆるをなどいはれたる、いづれも恥かしからぬはなし。實に婚姻の夕世なれぬ少女心のいろ〳〵に思ひまどうて恐ろしさ、嬉しさ、苦しさ、とり〳〵なれど、そのはづかしさ、なにかはたとへつべき。

（評）よく枕の草紙をよめるもの。

○あはれ鶯

いしみ　富美子女史

繚亂たる庭の白桃よ、糸の如き雨の靜かなる夕、我兄君は遂にみまかり給へり、臨終の際に仰せられし御言葉あれば、今朝初七日といふに、塗籠を小椽に持ち出てつ、久しく飼ひ馴らしつる鶯を今放たんとする心。春日うら〳〵とさす此庭に、未だ梅が香の床しかりし頃よ、汝が法華經の妙なる聲は如何許りか兄君が苦しき胸を慰めたりけむ、折にふれては、好き音や、彼の一聲の珠なりせば、耳輪にぬき長へに聞かましものをとぞ愛で給ひける。散る花と共に逝かせ給ふべき運命なりと、み胸の中にもおぼしけむ、血を吐き給ふがおん病なるに、皐月待ちて不如歸に死出の山路の語らひせんとはし給はで、汝が聲のみひたぶる懷み給へり。さばかりのいつくしみを受けつる唯一の生ける紀念なる愛らしき鶯よ。今ぞ汝を自由の身となさん。

假令如何なる愛を受くればとて巢立つ間もなく、無慘や人の手に捉はれ、親同胞にも敢なく別れて、小さき籠の中に久しく在れば、さこそは古巢の慕はしからめ、されば樂しと聞きてし音も、涙絞りて啼きしや知る可らざること、思へば哀れなりき、いでや、放ちやらむと、小さき籠の戸を開きぬ、されど鶯は出でず。飛歸らば猶同胞にも逢ふべきをたゆたへるは、別るゝが悲しきか、籠を天地と住馴れては、恁る宿に猶名殘惜しきか。旋て、小さき翼に風切りて鶯は飛出でぬ、流石に此鳥のあだなる樹には留らで梅の小枝に休らひたる、花こそなけれ、なか〳〵に風情あり、二度三たび小枝を移ると見えしが、忽ち上ざまに舞上りて、小さき影は隱ろひぬ、あはれ鶯！心あらば、一聲兄君の御墓になきて、さて汝が古巢にかへれ！

（評）最後の一句に趣致あり。

○痛はしき弟

周防　三井はる子

斯うして弟が、私の側へ磨寄つて寢るとの出來るのも、今夜限りであるかと思ふと、悲しいやうな、痛はしいやうな、唯もう泪ぐまれて、どうしても眠られない。明日夜が明ると八時の汽車で、罪のない弟は、又あのいやな〳〵神戸を指して歸り行くのである！あゝ彼の何かにつけて恐いお顏を爲される慳貪な叔父樣、それからお笑ひ爲される時でも何處か薄氣味の惡い叔母樣の側で、朝夕御機嫌をお伺ひ申したり爲馴れない用を言付かつたり我儘な坊ちやんをお守して行つたりする

ことが、あゝ其麽に幼い身には苦しい辛いことでせう、弟は何も言はないけれど、私は去年一月許お手傳に行つてゝ、もうちやんと知つて居る、然し此度歸つたのは、それよりも猶一層苦しい難儀なことがあるのかも知れぬ、それをお父さんは、それ等の事を何ともお思ひなさらないのか、やつと一昨日虎の穴を遁れた思に……あゝ情ない、私は忍びぬ、彼の悴憔れ果てた姿を見ては——。あゝ叔父樣の內へ行く迄は眞に快活な無邪氣な子だつたのに、何んといふ萎れかた、丸で今にも身も魂も滅入りさうに……朝から晩まで跼いて居る。私は最早堪へ兼ねて昨日密つと尋ねやうとした所が、弟は唯だんまり、お汝何か心配事があるなら、どうぞ、此姉に聞かせてお呉れ、と頼むやうに頭を撫づれば、口は噤んだ儘で少さな臉の間から、ほろ〳〵と溢れる熱い幾雫!!噫何たる悲しい事でせう……私は未だ此弟の相談に與かる事が出來ないのだらう?と思ふともう胸はせき込んで腸は寸斷々々に斷たれるやうだ、切めてもお母さんが、あゝお母さんが居られたなら、弟にも此麽思ひはかけまいに、他人の家で苦勞はさすまいに——覺えず私は弟を抱き締めて泣いたのだつた。それに夕はたつた一言僕を此方の學校へ出して下さいと言つたら、お父さんは、まあ之迄一度として爲された事のない、實に何とも云へない恐いお顏をなされて、お前は、叔父樣の御恩を何とも思はないのか、衣せて下さつて、食はせて下さつて、學校へまで遣つて下さつて、そして可愛がつて下さるのに、何の不足があつて其麽事を云ふのか、よく考へて御覧なさいお母さんはなくなられるし、僕は商賣に失敗するし、今はもう此家も屋敷も店の物もみんな內のではないんだよ、僕は一日風呂敷を脊負つて方々を歩いても儲からぬ日にはダビ一枚も取れぬことがあると、何かみんな弟が知つたかのやうに、頭からたゝきつけてお叱りなされて、其上明日は早速叔父樣に御詫び申してお歸りなさいと、まあ此弟の事故、餘程の理由がなけりや、無言で歸りはしないだらうが……それを誰にも語らないで、苦しい胸を押し包んで又歸り行くのであらうか……。

どれ今通つたのは三時の上り列車であらう、さうするともう夜が明けるにも間はないが……お父さんはグウグウと能く寢て居られる、弟は頻りに寢返りして居る、私はどうしても眠られない!……

（評）弟に對する同情筆端に溢れたり。

○あはれ月

信濃　玉蘭女史

あゝ月よ、日の光西の空に消えて世の中暗うならむとする時、山の端にほのめき出てゝ遙かに道を照す月よ、何ぞ其姿の淸く尊きや。イエスもかゝりきソクラテス

もかゝりき。さるにかの人々の、あるは十字架上に、あるはひとやの露と消えしは如何に、さては此の明るき月の雲にかくさるゝ事あるはいかに。あゝ月よ、見わたさるゝ限り眞白なる雪の野を、空のたゞ中より照らしたる月よ、何ぞ其姿の清く尊きや。夷齊もかゝりき屈原かゝりき。さるにかの人々のあるひは山に、あるは川にはかなくなりしはいかに。そも此の清き月の雲にけがさるることあるは如何に。妾は知りぬ。雲暗くして月明るきゆゑにかくされ。世けがらはしくしてかの人々清きが故にけがさるなり。世の濁れる時かの人にごらば、けがさるゝを恐れず、雲くらき時月のくろかりせば、かくさるる事を憂へじものを。さはいへ、月のあるところは高く、雲の在るところひくし。隠くさるゝも月の光にかはりあらずや。月はとこしへに明るき月にて、雲の散らむ時此世をてらし、此道をてらすなり、うべなり、かの人々の光世をへていよゝかがやくことや。あはれ。明るき月よ、たえずおのれを高く持して、たえず今の世の人におしのけらるゝ若きをの子の友となれ。清き月よ、うつし世の塵に得堪えて常にたゞ一人行く人の子の友となれ。あゝ、尊き月のあらざりせば、はたひじりのあとのあらざりせば、友なき妾が身を如何がせん。

（評）世に處して此覺悟あらんか、庶幾くは天を恨みず人を恨みず、よく自己の本分を盡すを得ん。



あみもの　三河　近田みつ子

○火葬場

横濱　錦戸彩子

黒き柩の影は肅々と、寂寞しき路を夕陽の今や沒せんとする彼方に向て練り行きぬ。蕭々として起る風は世の無常を敎へ、潺湲として流るゝ水は人のとゞまり兼ぬるを語る。あはれ人生の頼み難きは陽炎にも似て、今を始と云ふにはあらねど、人の死ぬるや、人の逝くや、其都度新たに起る感想の堰あへず湧き出づるをば何とせむ。幾人の化せし煙に煤りしにか、汚れに汚れて怪し氣なる幕の、麻縄の古びたるもて引締られたる、さても火葬場らしき景なるかな。柩は黒き扉の前に横はりて瓦斯燈の光微に、彼方に見

ゆる黒き人影、車の音さへいと怨し、あはれ榮華の世を誇り、あはれ窮乏の幸なきを喞つも、一度こゝなる黒き箱の中に横はりては、嗚呼夢なる哉、實に人の世は曉の夢より淡からずや。

鐵の黒き扉は開きぬ。中は同じく鐵、赤く錆びたり、嗚呼安きか、はた苦しきか。こゝに横はれるは人の血か、肉か、骨か、靈か。煙てふものは世にある總ての物をつゝみてちる。其煙……人の血と肉とを網羅し盡したる煙の靈化し得ぬを怨み、こゝに、扉にその怨恨を殘すにか。

軌らして柩を中に送る其の音よ！凄き其の韻よ！悚然として肌の粟立つを覺えき、胸の内異樣なる、一種異樣なる感に打たれて覺えず後に倒れんとしき。

心を取直して眼を開けば、早や扉は固く閉ぢられて怪し氣なる泥土もて、はや塗り込められたり。こゝに全く、彼と世とは相離れつ。斯くて世は人一人を失ひぬ。新たに生る可き者は兎もあれ、世は一人を失ひぬ。天は一人を得ぬ。嗚呼、逝く者遂に返す可からず。呼べども叫べども返らぬを如何せむ。悲しい哉。今宵を期して茶毘一片の煙と化して了らむとすなるを。

折しも夕の哀れを告ぐる鐘の音に悲愴の感は、いよいよ深く、寒鴉啞々として塒をもとめ、疎林風吹いて、落暉既に荒田に沒しぬ。

（評）北邙山上列墳塋、萬古千秋對洛城。

○ある夜

岩代　根本笑子

四方堅く閉したる此處六疊の一間の中、人形を抱きて我は座しぬ。回顧すればわが四才の春なりしとか、數多きはらからの中を離れて此家に養はるゝ身となりし朝夕の、寂しさは、幼き面に表はれて、幵を憐ませ給ひし養父上の京土産にと賜はりし此人形の名は妙子、それよりは朝に夕べに他愛なく遊び戲れぬ。心なき者とは云はじ眞の妹を得たる如、我喜び譬ひ難う。

春は花咲く岡の上の、ねゝ樣事に、まゝごとに、必ず妙子は我いとし子となりて抱かれぬ。果ては出てもせぬ乳房含ませて人形の樣な母樣よと笑はれしこともありしとか、斯くて生ひ立ちし我世はいつも春なりき。

されど、限りある人の世に春の命は短きもの、振り分髮は高き島田と變り、軈ては人の妻と呼ばれん日も遠きにあらぬを、人形遊びも相應ねば郷里の妹に與へよとの、母のみ言をいなみ難く、日頃親しみし二人の中を、今宵限り潔うたちて、明日は郷里へ送らむとす。やよ妙子よ心あらば歎きても見ね、魂あらば去りたる後も我事を思ひ起せよや、と見守る眼と眼、ものや云ふらんと怪まるゝ其口許には淋しき笑みをぞ表はれける。

夜や更けぬらし、冷々と身に泌み渡る夜氣堪へ難う、一しほ近く火鉢に身をよせぬ。

俳句

巖谷小波先生選評

二等

春の水緋房の鞭を洗ひけり　神田區旭町三二樋口方　長井漣月子

（評）詩趣畵意共に津々。

三等

春風や黛匂ふ中納言　奈良市押上町板橋北詰　藤田小百合子

（評）古き畵巻や讀むらん心地。

四等

陽炎や蛸壺乾く砂の上　府下中野町一、新實方　小川鱗子

（評）春日行旅の感。

五等

櫻にもかざしぬ雨の迎ひ傘　四谷區大番町七七　矢野靜子

（評）凄艷の趣あり。

秀逸

春風や馬上の笠の斜なる　丹波　政子

水底の星が鳴いたか初蛙　下總　神田美智子

蝶一つ化粧の水に溺れけり　武末八重子

星祭詩箋のせたる古机　越後　藤原虎子

春深う歌に更けたる局かな　安藝　たか子

春の夜の夢に美人と生れけり　横須賀　藤原すみ子

逝く年や物の屑うく蜆川　小石川　井上勝子

雛の間に小さき鼾や絹行燈　熊本　石阪せつ子

春の海夕日大きく沈みけり　遠江　宮城梅子

踏青や妹から渉るさゝ流れ　富山　小林芳枝子

山吹や子を産まぬ妻美しき　伊賀　山村野菊

金屛を越して匂ふや室の梅　伊豫　鴻上胤子

春の山小川の上に笑ひけり　上總　牧野瓊韻女

紅梅の蕾に息をかけにけり　靜岡　大石うめ子

鶯の啼くや書院は閑なり　備後　西山きよ子

鯉はれて梅散つて甚靜かなり　本所　岸野まち子

春の月提燈けして見たりけり　京都　松井星水

白毛布かけし寢床や水仙花　釧路　川村澄子

おぼろ月櫻の精を見たりけり　越後　詩狂女

瓦燒く小家六戸や桃の花　福岡　白百合子

釣りをする人に夕日や春の川　下野　須藤せつ子

雨ぽちり〱蛙の夜もすがら　越後　松村芳子

春雨や反橋わたる蛇目傘　常陸　大和田清子
緑眉を東風に飛ばして遊びけり　岐阜　安部喜久子
行春や百首にあまる歌の屑　下谷　高田ふみ子
信濃路や牛の涎に風光る　下野　青木ふさ子
春の灯を消せば櫻のかほる哉　能登　天涙子
春の水鳥の餌壺を洗ふべく　富山　小林よし枝
笛吹いて渡る小川や春の月　上總　渡邊幽江
落柿舎の廂淋しき時雨かな　牛込　岩谷綠子
春風や奈良へ旅立つ女絵師　熊本縣　土生葩水
山里や片戀に啼く猫哀れ　弘前　竹内のぶ子
空にとぶ鶴の抜毛や小春凪　京都　大井順子
菜の花や大臣山の裾つゞき　武藏　岩田たか子
いしぶみに散りかゝりたる櫻哉　下野　涼月子
蛤を焼かする春の泊りかな　羽後　みや子
新緑の下に贈位の勅使かな　下總　桃花女史
暖かき雨にぬれたる小草哉　北總　富美榮女史
雪五寸冬の日記なかざりけり　大坂　倭文子
蓬萊の一間に炭の香りけり　上野　紅蕖子
風呂を呼ぶ女美し梅のやど　麹町　淺井千鳥子
春の野やお仙が茶屋の赤毛布　熊本　石坂せつ子
春立つて夢のやうなる淡路かな　牛込　入島和枝
掛茶屋の椽に忘れし扇かな　茨城縣　中西歌子
六郷や霞ながれて春の水　中野町　山本柳子
張かへた障子あかるし梅の宵　麹町　長谷川なを子
御手植の松にたなびく霞かな　仙臺　相澤てい子
朧夜や黒塀を出る小提灯　小石川　片岡滿慈子
竹藪の地割れする日や桃の花　府下　小川鱗子
琴に通ふひるの螢や青簾　肥前　柳原初音
骨堂に夕日殘りて花吹雪　伊勢　常磐木花子
水鏡梅とならんで寫しけり　岩代　喜和子
苔もるゝ細き灯や春の雨　磯濱　安川久子

雪の窓明うなりて暮れにけり　常陸　川並花子
作りまけてくやしき花の一句かな　京橋　内田はつ子
春の潮ひた〳〵と我が足を打つ　若狹　山中露子
花に降る雨細き日や書畫の會　鶴見　岩田たか子
遠く近く大山小山霞みけり　羽前　齋藤貞子
散るか柳散らぬか柳散る柳　山形縣　てい子
此奥にまだ里あるや郭公　攝津　富美子
時雨より一足早よう泊りけり　安房　文枝
春風や丸薬を干す椽の端　失名
雛人形拵ふ家の緋桃かな　近江　藤野靜子
ふりむいて君見る宵を雛の灯　秋田　加藤逸子
橋長う岸は霞の櫻哉　安房　すみれ子
花落太刀小さき腕を叩きけり　京都　吉田靜枝
寶石を掘り出す山の蕨哉　出雲　世良ふみ子
雨の月團子を喰ふて語りけり　越後　藤原不二子
寒の海漁夫の晝寐も靜かなり　丹波　はる子
花の宿宿乞ふ人の男振り　能登　森田茂子
朝顔の盛りに人は眠りけり　福井縣　北野愛子
山吹を散らして去りし蛙かな　伊賀　山村りやう子
人稱に鎧かすみけり桃の里　小石川　塚越歌子
青嵐硯の龍も躍り出よ　南越　花袋子
菜の花に畑打つ翁かくれけり　茨城縣　橋本いは子
空濠や芦の芽をふく宵の雨　麻布　瀧本まさ子
縫ひかけの絹に散りけり桃の花　三河　長坂よし子
風かをる椽に夕餉のまどゐ哉　下野　孤英女史
春雨やいつまで晝寐する男　滋賀縣　寬雲子
春の夜やかすみて近し京の町　上毛　花波池女
江畔の九重の塔はかすみけり　紀伊　ひろ子
川越せば吾家も見えて桃の花　越後　戸利子
雉子鳴いて十戸の村や春の風　安藝　伊津美
公園の下流れゆく春の水　日向　横山きよ子

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

二等

○寄宿舍より

横濱　敏子

姉様待ちに待つてゐました御手紙並に御小遣、昨夜先生から慥に頂きました、實は姉様毎日毎日の樣に御手紙の御返事を待つてゐました、何時でも月末になると自然に心細くなりまして、何となく家の方がふだんより一層偲ばれる樣になるのです、夫に此月運動會が有るつて云ふので、猶心細かつたのでしたが、昨晩でなほりました、何だか魂が大きく成つた樣です、昨日の御晝の御飯の時、私が御茶をつぎましたら、茶柱が立つたので、嬉しい、屹度手紙が來るのだと想ひ、樂しみに待つて居りました、姉様學校の人々に御手紙は命です、いつでも御集りがすむと、先生が郵便箱から一ぱい持つていらつしやい升、すると皆様が、後になり前になり、先生の手と御顔を見ながら、自分の名を呼び上げらるゝを待つてゐますが、なかなかさうゝまくゆきません、來た人は得意然と自修室の隅の方で讀むか、又は懐にねぢこんで讀みたいのをわざとさもないやうにすましてゐるが、來ない人は自分が出してもこないとか、悲しい顏して勝手な事申升の、實は姉様私も悲しい顏してた一人、昨晩は嬉しかつた、大急ぎで讀んでは又讀み、嬉しかつたのなんのつて、姉様有難う存じ升、そしてあの赤いリボン有難う、政教兄様に宜敷申て下さい、今に御禮狀書升が、下手に書くと叱られるから少し考へて書升、先日の弟の手紙で父様の白毛ぬくつて黑い毛ぬいて叱られたつて、姉様一本の黑い毛ぬいてそんなに心配する程父様は御年よりになりましたか、姉様私屹度勉强致し升、姉様との約束忘れません、屹度ね姉様立派になり升、御庭の梅の花咲いて御父様の例の眼鏡越に御ひげなでながら御眺めなさる御樣子が偲ばれ升、姉様今朝御洗濯澤山致しました、土曜日は洗濯日ですから。けれど、御褒美の御芋が出升、今日も出ました、父様初め皆様に宜敷、實様田鶴及第ですか、此菫の花二ツ送り升、きれいでせう、さやうなら。

（評）筆のしどろなる所に却て喜びの溢るゝ樣見えてよし、まことに眞情の流露せる文と云ふべし。

（又曰）今回は書簡文としての投稿をもあはせて本欄に收めたり、第四號の誌上に「實際の用事を主題として作ること」

とありしに拘泥したる爲にや、郵便用文には乾燥無味にして何等の趣致なきもの多かりき、假令實際の用事を主題となすとも、人を動かすに足る佳作の成らざる理なし、諸姉の奮勵を望む、こは此作者に就ていふにはあらざれど、序なればこゝに。

三等　○學資に添へて都の姉へ

岩代須賀川本町　服部水仙子

この二三日の暖くなりましたこと、蠶が出そうな氣候になりました。東京はさぞ暖かでせうね、も少し過ぎると花も盛り、それに博覧會があるのでどんなにか賑かになるでせう。家からは誰れも行かないことに決めました。でも若しかすると母樣が一郎を連れて行くやうになるかも知れません。かもですよ、だから當にしないで待つてゐらつしやい。

父樣はゆうべ、夜汽車で宇都宮まで、四五日かゝるか知れませんつて、それで私に是を送るやうにつて言ひつけて行きましたの。今月のは定額より少し多いでせう、これは母樣がそつと增して下すつたのです旅に居れば何かと心細いものだからつて。だけどお前また、ボンを送れの何のつて言つて遣つてはいけないよ、だつて。いくら私だつてさう〳〵姉さんの懐をいぢめやしませんわねえ。

昨秋は油斷してゝ袷を催促されて手ん手古舞したから今度はまごつかないやうにと思つて、きのふから縫ひ初めました、縞柄は私のよりずつと派出なのよ母樣が、これではいくらなんだつてあんまりだと仰言るから私、いつか送つて戴いたあのお友達の寫眞を出して來て、ホラ此通り皆派出なのですものつて言つたら、さうねつて默つてしまひましたの、だからそれにしました、實際東京は派出なんですものね、田舍の人は驚いてしまふわ。いくら飛んでも刎ねても綻びないやうにしつかり縫つてあげませう、よその學校と違つて運動ははげしく無いでせうけれども。これからはそろ〳〵畑が面白くなつて來ます。私もちよい〳〵出て見る積りよ、今も母樣について菜を取りに往つて、來たとこ。那須山の煙りがよく見えましたつけ。いくらお醫者の學校でも躰は何よりお大切に。受取りは繪はがきで頂戴な。さやうなら。

（評）流暢にして洒脱。

四等　○聯隊なる兄へ

下總佐倉宮小路　小永井郁子

餘寒未甚しく候處兄樣には御機嫌美しく御勤め遊ばされ候由御目出度御嬉び申上候先達御送り下され候御うつしゑ一同御嬉びにて拜見仕り候美々しき軍服長き劍

つい此の間迄中學校にお通ひ遊れ候兄樣とは思はれず候兄樣が此の武き御姿を見るに付け女の身の漫に羨ましく存じ候私も男子ならむには斯かるいぶせき田舍にまごついて居らず江田島あたりにて天晴腕を鍛え候はんものをと、くだらぬ空想いたし居り候、されど此の間學校より歸るさ一人の少尉殿お歲の程も兄樣と同じ頃とおぼしきが、部下の兵士が敬禮をせぬか禮の爲樣が惡いとか、にて、いたく憤り居り兵士は過せし酒もさめたる樣にて只管にわび候へ共いつかな〳〵許すべくも見えず、果ては其膝の處を長き靴にてハタとけり、それで氣もすみしと見え悠々として立去り候我が國の武士道てふものは強いばかりを云ふにはあらず、勇あり情あるを誠の武士とこそは申すべきにこの若殿原が御擧動さても同じ國家に捧げたる身の、兵士とても變りは候まじきを、餘りの憎らしさにあかず其後姿を眺め居り候ア、これを見ても兄樣よその高雅なる勇ましき御姿と共に其御心も優しく高雅に、血氣にはやる御心もて、上官の命令に御抵抗など遊ばさぬやう又ゆめ〳〵部下の兵士につまらぬ恨を受けさせ給はぬやう御身御大切に御勤め遊ばされたく願ひ上候一人賢しらぶりの御注意はづかしく候へ共萬づ女は細かきところに氣のつくものにて只管御身を思ふ心に候へば無禮の罪は幾重にも御ゆるし下され度願ひ上げ候。



日曜日　下谷　佐野貞子

（評）細かき所に氣のつく女心の優しき注意は兄君も喜びてうけたまふべし。

五等

○寫眞に添へて

滋賀縣栗太郡　田美子

御文くり返しくり返し、斯くまで仰せられ候を、差し上げざらんには、必ずつれなきものと御憤りあそばされん。さりとて今斯くあさましき田舍人に成り果てしを、御覽に入れんは、いと恥づかしく、如何はせんと思ひためらひ候へど、有りし其のころ御ともども學校がよひの朝夕に、洋傘さしかざして日に燒けるを厭ひしその時の我れにては無きさまも、御おしはかりいらせらるべく、見苦るしとて參らせざらんは却りての失禮にや當り候はん、都を去りしより以來、知らせた

まふ通りの家のさま、父さへ筆を鍬にかへて、夫れまてなさらずともと人さまに色々と止められ候ても、いやいや其の時々の手すさびよとて立ち働き居り候中を、いかで絹はんけちに顔ぬぐひても居らるべきや、白粉などは最早幾月とり出でずや候はん、早う都にありける日、田舎人は何れも年齢よりは老け形なるがをかしなど嘲り候ひしが、誠に人は處がら、郷に入りては郷にしたがへに御座候、此處らあたりには、二十歳を越して肩揚の娘もなく、三十女が緋ぢりめんの襦袢の袖などは、かけても見らるゝ事に候はず、いさゝか縞のあらきを着候ても、やがて人の見とがむるさまに候へば、ひたすらくすみ入りて今日此頃の姿の有樣、御覧じたらば御驚きや遊ばされん、隨ひての面がわりは、今參らする寫眞の上にも御覧じ下さるべく、左もあらばあれ、思ふ心は其の昔にもいとゞ增りて、忘るゝよしなく戀ひしのび奉るなれば、よしや此のおもかげの見苦しうもあれ、是れに依りて、厭かれまつるやうの、輕らかなる御交らひには候はぬものをと、思ひかへし、斯く淺ましきを御覧に入れ候、人ごとに逆らふはよからぬ事と、いつも御許さまの御敎へなれば、かゝる事にも猶背くまじと守り居るにて候、いで、其の御取りかへをも早々賜はれかし、此方のみ徴すは、御人よしとも申しがたかるべく候。かしこ

（評）手織木綿まとひたる姿のゆかしさよ。

秀逸

○うつし繪を送られし友に

伊勢　對花女史

柳のかげに涙の露を、形見にとゞめて、汽笛の音に、をしき袂を分ち參らせしより、露のひぬまもなければ昨日のやうにもおぼゆれど、數ふれば、早や、二とせ餘りの、ながき夢とはなり侍りぬ。

去るものは日々に疎し、とは申し侍れども、其の後、一日とて、君がみ姿の忘らるゝひまなく、ともに同じ學びの庭に、敎へ草摘みあひ、春は花の下蔭に、秋の夕べは、月にうたひて、庭のそゞろありき、其の折々に睦み語らひし、事どもの思ひ出だされては、花につけ、月につけ、友なき我の、たゞ御身と共にならば、如何に嬉しからんものをと、御地のなつかしう、明け暮れ、空とぶ鳥のみ、うらめしく、翼なき身のかなしさを、獨りかこち、思ひわびし果ては、文机によりても物うく、書を繙く心なげに、徒に時をすぐし居り候折柄、ゆくりなくも御寫眞たまはり、とびたつばかりに嬉しく、思はず聲を發し申候。

さても〳〵、暫く見まゐらせぬ間に、美はしくおとな

びたる、み姿になり給ひしか。綠色濃き、おつむりに流行の廂髪、さては、お袴の折目正しき、女のたしなみとはいひながら、平素の御氣質をあらはされたる、お召し物の縞柄の、如何に似合しく、右手に持たせらるゝ薔薇の花の　ゆかしき薫りを放たんやうにも見えて、げに、氣高う見え侍りつる、み心のほど、いやましに、ゆかしう存ぜられ、如何にも鮮かに、いかにも見事に、うつり給へば、愛らしき唇の動きそめて、今にも、ものいひ給はんかと思はれ、久々にて御目にかゝりし心地いたし候へば、愛らしく笑みたまへる、御口を守りて、添へられし文を讀み、文を讀みては、御口もとを守りつゝ、いにし、柳のかげにお別れのお言葉も、此御口より、妾と同じ思ひの、心を書きそへられし、此のゆかしき文も、薔薇を持ちたまへる、み手よりと思へば。頰にあてゝも見、あるは下におきて、みとれもし候、此の後は、文机の上に飾り置き、かたへに文をそなへて、明け暮れ、み姿を拜し、をりくは、



荷車　青森縣　佐々木きそ子

文をも繰りかへして、拜讀仕るべく候。おのれこそ、みにくき姿の、うつりあしく侍れば、お耻しくは候へども、二週間ほど前に、撮影いたし、やうやう、昨日送り呉れ候まゝ、仰せに任せ、お贈り申上ぐべく候、田舎そだちの、たゞ、健かなるを取りえに、御覽ぜさせ度、先は御禮までに、あなかしこ。

（評）前なる「寫眞に添へて」よりはやゝ劣りたれど、情摯するに足る。

○兵營に有る弟へ

上野　光蓉女史

其後は心ならずも疏遠に仕り候へ共其許には御變り無く候や、未だ寒むい故お風邪でも引きはせぬかと、日々案じ暮し候、先日も歸休兵の山田樣から新兵の頃のお話を承り候節は聞く度每胸轟き候、其許にも定めて今頃は古參の者に、いぢめられて居りはせぬか、打たれはせぬか、增して今日の樣な雪の降る寒い朝でも火の端へは寄れず意地の惡い古兵の爲に雪の中をかけ足でもさせられはせぬかなぞと、女心の淺はかにつ

まらぬ事迄心配致し居り候、されど最う一度入營し給ひし上は苟くも國家の干城たる名譽ある軍人に候へば日本魂と云ふ事を一時もお忘れ給はぬよう、假令如何程つらき事御座候共、僅か二年、それも骨の折れるのは一ヶ年に候、此位は夢の間に過ぎ候はん、上官も古兵も皆此困難をして出て始めて今の位置に居る者に候、人として多數の人のなし得る事も出來ず、苦勞もせぬ様な者は決して世に立つて名を擧げるは勿論の事、人の頭となつて人を使ふ事等は出來ぬ者と信じ候、女さへも嫁したる時は隨分つらき事有るも大概忍ぶ者を、男として是しきの事忍べぬ苦は無く候、世に名を擧げし人を見るに皆非常なる苦心をなされたる結果人に知られる様になり給ひし者故、今の內勞するは却つて身の幸福ならんと存じ候、何事も皆世上の習ひと思召給ひ「苦は樂の種」と云ふ言を樂しみに、陰日向無く働き、上官や古兵のシャツや靴の様な物は一々云はれず共よく氣を附け給ふやうになし候はゞ幾分か心も違ふ可くと存じ候、決して一時の心得違ひなぞして一家親戚の面を穢し汚名を千載に殘し給はぬ様呉れ〴〵も頼み入り候、只此上は首尾よく滿期迄勤め上げ、筋の一本も餘分に頂戴し歸宅なし給はゞ兩親に對しても是に勝る孝は無きかと存じ候、かへす〴〵も御身大切にし給ひて能く御辛棒致し下され度候、此腹卷は叔母様から私がお正月に頂きしを其許へと昨日仕立候故御氣に入間敷とは思ひ候へ共多少寒さの凌ぎにもならんかと考へ差上候間御しめ下さらば有り難く候。かしこ。

（評）同情もあり、教訓もあり、慰藉もあれど、錬は未だし。

○妹に

酒田　菊池りう子

花さん御手紙有難う、父様も母様もお變りないつてね、やつと安心しました、私の居る北海道はそれは寒い事井の水がすつかり氷つてよ、御飯も、花様なんかいらしつたら、まあどんなおことゝをきく所だつたらうオホホ、、、それからね、花さん御相談の補習科の事ね、お嫁になる氣なら補習はいらないことよ、何もならないの、それよりかね、お母様のお側でお手つだひするんですは、理論より實際が大切なの、それからね、お茶の湯と生花とお習ひ、いゝかえ、それから、お琴は花さんが此地にいらしつたら私が教へてあげますから、それからもう一つは應接よ、之が一番大切だからね、よくなれるんですよ、言葉もぞんざいにしない様におし、髪も一人で結ぶんですよ、着物も母様のお手をかりない様にして、何でも苦勞をして見なけりやわかりませんからね、決して今迄の様に孃様育ちぢや他家へ行つてつとまりませんよ、いゝかえ、わかつたかえ花さんお姫様がお歸んなすつた様ですから今日は之て失禮を致します。さよなら。

（評）言々自己が經驗より出てしもの。

注意

本欄を郵便用文と改める筈なりしも、郵便用文は書簡文の欄の一部に載することゝして成る可く短くハガキ用文の參考となるべきものを採用すべし

新歌謡
編輯局選評

二等

み崎りゆう宮めぐれば二間守る海原一萬里

土佐吾南諸木　高橋白ばら

雄渾の象、俗謡必ずしも俗ならず

三等

天の河原へ糸まきなげてたぐりよせたい月姫を

茨城縣稲敷郡岡田村岡見尋常小學校　橋本いは子

女性觀

四等

誠やさしいあの姉様を何故に母様外處へ嫁る

大分縣大分郡日岡村三三四　平田つみ子

少女の情

五等

わたしや白川花賣娘村の掟が戀させぬ

京都市下長者町新町西入　山口京子

歌に戀あり

秀逸

○雲のとばりをさと押しわけて富士を旅立つ春の風　上毛　花波池女

○雪のふりよがまだたりないで麥がのびるよ寒の中　金澤市　大地波子

○木曾の名物寢覺の蕎麥は色が黑ても味がよい　信濃　木下壽惠子

○雪が消えたら深山の奥でまたもやろうか炭燒を　岩手縣　伊藤宗枝

○春の女神の現つの夢が拔けて遊ぶか蝶胡蝶　赤羽町　孤菊女史

○人も通した諏訪湖の氷水に戻して舞ふ胡蝶　東京府　大石よね子

○今日は朔津山の祭り皆んな行け〳〵私も行く　宮崎縣　濱砂まさ子

○生れ變らば天女になつて渡りたいぞや虹の橋　岐阜　篠田とみ女

○蝶々喜べ菜の花咲いた明日も天氣の風が吹く　廣島縣　薫翠女史

○寢るの嬉しさ起きるのつらさ仕事と小言となけりやよい　湖北村　利根邊女史

神戸　足立あさ子

○雲か霞か櫻か雲か目さへかすみて見えわかぬ

羽前　佐藤芳子

○便りやりたや青くひまもたぬ寫眞やるから無事と見れ

中野町　山本柳子

○椿の花ちる縁蓆見れば硯短册歌の本

長野縣　豐田たかの

○音樂家など〻囁きかすれどもとは若菜なうる娘

群馬縣　芳山房子

○親子三人て汗水流しとつたお米に實一つない

豐多摩　則本二葉

○花が咲く間にや歸ると云つた姉は歸らず花は散る

埼玉縣　近藤登久子

○都の景色を寫した文に入れて送ろか花菫

豐後　藤園舍

○嬉しうござんす春する旅は蝶の案内で花の里

みつけ　芳子

○一度ゆきたや都の友とすみれたんぽゝ摘み草に

横濱　折部色子

○遠く浦邊の船うた冴えて灯火チラ〳〵月が浮く

上毛　かるかや

○青葉若葉の今日この頃は雪解て氣高い不二の山

信濃　帶刀きさへ

○桃の花かげ機おる母に一目逢ひたや夢にても

南多摩　中島龍子

○東風が吹くぞへあの白糸の瀧の千筋が亂れ散る

入代　松野みどり

○寒い冷たい言はりよか弟妹の父樣涙の上

信濃　太田はるえ

○椿や櫻の色香は無くて恥かし妾は里の桃

京都市　狐　雁女

○落ちた椿の花掻き分けて池に遊ぶよ鷺二つ

備中　西石代

○妹は二十で嫁たけれど姉は二十五まだ家婦

丹波　藤枝女

○村のお里の馬方節が小蓁縫ひ行く小松原

三重縣　山崎はつ子

○嬉しなつかしこの小包は友の寫眞も二枚出た

備中　馬越昌惠

○桃の一枝そと折りそへて里へ送つた草の餅

肥後　みどり女史

○空と海との夫婦の中にしかとかすがひ打つ白帆

名古屋　恩の子

○お酒召してか濟化粧してか水にうつりし桃のはな

神奈川縣　小島政子

○谷をへだて〻鳴く鶯に架けて渡りたい糸柳

飛驒　萬翠月子

○桃の里から柳の村へ誰れの思ひを曳く霞

羽前　雉子

○母に抱かれてお年を聞いた昔なつかしけふの月

弘前　佐野てる子

○魚賣る乙女の籠の小鰈と青い小笹に春の雪

備後　松本棒林

○桃が咲いたら姪子が出來る私しや織りましよ初着の衣を

靜岡　山口芳子

○春の月夜にヒヤノの高音お庭覗けば梅薫る

周防　美登利

○花のしとれに霞の夜着に遊ぶ胡蝶の夢ご〻ろ

下總　國本つる女

○君は都で紫海老茶妾や田舍で赤だすき

小樽　織田信子

○父さまどうして母樣は問へば泣き出す納豆賣

○池の氷が春日に溶けりや苔の髮までのび〳〵と　羽前　長岡草青子

○リボンさすとも赤いのきらい妾白いの大好よ　紀伊　津田眞佐子

○晴衣ぬらして宿りを花にとへば胡蝶のお取り次ぎ　四多摩　森田喜代子

○春は草木が芽を出す時節私しの投書も芽を出すか　山口縣　梅　月　女

○誰が冠つた小笠であろか薫咲いたよ破れ目から　相模　岩澤翠子

○ほんに仲善いあの若夫婦出來た其子の名は愛子　佐世保　田中要子

○花のふゞきが又一しきり駒の脊中に雪とちる　駿河　岡村双鶴

○金山營所は屋根迄しろいなんて兵隊さんはいろくろい　福井縣　山本久子

○星が飛つて萓が折れて妾しや煩悶するわいな　福井縣　赤松投書子

○私や深山の炭焼き娘戀のこの字はまだしらぬ　群馬縣　河内とめ子

○死後て名高き田原坂見れば三十の昔がしのばるゝ　筑前　權藤つる子

○霞む野原に雲雀が飛んで黄金散らせば山が笑む　鳥取　藤井章子

○すみれ摘つてお庭におけば可愛や蝶々がとんで來る　水戸　中山道江

○柳そよ〳〵春風になびくなびく柳の芽は青い　京都　嘉勢なほ子

○着物洗ふとくんだる水に風が浮べた花の舟　常陸　大和田清子

○なぜにかへらんあの人故に私しや都で花を賣る　津　中村梅香女

○薪を脊負て月影ふんで踊る笹道花ふゞき　筑前　田中とよ子

○川邊小柳化粧を終へて月にうつすか水かゞみ　小樽　香都眞子

○嫁くは嫌じやと拒むだ娘今じや二人の母となる　下總　野本よし子

○巣がやどつた櫻の露にあした生れて蝶二つ　兵庫　藍あや子

○集まる〳〵博覽會へ白茶ショールに赤毛套　八王子　乙幡もん子

○梅の香りを袋に入れてなげてやりたや滿洲へ　備後　白百合

○赤い心を襷にかけて摘んだ此の茶は誰がのむ　土浦　季江

○妾や十三花賣娘人の情で日を暮らす　上總　牧野瓊韻女

○都よいとこ表に出れば電車自動車人力車　神田　渡邊登茂子

○隣座敷に電鈴が聞ゆ私しも聞きたい其電話　若狹　澤田ひさ子

○父母の生血なしぼつたお金何で無益に使はれう　備後　田邊節子

○昨日の試驗も事なくすんで今日はテニスノチヤンピオン　福岡　栗田瑛子

○時を得顏に咲いたる花を神が散らして實をむすぶ　伊賀　山村野菊

○紀州紀の川岩出の橋で下駄を取られてさんばそう　和歌山縣　長谷川かずえ

○百合の白露硯にうけて文を書きましよ花園で　盛岡　白桃

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○活動と抵抗

下谷區入谷町　蕉雨子

活動とは自然に起る運動を謂ふにあらず。人は常に的無きに矢を放たざる如く、人間の潑溂たる活動は必ず其對象として外力の抵抗を要す。鳩の大空を翺翔するや空氣の抵抗を感ず、されどもし空氣無かりとせば、鳩は遂に自由なる能はず。げにや寶石の貴きは、獨り其質の美と輝きとに非ずして、寧ろ之を求むるに難き所にあり。濱の眞砂の數知れず。碧玉瑠璃の存せるあらんか、之を大盤に盛るも以て珍とするに足らざらん。水に魚あり、漁せずして來り、山に獸あり、獵せずして獲らる、斯くては八珍の美味も何爲ものぞ、吾等の求むる所のものは、撒布せる金剛石に非ずして、深く自然の庫中に藏されたるそれのみ。手を袖にして味ひ得べき鯛と鹿とにあらずして、棹と銃とを要するそれ等のみ。斯の如きは甚だ以て奇とすべし、されど是實に奇なる人性の要求にして、其好んで外界の抵抗を迎ふるが如き觀あるは、實は唯活動の對象として自家藥籠中のものとせんの三略のみ。

虎兒を得るには虎穴に行くべしと雖一毛の輕きも尙全く無力にして擡げ得べきに非ず。されば活動の對象たる抵抗は、其是を排除するに當りて必ず幾分の苦痛を伴ふべきこと明けし。されば、人は本來さまで苦痛を厭ふものにあらず。薄弱なる抵抗の、取て以て、敵となすに足らざるものに對して却つて活動を厭ふに非ずや。譬へば常に勝算ある敵手と棊局を爭ふを好まざる如く、成人の小兒と相撲するを欲せざる如し。反言せば、人は多く苦痛の裡に在つて不可言の甘味に舌皷する也。

（評）「苦痛の甘味」正に是れ懦夫をして起たしむるの興奮劑、而も世人の多くは强大なる外界の抵抗に遭遇すれば忽ち挫折す、嘆ずべき哉。

四等

○處世論

京都市本町新六丁目吉田方　松井星水

偏狹なる勿れ、頑陋なる勿れ、我意なる勿れ、傲岸なる勿れ、汎く交れよ人を容れよ、人間は社交的動物なり孤獨の生活は到底人生の幸福を享受し得ざるもの、而して世に處する實に一種の技術を要す、技術の巧拙は往々にして其人の幸福の多少に比例す、古來の習俗として學者文人の輩とし云はゞ多くは狷介孤峭强ちに世間を卑しみ、只管世外に高踏して得たりとするが如きは必らずしも生活の眞意義を行へるものと云ふを得ず、人生究竟の目的幸福を求むるに在りとせば、其幸福の追求に要する範圍迄は處世の術豈研究に慣せずとせんや、夫人心の異なるは猶其面の如し、所謂世の中は十人十種、而して此異種あるが爲に社會は多面にして多趣味なり、心同き者に非んば交らずと云はゞ交際場裡は狹隘ならん、且斯の如きは仙人隱者の類にして始めて爲し得べく、社會に活動せんとする者の爲し得べからざる所、生活の方便としては時として心合はざる友も容れざる可からず、不快の地位にも甘んぜざるべからず、屈辱も忍ばざるべからず、此故に豊公は鞋を掴み、韓信は跨間に出てぬ、世に處しては所思の發表すら容易ならざるは、啻に韓非が說難に說く所のみにあらず、誤解する勿れ吾人が所謂處世の術とは必ずしも世と推移せよとの意味に非ず、我生活を幸福ならしむる方便として世を容れよと云ふに在るのみ、彼の無主義無節操、阿諛追從を以て生活の要義とし、不義の富貴を希ふが如きは人間の屑しとする所に非ず、交遊の間にも心友あり面友あり、社交あり私交あり其誼悉く管鮑の如くなる能はず、同心の人素より良友たり、然れども、他山の石以て璞を磨くべし、同心ならざる者も亦良友たり得べく、自ら求めて惡友に近くの要なきも、場合に依りて之を容るゝを妨げず、云ふ勿れ朱に交れば赤くなると、水晶は塵に委するも猶清く、蓮葉終に泥土に染まざるに非ずや、朱に交りて赤くなるは自己に一定の信念なきに據るのみ、友の善惡に依りて化せるゝ事果して水の方圓の器に依るか如くんば、我友遊する所をして直に我善に化せしむ可し、他の惡に化せらるゝが如きは畢竟我の意志弱きによるのみ。



子守　三河　白井[illegible]奈子

（評）崎嶇たる世路を踏破する、亦一種の技術也、而も主義なく、節操なくして徒らに技を弄せば迯にして仆れん、確乎たる信念を有すること作者の如く、斯の術を解すること作者の如くにして、始めて大過無きを得ん。

五等

○第一號の「四駁」を讀みて

福岡縣三井郡北野今山、上瀧嘉元方　永野吉子

一、棒程願つて針程叶ふに付て

なる程萬能の神から云へば馬鹿論かも知れぬ。しかし缺點多い人間。むづかしい世の中。秀吉は東亞を呑まんとして小日本を得た。元就は小日本を望んで中國の一部を得たに過ぎない。太郎君は熱心な大將志願てあるが未だ將校の仲間入りも出來ぬ。次郎氏は博士希望て、まだ學士の稱すら前途程遠してある。世の中には時勢や運命と云ふものがあり、一里あるけば一里近くなり、一錢出せばパン一つと、實力に對する報酬同樣にざうさなく行くものではない。旅行者が十里は必ずときめて發足して見ると、風が吹く、雨が降る、知人に逢ふ、道に迷ふ、つかれ切つて宿にとまり、さてふりかへつて見ればまだ五六里も來て居らぬ。これが世間普通の理ではあるまいか。古人はうまく人間の弱點をといた「棒程願つて針程叶ふ」自分は古今の至言として深く信じて居る。

二、來年の事を云へは鬼が笑ふに付て

これには自分も大躰贊成てある、しかし笑はれぬ覺悟も又大切てはあるまいか、十年百年の長計も立てねばならぬ、これがなければ近きに憂起るの失敗となるけれど、永遠の計畫ばかりでは太郎君の大將志願・次郎氏の博士希望の樣に、名あつて實なきものとなる憂がないともかぎらぬ。我等は百年の計をすると共に著々實行の功績を上げて來年の程を云はず笑らはれぬ用意するのも亦大切で、決して馬鹿論てはない、作者は一を云うて二を云はざるものと思ふ

三、かせぐに追つく貧乏なしについて

至る所生活難の聲かまびすしいのをきけば、稼ぐに追つく貧乏神が出來たかも知れぬけれど、どんな世の中ても實力に對する報酬は割合に正確てある、一つ稼げば一歩福の神に追つくのだから、追つて來る貧乏神も忘れてはなるまいが、近づく福の神も忘れるには及ぶまい、追ひつく貧乏神ときいて驚くにはあたらない、まあ失望せぬのが大切てあらう。

（評）四駁程には痛快ならざれども、うき世の辛酸を嘗めたる者ならては言ひ難き所なり、亦傾聽に値するの說。

秀逸

○交友論

芝　椎野白露

世人交友を説く必ず「水の器により形狀を異にし血に交はれば赤くなる」の諺をひき惡友と交る勿れといふ、生を天地間にうくる者何人か短所なからん、また何人か長所なからん、然らば惡友の短所とする所を見て直ちに惡友其者を擯斥するは當を得たるものと云ふべからず、寧ろ大に見るべくとるべき長所あるなり、惡友に交る勿れといふは早計者の言のみ惡友の長所、良友もとつて尙ほ改進すべきなり、翻つて惡友を見んか、彼等が忌むべき短所必ず彼自身の天性にして然るものに非ず、偶ま以て境遇の然らしむるもの、豈改善の道なしとせんや、故に一朝彼等の悔悟せし者を見よ、彈力性の物質のなす如く大に反動の伴ひて優に以前世人が見て良友となす者を凌駕するもの往々あり。何ぞ不孝なる同胞を改善せしむるの心なくして、却て之を恐れて遠ざからんとするの罪深きや、是に於てか惡は益々惡に、結局救ふに途なきに至るもの多々あるは事實なり、故に吾人は言はんとす、須らく惡友に交はれ、勉めて彼等に交り而して彼等を感化せよと。

（評）淸濁あはせ呑むの槪あり、而も斯の如きは偉人傑士にして始めて望むべし、凡庸の徒にありては危し危し。



春雨　豊橋のぶへ

○精神脩養

岐阜　錦汀子

大なる慰安を有するものは大なる幸福者なり、綠蔭淸泉湧き涼風起りて其處に夏の慰安あり、爐邊暖氣生じ團欒開かれて冬の慰安あり、前途茫たる砂漠の旅行者も一のオーシスあるが故に慰安を得ること大ならずや、然り而して人生の行路にも豈また一の慰安なきを得んや、然らば人生の慰安とは何ぞ、曰く精神修養なり、乃ち自己の精神に確固たる立脚點を定め、紛糾錯綜せる人生の安住の地を求むるにあり學問の必要、宗敎の必要、茲に於てか起る、而して精神修養の道程は、進むに從つて慰安ます〳〵大となる

べく、幸福またます〳〵大とならむ。吾輩先きに精神主義の福音に接してより、脩養日を經るに隨ひ彌々慰安大となる、内心の怡悦禁ずる能はず、然れ共吾輩豈濫に他を强ふる者ならんや、唯來つて吾輩と共に此福音に接し處世の安住を求めんとする人あらば、提携して共に修養を積まんと欲するのみ。

（評）憾むらくは龍頭蛇尾に終れり。

○偶感

横濱　山口直子

「受くるより與ふるは幸なり」とは聖者耶蘇の言である勿論我々が人に物を與へて其喜びを見た時は實に何とも云へぬ嬉しい感じがする、然し世の中には其幸なる心を自身の心得違から直に不快の念に打消してしまふつまらない人もないてはない、例へば小兒に玩具など與へた時、一度其無邪氣な感謝を受たら最早それで澤山であるのに猶自分を長く記憶して貰ひたく又其玩具を長く保存されたいなど〻欲の心を起すからこそ直に眼前て騷さる〻樣なことがあると遂腹も立ちたくなるのである、故に我々は與へると同時に最早其事を忘れるのがよい、能く扱ふと惡しく扱ふとは向ふの人の勝手である、只其瞬間の感謝を受けて共に樂しい心を持つたら其て目的を終るのである。然らば受ける側の人は幸てなからうか、其は人によつてゞある、今自分の前に或人が深山の塵を積んて之を與ふると云うたら、確かに自分は嬉しくない、大迷惑である、然るに之を適當に處置し能ふ人に與へたなら、必ず喜んで受け、よく利用して己れを益し、又人の便を謀ることが出來るのである、故に我々は受くると同時に責任を思はなければならない、責任と共に受くる人には、きつと自ら幸福が來るのである、

（評）受くる者と與ふる者との心得を論じて、よく時弊に中れり。

○漫錄

周防　岡部佐保子

○元祿風流行し、海老茶袴流行す。總て最も新しきものは、最も舊きもの也。あゝ枕草紙を除いたる清少納言、和歌を除いたる和泉式部の現はるゝ亦遠からじ。

○夏外套に暑さを堪へる位は未しも、一命かけて華嚴よ淺間よと後れんとを恐る。あゝ流行の寵見たる、亦難い哉。

○物質の聲は自ら歌の響あり。物乞の聲は自ら世を嘲笑する餘韻あり。

○大晦日の雜沓は淋しく、春の寂莫は陽氣なり。

○春、春らしく、秋、秋らしきは尤なり、春の戀猫は秋の如く、小春日の猫は春の如し。

○自然は科學の到達し得る以上也。之れを信仰せずして何れの日かその解決を見む。

○火吹達摩は自ら火を吹いて、火中に陷り、人は自ら不幸の野を耕して、不幸の種を蒔く。神何ぞ與らむや。

（評）自然は科學の到達し得る以上也の一語、陳腐なれども眞理也。

短文

編輯局選評

二等

○成田のまち

千葉縣印旛郡成田町　小倉秋風子

森に夾まれた成田の町は、瓦屋根がづらりと並んで、北は赤土を露はした山脈が公園となつて紅白入亂れた八重櫻、此處彼處まて一望爛熳、颯と吹下す山風に幾萬の花片が吹雪のように空一面、やがて舞ながら成田の町にふり掛てくる。

不動明王、利劍を以て拂ふ。

三等

○五人で投書

福岡縣嘉穗郡穗波村大字秋松　林　洗耳

お父さんは萬朝へ兄樣は太陽へ、次の兄樣は中學文壇妾が女子文壇で妹は少女界、月の五日には私皆んなの原稿をつゝんで町へ出しに行ます、そこで歸りには、道端のお地藏樣へ何も漏れ無い樣にとお頼み致します。

是より投書地藏に參詣多し。

四等

○春

攝津西ノ宮　森井せい子

ほこ／＼と暖うなつて庭の櫻も咲き初めた、野へ出るといろ／＼の花が咲いて美しい蝶がとんで居る、おゝ春よ、いつまでもいつまでも、去らずにゆかずに春の世であれと。

斯う云ふ文章なら、少女の方にも書けるでせう、文章は是で澤山なのです、能く春に付いて思ふ事が言へてるじやありませんか。

五等

○針箱

熊本　江副ちかつる

私は、お裁縫初める時と止める時とには、必ず針數を調べて、そして針箱の内外を美しくいたしますの！家の整頓不整頓は、その針箱を見ればすぐに分ると私の母がいつもそう申しますから‥‥。

皆さんもお聞きなさい。

秀逸

○我宿の神々

福岡　吉子

姉樣は春の神やさしく溫く麗しくさながら佐保姫の樣に兄樣は夏の神勇ましくたの

短文

もしく繁れる森のやうに母樣は秋の神なさけ深く慈愛にとんだ立田姫の樣に父樣は冬の神嚴しくいさぎよく我宿のかためてある。

信あれば德あり。

○本屋の朝の客　越後　長澤みすれ

一番先にいらつしやつたのが、小島先生の奥樣で料理の友を買ひに、御隣りの進さんが、秀才文壇と、女子文壇を、見た事もない、十四五の女が、少女界二冊、暫くして、ゆうれい塔が有りますかと入つて來たのが村美人の御里さん。

月の初め。

○詩神湯　多摩村　横倉たまえ

學校から歸つて來たら待ちに待つて居た女子文壇が机の上に待つて居た、急いで明けて見たら矢つ張り…………『何故妾の文は斯う出ないのだらう』と思はず嘆息を洩らしたら妹が次の間から這入つて來て姉さん夫れぢや其所に出て居る詩神湯と言ふのを買つて呑んだら良いてせうつて。

廣告の功能。

○せつぶん　長野縣　山田くに子

豆を撒き終つていつもの通り、殘りの豆五合程を、桝のまヽ三寳にのせ、さて各の年數程つかむのです、思へば鬼は外福は内と、祈り育つた十八年の、年毎增し行く豆の數のやがては此手一パイにつかんで、孫と一緖に數へる程に成るてせう。

一家合せて二合五勺の年。

○男の子　水戸　重子

私は六人姉妹で皆女ばかり去年生たのが男で其はく皆が大さはぎてす中にも父樣は少しゐないても直ぐ何うしたと聞にきます。

坊や、坊や。

○厄年　陸奥　林貞子

母上の仰せに、私は今十七才の厄難拂だと恭しくお膳にお燈明を添へて神前に額付きました而してお祈りを捧げられたのです。

母は何と祈つたてあらう。

○お產　信濃　吉江廣子

今私の宅にお產があるのです。燈火の影薄暗き產室の中に顏色蒼白めて枕頭の母樣に縋つて苦しんでゐるのは他家へお嫁に行た姉樣です。醫師と產婆は右と左に座つて產婦に注意し枕頭には父母兄上妾がゐますあゝどうしたらいゝでしやう。

生の苦痛。

○チルのはし　麴町　山岡ふみ子

私此の間から心がけて衣服のあまり襦袢の袖のあまりの赤白縞のフランチルの切をためましたそうしましたら何時か手函は一ぱいになりましたからいろ／＼考へて勉强の餘暇にはいて自分の座蒲團を縫ひました美しくつて且大へん暖かて御座います。

つゞれぶとん。

○郊外の春　麻布　秋山　澄子

草に投げた足の先には白い菫が一塊、右手を伸ばして摘むと其儘其手を後へやつて寫生帖を引き寄せる、菫は自然と栞になつた、ごろりと横になるとつひ目の前は筑波山が紫に霞んで、うしろの方にはかすかな濤の音。

氣取屋さん。

○習慣　岩代　ちよ子

ボン／＼時計がこはれたので、時計修繕所へ直しにやりました、すると、家の人は皆、時計のない柱をちよい／＼見るので、是れが習慣つていふだんべいつてばあやがいふので皆、大笑ひしました。

昭代の姿や、漢語をあやつる。



春の海　北品川　丸山たつ子

○三匹の子猫　岩代　池上きわ子

家の可愛らしい三匹の子猫は昨日嫁入りました、一匹はお向ひの後家お婆さんのうちへ貰はれ、一匹は一軒おいて隣のさる官吏の家へ、一匹はうちへくる八百屋が貰つて行きました、どの猫が一番幸福でせう。

八百屋のお千代は離縁となる。

○雛の隅　近江　きん子

蒔主のなき煙草に伯父樣は過料を出されたが、蒔主のない油菜には春が來て、知らぬ間に花が咲いた、小蝶が嬉しそうに戯むれて居ます。

蝶と菜の花に戀の科料を取る。

○私の希望　山城　柴田しな子

母樣が私に牛によく雑水を飲せば後て乳が澤山出ると仰有つたから毎日私が飲して居ります此頃は寒いので温めてやります大きくなつて乳が澤山て、可愛い子に充分飲せば私の望はかないます。

己が乳房も大切に。

○雪の紀元節　讃岐　藤　子

今年の雪は／＼とくりかへしたのも其はずか一尺二寸てすもの、丁度七十六になるおばあさんてさへ見はじめだつてあゝ一生わすられぬ今年の紀元節は大雪の日

であつた。

四國富士も雪の冠りす。

○お雛樣　酒田　菊地りう子

母樣が正行の切腹の所のおし繪が出來たらお雛樣をかざつてやるとおつしやるので一生懸命でおしたが今年で三年目！自分ながらも美事に出來上つた、之で今年は好なお雛樣も飾つていたゞかれると思ふとたまらなくうれしい。

あゝ正行よ、正行よ。

○お父樣のお望み　四谷　十四子

私のお父樣はいつも「あゝ私の死ぬまで七人な一人もかけないでほしい」とお云ひ遊ばすの、ですから、私や妹や何かて病氣にならないやうに、注意してゐますの。

好い衛生訓。

○或時に　播磨　平谷たづゑ

里娘を田舍臭いと嘲る人、女學生を袴の裾て風をきるなど〻罵しる人、あまり極端じやないでせうか、私は田舍乙女も愛らしく、女學生も美しいと思ひます。今私は淸い田舍に暮して居ます、美しい女學生を羨しいとも思ひませんが、冷笑も致しません。

[illegible]の立論。

○母の病源　若狹　師田秋郊

妾ね、お耻しいことを一つ公開しましよう妾はこれ迄方々から四五度もお嫁の所望をうけましたのですが、唯だ嫌だ〳〵の一天張で皆斷つてしまひました、そこでお母さんが非常に御心配なすつたものと見へて此頃は床に臥いて居らつしやるのです、吁！自分は何したら良かしら。

お嫁に入らつしやい。

○春風　南品川　風間彌壽子

紅梅が池の面に散つた、鯉がパツクリそれをのんだ。柔い風が私のほつれた鬢をなぶつた。

即興。

○鼻の色々　北海道　くれなゐ子

俗に團子鼻とかいふ優しげなき大きな鼻天狗の鼻のやうにさきの尖た高い鼻、鼻柱の挫けた鼻段のついた鼻、孔の上向いた鼻小鼻ばかりのいかつた鼻、おなじ樣でも違ふ鼻の色々見來れば面白いものである。

鼻の養生はかんじんですよ。

○野の十分間　神戸　谷輝

きれいだわ姉さんほんとうにきれいですのねあれ〳〵蝶がとんできてよ、豆のお花にとまつてよあら蝶のゐ父さんがきてよ蝶がをんぶされたは姉さん妾もをんぶ

して下さいな蝶がをりつこしたは妾もをりるは。

蝶よ、ダンスをすると退校を命ぜらる丶恐あり。

○大原女　京都　蘭子夫人

未だほの暗き鞍馬街道を俚歌唄ひつ丶行く三人の大原女頭には山なす薪を積みて。

彼女等は生活の爲に都に向つていそぐのである。

京は物賣る女も美くしく。

○かたみ　熊本縣　土生　葩水

あまり丈が長過ぎるので、貰うたまゝ、簞笥にしまつて、それなり忘れてゐた、姉さんの片見の此飛白、今日、土筆を見て、ふと思ひ付いて、出して着て見たら丁度好い格好！おゝ、さうよ、もう二年になるもの、まあ、忘れてしまつて。

弗、忘れ形見。

○三年ぶり　滑川　Y　T

妾は渡淸してから丁度三年に成りました處が御父さんや御母さんの膝元が戀しくなりましたから御兩親樣の寫眞を取よせて見ましたが大見變御顔の皺のよつたこと私しも御父さんや御母さんの樣に年が老たか、自分には少しも分からん年の老る事を思へば時計の針のかちかち鳴る音を聞くのも妾いやよ。

時に老若なし、人間自ら老ゆるのみ。



花粉　八王子町　乙姫もん子

○花の世界　大阪市　草の子

春の神「きをつけイ：：」梅の花櫻の花菫の花と色々の花は列を作りました。「とつかん：：：」と、春の神は號令しました。はらはらと美しい花は庭一面に落ちました。

殺風景＝活風景。

○蝶のまひ　周防　はる子

毎朝早く起きて、お書齋の戸を開け放つ、前は一面の菜畑で黄色の花が燃え立つて居る。筆を執つて歌を書き初むると、朝風がさーつと渡つて、机の上に甘い香を運んだ時には早、白蝶黄蝶が五對三對ひらひらと舞ふのである。

忽ち百羽となり千羽となる。

○妾の資産表　下野　榮谷德子

借方机本箱化粧道具鏡臺袴　教科書現在有金八拾五錢
貸方下宿料月謝本屋。

無配當。

○新聞配り　府下　寺澤みづゑ

毎號女子文壇を頼んで買ふ此村を廻る新聞屋さん。其新聞屋さんは馴々しい温順な人です。片田舍故、此邊へ廻つて來るのは正午頃で、大概私の家で休み乍ら晝食をたべられます。私は其内三四十分間種々の新聞を見せて戴きます。是が私、來る日〳〵の樂よ。

のんきさ、羨むべし。

○叱られる　長野縣　桐原梅香子

夜更けるまで勉强した加減か今朝は非常に寢床が戀しい、姉チャンもう八時だよと弟に云はれたので吃驚してはね起きたら枕元の「ランプ」と衝突……あはやと思うと「ホヤ」と「カサ」は微塵になつた、はつと思つて一足出ると昨夜大切にぬいて寢た横櫛は眞二つ……。

姉さん、帶がひきずつてるよ。

○まどろみ　京都府　吉田澄枝子

しんしんと更け行く下宿の二階、薄暗い燈を友の私は、いつの間にか、戀しい故郷へ歸つて柴の戸近くに佇んで居た。内にはお母さんが綿をつむいで居らるゝし、妹は其側で編物をして居ると思ふと目が覺めた、其翌日お母さんから綿入、妹から手袋を送つて來ました。

想ひがとゞいて。

○新築　下總　白梅女

此間から私の大好な昔のお城の跡の景色の好い處に新築をして居りますのよそれでお父さまはお座敷をお母さまはお居間をお兄さまは御書齋を私は勉强室をそれ〳〵竹やはお勝手元をしきりに氣を採んでをりますのよ早く出來上つて住たい。

地下室は如何。

○希望　大阪　倭文子

卒業證書を握つた幾百の女學生は、これから愈々希望と云ふ道を辿つて行くので御座います、そして遂に其の極に達し得らるゝ人は幾人あるでせう。

サア幾人あるでせう。

○私のねがひ　麹町　淺井千鳥子

毎日〳〵小言を云はれながら、兄樣に「桐の落葉」の琵琶歌を教へていたゞく。あまり私が節が下手なので、兄樣はぢれる私は泣く、けれど何んでも覺えたいので習つて居ります、何日か上手になるでしやう、神樣もお聞き届け下さるでしやうねえ……。

特師一到。

○親心　　府下　森田ぶん子

麗しい山茶花の木の枝に粟雀の巣がありましたから大いばりで取て來ますと母様は、お前そんな徒をしてはいけません早く元の所へ返してお出此後そんな可愛そうな事をするとお前もかまいませんよと叱られて元の所へは置いたものゝ又行つて見ますと最早、巣は運てしまひました。

轉居先の番地も知れず。

○繪屛風　　波島　工藤以津子

私が寐る枕元へ毎晩立廻す六枚折の繪屛風、孝子が奇しき水を瓢へ扱み居る養老の瀧、景色よき近江八景、其他美しき種々の風景花鳥の繪が大小合せて二十幾枚、噫妾は未だ此繪より外では見た事のない是等の風景や土地を毎夜衾の中で色々と想像するのである。

○眠る時　　麹町　山下里子

私の祖母の眠る時は、こう云ひます、ねるぞねだなきるにたるきはりまるた何事あれば起こせやのむれと、三度申します、こうすると安らかにねむれると固く信じて居りますのよ。

○一日の仕事　　滋賀縣　川島崇子

朝は早うから臺所の掃除して、それがすむと色々の面白い雑誌や、有益な書物を見ますの、晝からは母上の手傳に針仕事して、日暮になると妹の手をひいて、散歩に出るの、そして夜はひつそりとした書齋で文章や和歌をつくるのです。

○樂しい春　　日本橋　神翁きよ子

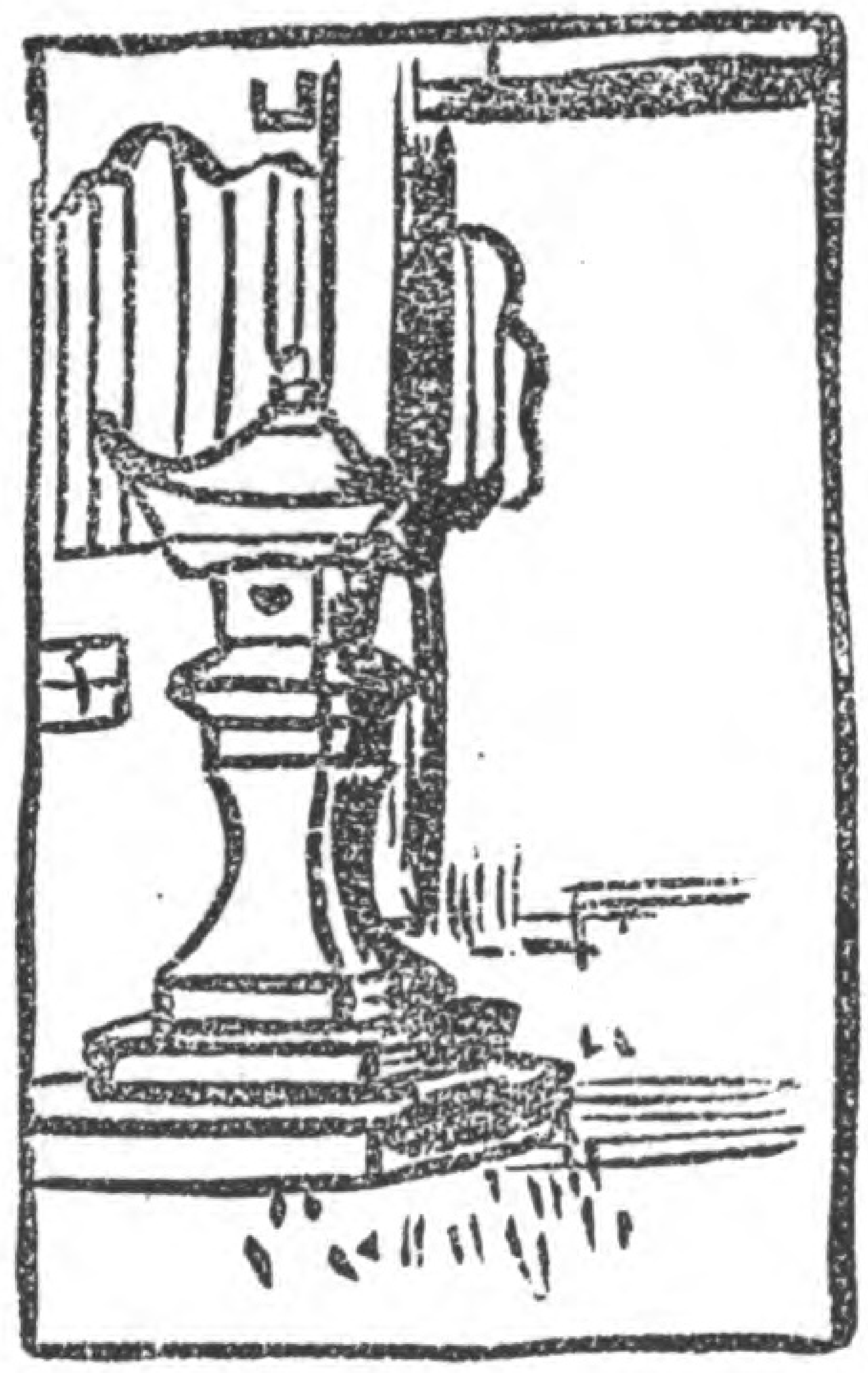
隣りの花子さんの家には梅が美くしう咲いて居る、私の家には鶯が面白そうに籠の中を遊んで居る、隣りから芳ばしい梅の香を送くれば、此方から朗かな鶯の音を返し、此方から梅の歌を書き送くれば、彼方から鶯の詩を返す、私はいつまでも此の樂しい春で欲しい。

○親心　　麹町　長谷川なを子

妾は此間一寸用事がありまして九段まで參りますと丁度坂の中程の處に女の乞食が三ツ位の子に泣な／＼と風の身にしむにも己れが肌の顯はるゝも知らず、我子よかれと着物を着せていました、人には上下こそあれ親の心は皆同じ事と思はず親の有難さに袖を絞りました。

○歸り路　　遠江　宮城梅子

學校から歸つてくると路ばたに一匹の親犬の乳房に五匹の可愛らしい小犬が集まつて居る、おおあの仲のよい事、そして五匹子を持つてる彼犬は何歳でしよう●



石燈籠　　陸奥　松尾ちよ子

○妹の髮　　長野縣　成澤九女子

今は夜の十時妾はねようと思つてふと見ると宵のうちに結つてやつた妹の髮がつやつや／＼と、くづしもしないでねてゐるあゝ今頃はどんな夢をみてゐるのだろう髮をみださないといつて先生にほめられた夢でもみてゐるのではあるまいか。

○はと　　横濱　むらさき

八幡様のお宮の前で三歳許りの可愛らしい女兒が母の撒ける豆を爭つて啄む鳩を兩手を擧げて追ひに行くとパタ／＼と飛び上る羽風に時ならぬ花吹雪優しい母様は嫣然笑つた。

○櫻　　　渡島　野ばら少女

去年火災に罹つて後方半分燒失した光善寺の櫻は、今春前方半分八重の花美しう咲いた、けれ共去年の様に短ざく付ける人も、櫻餅屋もなく、傍の大きな金佛様は長い春の日を退屈氣である。

○水仕事　　　愛知縣　高仲蓉子

冬風の寒さに、おろ／＼として學校から歸れば、まあ母さんはかひ／＼しう水仕事をなさつてゐる。見るからに一念發起して、さ妾がとあとをつぎさまそれからそれへと洗ひ物の最中、空合ひが俄かにかはつてこまかな雪がちら／＼と降りだした。

○美人草　　　福岡縣　浮き雲

裏の花畑は毎年美人草が奇麗に咲きます妾は見る度に五六歳の頃暖い日に母様にあまへ赤いのをもらつて土まんじゆうを造た事を思出し常に袖をしぼります、あゝ彼の奇麗な美人草今は妾を泣かせるのです。

○理　想　　　をばな

お祖母さんの理想はお寺詣りて、お父さんはお謠に、お母さんはお針、姉さんのはたしかヴイオリンだろう、私のは玉ちやん(猫)よ玉ちやんの理想は炬燵の中。

○卒業の後　　　香川　玉女

私の組は三十人餘りの仲善しばかり、今日からは皆、西東へ別れるのである、妾は二年後の同窓會て二度皆さんと逢ふ事を習つて、故郷へ歸へるのであるが、さて、其時は如何なる物語りに、其變つたお顔を見るであらうか、又、園の百合は妾を待つて居るだろうか。

○三厘の貯蓄　　　沼津　渡邊とよな

毎日三厘づゝの貯蓄、皆様御笑ひ遊ばしますな、三百六十五日積めば、一圓と九錢五厘、こうして蓄めたお金を、私は毎年、愛國婦人會の、會費に納めます。

○稚兒の姿　　　牛込　鈴立月代

古い櫻の樹を包んだ紅白の幕を靜にあげました振袖ながい可愛らしい稚兒の姿、裾より小蝶が飛びだしまして二つ三つ花片が降りました。何處からか小鼓の音、チヨンにポン／＼。

○その刹那　　　大和　和田芳子

汽車は一瀉千里の勢て轟々と、今し城山公園の松林に差しかかつた、突如聞ゆる裂帛の短笛、と見る線路の中に餘念なく遊べる愛くるしき小兒、機車は迫つて、あわやその毒牙に罹らんとする吁その刹那、小さな生命は神の手に拾はるゝか、魔の手に奪はるゝか。

○妾の希望　　　山口縣　井坂禎子

妾は出來得る丈け滋養物を澤山食べて、梅ケ谷も及ばぬ位の身躰を造り子供を拾人位は產むで、それを皆んな軍人にしてやりたい、

○さし木　　　青山　角田千代子

薔薇はさし木て、善く根が付ます、日外御友達の處から頂いて來た、白薔薇の小枝、花は其まゝおし花に、小枝は二寸位づゝ、二本に切つて日當りのよひ、そして濕り氣の有る土の處に、さして居いた、今ては枝も葉も善く伸びて完全な鉢の木となつて居ります。

○合　格　　　鳥取縣　桑本きさ子

志願者五十名の中てたつた五名危ふくふみ外さうとして運よく合格した妾入學の當時はもう夢中その嬉しさは妾一人の胸にはとても包み切れなかつた高等女學校第二學年生になつたときだもの。

○素　性　　　加賀　白菊女

妾の生れ東京にして拾五の春小學全科卒業して翌年の春花咲く頃に慈しみ深き父母の元を離れ懐しき親友と別れてこんな田舍なるお叔母が元に貰はれ今町はづれの閑靜なる所に、養母と二人暮らし妾はいと愛らしの敎へ子導く身。

○冬の夜長　　　近江　千鳥子

家内五人大なる火鉢をかこみ、父上の若き時の伊勢詣の話が出て其は可笑しいの「チヨン」髷に結ふて、其巾えお金入れ、笠を被ての姿、父上のくせの手まねをして、道中の話の可笑しさ、皆て御腹を抱えて笑ふた、其故、夜の、更けるのをも知らずに居りました。

○村の茶屋　　　丹波　不木照野

村端の小茶屋、姉を雪、妹は末、何れ劣らぬ田舍には一寸稀に奇麗な娘がおつた、て、村の若者、役場書記、巡査等、晝夜となく行つて居つた爲に此茶屋は日に大繁昌、姉は一昨年役場書記と妹は此の春山向ふに嫁いりしたと……。

○猫　河内　陸山霞子

此れ迄私は大層猫を愛し抱いたり撫てたりしてやつた顯微鏡て、猫の毛を見て貰つた、處が驚いた事には、猫の毛には卵虫が數知れぬ程くつついて、其が知らぬ間に人の腹内へは入るのだと聞いてからすつかり猫が嫌いになつてもうすれるもいやて追ひ廻すのてある。

○弟の着物　伊豆　上原靜枝子

母さん坊の着物を私に縫はして下さい、坊は何處て聞いて居たか、いやのよ姉さんは、始めてゝへたてあるから母さの縫ふたのを着たい、姉誰ても始めてゝはへたよ、私も坊の着物て習つてすえに上手になります。

○對　照　常陸　今泉鶴子

梅ヶ谷宜しくのお糸樣と骨と皮ばかりのお瀧樣、燒芋屋のお富樣と金滿家のお凝樣、嘘つきのお正樣と氣短のお久樣、隱居のお若樣と子供のお要樣、物言の忘れつぽい賢樣と長屋住いのお倉樣、荒つぽい靜江さんと優しいお熊さん、忙しいお春樣と野氣なお秋さん。

○この別れ　新潟　花枝

「それなら最う行かつしやるか」「あい、村の衆、長々世話になりやした、此後は何時遇はれるか……」と共に涙聲、正直親父と名を取つた典作と、病める妻が泣く小供を引き寄せながら、少し許りの家財をつけた荷車の後先にて見送る人に挨拶し三代住み馴れた此村を、今追はれて行くのてあります。

○夜の海　滋賀縣　伊藤艶子

一旦眞暗になつた、紺紺の空は纔て白色が帶て、遂に鮮かな月が顯れた、蓄の樣な漣波が、光りを受けて宛然、銀蛇の逡く走る樣てある、岩上の私は、白蠟て作られた觀音樣のようになつた。

○晴　着　京都　馬淵

去年の暮母樣に心をこめて新調して戴た晴着の地は羽二重て模樣は松竹梅を程よく合せたすそ模樣其を着て伯母樣處へ御年始に行つた時の姿のうれしさ。

○時ちやん　能登　天涙子

可愛お隣の時ちやんは、いつも姉さん〳〵てうるさい位にあとを追ふのです、妹のない妾にも又あの兒がどれだけ可愛か自分でも可笑しいことがあるのです、それて始めてのお方などから、貴方は好いお妹をお持ち遊ばすなどと挨拶を受けることがあります。

○美人草　福岡縣　うもれ木

大變可愛がつて居た美人草、もう大分のびて居たのに今朝お叔母樣方へ水仙を貰ひに行て歸つて見ると殘らず雛雞の餌となつて……私は腹だたしく裏の方へしかりに行きました處が雛雞は餌を貰ふかと思つて小走て集つてきました、私は覺えず、につこり、前の怒はいつしかうせて。

○春の朝　濱松　霞見すみれ

暗は漸くうすれ行かんとす。夜の空高く煌めきし星影も、野末に渡る曉鐘の音の一ツ一ツに消え行きて、疎らに殘れる星の光も漸くかすかに、靜かに眠り行かんとす。

○友達がお嫁さん　京都　白菊

お隣の俊雄さんがお嫁さんを貰ひ成さるのてどんな方かと思つて居たら私のお友達の政子さんなのよ私はあまりおかしいのてお母さんに云ひますとそんなに笑ふんぢや無ひお前も今に嫁くんだからと私をお叱りになりました。



姉妹　小國政子

○姉上の御恩　臺灣　小畑はま子

私は七ツの時から姉上に養はれて暑さ寒さにもまけずして今は女學校迄も入る事のてきたのは姉上の御影てある此迄姉上の御苦勞は如何ばかりか勉學して此大恩をむくわればｆ。

○私の一日　山形縣　齋藤良子

私は銀行雇員てす、朝は鳥と共に床を出て、神棚に向つて、父母兄弟の健康を願ひ、八時出行、勤務を終へて、午後五時歸宅、すぐ書を手に、我家の小庭にてかけ、松が木蔭て讀書一時間餘、入りて、夜は裁縫あるは、算術の練習、是が私の一日の暮してす。

○甲板上　韓國　角田矢須惠

うつすりと、お月樣もお山もかすんて居る、畫にてもありそうな、私は

涼風に面を吹かれながら欄干に寄り掛つて茫然とはやい船足を見つめて居ると何とも云はれないよい氣持になつて、丁度去年の今頃船室に苦しみながら又と船には乘らない等と云つた事を思ひ出して。

○妾の机上　羽前　渡邊智惠子

妾の机は黑ぬりの四角なの向ふて右は卷繪の硯箱インキ文ちんに親友の君より御送附の美しい栞まんなかには女學講義女學世界女子文壇裁縫のおけいこ名流理想の家庭の趣味左は太陽新報新女訓女子修養乙女の生涯なのです。

○池の面　越後　松山けん子

滿開干す婆やが家も三味に太鼓にさわいで居る料理屋の客も皆逆しまに寫つて居る池の面に靜かにむつまじく遊んで居る鴛鴦一つオヽ今また何やらさゝやいた。

○若菜つみ　備後　佐藤いち子

今日は七草、起きたらすぐ手籠かゝへて裏畑へ若菜つみにと樂しい想からさめて雨戸をあけて見ると意外‼まつたく意外だつた、昨夜のうちにつもつたのだろう、雪はもう五六寸もつもつて居る、まあ美事なこと、けれどせつかくの若菜つみは！、妾どうしようか。

○わが机上　愛宕　新風

向ふの右に辭書七冊辭書にとなれる水仙花を彫刻せし高價なる筆立と卵色の地に菫を描きし優美なる水入となり向ふの左には清潔なる白布を以て包める神のモデルありモデルの前に箱いりの聖書あり手前の右には朱ぬりの硯箱あり。

○わかれの聲　廣島縣　新見よし子

お父さんは、勉強せよといはれ、お母さんは、又早くかへれと、涙を落されました、そして三歳になる、君ちやんは、一しよに行くといつて、なくのですよ。

○眞夜中　筑前　初枝

風にたゞよふ紙鳶を梯子に、亡き母樣の御手に縋がり、空へ空へと舞上る夢のふつと破れた眞夜中。手探りに用意のマッチをさつと擦り燈燭に移すと、ぱつと廣がる光明に先づ目に入るは、……あゝ泣かずには居られない、疲れ給へる父樣の御寢姿。

○春と夏　岐阜縣　白梅子

妾は四季の中で夏が一番すき春が一番嫌先づ第一に春風に風の上つて居るのがきらひ、花咲く頃は何んだかそら淋しい心地がして、心が浮き立たなひ、夏は雨の日も風の日も燒くように熱ひ日も、ちつとも不愉快でない、わけて月清き夜の夕涼なんど……愉快なは夏。

○三日歸り　滋賀縣　伊藤登久子

今私は車の上に居るのです、前の車には嫁入した先の姑樣が黑の被布を召して、後には氣に入の竹やが土産物うづだかう前に乘せて村近く迄來ました村の人は見てなさるだろうかオヽ恥しい歸て姑樣のやさしい事を皆に話そう、其から夫の親切な事もけれど此は母樣に丈。

○雪の朝　山城　白梅子

珍らしう雪がうつすりとたまつた朝弟と共に椽側に立つて雪の氣色にみとれて居ると弟が下から袖を引いて「姉ちやん金魚がこほつて居るよ」と云ふのでふと氣がついて下をみるとうす氷のはつた泉水の面に何か枯葉が一枚こほりついてゐるのであつた。

○靜子さん　宇都宮　渡邊英子

隣りの靜子樣は、左程美人と云ふ程ではない。然し、脊格好のスラリとして、丸顏で、色は白く、生い際のよく揃ふて、睫毛よりも猶黑き髮、眉は三日月樣の樣で、鼻は高からず低からずで、實に愛嬌者である。

○妾の望み　豐前　小草子

妾の望みはね、愛らしい京人形のような妹が一人ほしいのよ、そして其つぼみのような口から姉さん姉さんて云はれて見たいの。

○火事の話　京都　前野政野

わたくしは、たばこの火です、わたくしらのからだを、人がきせるに入てのみます、そして人がのんでそこらへほつて、おくと、だんだんほうぼうひがついてきて、しまひに火じと、ゆふくらいに大ほきくもへて、きて、人てもやきころすほどてす、そしてほんぷてしてもなかなかきえません。

○すみれ　佐賀　かつら子

暖かい風が、さつと吹いて來て、今年始めて咲いた、鉢の一本すみれを、ゆら〳〵とゆつたので、ゆかしい紫の香りが、ぱつと散つて、そこら一

面にすうと流れた。

○我地方の諺　島根　鵜　子

私の地方の諺も一つ二つ申上ませう、一夜火わるさをすると寢小便をする、二夜ほうづきをならすと蛇が出る、三齒のぬけた夢を見ると親族に死人がある、四朝蜘を見れば其日の運がよい。

○逝く春　大阪市　橋本賀壽尾

手すさびなるまゝ、オルガンをかきならして、例の讃美歌を歌つて居りますと、何かは知らず、雨外に黄色い聲がしましたので、珍らしいわ杜鵑か知らんと、急いで障子を開けましたが駄目、正體はもう見えません只目につくのは丘の青柳にまじる遲櫻の見ゆる許り、あゝ漸く平和なる春は今逝かんとして居ます。

○姿の思ひ　山口縣　中津江照子

夏橙が黄金色をして、さも、美味さうに成つてゐる。そして美くしい黄金の光りを放つて。あれが、もし眞の黄金てしたら半分は、御國へ献納し、後の二分の一を女子文壇社に寄附し、其殘りは貧しい人々にめぐんでやらうと思つてゐます。

○私の仕事　山口縣　館　美　子

私は朝五時半に起き毎日工場に通ふのが常です、私の工賃は毎月六七圓ですから、僅かの食料と女子文壇一冊代又小使金を出し余は皆貯けます、夜は毎夜女子文壇を手にして下手ながらも勉强し、末は高等女學校にても入學せん、と云ふ勢て。

○待ちどうしい事　上總　野本芳子

姉樣の御出產なさるのと、兄樣のお嫁樣が早く入らつしやるのと、學校の卒業式と、女子文壇の發行日。

○二月のうれしかうた事　兵庫　浦上政子

先づ紀元節の大雪と十七日の「ロンテニス」會と二十四日の寫眞とたつた三ッ。

○春の海　牛込　川上清子

美しう彩つた夕陽を浴びて空も波も眩しい樣な橙色汀の岩に腰打掛けて恍惚と沖の帆舟を數へて居る十二三の少女「勝チヤン」と呼ばれて嫣然と後を振向いた聲の主は牛漸く童髮の松原からうれしさうに馳て來るの

○繁子と春子　紀伊　文　子

繁子は母の姉の子、春子は母の妹の子、二人とも六歲ですが繁ちやんは餘り人に懷きませず、春ちやんは姉樣姉樣と云つてくるから私は春ちやんの方が好きなんてす。

○櫻の花　大阪　片山忠子

天の宮居の佐保姬が、詩の神から紅瑠璃の玉を賜ひました、所が或る夜、玉は春の扉を拔け出てゝ、天の川を流れ、地球の世に降りました。それが開いて櫻の花となつたのです。

○湯上り　近江　今村野百合

姿見に映つた片頰の淡紅に、自らほゝ笑まれて、いざと下駄をはけば、「石鹼は」との姉樣の言葉にそこゝを見廻した末、ふと袂の重みに氣が附いて見ると、あら！恥しさに顏を袖に當つれば、まあ、今のうつり香、美しいローズの香りが。

○自然の敎訓　信濃　花　園　守

半殘の夢名殘り惜しい暖い衾を漸捨てた姿は今雨戶くり開け樣として思はずも身振ひした、おゝ寒い風！きつと霜！と裘を眺めると十四五の子が新聞を振ひつゝ新如何てやすい……。

○農家の冬春　京都府　深田富子

粉の綻方と生花のけい古を爲さんと思定めしひま多き農家の冬春百合根の仲買に拾參圓八拾錢懷中にぎはへりされどあゝ悲し陽炎燃ゆる荒起しの時機は來た。

○年老る恨　播磨　古　月　女

月日の過つのは早いものですれと云はれて、全くですわと云つてゐた昔の言葉は、唯の御挨拶で眞からてはなかつた。今十七才の春、小學を卒へて既に二年、姉に嫁がれし今こそは、眞に流水の如き月日を惑じて心細い。

○太平洋の曙　宮城縣　は　ま　子

富士山のやうな龜山、綺にかいたやうな觀音堂、それに太平洋て洗ひあげたやうな雲が、海の上から、すーつと棚引くと、それはそれはきれい、私は毎朝この景色を見るのが樂み。



三等

○着物の長け　高崎市鶴見町　峰岸民佐子

甲女「貴孃は着物を何寸着なさるの。
乙女「私ですか私はどうしても二丈六尺着るのよ。

四等

○試驗の成績　石川縣金澤市長町七番二十四北五三郎方　北りん子

甲「あなた今度の試驗の成績はどうでございましたかさぞ御及第てしたらうね」
乙「いゝへ」
甲「あらうそ、落第したの」
乙「いゝへ」
甲「やはり及第したのてしやう」
乙「いゝへ元の通りてした」

五等

○暗示　紀伊よし子

母親「露ちやんなぜそんなにだゞをこねます」
子供「お菓子ほしいんだい」

○誰の子　後志北海女史

先生「皆さんは何誰の子てすか」
男生「お父さんの子てす」
女生「わたしはお母さんの子てす」

○名醫　德島縣　靜嵐子

病者「よほどよくなりましたが熱のせいか余身がかゆくてしかたがありませんから御藥を、」
醫者「それては此孫の手を差上げます。」

○大丈夫　牛込　川上濟子

母「坊や學校へ行かないと遲くなりますよ」
坊「大丈夫てす今朝は時計が止つて居りますから」

○實驗　筑前　河村みどり

ハイカラ女學生
『あの白菊樣貴女は失戀の小說計り御書きなさるのね』
『ハアあれは皆姿の實驗なのよ』

○一人子　岩代　ちよ子

腕白な生徒に向ひ
先生「お前は家に居つたらきつと兄弟爭ひをしてお父樣やお母樣に御心配をかけるだらう」
生徒「イエ先生僕は兄弟爭ひはした事はありません一人子てすから」

○ハイカラ　青森　進藤花子

妹『兄さん、そんなに高襟にしてお身體が不自由てなくつて』
兄『いや首だけさ』

○病人の祈　石狩　繪澤元子

甲「オイ君そんなに騷いては困るよ僕の所に大病人があるんだよ」
乙「イヤ君そんなに言ひ給ふな僕は今一生懸命に君の病人の祈をして居るのだ」

○結婚期　印旛　花枝女史

甲娘「女子の結婚の時期は幾つが丁度よいてしよう」
乙娘「十九頃てしよう！」
甲娘「そして貴女は今いくつなの」
乙娘「十九」

○モデル　大阪市　蝶

「先生此美しい女のモデルは誰てすか」
「貴女てす」
「能く出來て居ますこと」
「いや書き損ひましたのてす」

○半分　大阪市　川合ふさえ

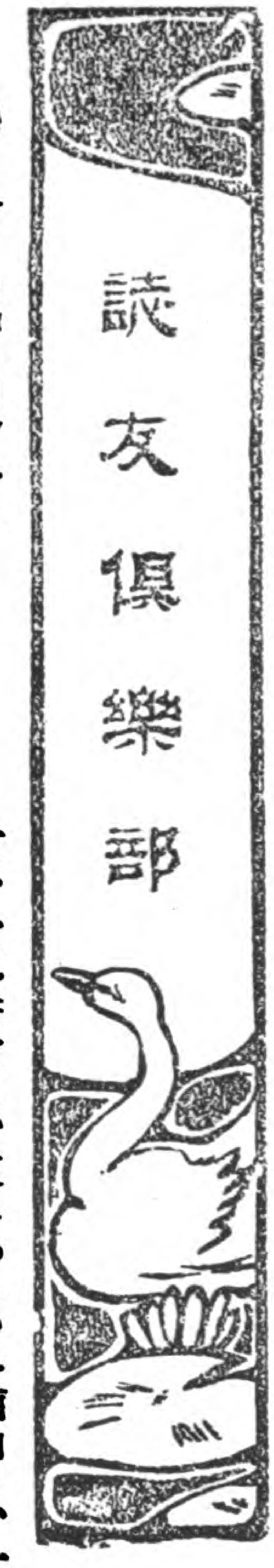
母「英ちやんが六つて、美ちやんが三つだから美ちやんは英ちやんの半分よ」
英「じやあ私が十になると美ちやんが五つね」

○言ひつけ　山口　井坂祕子

母「靜ちやんは何故あんなに書齋をするの」
靜「だつて今朝お母さんが何もかも晝の間に濟まして置けと云はれましたから」

○價千金　武藏　色摩秋水

主人『君は何んでも他人の物に直踏していかんと注意します、實に先生の御教訓はあたへ千金てす』
其他人に對しても失敬だから注意し給へ』
書生『はい、誠に申譯けもありません以後はきつと注意します、實に先生の御教訓はあたへ千金てす』



○各地通信

○女子實業學校

丹波 森田糸子

私の住所綾部町は戸數わずかに六百餘の小都會てありますけれども三年前より坂鶴鐵道もつき近々京鐵もつゞく事とて年々商業も繁昌――取りわけ蠶業は盛にして郡是製糸會社ありて女工七百人をつかひ又此四月より女子實業學校も出來まして此の片田舍でもいながら勉强が出來るようになりました。

○松江より

松江 長谷川信子

私どもの住んて居るこの松江も日々文明に進んて鐵道電話などの仕事中てすよ。今年工業學校が出來ました。其他都會にあるような學校もあまたありますよ。

別して本年は五月頃 皇太子殿下行啓ましますので其準備中てす 城山公園はこれが爲先頃修繕がありましたこゝの名物は皆さんの中御存じの方もありませうが櫻餅てす 御遊覽の節御風味なさい。

○七不思議

長崎山 茶花

當地ては此樣な事を云つて居ります 寺もないのに大德寺平たい所を丸山と、櫻もないのに櫻馬場古い宮を若宮と、東にあるのを西山と、大波止の彈はあれども大砲なし、しやんと立つたる松の木を下り松と、是ぞ長崎の七不思議とまうします。

○薩摩の方言

鹿兒島 菊子

薩摩の方言は、なか〳〵面白いのてすよ、左に其の一二を御通知申上て見ませうか。然し普通の人々は、大方こんな、方言は用ゐません只、下等の人や當地の田舍ては、やはり用ゐられて居ますよ。

ヒツカブイ(臆病者)、イン(犬)、アマン(酢)、アンサン(兄樣)、エリロポ(醉人)、オドモン(横着者)、ソメン(素麵)、チヨチン(提灯)、テガン(手紙)、ニセ(下男)、ヅンパイ(澤山)、

○佐倉高等小學校

一讀者

佐倉町立の高等小學校はいと靜かなる所にあり敎員十數名にしてよく指導し信用多く生徒約五百名にして縣下に成績のよきを以て去年縣知事より銀盃を戴き郡長より賞旗をたまわる

○新旅團

岐阜 ○○生

當地は兵營がありませんから練兵などは見ることが出來ませんそれてたまに他所から演習にても來ますと隨分な見物人てすそれても今度は旅團が置かれるそうてすから始めのうちは澤山な見物があらうと思ひます。

○京都より

京都 山口直華

去る四月三日神武天皇祭の佳辰を卜して東山々麓の久昌院と云ふお寺て京都日出新聞投書家の第三回懇親會がありました集た人員は八十名程て同新聞の記者や知名な文士畫家其他隨分見えて居りました開會は正午て餘興には少年茂山眞一のお伽狂言や演説落語などわけて長谷川欣子君や丸山鶴野孃などの琴(泣薫氏作のおもひて)など奏てられ。福引、スタンプなど中々繁昌にて散會は鳥の塒急ぐ五時半なりき。

文學顧問

問 からす丸帖と申す習字手本は幾册て終りてすか價は何程位てすか(東京下谷根岸嶺子)

答 「からす丸帖」(橘千蔭)全一册定價三十五錢 博文館發兌

問 記者樣私多讀は大變に好きて隨分熱心に讀みますが作が嫌いて困りますどうしたら作ることが好きになりますでせう(岐阜花村浜子)

答 讀むだけても結構じやありませんか。

問 東京市の内に新體詩ばかりの雜誌發行所は有りませんか。亦初心者に至極適當の新體詩作法の書籍は有りませんか。是迄出版のは五十六種も有ますが皆氣に入りません(京都市御幸町御池下ル島田千代)

答 今の處てはどちらもありませんが、頓て出來るてせう。

問　東京に學校でなくて音樂を敎へて下さる所がありますか又音樂の雜誌見たやうのを發行して居る所がありますか（山梨よれ子）

答　學校以外に音樂を敎へる處は市内にいくらも出來たてせう、音樂の雜誌は「音樂」「音樂新報」などあるやうです。

問　憧憬の意味を問ふ（福島師範かすみ子）

答　憧憬はあこがれと訓む、もと〳〵あこがれあこがるなど丶動詞であつたが、新體詩にはあこがれと云ふ名詞になつて來ました

問　東京市麹町區有樂町一ノ五シンガーミシン裁縫女學院の事をお敎へ下さいな（栃木、千代子、岡山、ミトヤ）

答　詳しい規則は同校から直接にお取りになる方が分るてせう、評判は惡くありません、實地の稽古には適當した學校てせう。

問　私は漢字をよく知りませんのてどうぞ實用にかなふた字引がありましたら代價をお知らせ下さいませんか（森井せい子）

答　一時の間に合せものなら地方ても大抵の本屋にあるてせう、宜しいものなら、三省堂の漢和大字典（定價四圓）

問　女子職業學校の所在地は（印幡湖上の女）

答　神田一ッ橋外。

問　記者樣三宅克己先生のお住居は何方でございませうか（さだ子）

答　東京府下淀橋町字柏木四〇七。

問　記者樣夜雨先生の詩集花守は何處の發行で定價はいくらてすか何卒詳數御敎へ下さいまし（波島春園）

答　「花守」は京橋區尾張町一ノ一隆文館發行、定價五十錢郵稅四錢。

問　私は生れつき愚な者てありまして後來それを以て世に立つなんと云ふ考はありませんけど小說がすきてすきて家事の餘暇に作つて見ようと思ひます、修養するにはどんな本をよめば宜しいでせうか、御願で御座います御敎へ下さい。（失名女）

答　小說の修養するには、小說を讀むのが一番宜しい、くだらぬものでなく古今の傑作を讀破しなければいけませぬ、それから世間の觀察も一つの修養です。

問　巖谷小波先生の御住所はどちらてすか（神田漣月）

答　芝區高輪南町四十七。

▲記者曰、文學顧問は未だ餘り多數に參られど、追々參れば答へるつもりです、但し要領を得ない問には答へません。

諸孃と記者

○私はまことに貧民にして毎月の前金を送る事が出來ず本屋より買ひもとめ居り候ひしが投書致してもよろしう御座候や若し御ゆるし下され候や右御たづね申上げ候（伯耆西村照惠）（記者曰、御遠慮なく投書して下さい）○記者さんお達者てすか折角の博覽會も開場以來雨や雪の爲めに大變でしたれい私は都の有樣などを親切に知らせて下さる優しい小野喜代子樣高橋さく子樣と云ふ二人のお友達が東京に出來ましたよこれも皆本誌の賜物と深く感謝致して居ります時節から御自愛遊ばしませ（芳枝）（記者曰、東京に友人があると幸福てす、何かの樣子が能く分ります）

○記者樣私は神經衰弱をやりまして先月學びやも退りましたあわれなものです今度始めて小說を造りましたから御送り致します衰弱した腦をしぼつて作つたものですどうぞおかしいのですが御目どほしを願ひますそれから誌友倶樂部てもつて御交りを願ひましたところ牛込谷町に一人のしたしい友を得ましたこれも皆記者樣の御かげと謹上て御禮申し上げます（高木とめ子）（記者曰、神經衰弱はいけません、御養生なさい、御親友が出來ましたそうてすが結構てす）○記者樣私しすい子てはありませんつい子てす前號にすい子と記入してありましたがあれは活字の誤植てしたか、然し御蔭樣で諸方から澤山交換や交際をして下さいました方が大變ありましたから厚く記者樣に御禮申上ます、尙男子の方も四五名ありました、私し大變困りましたが返事せぬことにきめました、記者樣よいてしようか（伊勢龜山東町山門つい子）（記者曰、折々活字に誤りがあつて皆樣にもお氣の毒てす、男子から參りましても交際が出來なければ出來ぬと云ふお返事を出した方が宜しいてせう、再三はお返事するに及ばないとしても）○記者樣一寸お尋ね申ます和歌や俳句は姉妹別紙に認めて有ましたら同封にしてもかまいませんか敎へて下さい（りやう）（記者曰、かまいません）○記者樣女子雜誌ては本誌が一番よ、誰にきいても評判が良いのですもの、此後はます〳〵發達させて下さいな、それからられ繪葉書はどうゆう風にして、交換したらよいてせうか、記者樣は未使用と未使用てないのと、何れが趣味があると思召すの、敎へて頂戴な。世の中にはずるい方

があつて、はがきを差上げても御返事のない方が澤山あるのよ。(沼津の里、ちよ子)(記者曰、お褒めにあづかつて難有う、此上とも出來るだけ雜誌は善くしたいと思つてゐます、さて繪ハガキ交換法に就いてお尋ねてすが、使用、未使用は其人々の好惡に依りて趣味もちがひませうけれど、郵便に出して、消印のあるもの丶方がほんとうにハガキとして價値はあるので、消印の無いものなら只の繪畫がハガキの形にしてあると云ふに過ぎないてせう。又返事を送らない方があるさうてすが、然う云ふ方は何うせ世の中から捨てられる時が來ます)○私はやつと十五歳に成ります女子文壇が次第に盛に成て來るのを見てはどうしても自分も出さずには居られません其で始めは沒書されても一度は紙上に出る事がありましようから投書致します、記者樣よろしく御願申します(佐世保田中要子)(記者曰、上手なら治めだつて沒書にしません、其代り下手ても一生懸命におなりになつたら必ず出ることを請合ます)○記者樣私は今月始めて當地の本屋で御社の文壇を買ふて讀んで見ましたが大そう面白くて爲めになる本れ私は何も出來ないものてすが和歌や俳句など投書して見ようと思ひますが直接に本社から取て居る人てなければ投書されないてすか是非次號て御答を願ひ申します(羽後増田伺ひたい女)(記者曰、直接てなくとも投書は御自由に出して下さい)

繪葉書交換

○私の許に不用の書籍や雜誌澤山ありますのよ御望みの御方は美はしき繪葉書(短文にて)可成は粟にて申こみ下さい先着六拾名樣まて速時差あげます(岐阜縣下飛驒國大野郡高山空町三千六番戶住嫩葉)○妾は善光寺參拜紀念スタンプ付の繪葉書を澤山持つて居ります上等繪葉書と御交換して頂戴な又名刺の交換も願います(長野縣下高井郡日野村牧野芳枝子)○諸嬢樣私にも末長く繪葉書の交換をして下さい(神戶市旭町通四丁目三十三番屋敷細川貞子)○繪葉書、寫眞の御交換を願ひます、御返事には、御はづかしうは御座いますが妾の寫眞を差上げますから、(神戶市三宮町三丁目一六三ノ一高橋ゆき子)○誌友の皆樣何卒繪端書の御交換を御願ひ申します先着十名の御方には耶馬溪の繪端書一組づ丶差上げます貴孃方の寫眞御送り下さつた方には不束ながら私の寫眞を添へて差上申します(大分縣豊前中津片端町秋元方相良文子)○妾は繪ハがき數百枚を持つて居りますが其の內觀艦式と大觀兵式紀念が缺けて居ます御持合の人は御送り被下ば屹度相當なる返禮をします(安藝國津田村日呂金ふえ子)○繪葉書の交換をして下さいませ御送り下さいました御方えは必らず〱東都又は東都近邊の景色のにて御返事します(東京神田錦町三丁目七菅能美保子)○繪葉書の交換を願ひます、畵面には歌か俳句だけを書いてお送り下さい本月三十日を〆切と致しまして上等五名樣には別に粗末な寫しゑを添へてお返し致します(兵庫縣明石郡櫨谷村ノ內谷口村藤田道子)○どうぞ皆樣外國繪葉書か圖案のを御交換して下さいそれに肉筆水彩繪葉書の御交換を盛んに願ひ升互い御方十名には明星繪葉書て御返し致します其他は自筆て、また御出來になる方は俳句か和歌を一二首書き添へて下さい御返しは致します(千葉縣成田町川島ふぢ子)○繪葉書の上等を送つてくだすつた御方には佛國製(一枚五十錢以上)繪葉書を二枚送りますよ、(福島縣信夫郡野田村よしの要三方よしの櫻雲)○天が下の諸孃樣方よ私と繪ハガキや寫眞。栞(但し絹製)ヒナカケ。及び玉章の御交換を下さる方は御座いませんか廣い東京てすもの皆樣の御望みのもの必ず〱御送り致します若し私に不正が御座いましたら誌上て如何樣發表されても決して苦しくは御座いません成るべくは東北。關東。關西。の方々と末長く御交際を願ひます(神田區柳町二番地早坂樣方榮子)○妾は今迄知合ひの方とのみ繪葉書交換を仕て居ましたが其れては何だか物足りませんから今後は廣く御交換を願ひたくかれこれ注文は申しませぬが可成文學に趣味を有して永く文通を仕て下さる方を求めます(三重縣津市新町南河路卅一杉田諒子)○姉上樣等私は女學校は一年生てすが英語がほんとうに好きてす何うか繪はがき交換に英文てイロハでもよろしいから書いて交換して頂戴(大阪市天王寺逢阪下ノ町花本方橫山敏代子)○皆樣私は兄樣から下記の小說英和文ほととぎす乳姉妹己が罪の四種を買ひましたから繪葉書と玉章と御寫眞を下された先着四名の御方に御送り發て致します(東京府下北豊島郡王子村王子製藥場にて近藤花枝)○親愛なる諸姉樣よ妾は俳句が非常に好きてすから美麗なる繪はがきに俳句を一首書いて御送り下さい妾よりは當地の名勝繪はがきにて御返禮致ます。(紀伊田邊町南新町八切理方鈴木あなみ[illegible])○皆樣紀念

スタンプ付きの繪葉書を送て下さい妾も必ず相當のをお返し致します 先着二名へは妾の寫眞を差し上げます（大阪砲南通三丁目中野醫院中野秋子）〇繪ハガキ及び手紙と編物の交換をねがひます（大阪川口郵便局白澤みのる）〇記者様の紹介に依りて諸嬢と繪ハガキの交換が出來るやうになれば私の幸福です（能登輪島河井立町笠岡巨朔方みね子）〇紀念スタンプ附繪ハガキと妾の女學世界其他の婦人雜誌と交換して下さいませんか（京城旭町奥田惠以子）〇交換、交換、先着五名には韓國京城の艦隊歡迎紀念スタンプ附てお返し相違なし（播磨宍粟郡千種村西山石原とみ子）〇繪ハガキ澤山參りました、御住所不明の方には一々お返事出しかねました、なほ皆様御見捨なく（大阪市西區阿波堀通り五丁目十四灘登代子）〇繪ハガキなりと玉章なりと御交換下さい、私は韓國に居ります（韓國仁川港本町通り堤方神宮はる江）〇繪ハガキ御送り下さらば長崎名所てお返しいたします（長崎市錢町四十七、森谷つたみ）〇私は病後の疲勞て未だ不愉快を感じて居ます何うか繪ハガキて慰めて下さい（能登鳳至郡輪島村鳳至横町久保千代子）〇母國に居ます皆様、當地の目新しき繪ハガキと交換して下さいませんか、最も御繪ハガキは日本文字にて（米領布哇馬哇フイルク町タイルクキヤツシ商會日本人係、酒井）〇皆様本年も同じく繪ハガキ玉章寫眞の交換をねがひます（神戸東川崎町四丁目百五十三淀井様內、神本政江子）〇妾は無學の者てすけれど繪葉書、寫眞、編物などの交換がしたいのてございます（三重縣鈴鹿郡龜山本町小川満子）〇本誌の愛讀者たる皆様よ眞に一掬友情の血涙あらせ給ふ方は一時的てなくて親密なる交際を繪葉書にて願ひます（美濃今尾町三田村芳美）〇誌友の姉上さまふつゞかな妾と繪葉書交換を賴みます なるたけ美人を望みますしかし外の繪葉書にてもきつと御返事は差上ます（熊本市鹽屋町裏三番丁宮崎はる様方田中美代子）〇記者さん、私は年を一つ貰ひましたが然し何も去年よりは發達せん様に思ひますので、大に勉め様と思ひます、就いては本誌愛讀諸孃も繪葉書の美麗なのに和歌、俳句を書いて御文通を願ひますよ（越前吉田郡圓山西村開發、野坂まさを）〇誌友諸姉様よ、妾は繪葉書がすきてすがれどなたか交換して下さる御方はありませんか交換して下さる御方には（先着五名）當地名所繪葉書一組差上げて御禮申上ます（久留米新町ひしや內峯子）〇一時的てなく末の末まて繪葉書の交換をして下さいな私が里の名所奇々妙々なる、獅子落橋の繪はがきにて屹度すぐと返事致しますよ（廣島縣備後國比婆郡東城本町西山清子）〇吾が敬愛する誌友諸姉よ、妾は丹後舞鶴の北方なる片山里に住へる不束者てすが、願はくは御見捨なく御敎示被下い皆様どうぞ繪葉書の交換を願ます、それから妾は今後どしどし投稿する積りてすから御見知り置を願ひます、（京都府加佐郡西大浦村字中田吉田茂平方澄枝）〇皆様私も何卒繪はがき交換のおなかまにいれて頂戴なそして お寫眞もれ私もきつとお返しいたしますよ（京都府乙訓郡乙訓村字長法寺荻原ひさ子）〇皆さん當ヘガキありがたう御座います 以後もよろしくねがひます（濱田三明千鳥子）〇親愛なる滿天下の諸孃様よスタンプつきの繪葉書 交換致しましようれ、きつと返事致しますから（廣島縣賀茂郡仁方町手島謙城內照子）〇皆さん美しい繪葉書澤山下さいまして 私どのくらゐ嬉しいか知れません何卒か此上も御交際して下さいまし、私しはほんとに淋しく暮して居りますの、たゞ皆さんから下すつた繪葉書と野邊の景色を見て心を慰めて居るばかり、外に遊れといふ樂みはありませんの、（千葉縣下總國印旛郡成田町土屋吾妻屋渡邊かつえ）〇わたしは繪葉書好て今まて度々明友と交換して居まして 此度、女子文壇愛讀者となりましたから皆美麗の繪葉書に表には無記して送つてくださつた方には賤等上等品を返禮します（福岡縣鞍手郡直方町七百三十四番地淺原方河村みどり）〇おやさしき誌友の諸孃様繪葉書やレターの交際をして頂だい（滋賀縣八幡魚屋町上喜多川きぬ方りゝし）〇皆様繪葉書交換願ひます（常陸高濱町、川並花子）〇皆様繪端書の交換を願ひます但し私から上げますのは男山八幡宮のてす又寫眞や手紙を下さる方には當地名物の八幡宮の神鳩の愛らしい木て彫んだ物（男山の楠て）を一個づゝお送りします（山城岩清水にて鈴木附香子）〇なつかしい御孃様、一寸御願ひ中ますそれは外てもありませんが妾のところには日露戰爭繪葉書の紀念のもので美いものが五枚ありますが どれも寫眞銅版て極めてよい紙質てすが何卒地方繪葉書と交換してね三種郵便て貳錢貼つてよ（能登國七尾町字府中岡崎方森田茂子）〇あゝ懷かしき諸姉様妾も本誌讀者の一人てあります 何卒繪葉書の交換をして愛頂戴な、又寫眞を送つて下さいお禮は致しま

す（山口縣阿武郡紫福村下沖中の組末益貞子）○皆様私は日向の一隅に住む田舍者ですが實に淋しくて困りますから何とぞ御玉章繪端書にて御交際下さいまし拙い者ですが屹と眞心を染めて必ず御返事致します（日向兒湯上穂北島内濱砂まさよ）○御なつかしい誌友の諸姉様方よ妾も繪端書御玉章の交換を御願ひ致します御返事きつといたします（周防國玖珂郡伊陸村周南女學校寄宿舍藤岡靜子）○誌友の姉様エハガキや文通をして下さいれ！妾は御望みにより錦帯橋嚴島亀山銅像等のエハガキにて御返事申しあげます（周防玖珂郡伊陸周南女學校寄宿舍藤岡靜子）○御玉章や繪葉書の御交換を願ひます但し繪葉書はあまり悪くないのを御返禮は對つていたしますからどうぞ〳〵御親密に御願します乘も（北海道函館大黒町稻野逸吉太郎方稻野逸よれ子）○本誌友の姉上様、皆繪葉書々々と云はれるが妾は字葉書の交換を願ひます、和歌か俳句を一首宛認めて（長野縣下高井郡日野村三〇四中村まさじ）○誌友の皆様まことに勝手ですが女學校や公園の繪はがきを送つて下さいきつと相當の御返禮はいたしますから（本郷元町二丁目六十番地橋本様方川口久子）○誌友の皆様繪ハガキの交換を願ひます妾は成可く名所繪端書て未使用のまゝ封入て送つて戴きたいのであります御禮には當地の名所のを差しあげます（山梨縣東八代郡一宮村太田はまの）○誌友の諸嬢様私は琵琶湖畔に住する不束なる少女です何卒此後末長く御交際を願ひます尙極く美麗なる繪葉書や編物寫眞雜誌などの御交換を願ひます（滋賀縣栗太郡物部村大字大門字野田葵子）○皆様繪葉書の御交換を願ひます御送り下さつた御方には必ず御返事を出しますよそして可成趣味のあるものを送つて下さい是迄本欄にて御希望の御方に差上たことありますが中には反古同様の繪葉書にて返事下さつた御方もあり又た酷な人はロハ取りの御方あります是等の人の名前は何れ本欄て申上る積りであります（京都五條通橋東二丁目岸田榮子）○十萬の諸嬢様方よ自筆繪葉書の交換を願ます（岩手縣陸中國稗貫郡湯口村一二四高橋菊子）○本誌愛讀の姉様エハガキ交換願ます先着六名へ妾の寫眞とエハガキ送ります（京都府綴喜郡草内村字東上村いと子）○親愛なる諸姉上様方よ妾も愛讀者の一人てすわ繪葉書や御手紙の御交換を願ひます妾も必ず同等のもので御返禮致します（茨城縣那珂郡石神村竹瓦五〇四仲田百合子）○皆様私も愛讀者てすから繪葉書文通を願ひます田舍てすから立派なゑはがきはないのですが永久に變らず御交際下さい御返事は直ぐ出します（大阪府南河内郡埴生村糸若柳對）○滿天下の諸孃さま妾は繪葉書狂です舶來繪葉書や印付繪はがきの交換を御願ひ申します（大阪府中河内郡八尾小南町中村方白露）○どうか繪葉書の交換を願ひます妾は奈良名所スタンプ繪葉書や美しいのがたくさん有りますから皆さんが美しい繪葉書お送り下さいましたらきつと御送り申します、（奈良椿井町山川かほる）○誌友諸孃様私は至て片田舍の不束者て御座いますけれど繪葉書寫眞等交換を願ひます先着者五名に限りコロタイプ繪葉書御送り申上ます（靜岡縣周智郡山梨町松島光子）○誌友の皆々様妾寫眞道樂のよ依て此度縣懸の中て希望の方々の御寫眞を當はがき用紙へ寫眞いたしたいんてすがお望のお方は御自分の御寫眞をお送り下さい壹名五枚限り（但壹回）壹週間の猶豫にして發送いたします、そして御自分の御寫眞返却方お望の方は前以て繪葉書にて報じて下さい、又繪はがき寫眞の交換も願ます近傍の景色寫眞澤山あります依て粗末ながら自分寫の分を差上ます（靜岡縣駿東郡小泉村佐野驛松葉屋旅舍方杉山光子）○御愛讀者皆々様妾も愛讀者になりましたから繪端書、端書、玉章などにて御交際なさつて下さいませ御玉章御端書御送り下さる御方へは高等女學校運動會其他の繪端書にて早速御返事を出します（金澤市片町七十一大久保花子）

寫眞編物交換

○妾も本年から愛讀者になりました諸孃様と御交際を願ひます御寫眞又は御手製の編物を御惠み下されば必ず上等繪はがきて御返事いたします（東京市愛宕下町小島千菊子）○皆様此の後は御心安う永久に御交際ねがひます猶編物寫眞の交換も苦しうは御座りませぬおよぶかぎり致すつもりですわどなた樣の如くには决していたしませぬ（茨城縣新治郡眞鍋町中村富士子）○賢き諸孃よ妾は今度東京の友人より寫眞挾みを送りて貰ひましたから御持合の御方は一枚何卒御送り下さい返禮には名所繪葉書十板一組を差上ます（肥前杵島郡北方村県岩きい子）○誌友の皆さん私は古くからの讀者ですが今度始めて誌上を借りました故御交際を願ひますそして繪葉書々寫眞の御交換を願ひます（横濱市辨天通二丁目朝掬様方植木秋月子）○諸孃様よ御寫眞御

持合の方は 風景人物等何卒御惠み下さいまし若次第雜誌を以て 御禮致します（信濃下伊那郡龍江村字今田島岡新子）○妾は年中病身で床ばかり入つて居りますのです 編物を毎日床で仕事の如くにしてなりますの 皆様と交際を致しませうか如何です 妾、女子のなり致しまして、舶來のメツク製の繪はがきか汽車か船か軍艦が好きてすの交際してくださいれ、 封筒にして文字を書かずとれ、 若し妾の持ちてなるのと二重になれば御かへし致しますから（大坂築港大道路木村登羅子）○誌友の皆様どうぞ御寫眞の御交換を御願申ます 高様御返しいたします又繪葉書の御交かんもして下さい 是非御願ですよ（下総印旛郡船穂村松崎の酒井平作方酒井富美江）○誌友の姉上様お美しい繪ハガキばかり 二百三枚もお惠み下さいまして實に 妾は此の二百三人の姉上様に對して嬉しさあまる身のやる瀬ないのてあります もれなく御禮はいたした積りてすけれどもし何んとして 洩れて居るやもわかりませんから其御方は 早速御知らせ下さい又御寫眞を御持ちの御方は何卒御送り下さい 妾も自分の寫眞に絹レースの栞を添へて必ず御禮致します（長野縣下高井郡日野村三七三豐田たかの）○懐しい姉様方よ 今度私は下名の所に移りました末永く御交際下さい 御手紙又は寫眞を下すつた御方には私の寫眞に美しい水戸名所繪はがきを添へて御返禮致します（水戸上市馬口勞町片町佐野太兵衛様方中山道江）○皆さん妾ひじつき欲しいの、 もしお送り下つたら不束な妾の寫眞に新古文林と高等才媛文集とを添へて 御返禮申します其他いろいろの 雜誌たくさんありますから美人繪葉書て申込まれた方に 相當の價のものを上げます（和歌山縣海草郡四和佐村、池見俊子）○誌友諸嬢様よ妾は 南紀の片田舎に住む不束者てすが何とぞ寫眞桒の御交換をしてくださいい 願升（和歌山縣海草郡安原村字松原福本保子）○皆様私にお芳姿をお送り下さいな 私は誌友の方々のお寫眞を拜見するのが何より樂しう御座ます。又造花編物の交換も大賛成てす どうぞ永久にお交り下さい（横濱根岸三、一、三、一、井上久子）○本誌愛讀者諸姉上様よ、 寫眞交換を願ます、 先着三名には、 自分の寫眞と繪葉書一組を御返禮致します、（佐倉町内鄒小路、 三河屋方大木琴子）○誌友の皆様の御寫眞を 御惠送下さい御禮には絹張り極彩色肉筆繪葉書を 御送附申し上げます（甲府市城屋町桃山玉子）○誌友諸嬢様よ寫眞編物の交換を願ます 御送り下れた御方には先着者拾五名に妾の寫眞を返禮致します （京都府相樂郡加茂村錢司六十六番戸岩井久子）○妾は片田舎に住んで居る一少女てすが 何卒御見捨なく御交際を願ひます 尚寫眞の交換も願ひます先着五名へは繪葉書をそへて御返しいたします （山城國相樂郡加茂村字錢司四拾九番地住岡敏子）○親愛なる愛讀諸姉様方々よ お寫眞や繪葉書の交換を致したいのてす 何卒御送りください先着十名の内寫眞の方へは 多田親愛書の女子消息ゆきかひぶりかすみれ集を 差上げます外の方へは水戸名所ハガキ一組づゝ （常陸國那珂郡石神村竹瓦仲田志幾子）

諸嬢の交際

○未見の諸姉上様よ私は片海邊のはしたなき賤しき者て御座いますが 以後永久的に繪葉書や玉章などの御交際を願ひますそして 編物や御手製の造花などの御惠投を願ひます （越前國南條郡河野村滿定子）○誌友の姉様方永久に御交際下さいませんか今まで玉章や 繪はがき交換した人の中には一度きりて 御返事下さらなかつたりする人がありますので私は殘念に 思ひます長く御交り下さいます方がありますなら 御手紙や繪はがき下さいませ御返事はきつといたします （東京市本郷區眞砂町二十二、種川みき子）○何卒皆様御交際のほどを願ます。 又文章や繪端書の交換をなして下さいませんか、 及ばずながら御答へは必度します （甲斐國東山梨郡日下部尋常小學校内花野いづみ）○誌友の姉さま私は昨年女學校を卒へた淺學の者てすが どうぞ永久御交際をして下さいまた玉章の交換をも御願申します （愛知縣渥美郡吉田方小學校石田ひさ子）○懐はしい誌友の姉上様方おかわりもありませんか 私此度女學校を卒へましたからすこし 旅行を仕様と思つて居りますのよそれて 旅行中は御手紙下すつても御返事致す事が出來ません 歸りましたら御知らせ致しますから其時は 又改めて御交はりのほどを願ひます （徳島市通町三丁目竹内方五島かれ子）○私は去年の秋女學校を中途にして故郷に歸り、 今は村の小學校に奉職して居ますが誌友の姉上様方に繪葉書の交換や 文通交際をねがひます（岩手縣氣仙郡吉濱小學校伊藤宗枝子）○記者様初め誌友の皆様世は 花咲き鳥囀るといふ好時節て御座いますが 御變りものう御暮していらつしやいますか 私は南豐の片邊に住む不幸の一少女て御座いますが 以後御見捨のう御願ひ申します（豐後臼杵安部富士子）○誌友の皆さん妾

は工業地に住むて居る淺學無才の乙女てすが何卒姉上の皆樣御見捨なく繪葉書や玉章の御交際を永久に願ひ升拙ない筆ても必ず御返事致します（群馬縣山田郡桐生町新宿五拾八番地野本まつ子）○諸姉さま方どうぞ〱交際して頂戴れ、（福岡縣粕屋郡宇美村吉松靜枝）○女學校卒業後淋しき月日を過して居ますから同情ある諸嬢樣妾とも何卒繪葉書並に御玉章の交換永久に御見捨てなく御交際下さりませ 返事は必ず差上ますよ（肥前佐賀市柳町副島まつ子）○滿天下の誌友樣方妾は昨年から女子文壇愛讀者となりました何卒御見捨なく御交際を願ます（栃木縣芳賀郡市羽村大字市塙二五四川上溪泉子） ○誌友の姉上樣よ妾姉妹は片山里に住める淺學ものなれど何卒御交際の程願上ます（安房郡健田村川戸川原りせ子仝貞子）○寫眞、編物、エハガキ。玉章。の交換をも願ひます必ず御返事は。 わすれませんよ。きつと差上げますからね（羽後國酒田千日前通り伊藤清子） ○皆樣去る一月五日にね文壇の友和歌山大野幸子樣がいらつしてね嬉しう御座いましたわいゝ方て御座いますよ何だか初めてお目に懸つた樣ぢや御座いませんてした紀念に御一所に寫眞をとりました之も記者樣の御賜と厚く御禮を申上ます（明石西中町白旗清子）○諸友の皆樣妾し 東京早稻田農園新輸入の勿忘草（ホワレトミナート）及香すみれ（ペイチレツト）種子澤山持つて居りますそして 勿忘草は小さき可憐の愛らしき花が 高さ五六寸にて一樣に澤山の花が咲くを見ると何とも 忘るゝことは出來ない宿根草てあります 依て諸嬢に分與す望みの御方は景色又は 御自分の寫眞に住所姓名年齡を記して申込あれ先着拾名には 粗末ながら妾しの寫眞に栽培書をそへて配布いたします 尙繪葉書寫眞書籍類草花の交換も願ひます（東海道原町原六軒丁庄司消職方じゆん子）○懷かしい皆樣よ妾も愛讀の一人てす分けて東京といふ字はこひしいのよ去年迄は 女學生て居ましたので皆樣よこゝは鬼怒河の片ほとり何卒遊びに御出てかけ下さい御待ち申上ます（栃木縣鹽谷郡氏家町字櫻野瀧澤秀子）○四號の誌上、手風琴をお讓り下さる樣に出しましたら陸奥の白戸さだ子さまから御親切にも御通知下されました、早速御讓り下さる樣に御返事上げましたが、もし着せぬといけませぬから、亦誌上て申上げます、どうぞね、白戸さま、手風琴てさへあればよろしう御座いますから御讓り下さいまし、 お金はすぐに送り上げますわ（群馬縣利根郡片品村大字土出村廿七星野みれ子）○お手紙やお書物を繼々給はりて、貧しき妾に多大の同情を寄せられし諸姉樣に對し、 失禮ながらこの欄を拜借して謹んて御禮申し上げます。 猶諸姉樣の御健康をも祈ります。（越後中蒲原郡兩川村五十嵐美波子）○親愛なる諸姉樣方よ妾は 深山の奥に自然を友として明し暮す不學短才の賤の女て御座います、次に私は、 つれ〲のなぐさみに草花を多く植ゑて美しい花を咲かせたいと思ひますが 諸姉樣の中て何ても草花の種子を 御所持の御方は御惠送下さいませんか、 ついてに蒔方も委しく御敎へ下さい必ず御禮は、 リボンか何かていたします（上毛碓氷郡烏淵村、湘野きと子）○誌友の御姉上さんよ玉章と繪はがきの御交換をね乾度御返事差上ますよ、（福井市寶永下町廿九番地上田ひろ子）○誌上の姉樣、私は片田舍に住む不束な者てすが何卒御交際を願ひます、 また繪葉書の交換もして下さい。（福井市寶永上町廿一番地水戸樣方壽榮子）○どうぞ此れから繪端書や玉章などの御交際を願ひます、 然し御交際下さる御方は何卒一時的てなく永久的に願ひます、きつと御返事致します（福井市老松下町廿四番地大谷多知子）○誌友の皆樣方繪葉書やお手紙の御交換を願ひ升只取はいたしません必ず御返事致します其内にも東京在住の御方永遠に御交際ねがひます（東京牛込矢來町一柴田方一翠子）○此たび廣く誌友の皆さんと交際いたしたく申込多數にて餘白も御座なくとは存じ候へども何卒御掲載被下度よろしく御ねがひ申上候（山城國綴喜郡田邊町北川智惠子）○誌友のお孃樣たち編物寫眞繪端書雜誌の交換をお願ひします 先着のかたから順にきつとお禮を致します（大阪東區上難波南之町壹五松屋花子）○妾は母と二人きりて毎日淋しく暮して居るものてすから皆さんの便りが一番樂しみてすから 繪葉書や玉章を末永く送つて下さいね 妾成田の繪葉書を差上ますから（下總成田町土屋武田のぶ子）○おなつかしい姉樣方よ編もの、 玉章、 寫眞の交換を願ひます、 寫眞のうらに御名前を認めて送つて下つつた方には妾の寫眞、編ものを添えて御返禮申上ます。 まあ忘れた繪葉書もどし〱送つて下さい私は上等の繪葉書てきつと御答へ致ます。（信濃國東筑摩郡島立村南栗吉江底子）○誌友の御姉樣方私は石川縣生れなのよ何卒永久的御交際を願ます而して繪葉書や 玉章の交換も願ます（秋田縣能代大町西村品子）○誌友の諸姉樣前月

の女子文壇て交際を望んだ谷田菊子事二月中旬に女子技藝講習學校へ入學の爲に妾しの家を去りまして皆さんの所から繪葉書やお手紙て交際を望まれましたがあまり多數故一々妾し代理して御返事するわけに行きませんから御返事の無かれたお方は留守なのを察して下さい悪しからずれ(常陸國高濱町東大橋酒楽花舟)○私は京都に遊學をして居りましたが此頃片田舍て暮して居りますから皆様よろしく御交際をして頂戴れ又繪はがきやうつくしい玉章や寫眞の交換を願ひます(兵庫縣多紀郡村雲村ノ内上筱見村八黑田水鵜)○水彩畫とか和歌、新體詩、綴物、御玉章等が一番好むて居ります故御惠み下され其和歌、綴物、繪葉書、姉様方の寫眞、新古本の雜小說も澤山持ち居ります故御交換をも致します(金澤市横安江町六五、福田蕗枝)○妾は草深き南紀里に淋しき月日を送りゐる不束者て御座いますが見捨てなく御交際を願升亦繪葉書玉章等の交換も宜しく願上升(和歌山縣海草郡安原村大字松原、福本保子)

圖書換讀

○私のところに生花早學び詩集ゆく春、落梅集紀行文集草枕及女子文壇をはじめ諸雑誌數百冊不用のがありますから御望みの諸姉妹様は何てもかまいませんから紀念はがき一組を添へて申込みなさい又色のスタンプ附繪葉書もありますから郵券四錢送つて下されば三枚以上進じます(豊橋市鍛冶町弁柝屋内いち子)○皆様妾の手許に續帝國文庫續々紀行文集、美文之資料、作文錦囊、明治秀才文集、明治才媛文集及び秀才文壇數多あり、皆様の中て黄菊白菊、花紅葉、青春、雛子、思ひ出の記、濱子、露子、天地有情、血の涙、相夫憐、及び大町先生のわが筆、お持ちなら、妾のはお望みのを差上げますから相當て交換して下さい、寫眞も下さらば、妾も差上げます(大分縣速見郡御越町湯山草牧いゑ子)○誌友諸姉のうちて女子文壇第壹卷第壹號より第貳卷第拾五號迄の内御不用の分が御座りましたら御惠み下さいな、私は兄さんより頂戴した中學世界、其他種々の雑誌や小說て相當の御禮を致しますて(近江長濱南船町中山方中山とみ子)○先日は不束な私の心を買て下すつて、世にも有がたい皆樣の餘の跡を戴き、儚い身にはどんなに慰めになつたてしよう、合計て二百八十一名の方から戴いたので一々御返事は致ましたが、もれた方も御座いましようから云つて戴きさいすればきつと御返事は致します中には住所がわからない爲めに上げられない方が二三御座いましたから、住所はなる可くくわしくはつきり書いて下さいまし。なほ外の方々にも永久なる御交りを願ひます(下野國小山町大字神鳥谷新井琴子)○誌友の誰方様ても宜しうございますがあなた様方の内て不如歸か金色夜叉か己が罪の歌の書いたのはありましたならば私一寸うつし取るまで決して汚しませんからかして下さる方はないてせうかそれから誠に失禮なおたのみてすが私はまだ學問の方てはありませんが學校にいつてるので明かに名前を出すのは少しお友達に憚りますから誠に勝手がましうこざいますがおさし支はございませんでしたらどうぞ御住所とお姓名を誌上てお知せ下さいませんてせうかそういたしますと私はおかし下さるお方の御宅にお申こみいたしますから其のおれいは決して忘れはいたしません私の寫眞も添へてお禮いたします(陸奥の絹子)○妾の手許に第一卷の終から第二卷の終迄の女子文壇、昨年の女學世界、我と人、家庭十二ヶ月、東西家庭事情などお不用になつて居りますから、相當郵税お遣しになれば進呈いたします。夫から小說十七八、慰問袋、長壽延命法、家庭衛生訓、光榮の日本、の内で、擲汀著黑風、漱石著鶉籠と交換して下さる同情の厚い姉様にお願いたします。(岩代國河沼郡野澤村甲一八六番地齋藤信夫)○皆様私は黒岩涙香氏譯古王宮其他小說叢美文叢文書など數册持つて居ますが金色夜叉と替へて下さる方は御座いますまいか(備後國双三郡田幸村松小枝)○私の手許に新編女子手紙の文、明治秀才文集、小數育學を持つてゐます故皆様の朝ばれ、女子懸賞文集、女學生訓か其他の小說雜誌と交換して下さいませんか、又、女子文壇十一號から十六號迄、九州の少年、高等女學講義、秀才文壇、兒童研究が不用になつてゐますから女學世界か其他の雜誌又は皆様のお寫眞、編物、造花、か相當の繪葉書かと交換なすつて下さいませんか、但し所有の書物に限りがありますから先着順に(福岡縣築上郡上城井村鬼木龍子)○榕蔭、戀、星、過去の罪、生花獨習の友、海底軍艦等妾不用になつて居ますから姉様方のおうちて塔影、塔中の怪、銀山王、新造軍艦、夏子、濱子、お持ちの方は何れかと何卒御交換下さいれお願いたします。(神戸市下山手通七丁目二三〇廣澤花子)○皆様の中て去年中の女子文壇の八月分、九月分、十一月分、及び秋期增刊菊花月、不用の方

は御惠み下さい御禮には繪葉書リボン其の他色色相當なものを送ります、又小說の面白いのを御借し下さいませんか（山形縣南村山郡瀧山村元木岡崎梅子）○妾は只今左の本を持つて居ます皆樣の內、御入用の御方は極く奇麗な繪はがきか高價なのか又は御寫眞を以て御申込み下さい、女夫波、火の柱、良人の自白、濱子、不如歸、小華族、金色夜叉、伯爵夫人、乳姉妹、キイツの詩、ハイネの詩、花守、冷人、小詩國、黃菊白菊、天地有情、女夫波の歌、金色夜叉の歌、同脚本、俳句作法、俳句入門、美文作法、女子懸賞文集、女子作文の栞、外に、女子文壇二卷全部、女學世界婦人世界十一冊（東京府豐多摩郡戶塚村大字下戶塚三五五小田いく子）○私共に日露戰爭實記及び寫眞畫報、太陽、新小說等澤山、所持致して居ますから、姉君方て、御覽ずみの小說、又は編物、エハガキ、リボン、葉などと御交換下さいませ尙ほ、臺灣、寫眞の珍らしいのが御坐いますから、御望みの方は、美くしい繪葉書にて……臺灣の少女等のもあります（佐賀縣藤津郡濱岡ひて子）○文藝俱樂部の不用になりましたのが數冊ありますから何うか繪葉書と御交換して下さいまし御願ですから又且那から頂いた舶來の葉書も少し持つて居ります（神戶市居留地百七番リネル機方廣沼はま子）○諸姉樣の中て本年一二月分の女子文壇及女學世界「なるべく汚れないのて」御不用な方は御讓り下さいませ相等のお返禮はキット致しますから（讃岐本田郡川添村元山一二五佐野紫女）○妾に新小說、明星、趣味、女學世界、女子文壇、等昨年本年取混ぜ數十冊あり面白き小說、詩集、文學書類、細菜、等何でも御贈り下さらば前記を二冊宛と吉備名勝繪葉書にて御返事す又繪葉書の交換も可成上等品なれ（岡山市岩田町五八河合政子）○私の許に女學世界少女界女鑑等數十冊と他に小說（美人鷗探險、啞の旅行、不如歸、女の義理）など外にも澤山ありますがどうぞ他の雜誌、小說と御交換を願ひます（常陸土浦本町木村方貞子）○諸友の姉樣どうか不如歸の歌か湖上美人の歌か金色夜叉の歌か乳姉妹の歌忘れ形身言海何れてもよろしいから御送り下さいませねえ御返しは致しますから御禮と致しまして露營の歌大海原四條畷て須磨の曲箏曲集讃美歌を寫しまして御送り致します又紀行文集女子衞生學女學生訓花紅葉うもれ木美文の資料不用になつてなりますから入用の方は御申込下さい御送り致します諸孃樣どうか玉章の交換して下さい神にちかつてづろい事は致しませんすぐ御返事を上げますからねえ（福岡市土居町田中愛子）○この間諸孃樣にだいぶん送りましたが不着のお方がありましたかしらせて頂戴尙妾は女夫波、不如歸、金色夜叉、良人の自由、白百合、伯爵夫人、己が罪、小公子を持つてなりますが繪葉書て云ふてお越ししてしたらすぐにおくります寫眞の交換をたのみますよ（神戶市兵庫羽阪通二丁目四番地野中あい子）○妾方に、十年前有名であつた、『めざまし草』が五十部許りあります、妾は此を一部宛賢明なる、壇友諸孃に進呈いたしたいのであります、御望の御方は遠慮なく下名へ御申込を願ひます、又其折り果、其他編物、寫眞等を送つて下さい、妾も御かへしいたしますから。（讃岐綾歌郡川西村香川紫子）○私は女子文壇初號よりの愛讀者ですが、今私の處に文藝俱樂部、雜誌の交換をお願ひします、新小說、外に雜書物十冊餘り不用になつて居りますが、上等繪葉書か諸姉樣のお寫眞て、お申込み下さい、先着五名樣に不足ですが、私も寫眞を付けて送ります、（京都市新寺町七條上ル住吉町淺野方河井梅子）○諸友の諸孃樣宜しく御交際下さいませ尙諸新聞雜誌の御交換お願ひ申します。（大阪東區淸水谷東之町七五一神前方我澤紫子）○私は全國各地に於て發行する諸新聞を集めて讀みたいと思ひますから諸友の諸姉樣御愛讀の新聞紙を一枚どうか下名迄御惠送を願ます御禮には有名な靜岡民友新聞か靜岡新報を差上ます（靜岡縣小笠郡朝比奈村京松原五四中島松枝子）○愛讀の孃樣の內に、黃菊白菊、女子懸賞文集、不如歸歌、婦人世界、（四十年、一月發行）少女世界、（九、十、十一、十二、一、）等御不用の御方は私の、俳句獨習、紀行文、言葉の寫生法、新體詩資料、美文資料、等の內て御好みのものと御交換を願ひます（讃岐大川郡白鳥村大字湊鎌田緊太郎方、仲枝子）○皆樣の內に緣不緣、人の兄、破戒、源氏物語、良人の自白、女學生（風葉著）己が罪、相夫憐の中てどれか御不用の御方は妾の新詩辭典（新派）新生涯（擲汀）ひげ男（露伴）雅俗對譯國語辭林（宮脇郁著）養生篇（衞生新報社）歷史讀本紅葉の錦（落合、小中村）の中て相當なものと御交換下さいませんか。御心ある御方は先きに御一報な願ひます。（神奈川縣愛甲郡荻野村小林幸子）○諸孃樣方妾理科字典理科敎本日本地理歷史小學教授法岡山縣地理其他雜誌有りますから何卒買

海少年節用新撰日本文典 其他詩集御持の方は交換して下さいな又短册の交換を願ひます（備中吉備郡関村林美之助内ふみ子）○内外音樂書不用澤山あり音樂書以外の奇な書を御送りあらば直に適當の書を御返送す 但し原價二十錢以上六圓以下の書に限る（横濱市末吉町七ノ七一、秋葉）○皆様の内で目下不用の乳姉妹を御持ちの御方は何うか別な雜誌と交換して下さいませんか重ねて御願申ます（佐賀縣西松浦郡二里村中里二二七德久千代子）○誌友の諸姉樣の内に金色夜叉又朝晴秀才文壇三十九年十一月發行の分をお持ちの御方は御座いませぬか御送りの御方には皆錦雜誌名所繪はがきの内いづれにても御禮を致します（伊豆田方郡小室村川奈上原靜枝子）○皆さんの御手許に、小說、伯爵夫人、不如歸、夏子、青春、女夫波、金色夜叉、御持なれば古くても宜し御送り下さいませ、御禮には聖裝にシオリをそえてすぐ樣御送り致します、住所姓名を明瞭に御ねがひ致します（備後福山東町矢野品子）○一月號上記載不用雜誌申込みの方意外の多人數でしたのでお約束だけては足りず他のも加へて送本しました 御斷りした方が九人消印て住所不明の方が四人有ました（信濃松本在入山邊桐原登志子）○私は進行曲譜が不用てすから何でも詩集と交換して下さい（德島縣福塲町島嶺子）○私しは水彩畫が大好きなのよ諸姉樣の中で繪畫のお好きなお方は永久にお交りなれおつてよそして みな樣の中で大田三郎先生のスケツチ畫法三宅先生の 水彩畫手引等繪畫に關する書籍お持ちのお方は私くしの不如歸、青春、食道樂、伯爵夫人、其他諸雜誌に觀兵式紀念葉書（紀念切手スタンプ付）一枚をそえ申しますから御持ちのお方は一寸下名迄お知らせを（山城國綴喜郡田邊町北川壽久子）○皆様の中で花守日記、旅すがた、白衣姫、白羊宮、良人の自白、（後編）露子夫人、御不用の御方は私の短詩初潮、元氣、ながれ藻、新體琵琶歌、同續篇、茶の湯と生花、などゝ御交換下さいませんか、（伯耆東伯郡赤崎町佐伯白百合）○妾は前號で孝女白菊の歌を望みましたら、二十三名も送つて下さいましたが、先着五名だけはいささか謝禮致しました、就ては殘り十八名の御方には厚く紙上を以て謝意を表します（神田旭町長井連月）○誌友の皆様妾に本社發行の言文一致文範、禮儀と作法、作文叢話、短篇小說集のよする波、鐵幹著の紫、小說空想病、文章世界がありますからお望のお方には交換をしてもようございます、（福井市清川中町五六山崎粂藏方山崎松枝）○皆さまわたしの所に左の不用書があります、澁江保著初等教育小心理學書全、大津豊憲述教育法令註釋第一卷井上圓了講述哲學早わかり、フランクリン自叙傳、致富の秘訣、宣明講師講述改悔文正理義解、以上でありますが書籍雜誌と交換します（能登國七尾字府中岡崎方森田茂子）○皆様の中で不如歸、また見ぬ親爺何れてもお持ちの方は私の應用家庭美術（ごく新らし）と御交換下さいまし（東京市本郷區新花町九三中村ふじ子）○皆様の内に良人の自白、緣不緣、小督護婦、言海、夏子上下、町の仙女、己が罪、乳姉妹、其他此の類の小說御持ならば、相當代金又は繪はがきにて交換を願ひます（金澤盤原町一二七安江莚子）○妾は新詩辭典、算術之部下卷（理學博士寺尾壽理學士吉田好九郎著）、中等敎育上卷（荻野由之著）、などを所持してをります、いづれも新し諸樣の中にて、御不用の書籍と、御交換下さる方は、御一報下さい。（備中國上房郡高梁町字石火矢町菅森定子）○皆樣妾の手許に不如歸の歌、澄子、風月嵐風、大澤天仙氏の小說、催眠術、吹雪夜、等不用になつて居り升から黃菊白菊、良人の自白、花守日記、思出の記、桐一葉等と御交換願升（東京市日本橋區元濱町二和田つみ子）○皆さんの内に、女夫波、女波男波、乳姉妹、夏子、澄子、心の波、魔風戀風、緣不緣、青春、無花果、金色夜叉、麗子夫人の內何れかを御所持の方あれば妾の戀女房、朝晴、玉蟲、美文花園、美文的紀行文、思想天使、美文の資料、女子懸賞文集、靜思餘錄、立志小說、人物管見、情之學生、日清會話篇、天保水滸傳、其他諸文集諸雜誌と交換して下さい、尙委細は直接に。（山口縣玖珂郡伊陸村大野口、井坂禎子）○皆さん私も誌友倶樂部に入りましたから宜しく御願ひ申ます私の手許に大臣の書生時代俳文集西洋花曆みだれ箱當世ハイカラ氣質谷間の姫百合等不用になつて居ますが皆樣の御內で朝ばれみだれ髮魔風戀風心の波文藝倶樂部等御送り下された御方に御のぞみの本に美しい繪葉書一枚づゝそえて差上ます（堺市車之町東壹丁三宅小糸）○夏子にせ紫等御持ち合せの方は相當の代價又は次の書籍の中の何なりと御交換を切に御願ひ申ます不如歸浮世日記へかき文學（去年）文藝界等（福井縣南條郡河野村北野愛子）○皆さんの中で不如歸、錦子、濱子等の小說を御もちのおかたは御送り下さい、私の手もとに、乳姉

姝、人の罪、己が罪等の小說など送りますから何卒交換して頂戴（石川縣鶴來町高橋乙吉方ばな子）〇私は小說（二人ミナシゴ、女のこゝろ、女波男波、想夫憐、黑百合、失戀塚）等持つて居りますが何か他の新刊小說と交換して下さる方が御座いますならば何卒下名へ（尾張國知多郡龜崎町、井口豐子）〇妾の持つて居る金色夜叉全五册筆子二人女繪師の戀全無渠花徒然草女子文範など〻諸孃樣の御不用の言海伶人夢の華二十五絃宵駒凌霄花白羊宮と交換してください先着の御方六名迄は附ッキ添えて差上げます（新潟市寄合町岩瀨波子）〇皆さまのお手許に婦人世界、女學世界、料理法などの本御不用のお方は送つて下さいませんか お禮は一々おかへしいたします。（伊豫喜多郡久米村宮脇あさ子）〇私の許に 白百合（英文）アラビアンナイト（英文）小詩國、亂れ髮、かくれ簑、不如歸、女大波、濱子、其他英文の小說を二三持てゐますが何でも宜しう御座いますからあまり下品でない書物て申込んで下さい、御望のを上げます。（栃木縣入舟町島田淺之進方、福富紫泉）〇女子文壇愛讀者の諸姉樣方よ御願てすから 乳姉妹御もち合せの御姉樣は御惠み下さいませぬか 若し御送り下ださつた御方には御禮として 女もち一號畫紙名刺下ださつた方の名摺入御送り申上ます（京都市下京區五條橋東詰北入四三七、大井順子）〇妾は女學世界女子之友女學界 二十世紀婦人及び美文之資料を三册程所持して居りますから 玉蟲か朝晴かと交換して下さい（山口縣玖珂郡伊陸村、非坂禎子）〇嬉はしき皆々樣の中にて御不用の優雅なるアルバム御持ち遊ばす 御方は何卒左の書籍と御交換遊ばしてよ長澤氏數學辭書。同氏幾何學辭書。幾何學通解平面の部。同立體の部。作文新辭林。東洋史講義。英文二部府物語。神洲元氣。寬風戀風。亂れ髮。の中御氣に召したる著三册以上五册にて御答へ致します但アルバムは二百枚はさむ物貳册か 三百枚はさむ者にて優麗ならざる物。汚れし物。賀惡るき物。破損せし物。等は呉れ〱も御斷り申ます 一度御手紙にて御照會遊ばして下さい 郵稅は御返し申ます（飛驒國大野郡高山空町三千六番戶住緻葉）〇私は「小說病戀愛戀田秋聲著」井に朝晴を持つて居りますから「朝晴と金子薰園著小詩園」「病戀愛と大和田建樹著秋の日又は旅路又は佐々木信綱選歌集あけぼの」の內どれとか一册と交換を願ひます下名へ通知あれば 私の方から送本します（筑後國八女郡木屋村光源寺內春野園子）〇私は寫眞畫報其他種々の雜誌が澤山ありますから皆さんの中にて御不用の詩集、文集、小說、唱歌、刹琴、同花瓶數、同ひじつき、同寫眞掛等と御交換して下さいな 御望の書物の名を御記し遊してどうぞ御願ひ申ます（横濱市平沼町三丁目三十八番地加藤）〇皆さん、常識の修養、二十五絃、藻鹽木俳諧獨學莊子人物養成譯女流の偉人國文學資料、美文自在トルストイの人生觀使徒保羅西洋全史二册持ち居ますから、失樂園物語、玉むし、朝ばれ、其他、新き書籍をお送り下さらば、右の書いづれかを三日內に返送致します（丹後加佐郡河守新町鹽見千代子）

〇諸孃さま花妻花守廿五絃舞姫の中の何れか御持ちの方は白羊宮 白玉姫朝ばれすみれ集新曲浦島の何れかと御交換下さい（河內八尾表町山口方俊子）

剽竊詩文の注意

▲第五號の分 〇安房、文代女史。俳句二等「歌反古の」は雜誌『海原』一卷一號千葉吉原靜江君の作を〇下總、岩井よし江。同五等「菜の花や」は『青年』一卷四號酒井氏の作を 〇靜岡、山本靜子。新笑話五等「田舍女學生」は『成功之少年』二卷七號三室氏の「汽車」を〇藤浪の里、花の人。書簡文秀逸「春だより」は『秀才文壇』六卷七號高木涙華氏の「春だより」を〇磐城、武者雪子。和歌秀逸「月うすう」は『凌霄花』より〇塚越俊子、同「友去ると」は『秀才文壇』より、剽竊。

▲第四號の分 〇成田、夢の舍濱子。敍事文秀逸「蘭燈」は『秀才文壇』六卷九號花田翠波氏の「落花蘭燈」より〇陸奥、加藤美枝子。新體詩秀逸「せゝらぎ」は『成功』二卷五號吉木月夜氏の作を〇陸前、鈴木よし子。抒情文秀逸「朧月夜」は『中等教育女子作文』中の「朧月夜」を、何れも剽竊。

▲第二號の分 愛媛縣、水口菊子。小說四等「映れる花」は『實業新報』第九百十號牛江櫻氏の『新年の松』と同じとのことにつき剽竊とす。

〇今回注意を與へられたるは 〇群馬縣、小幕たつ子〇坂富江子〇東京、澄子〇上毛、黃水女〇飛驒、二葉會〇大阪、片山忠子 〇下野、鈴木雪子 〇德島、長川棠勝敎〇神戶、櫻花女〇中備、紫陽子〇鎭西山麓、愛讀女子〇大阪、岡本方年子 〇北總、銀葉子〇成東町、天眼通女〇上總、櫻子 〇茨城縣、中西歌子〇大阪、短歌盗見檢事局 〇神田、長井漣月子〇千葉、竹澤つる子 〇美濃、野村秀子〇爾越、はさ子

記者通信

▲『文藝講話』　上田敏氏の文藝に關する種々の言說を集めたもので、新思想の流れを知らうと思ふものには最も好い參考書です（定價一圓）

▲『二十八宿』　横瀨夜雨氏の詩集、新月の卷には新しい頃の作、夕月の卷には以前の作を載せてある、夜雨は詩の爲に生きて居る人ですから、『二十八宿』は夜雨の化身と云つても差支はありません（定價五十錢）

▲『舊約物語』　中村春雨氏の譯、舊約書を面白く誰にも分るやうに書き改めたもので美くしい繪の多い本です（定價一圓五十錢、以上三書京橋區五郎兵衞町金尾文淵堂發兌）

▲『韻文提要』　詩の趣味を小學敎育にも普及させやうとの志て三宅衍星氏の書いたものです（定價二十錢京都大和大路斯文館發兌）

▲『化粧かゞみ』　此れ一册でお化粧の事は何でも分ります（定價十五錢實業之日本社）

記者通信

卒業生寫眞

例年の通り都下各學校の卒業生寫眞を卷頭に揭出しました、特に二頁を增してあります、なほ次號の增刊にも寫眞版の頁を增し學習院女子部、女子大學を初め新しい學校の卒業生も揭げます讀友面影其他各地風景も　深山參つて居りますから追々揭出いたします。

懸賞當選

懸賞當選者で住所氏名の明記されてない方は至急申込み下さい、又本號の女子新聞當選者太田樂子、大倉京子、なでしこ、野岸みつえの四君は規定の通り新聞一ヶ月分を差上ますから新聞の名を御注文下さい、但し新聞不用の方には相當の圖書切符を送つてもよろしい。

定期增刊　花百合

例の通り來る十五日本誌の定期增刊「花百合」を發行致します、繪葉書、水彩畫、寫眞版（六頁）は勿論內容もふだんの通り少しもちがひません、いつも投稿が餘りまして申譯ないのは是て少しは償ひ得る事と信じます（定價も普通號に同じ）

文藝遊戲　百人女（新課題）

▲今度の文藝遊戲は百人女と云ふのてす、なかなか多勢てす驚いてはいけません▲さて何う云ふ事を皆さんにお願ひするか、下の文句を御覽下さい▲諸孃は假にある種類の女になつて其理想を言ふのてす▲ある種類とは奧樣、令孃、舞姬、女俳優、おさんどん、女學生（此れにも官立、私立、小學校、高等女學校、師範、技藝、美術などいろ／＼區別して）女醫師、產婆、女詩人、女繪師、女音樂家、令夫人、商人の細君、花賣女、柴刈女、工女、判任官、女記者、小說家、ばアや、乳母、女官、看護婦、女髮結、外國婦人、田舍女まア此位ゐ言へば分るてせう、此外何んでも女てさへあればよろしいが只、女子と言つたゞけては　いけません必ず或る種類の女の一人になつて下さい▲理想とはつまり希望です、おさんどんならおさんらしく、令夫人なら令夫人らしく理想を上手に言ひあらはしたものが優等になるのです▲成るべく五六行ぐらゐに願ひます▲一々其女學生とか工女とか題を書いて下さい▲賞品は五人まて、原稿しめきりは本月二十日。

雜報

▲跡見女學校　本年度卒業生は四十二名、全體の成績は例年に比して好い方ださうで、優等生五名の內、本誌に揭載の西澤春海氏は家政、作歌、和田總子氏は裁縫圖畫に堪能とのこと、新入學生百二十名、現在生徒總數三百餘名。

▲女子美術學校　卒業生百三十七名の內、日本畫科十名、西洋畫科四名、編物科七名、造花科十六名、刺繡科十二名、裁縫科八十八名で三月卅、卅一の兩日賑かな生徒製作品の展覽會がありました。

▲東京裁縫女學校　本科卒業生五十餘名內優等生三名、本誌に揭載の飯高たき子氏は細かき仕事が上手ださうてす、新入學生百三十餘名。

▲三輪田高等女學校　卒業生百五十三名全體の成績は非常に宜しく、優等生十二名、口繪揭載の吉原あい子氏は數學理科が得意で、遊戲としてはお友達とお話して遊ぶことが好きださうです、目下お茶の水の專修科に在學、本年も入學生は非常に多く、選拔試驗によつて入學生を決めるとのとてす。

▲淑德高等女學校　卒業生五十四名、入學生百二十名四月十一日より始業。

▲女子奎文美術學校　卒業生二十八名、編物科の優等生は二名とも淸國人てす。

wagon, under the seat!"

The child had climbed into a great wagon that stood in one corner of the yard, as soon as she left the tea table; and, feeling tired, had crept under the seat, with her doll in her arms, and fallen fast asleep. We had passed the wagon at least a dozen times, but she was hidden, and no one thought of looking there.

"What did you get into the wagon for?" I asked. "You'll hurt your-self some time, climbing into all sorts of places."

"Lulu wanted to have a ride, but Mamma said it was too late to go to the village with papa," the child answered, "so we take just a little ride in the big empty wagon." That is the way Lulu got lost.

んの大な馬車の腰掛の下に居たの」。

此子は食卓を去つてから直ちに庭内の一隅に置捨てゝあつた大な馬車に上り，其から草臥れたので，人形を抱いたまゝ，腰掛の下に這入て寢て仕舞たのてす．我々は何度となく其馬車の側を通りましたが，子供は隱れて居たため，見付かりませんてしたし，又其内とは誰も氣が付きませんてした。「何しに其馬車の內へ這入たの？何處ても搆はず上つたりすると，何時かは必然怪我をするから」と咎めました。「ルヽはね，馬車に乗りたかつたの，それだのに御母さんは，私が御父さんと村へ行のは晩過ぎると御仰つたから，人形と二人てあの大な空馬車に一寸乘つて見たのてす」と答へました．ルヽが居らなくなつた譯はかゝる次第からてした。

One gentle word
that we may speak,
Or one kind, loving deed,
May, though a trifle,
poor and weak,
Prove like a tiny seed;
And who can tell
good may spring
From such a very little thing?

selected.

吾人の談る優しき一言
或は親切にして
情ある一行爲は，
假令如何に未熟，
薄弱の瑣事なりとも
粒々たる小種子の如きを
證すべし．
誰か知らん此至小粒よりして
如何なる至善の發芽せん事を。

"Lulu! Lulu!" at every step. It was after sundown, and I hastened back to the house. But where was Lulu? Oh, if her father were only here!

きつつ,ルヽ,ルヽと一歩毎に呼びながら駈けました. 既に日沒となりましたので, 自分は家に馳け歸りはしましたが, 嗚呼ルヽは何處に居るのでしよう. 主人が今在宅ならば何程嬉しいだらうと思ふてかへりました。

As if in answer to my wish he drove into the yard at that very moment. I flew to his side and told him all there was to tell. He told me to stay in the house and get rested. I obeyed him. Night was darkening the earth, and where was my only daugher? My head sank into my hands, and for the first time that night I wept.

殆ど自分の願が達した樣に, 丁度其瞬間に庭先へ良人が馬を進めてきましたゆゑ, 其側に飛び行き一部始終を告げました. 主人は私に家へ這入て休めと命じましたから,其に従ひました.夜は愈々闇になりますが, 私の大事な一人娘は何處へ行きましたのでしよう? 顔を手に沈めて其晩始めて泣きました。

But just at that moment the door flew open, and there stood Lulu,—her hair in a tumbled state, a look of sleeply wonder in her great, dark eyes, her doll tucked under one arm. I laughted and cried in the same breath. "O Lulu! We thought you were lost, were drowned. Where were you?" "I don't know. Asleep, I guess," she said, rubbing her eyes in an absent sort of way.

忽然戸が開放されて其處にルヽが佇立して居ました——彼女の髪は亂れ大な黑みがちの眼を寢惚た樣に見張り, 片手に人形を抱いたまゝて. 私は笑ひ泣きをして,「ルヽ,御前は迷子になつたか, 溺れ死にしたかと思つたのだよ.何處に居つたのかへ」と問ひますに, 彼は眼を擦りながら,「私知らないの 寢てたんでしよう」と氣の無い返事。

"But your hair is full of straws, and your dress is in such a tumble! Where have you been? Tell mamma!" "In papa's big

「頭に藁が一ぱい着いて居るし, 又御前の着物がクチャ〃〃〃だが, 一躰マー何處に御出たのだへ,御母さんに御話し」.「御父さ

girl, with a slight, dancing figure, a delicate face. One day, the little girl's papa said, "I must drive to the village after supper; couldn't I take Lulu with me?" "O no!" the mother answered. "It is too late. She must go to bed in half an hour."

Lulu opened her eyes wide, but said nothing. Presently she slipped from her chair, took her doll wrong end up, and vanished. In half an hour I said to her nurse, "You had better go and find Lulu." I heard her out in the yard calling "Lulu! Lulu!" But no answer. I went out growing uneasy. We could not find her. I rushed to the kitchen and said, "Mary, have you seen anything of Lulu?" By that time we had become very uneasy. Our nearest neighbor was half a mile off, and the child was not in the habit of going to the creek alone. We all started in different directions to find her. How I hurried down the lane, looking behind every pile of boards, peering beneath every bush, and calling

た，痩せ方の身輕い小供でした某日父なる人が云ひますには，「夕食後に一寸鄉へ馬車で行くが，ルヽを伴れて行つてもよいかしら」.「否ません．もう晩う御座いますし，彼女は半時間以內に就床しなければなりません」と母親が答へました。

ルヽは眼を見張つて居りましたが，何とも云はず，軈らくしてから，今まで腰掛けて居た椅子から降りて，人形を倒に抱きつゝ何處へか行つて仕舞ひました。半時間許經てから，私は乳母に，「ルヽを伴れて來るが宜からう」と申しまがたので，彼女の庭內中ルヽさん，ルヽさんと呼ぶ聲がしました．併し返事が少しもない．其處で自分も心配になつて來ましたから，外へ出ましたが，如何にも探しあたりません．大急ぎで臺所に馳せ行き「メリ，御前はルヽをチラと見なかつたかへ」と問ひました．此時分には我々は非常に心配になり出しました．御隣と申しても一哩も離れ居るし，近所の小川には小供が獨りて行く習慣はついて居りません．一同四方に手分して探しに行きました．私は並木の小路をそれは々々々大急ぎて，板や材木の積んである場所には一々目を配り，雜木々叢の中を窺

英文（五）

津田梅子閲　河井道子述

May Morning

Now the bright morning star,
day's harbinger,
Comes dancing from the east,
and leads with her
The flowery May,
who from her green lap thrones
The yellow cowslip,
and the pale primrose.
Hail, bounteous May,
that dost inspire
Mirth, and youth,
and warm desire;
Woods and groves
are of thy dressing,
Hill and dale
doth boast thy blesing.
Thus we salute thee
with our early song,
And welcome thee,
and wish thee long.

Milton.

五月の朝

曉の明星
大陽に先立ちて,
跳りつ來ぬる　東より,
伴ふ花の　五月姫,
綠の袂
振翳し
播くや黃金の
櫻草.
めぐみの春に　幸あれな,
なが力にぞ　湧かへる
歡樂, 精氣,
切望も.
森林はなれに
裝飾られて
山谷惠を
喜べり.
さらば, 君を迎へて
朝まだき
たゝへて歌はん
千代ませと。

Lulu

Lulu was a little black-eyed

ルヽ

ルヽは黑い眼の優しい顏をし

投書家愛讀諸君は此社告を見落す勿れ

[illegible]

第参巻より改定

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井酔茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種

- ◎叙事文 ◎抒情文 ◎評論文（各半紙廿四字三十行以内）
- ◎短篇小説（半紙總かな付廿四字六十行内） ◎新體詩（半紙總かな付十句以内）

乙種

- ◎書翰文 郵便用文（半紙廿四字詰） ◎和歌（半紙一首） ◎俳句 ◎新歌謠（全上）
- ◎短文（半紙かな付廿四字五行） ◎新笑話（半紙半分十六字詰） ◎圖畫（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種

- ◎文藝遊戲（半紙十六字詰）
- ◎誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも課題は隨意▼

↓（毎月十五日投稿〆切）↑

奬學懸賞品

（品目改正す）

甲種

- 第一等 賞金牌品類……價格金拾圓
- 第二等 呉服物類……價格金參圓
- 第三等 小間物類……價格金八拾錢
- 第四等 便利の圖書切符……金五拾錢
- 第五等 同……金三拾錢

乙種

- 第一等 絹張洋傘……價格金五圓
- 第二等 帶止、半襟類……價格金壹圓
- 第三等 文房具類……價格金五拾錢
- 第四等 便利の圖書切符……金貳拾錢
- 第五等 同……金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は賞品に差支へざる様前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書ま不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期增刊年四回二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

一冊（大判百頁實價）	加金拾錢	郵税共 前金拾壹錢
八冊（半年分增刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二冊（一年分增刊除く）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六冊（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割增

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年四月廿八日印刷

明治四十年五月一日發行

金拾錢

不許複製

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十二番地 電話（本局六〇七番） **女子文壇社**

特約元賣捌○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

廣告料

特等	一頁三十圓	半頁……	一行……
一等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行……
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切 毎號十五日前

（[illegible]）

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇　最廉無比　定價金拾錢　郵税壹錢

（東京秀英舍印刷）